

---

# 科学の都市の大天使

きるぐま-1号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

科学の都市の大天使

### 【Nコード】

N2412R

### 【作者名】

きるぐまー1号

### 【あらすじ】

学園都市の学生で、上条当麻と同じ高校に通うレベル4の少年千乃 勇斗。彼は周囲で起こる、科学サイドの、そして魔術サイドの事件に、どんどんと巻きこまれ、そして自ら関わってゆく……その過程で明らかになる様々な事実。 様々な事件を通して成長してゆく、少年達の物語。 文章作成初心者で見苦しい点多いかと思いますが、あたたかく見守って頂ければ幸いです。

## プロローグ（前書き）

初心者かつ初投稿です よろしくお願ひします。

## プロローグ

学園都市

第7学区、窓の無いビル。

一切の照明はなく、それでいて、大量の計器類からまたたく光が広大な空間を満たしている。

その空間の中央に存在する生命維持装置ビーカーの中に、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える男が逆様に浮かんでいる。

3

学園都市統括理事長

アレクスター・クロウリー

その男は、ビーカーの中の赤い培養液に浮かんだまま、モニター越しに映像を見ながらつぶやく

「虚数学区・五行機関の制御可能化までの時間短縮のためには、  
ハイブリッド”の覚醒が必要か…  
”

さあ…、                      君は…、                      いったいいつ目覚める?」

言葉とは裏腹に、彼は唇を釣り上げ、楽しげに笑っていた。

## プロローグ（後書き）

誤字脱字のご指摘やアドバイスなどございましたらよろしくお願  
い  
します。

「あー、やっぱり日が出てくると暑いなー」

まだまだ残暑が厳しく残る新学期1日目、彼  
ぼやきながら学校への道を歩いていた。

千乃せのゆい勇斗は、

(あーもう汗ばんできたあ…)

勇斗が心の中で1人毒づいていると、後ろから走る足音が近づいて来る。

「おっす勇斗。おはよう」

「ういっす。おはよう」

勇斗は後ろを向き走ってきた少年――上条当麻に声をかける。

上条当麻

イマジンブレイカ  
幻想殺し

しか思えないほどの不幸体質を持つ少年であり、勇斗の親友である。

夏休みの初め頃に記憶を失い(上条とともにカエル顔の医者の常連だった勇斗だからこそ知り得た)、8月21日には学園都市最強の

レベル5、一方通行を破つて1万人近いシスターズを救い出したりと、このところハンパ無い事件に巻き込まれ続けている。

ちなみに余談であるが、勇斗は以前、「コーヒー事件」以来一方通行とも知り合いである。

(8月21日の事件の当事者両方と知り合いつて…、よく考えればすげーなおい)

そんな事を思いながら勇斗は上条に話しかける。

「…で、その疲労具合を見るに…、またなんか事件に首突っ込んだ  
だろ？」

「…くっ、何か俺が自分から進んでやったように聞こえるのは気になるが否定しきれない何かがある…!!　そーですよ!カミジョー  
さんはまた事件に巻き込まれましたよ!」

そう言つて、夏休み中の武勇伝を語り出す上条の話聞きながら、  
2人は学校へと向かった。

職員駐車場まで来ると、一人乗り用の車が停まろうとしており、2  
人が運転席を覗きこむと、頭脳は大人、見た目は幼女な2人の担任、  
月詠小萌つくよみこもえがハンドルを握っていた。

「…ってオイ!ブレーキに足届くんかい!?!」



「とっ、届かなくなったって運転できるんです！」

ややあつて、3人のやりとりが落ち付いた後、勇斗は小萌先生がもつクリアファイルについて尋ねた。

「あの…、先生、そのクリアファイルの中の紙束ってなんですか？…まさかいきなり抜き打ちテストですか？」

勇斗のそんな言葉を聞いて、上条の顔がサツと青くなる。

が、

「千乃ちゃん、上条ちゃん、先生は学生時代やられて嫌だったことはやりません。これは学校のお仕事とは違って、大学時代の友人から論文の資料集めをお願いされて、その手伝いなのですよ。」

「ふーん… ちなみにどんなもんなんですか？ 論文で」

「AIM拡散力場についてなのですよー。」

その言葉を聞いて、上条はポカンとした顔をしている。

「えーあいえむ？」

「上条ちゃんももう少し大人になったら勉強するんですけどねー。

AIMは An Involuntary Movement  
『無自覚』ということですよ。まあ噛み砕いて言えば、能力者が無意識のうちに発してしまう力のフィールドのことですよ。」

「ふうん。例えば御坂みさかの体から微弱な磁場が漏れてるとかって感じか……」

「うん、まーそんな感じかな。」

上条の言葉に小萌先生に代わって勇斗が答える。

「AIM拡散力場は、能力者の能力の種類によって異なります。発パイロキネシス、イロキネシス、念動力なら圧力を周囲に展開してしまうといった具合ですねー。もっとも、どれも微弱なので精密機器を使わなければ計測できないレベルのものなんですけど。」

「へー。じゃ、もしもそのAIMナントラを読み取る能力者がいれば、『ムツ、近くに能力者の気配がする』とかっつーマンガみたい

な真似まねができるって訳ですか。」

「そうだな。もっと進歩すれば、AIM拡散力場から能力の種類や強さを測る事もできるかもしんねーよ。『ムムツ、ヤツの戦闘力せんとうりょくは53万だ』みたいな感じで。」

「まあ、世の中にはそんな事に情熱を注いでる物好きさん達たちもいるのです。」

そんな話をしながら、勇斗と上条、小萌先生は校舎に向かって少し歩いたが、すぐに別れた。

「さーてそれじゃ行くか当麻。」

「ああ、だな。」

その後クラスでは色々あったが…、割愛する。

特筆すべきことは、ホームルームホームルームのときに上条家の居候シスターが乱入したこと。姫神秋沙ひめがみあいさという上条の知り合いが転校してきた事だろう。フラグを立てられた人

始業式が終わり下校前のHRが終わると、勇斗はジャッジメント1

77支部へとむかった。

「うつつす初春。」

「あ、勇斗先輩。こんにちは。」

イスに座ってモニターの監視をしている花飾りを頭に載せた少女

初春飾利に声をかけ、勇斗は自分の席につく。

「先輩…、早速ですけど報告です。今朝、学園都市外部から侵入者が1人、ゲートに攻撃を加えて無理矢理都市内に侵入しました。現在、『特別警戒宣言』<sup>コーポレーション</sup>が発令されています。そして先程、白井さんが侵入者と思しき女性と交戦、一時は交戦したんですけど能力…のようなものを使われ、現在逃走しています。」

「…新学期早々そんな事になってんのかよこの街は」

勇斗は呆れながらつつこむ

「あはは…、で、現在、その侵入者は地下街にいるようで、現在固法先輩達が避難誘導に向かっています。先輩も合流をお願いします。」

「

…了解、新学期早々だるいなおい」

そついいながらもテキパキと準備をすませ、勇斗は現場へ向かった。

## 設定資料1 (前書き)

主人公の設定です

## 設定資料 1

### 人物設定

Name : 千乃勇斗<sup>せの ゆうと</sup>

学園都市で、上条たちと同じ高校に通う少年。

身長171cm 体重58kg

性格は基本的には、お人好しと言ってもいいくらい優しい(甘い)だが、好戦的な一面も持ち、怒ったときや本気になってしまったときは、容赦がなくなることが多い

黒い髪に茶色の目、ルックスは良く、人当たりのいい性格の良さから男女を問わず人気がある。

大能力者<sup>レベル4</sup>であり、有する能力は 御使顕現<sup>エンゼルライズ</sup>と呼ばれる。能力使用時には背中に2枚の白い翼が出現し、身体能力が向上するという恩恵がある。

その翼は 飛行、攻撃、防御 e t c . に使用可能。

この能力には秘密があるようで、アレイスターからは『ハイブリッド』とも呼ばれる。

ジャッジメント

風紀委員に所属し、初春や黒子、固法とは同僚である。

その能力と性格ゆえ、自ら前に出て戦闘を行うことが多い。

魔術に関して、当麻やインデックス、土御門からある程度の説明を受けており、本人も以前、第12学区の神学系の学校で、科学的にアプローチした宗教などを学んでいるため、ある程度の魔術の知識を持っている。

以前、上条とともにカエル医者<sup>カエル</sup>の常連だったため、上条の記憶喪失について知っている。



e p . 2 9 月 1 日 - 2 ( 前 書 き )

技術がほしいです。 まだまだ精進です。

勇斗が地下街へと向かうと、ゲームセンターから上条、インデックス、そして見知らぬ少女の3人が出て来た。

(また新しいフラグでも建てたのか?)

心の中で少し呆れながらも、勇斗は上条に声をかけた。

「オイ当麻。」

「お つす勇斗。なんだあ?」

あーっ、ゆーとだゆーとだ、と言って手を振ってくるインデックスに手を振り返しながら、勇斗は当麻の質問に答える。

「またフラグかコノヤロウそしてなんか今この地下街にテロリストが紛れ込んでるらしくて特別警戒宣言も発令されてんだ。今から約900秒後、15分後に捕獲作戦始めっから隔壁を降ろして地下街を封鎖する。銃撃戦になるかもだから、早めに逃げてくれ。」

「ちげー!!! つーかマジかよ!?!」

と、当麻が驚愕するが、

「ま、お前の夏休みの凄まじさに比べりゃマシじゃねーの?」

と、勇斗が言うと、当麻は

「くっ…、やっぱり否定しきれねえ…」

そう言ってへこみ始める。

「…まあ当麻だけならともかく一般人(…?)もいんだから早めに逃げるよ。」

勇斗は自分が言った「一般人」という言葉に違和感を覚えながらさらっと毒を吐き、その場を去った。

そしてその後、合流した固法と共に避難の誘導を行っているとき、突然　　ガゴン!!!　　と地下街全体が大きく揺れた。

「なんだこれっ…!?!」

不意の振動に勇斗は思わずよろめき、そして更にもう一度巨大な衝撃が地下街を襲う。

全ての照明が消え、非常灯が作動する。      低く重い音と共に、隔壁が降り始める。

のんびりと出口に向かっていた人々が、一気にパニックに陥った。

そして出口付近にたくさん人間が殺到する中、再び一際大きい振動が地下街を揺らす。

「くそっ…、固法先輩は何かこの状況の收拾をお願いします!!  
俺はこの状況の大元を叩きます!!」

「…わかったわ、無茶しちやだめよ!!」

その言葉に頷いて、勇斗は地下街奥へと走り出した。

戦場だ

勇斗はそう思った。

目の前の尋常でない傷を負った警備員<sup>アンチスキル</sup>、ぼろぼろの柱や壁がそんな印象を抱かせる。

(くそっ!!)

歯噛みしながら勇斗はそこを走り抜けた。

上条当麻はイギリス清教、シェリー・クロムウェルと対峙していた。

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒<sup>てしま</sup>だって事を知ってもらわないと、ね？」 エリス」

シェリーがオイルパステルを回す。彼女の動きに引かれるようにエリスと呼ばれる巨大な石像が地を踏みしめて、拳を振り上げる。

バリケードを一撃で粉碎した拳。上条は避けようとしたが、地面の震動で移動できない。

(やべえ…、やられる…！)

バジン…！！

と大きな音がした。

「…まったく、無茶すぎだつて、お前は。」

「…サンキュー勇斗。」

勇斗は間一髪、拳と上条の間に割って入り、巨大すぎる拳の一撃を、背中から生える2つの白い翼で弾き飛ばす。

「…なんなんだ？てめえのそれ。…天使？ いや、んなわけないか。邪魔するってんならテメエも一緒に殺してあげるよ。」

そう言ってシェリーがオイルパステルを振るうと巨大な石像が再び腕をを振り上げる。

「…何なんだよコイツ。当麻、こいつもお前の知り合いか？」

「んな訳ねーだろ！」

「ま、だろうな」

そう言いながら勇斗は翼を振るい拳を受け止める。

何度も何度も繰り返される拳と翼の激突で辺りにたくさんの破片が飛び散ってゆく。

「エリスと打ち合うとかテムエほんとなんだよ！」

「すげーだろっ！！」

そんなとき、闇の中、赤い非常灯の下、

さつき上条と共に居た少女が姿を見せる。

「…ッ、バカ野郎！！      なんで白井を待ってなかった!？」



周囲を飛び交う破片、それに対して全く無防備な彼女を、上条は助けようとするが、しかし、上条自身、破片にぶつかる恐れがあり、駆け寄る事が出来ない。

「風斬！！ 早く伏せろ！！」

突然の叫び声にその風斬と呼ばれた少女がキョトンとした顔をした直後、弾かれた石の破片が風斬の頭を直撃した。

「くっ…」

勇斗は翼で拳をねじ伏せると、当麻と共に風斬の元へ向かう。

と、彼らの顔が驚愕に染まる。

彼女は頭に傷を負っていた、だが、その中身はただの空洞だった。

どうしていいか全く分からず硬直している2人の前で彼女は起き上がるが、彼女の目がふと、すぐそばの喫茶店のウィンドウをとらえる。

「いや……ア、…な、に……これ!? いやあ!」

壊れかけたその身体からほとばしる絶叫に流石のシェリーも驚き、そのすきに風斬は闇の中へと走って行ってしまふ。

「エリス」

シェリーが眩き、オイルパステルをふるうと、エリスと呼ばれた石像が近くの支柱を殴り付ける。

よって、勇斗や上条の周辺、そして通路に瓦礫や破片が降り注ぐとする。

「くっ…、おらあ…！」

勇斗は翼を振るい、人に当たりそうなそれらを次々に吹き飛ばしていく。

だがシェリーはそれに目を向けることなく、風斬を狙って闇の中へ消えて行った。

2人は驚愕状態から若干回復したのち、通路を塞ぐように崩れた天井を見ながら、情報集めの為に小萌先生に電話をかけた。

そしてそこでもたらされたのは風斬の正体  
彼女は学園都市  
に満ちるAIM拡散力場の集合体であるという事

それでいて、風斬は人間となんら変わらない、大切な存在であると言ふ事

2人は決心する。

「大事な友達を守る」という上条の決意

「親友のしりぬぐいはしてやるよ」という勇斗の覚悟

2人はそれらを心に持って、再び前に走り出した。

ep・2 9月1日・2（後書き）

投稿後ではありませんが、ちょいちょい修正が入っております。

どうかご了承ください。

2人は走り続ける。

爆撃でも受けたかのような破壊され具合の通路を飛び越え、先へと進む。

しばらく走り続け、2人はようやく風斬の姿を見つける。

石像の腕は大きく振り上げられ、今にも振り下ろされようとしている。

「…っ、やばい…！」

「当麻…、風になれ」

勇斗は背に翼を出現させながら言う。

「……………えーとそれは、……………!! おっけー!」

「よし…、わかったなら、行けっ!!」

上条が地を蹴ると同時に勇斗は翼で風を巻き起こす。

「うおおおおお!!」

その風に乗って上条は、一気に風斬と石像に接近する。

その右手が今にも腕を振り下ろさんとする石像の腕を掴んだ。

石像の動きが、止まる。

そして、ビシリ、と音を立てて亀裂が走る。

「エリス？」

どこか遠くで、女の声が聞こえる。

「エリス。反応なさい、エリス！ くそ、あのガキどもか！？」

焦りが見え隠れする女の声を聞きながら、勇斗も上条達の元へ飛んでいった。

「エリス……。呆けるな、エリスッ！！」

怒りに震えた絶叫が聞こえる。

金髪の女は白いオイルパステルを掴み、すごい速さで壁に何かを書き殴った。

同時、彼女は何事かを早口言葉のようにまくし立てるとコンクリートの壁が崩れ落ち、数瞬で天井にまで達する石像が完成する。

それを見た上条は少女を守るように石像に立ち向かい、勇斗も上条の横に並ぶ。



その光景に風斬は驚き、金髪の女は笑みを引き裂く。

「くっ、あはは！何だあこの笑い話は。喜べ化け物。この世界も捨てたものじゃないわね、こついう馬鹿が二人もいるんだから！」

「ふん…2人もいれば」

「十分だけどな。」

勇斗と当麻は言う。

「……どうして……？」

風斬は不思議そうに問う。

対して、上条は一瞬で答えた。

「理由なんていらねえだろ？ 特別な事なんかじゃない。俺は思ったんだ、俺の友達を、助けたいって」

勇斗も続ける

「それに、警備員アシチスギルの人たちだって、君を助けたがってたよ。『まだ奥に、あの女の子が居る、こんなところで、休んでる訳にはいかない』って。」

風斬は、顔を上げる。

「まあ、みんな治療に行かせたからここに来れたのは…、1人だけだね。」

「…まったくお前らは。せんせーたちに命令するなんてとんでもないやつらじゃん！ おお、さっきの女の子！ 大丈夫じゃん？」

ほらな、 と上条は言う

「…みんなお前が心配なんだよ。だからおまえは胸張って堂々と助けて、って言えばいいんだ。」

「今からお前（君）に見せてやる。お前（君）の住んでるこの世界には、まだまだ救いがあるって事を！ そして教えてやる！！ お前（君）の居場所げんそつは、これぐらいじゃ簡単に壊こわれはしないって事を！！」

「クソ、エリス

ぶち殺せ、一人残らず！ こいつらの肉

片を集めてお前の体を作ってやる!!」

シエリーは叫ぶと同時に、オイルパステルを振り、ゴーレムを動かす。

勇斗はそれを見て言う。

「させるかよ、…黄泉川先生は風斬の保護を。」

「わかってるじゃん。…無茶すんなよ少年ら。月詠センセが泣くぞ。」

透明な盾を構えて、黄泉川は風斬の前に立つ。

勇斗と上条は頷いて身構える。

そして、

「いつつけええええええ!!」

勇斗は翼に力を込め、石像<sup>エリス</sup>に向けて放つ。

放たれた白い翼は途中で幾筋もの光に分かれ、石像の身体を貫き、動きを封じる。

「今だ当麻!!」

「おう!!」

これを機と見て上条が石像<sup>エリス</sup>に突っ込む。

「チイツー!!」

石像の向こうから、シエリーの怒号が聞こえる。

「『ミカエル神の如き者』 『ラファエル神の薬』 『ガブリエル神の力』 『ウリエル神の火』 ! 四界を示す  
四天の象徴、正しき力を正しき方向へ正しく配置し正しく導け!!」

オイルパステルによって歪ゆがんだ十字架が空気中に走り書きされていく。エリスの体が不気味な音を立てながら、一歩、前へと出る。

「なっ!?!」

それを見た上条は動きを止めかける。 だが、

「なめんなよっ!!!」

勇斗は背中の翼に更に力を込める。

「チイツー!! エリス!!」

シエリーは狂ったようにオイルパステルを振り回す。翼に押されて

いるエリスの足が、より力強く前へ踏み出される。

「ハッ！！ 舐めてんじゃねーよクソガキがあー！！ この程度の手  
カラでエリスを止められるものか！！」

「…ふーん、そう」

しかし、勇斗はゆっくりと告げる。

「ま、でも、なんにでも言えるけどさ、……少しは落ち着くことを  
覚えような。」

そして勇斗は演算をストップさせ、翼を消した。

シエリーにとって、それは予想外の展開だった。

そしてエリスの鈍重な体が、前につんのめった。

上条はそれを見て再び走りだす。

「くそ。やりなさい、エリスー!!」

矢のように走る上条に対し、シェリーは慌てたようにオイルパステルを振るい、その命令に忠実に従い、エリスは拳を握る。

しかし案の定、失いかけていた体のバランスは完全に崩れ、エリスは前のめりに、ゆっくりと地面へ倒れていく。

上条は足のバネに全神経を集中させ、身を屈めるようにして、ほとんど地面を舐めるような姿勢で、一気に前へと跳び、そのままエリスの足の間を突き抜ける。

直後、勇斗が再び翼を出現させ、エリスへの攻撃を再開する。

翼によってエリスの動きが再び拘束される。

上条はゆっくりと立ち上がって、前を見据える。

そこに、シェリー＝クロムウエルがいた。



「は、はは。何だ、そりゃ。これじゃ、どこにも逃げられないじゃない」

「逃げる必要なんかねえよ。テメエは黙って眠ってる」

上条は、一切の手加減なしにシェリー・クロムウエルを殴り飛ばす。

勇斗はエリスに突き刺した翼を一気に炸裂させる。

シェリーの細い体は、風に流される紙クズのように地面を転がり、エリスは粉々に砕け散った。

「ふう… お疲れ、当麻。」

「うー、お疲れ勇斗。」

2人はそこで互いの仕事をねぎらい合う。

が、

「ふ。うふふ」

そこで、女の笑い声を聞いて、2人は勢い良くシェリーの方へ振り

返る。

彼女は倒れたまま笑っている。ただし、その手に白いオイルパス  
テルを握り締めて。

オイルパステルが地面に走り、模様のような記号のような、判読不  
能の何かが勢い良く床へと書き殴なぐられる。

シェリーは極ごく猛まうに、それでいて可笑しそうに笑って、

「石像作りを上手く活用すりゃあ、こういう事もできんのさ!!  
油断してんなよ、ガキども!!」

瞬間、シェリーが描いた文字を中心点にして、半径二メートルほど、  
彼女が倒れている地面が丸ごと崩れ落ち、地面に呑のみ込まれるよう  
に姿が消える。

「くそっ!!」

勇斗と上条が慌てて駆け寄ったが、そこには空洞しかなかった。穴  
は深く、何メートルあるかも分からない。ただし、底の方から空気  
の流れのようなものを感じる。

「くそ…、地下鉄の線路だな。」

「ああ、逃げられちゃった。」

勇斗と上条が悔しがっていると、動きの止まっていたエリスが、バラバラと音を立てて崩れていった。

「…何か、引つかかるんだよな。」

と、上条は言う。

「何か？」

「ああ。なにか…、あいつの行動に何か違和感があるんだ。」

しばらく、上条はは難しい顔をしてうつむいていたが、不意に彼は顔を上げた。

「…そうだ。あいつは言ってた。『戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒<sup>てこま</sup>だって事を知ってもらわないと、ね？　　エリス』って。」

上条は続ける。

「あいつは最初から風斬だけを狙ってたんじゃない。戦争の火種が欲しいから、って、俺か、インデックスか、風斬の誰かを殺せさえすればいいんだ。」

そこで勇斗は気付く。

「じゃああいつは逃げたんじゃなく、新しい標的を狙いに行っただけか!？」

勇斗は彼女の標的の三人を考える。

その内、上条と風斬はここで自分と共に居る。

そして唯一、今ここにはおらず、アンチスキル警備員にも守られていないのは。

「まさか……。インデックスか!？」

上条は頷いた。

**e p ・ 4 9 月 1 日 ・ 4 ( 前 書 き )**

分量の都合で e p 4 と e p 5 に分けました。ご了承ください。

そして「設定資料1」に書き忘れていたのですが、勇斗は魔術について当麻やインデックス、土御門から説明を受けています。

その前提でご覧下さい。

上条が警備員アンチスキルの女性にほとんど掴みつかかかりそうな勢いで話しかける。

「もうさっきのヤツは地下街にいないんだろ！ だったら何で地下街の封鎖ふうさが解かれなんだよ！？」

「何度も言うように、地下街の管理とウチらとは管轄かんかつが異なるじゃん。こちらでも連絡をつけているけど、命令系統というものもあるし。封鎖を解くにはもう少し時間がかかるじゃんよ」

「くそ！」

そう毒づいて上条は壁を蹴る。

風斬はそんな上条を見て、様子がいさおかしき事に気づき、声をかける。

「何が、あつたん……ですか？」



その声に、上条は少し黙<sup>たま</sup>った。言<sup>い</sup>つべきか否<sup>いな</sup>か、迷<sup>まよ</sup>っているようにも見えた。

そんな上条に代わって、勇斗が答える。

「あのゴスロリ女は逃げたんじゃなくて、次のターゲットとして、インデックスを狙い始めたんだ。」

「え……?」

「あいつは上条や風斬だけを殺すためにここに来たんじゃなく、特定の条件が合えば誰でも良かったっばいんだ。で、その一人がインデックスだ。」

「そんな……」

上条は唇をかむ。

「<sup>アンチスキル</sup>警備員には掛け合ってみた。けど、地下街の封鎖はまだ解かれな  
いって。あの分厚いシャッターが上がらないと外へ出られないの  
に  
！」

「…………でも…………それなら、あの人達に言えば。地上にも、警備員キルの人達はいっぱいいるんだから…………保護してもらえば良いんじゃない…………」

「無理なんだ。」

上条は即答する。

「どうしてですか？」

「インデックスは、この街の住人じゃない。警備員アンチスキルに見つかれば保護どころか逮捕されるかもしれない。…………あくまで、かもしれないだけだな。可能性の話。一応、アイツにも臨時発行扱いのIDはあるんだけど、特別警戒宣言コートレック下なんて非常時じゃ役に立つかどうか分からない。免許証なりクレジットカードなり、他の身分証を見せるって言われても不思議じゃねえんだ。…まずいんだよ、それだと。アイツには『書類上の身分パーソナルデータ』がないんだ。カード、保険証、住民票、果ては自分の年齢、血液型、誕生日から何まで全部だぞ。インデックスなんて名前も明らかに偽名だしな。『外からやってきた怪しい人物』を捜している連中が、こんな空白だらけの人間を放っておくと思うか？」

そこまで言うと、上条は一人で歩き出した。風斬は慌ててその後を追う。

上条が向かったのは、床に空いた大穴の縁だった。

「やっぱり、行くならここから飛ぶしかねえか。くそ、すぐその隔壁を開けてくれりゃ簡単に先回りできるってのに！」

「……………大丈夫、です。あなたが、行かなくても……………助ける方法はありません」

風斬は言う。

「化け物の、相手は……………同じ、化け物がすれば良いんです」

勇斗と上条に、風斬はそつと笑いかける。

「私は……………あの化け物に、勝てるかどうかは分からないけど、少なくとも、困ぐらいはできます……………、私が殴られている間に、あの子を逃がす事が……………できます。私は、化け物だから。それぐらいしか、

できないけど……」

上条の表情が怒りに変わる。

「お前、まだそんな事言ってるのか！ 良いか、お前がはつきり口にしねえと分かんねえなら、一から一〇まで全部教えてやる。お前は化け物なんかじゃねえんだよ！ 俺達は何のために、誰のためにここまで駆けつけたと思ってるんだ！ それぐらい分かれば、何で分かるうとしねえんだよ！！ そんな風にされて嬉しいとでも言うような人間に見えんのか、俺達が！ インデックスがあんな化け物にお前が殴られているのを背に逃げるような人間だと思ってるのか！ ふざけんな！ たとえお前が俺達を見捨てたって、俺達はお前を見殺しにしたりはしねえんだよ！ できるはずがねえだろ！！」

「……だけど、それで良いんです。私は、化け物で良い……」

風斬は、目を逸らさずに正面から上条の、そして勇斗の顔を見て告げる。

「だから、私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……化け物で、幸せでした」

にっこりと笑って、かさきりひょうか風斬氷華はシェリー・クロムウエルの空けた大穴の縁から、飛んだ。

大穴へと落下していく、その途中で彼女はそっと微笑んでいた。

「くそっ、俺も早く行かねーと!! やっぱこっから飛ぶか?」

上条は焦って言う。

「落ち着け、当麻」

勇斗が落ち着いた声を出す。

「んなことしたら風斬に追い付くもくそもなく、怪我して終わりだ。そんなことになったら、それこそただの足手まといだぞ。」

「じゃあどうすんだよ！！ あいつをたった一人で行かせんのかよ  
「！！」

「……………簡単な話だろ。」

勇斗は言う。

「その隔壁をぶつ壊して、俺らも助けに行けばいい。」  
「シャッター」

勇斗と上条は学園都市の街並を前へ進む。

シャッター  
隔壁を勇斗の翼で破壊して地下街を脱出した2人はインデックスを  
探してビル街を走っていた。

勇斗は走りながら携帯を取り出して177支部に連絡を入れる。

「…初春か？　すぐに第22学区の監視モニターに変な土の塊が映

っていないかを調べてくれ。」

『了解です。……………勇斗先輩の居る場所から西に400メートルのモニターが不審な土の塊を発見、同時に不審な地面の振動も感知しています！！位置コード…送信しました！！』

「サンキュー初春！！」

『…先輩、怪我しないように気を付けて下さいね。』

「…ああ、わかってるよ。」

勇斗は電話を切り、上条に情報を伝える。

「ここから西に約400メートル、エリスはそこだ。」

「サンキュー勇斗！」

そして2人が西に向かって走ろうとしたそのとき、不意に、すぐそばのアスファルトが砕けた。



まるで見えない巨大な手で地面を叩きつけ、地面を割り砕いたように、明らかに不自然な現象だった。

「ちっ……！？」

「くっ……！？」

足を取るように陥没していくアスファルトを、勇斗と上条は慌てて横へと跳んで避ける。

「流石さすがに、簡単には呑まれないわね……」

横道から声がかかる。

勇斗と上条が視線を向けると、薄汚れたドレスを引きずるようにして、シエリー「クロムウエルが立っていた。

やはりエリスの姿がない。

「……ち、やっぱりあの石像は先に行ってるか…… 当麻！！ お前は先に行け！！」

「……良いのか？」

「お前の右手はこいつよりあの石像向きだ！… それに、インデックスが待ってんだろ！…」

「…わかった！！ 任せたぞ！！」

そう言って、当麻は再び走り出す。

「素直に行かせると思ってんのか？」

シエリーはオイルパステルを振ろうとする。

が、

「思ってるわ。」

勇斗は出現させた翼を振るい、風を巻き起こし、たくさんのお土くれをシエリーに飛ばす。

「くっ…!？」

シエリーが顔を腕で覆い、土くれから身を守るうとしていた間に、当麻はすでに走り去っていた。

「……おい、イマジンプレイカ幻想殺しを逃がしちまったじゃないか。この死亡フラグ野郎。」

「ふん、あんなんでフラグが立つほど俺が弱いとお思いで？」

「……つくづくムカつくクソガキだ。お前こそ、私の力を舐めすぎだよ!！」

そうやってシエリーがオイルパステルを振るうと、アスファルトがめくれあがり、巨大な石の槍となって勇斗に迫る。

「この程度かよっ!！」

勇斗は再び翼を振るい、槍を叩き飛ばす。

「チッ、まだまだよっ!！」

シェリーが再びオイルパステルで空を裂く。すると砕け散ったアスファルトの破片それぞれが、散弾のように勇斗に向かう。

「くっ!!」

勇斗は翼で空気を叩き、地面を強く蹴って横に大きく飛んでその破片を回避する。

「ッけえ!!」

回避行動に移った勢いそのままに、勇斗は翼をシェリーに向けて放つ。

「チッ!!」

再びオイルパステルを振るって厚いアスファルトの壁を作り出し、シェリーは勇斗の翼を防ぐ。

「…邪魔なんだよクソガキが!! わたしは科学と魔術の戦争の火種を作る必要があるんだ!! 邪魔すんじゃねーよ!!」

「……………アンタはなんでそんなに戦争にこだわんだよ。なんか科学に恨みでもあんのか？」

「……………お前はなんで能力者が魔術を使えないか分かるか？」

「はあ？」

「試したんだよ、今からざっと20年ぐらい前に。イギリス清教と学園都市が、魔術と科学が手を繋ごうって動きがウチの一部署で生まれてな。私達はお互いの技術や知識を一つの施設に持ち寄って、能力と魔術を組み合わせた新たな術者を生み出そうとした。その結果が……………」

彼女は首を横に振った。

彼女の言葉で、勇斗は上条から聞いた話を思い出す。

能力者が魔術を使えば体が破裂する。

そのせいで、土御門が危ない目に逢ったと言っ事を。

「科学側と接触していたその部署は、同じイギリス清教の者によっ

て討たれた。互いの技術・知識の流出はそれだけで攻め込まれる口  
実にもなりかねねえから。そしてそのとき連れられてきていた  
能力者の一人が、エリス。……私の友達だったやつさ。」

シェリーはポツリと言う。

「私が教えた術式のせいで、エリスは血まみれになった。施設を潰  
そうとやってきた『騎士』達の手から私を逃がしてくれるために、  
エリスは棍棒メイスで打たれて死んだの。」

シェリーはゆっくりとした口調で、

「私達は住み分けするべきなのよ。互いにいがみ合うばかりでなく、  
時には分かり合おうという想いすら牙を剥く。魔術は魔術の、科学  
は科学の、それぞれを領分を定めておかなければ何度でも同じ事が  
繰り返されちまう。」

「……だからってアンタしたことを正当化なんてできない。あいつ  
らが何をした？ 争いたくないなんて大層なご高説説いてる割には、  
アンタは一体誰を殺そうとした？ 科学に対して怒るのは良い。  
哀しむのだって止めない。けど、それを向ける矛先が間違っ  
てる。それを他人にぶつければ、アンタが嫌う争いが起きちまう。」

「……そんなのはわかってんのよ！！ 本当に魔術師と超能力者を

争わせたくないとも思ってたのよ！！ 笑いたければ笑い飛ばせ。  
どうせ私の信念なんか星の数ほどあるんだ！ 一つ二つ消えた所で  
胸も痛まないわよ！！」

「……何で気づいてないんだ、アンタ」

「……何ですって？」

「結局、アンタの信念なんて、最初から最後まで一つきりだ。『大  
切な友達を失いたくなかった』っていうたったひとつなんだ。」

e p . 5 9 月 1 日 . 5 ( 前 書 き )

これで9月1日編は終了となります。



勇斗は続ける。

「そのたったひとつの信念で考えるよ。 あいつらに……当麻とインデックスに、お前が言うような住み分けが必要だと思っか？」

勇斗は告げる。

「そんなもんなんか必要無いんだ。 だから、俺の親友を傷付けんじゃねーよ」

シェリーの肩がビクリと震えた。

シェリーの顔は、葛藤に耐えるように歪んでいた。

「Intimus 115  
我が身の全ては亡き友のために!」

しかし、彼女は勇斗の言葉を振り払うように絶叫した。

放たれるのは魔法名。

彼女の手の中にあるオイルパステルが閃く。

シェリーの周囲のアスファルトに紋様が走り、巻き上げられ、今までで最も巨大な槍が作られる。

「私は…この信念を選ぶ！！ 私を止めたければ……力で止めてみ  
せな！！」

泣きそうな顔になりながらも、強く叫ぶ。

「言葉ではもう止まらない、か……」

勇斗はそれを見て呟く。

「死んでしまえ、能力者！！」

泣き出す寸前の子供のような顔で、鬼のように罵声をあげ、シェリーは槍を勇斗に放つ。

星の数もある信念全てに納得し、それでも彼女はこの信念を選んだ。

なら、

「俺も全力でアンタを止める。」

翼をしならせ、力を込め、そして、放つ。

ガゴン！！ という音を立て、翼と槍が激突する。

そして一瞬の拮抗の後、翼が槍を消し飛ばす。

「は、はは。……マジかよ。」

驚愕で目を見開きながらも、どこか安心したような表情でシェリーは座り込む。

「……おい能力者、私を殺さなくていいのか。」

「……なんでそんなことする必要がある？」

「今は殊勝な事を考えてるけど、わたしの中には無数の信念がある。この先、何をしたくなるか、分かんないよ。」

「……自分の信念の根底をもう一度思い出せよ。それでもまだ戦うってんなら、また俺達が止める。」

「……ははっ、負けたよ。……お前、名前は？」

「？ ……千乃勇斗だよ。」

突然の質問に少し戸惑いながら、勇斗は応える。

「私はシェリー・クロムウエルだ。」

集まってきた警備員アンチスキルに拘束されながら、シェリーは言う。

「お前達が、この世界を変えてくれ。」

「……ああ、わかった。もちろんさ。」

勇斗がそう言うと、シェリーは微笑んで、車に乗り込み、連行され

ていった。

「……初春か？ 向こうの方はどうだ？」

『モニターにはもう石像は映ってません。むこうももう終わったみたいですよ。』

「そうか、わかった。サンキュー初春。あとでなんか食い行こう。」

『はい！！ お待ちしてます。先輩もお疲れ様でした。』

「おう。」

勇斗は通話を切り、1人呟く。

「まあ…、その前に、後片付けか。」

1人苦笑して、勇斗は警備員達と合流した。

「これで満足か？」

窓のないビルの一室で、土御門元春は空中に浮かぶ映像から目を離して吐き捨てるように呟いた。

巨大なガラスの円筒の中で逆さに浮かぶアレイスターは、うつすらと笑っている。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいた、という訳だ。」

虚数学区・五行機関。

「まさかその正体がA I M拡散力場そのものだなんて誰も思わないだろう。学園都市に住む二三〇万人もの学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作っているなどと。そしてそれを制御するための鍵こそが千乃勇斗、上条当麻、風斬氷華、という訳か。まったく、風斬については、あくまで虚数学区の一部分とはいえ、あんなものに人為的に自我を植えつけて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない。」

と、それまで黙っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御するための方策だ。『何をするか分からない』  
無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測できる  
し、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える。それに”ハイブリ  
ッド”たる御使<sup>エンゼルライズ</sup>顕現と幻想殺しが覚醒すれば、完全制御可能化まで  
の時間が短縮できる。」

「そこまでして、虚数学区を制御する事に意味があるのか。確かに  
虚数学区は学園都市の脅威だ。だが、脅威とは内側だけにある  
ものではないぞ。今回の一件によって、世界は緩やかに狂い始め  
た。理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを警備員<sup>アンチスキル</sup>と能  
力者の手を借りて撃退したんだ。聖<sup>セント</sup>ジョージ大聖堂の面々はこれ  
を黙って見過ごすとは思えない。まさか、お前はこの街一つで世  
界中の魔術師<sup>まじゅつしたち</sup>達に勝てるなどとは思っていないだろうな」

土御門の脅迫めいた声に、しかしアレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師どもなど、虚数学区さえ掌握できれば取るに足らん相手だ  
よ」

「なんだと?」

ふと土御門は背筋に嫌な感覚が走り抜けた。

もう一度、彼はAIM拡散力場の集合体、虚数学区・五行機関につ



いて考える。

それは赤外線や高周波のように、そこにいるのに見る事も聞く事もできず、

人間とは別位相に存在し、ある種の力の集合体によって構成される。

土御門元春は知っている。

その存在を、魔術用語で述べるとどんな言葉になるのかを。

（まさか、天使）

そして、虚数学区に住人 かきぎりひょうか 風斬氷華を『天使』と表現するなら、彼女達が住んでいるとされる『街』とは、つまり……。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか!？」

「やてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えるのみ。

土御門は戦慄しながらも、なかば負け犬が吼えるように吐き捨てる。

「ふん。これがイギリス清教に知れば即座に開戦だな。今にして少し思う、オレはシェリー「クロムウェルに同情すると。お前の言動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れっきとした、自分の世界を守るために立ち上がったもう一人の主役だろっさ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天界を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの星にいるか。そうだろう?」

土御門は、唇の端を歪めて、

「魔術師・アレイスター「クロウリー」

その場はしばしの沈黙に包まれる。

「……丸つきり負け惜しみになるがな、お前に一つだけ忠告してやる。アレイスター」

「ふむ。聞こっか」

「オレにはお前が考えている事など分からないし、おそらく説明を受けても理解できないだろう。だが、あの御使<sup>エンゼルライズ</sup>顕現と幻想殺しを利用するというなら覚悟しろ。生半可な信念ぐらいで立ち向かえば、あいつらはお前の世界を食い殺すぞ」

彼が告げると、ちょうどタイミングを計ったように空間移動能力者が部屋に入ってきた。

三〇センチ以上も背の低い少女にエスコートされ、土御門はビルから出て行く。

誰もいなくなつた部屋の中、逆さに浮かぶ男は一人呟いた。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に壊れているぞ」

その言葉は、何も感じていないようにも、寂しげであるようにも、憤っているようにも、呆れているようにも、聞こえた。



ep.5 9月1日・5(後書き)

ちょっと字数的にアンバランスな分け方になってしまいました。

反省……

先日起きました地震に被災しまして更新が遅れてしまいました。私の住んでいるところはそれほど被害は大きくないのですが、やはりまだ物資の不足が厳しいです……。

あ、それでは久々の更新になります。よろしく願います。

「……たく、なんで学園都市は騒ぎばっか起こんだよこんちくし  
よう。」

そう独り言をつぶやいて、勇斗は1人、裏路地を駆け抜けていた。

その前方には茶色い髪に白Yシャツの少年と、黒い髪に黒いポロシ  
ヤツを着た少年が走っている。

「ツリーダイヤグラムの設計者の残骸とか……、怪しさ満点じゃねーか」

前を走る2人が口走っていた不穏な単語。

ツリーダイヤグラム  
樹形図の設計者、

ヨハネのペン  
自動書記起動時のインデックスによって破壊された世界最高性能の  
スーパーコンピュータ。

一か月以上前に失われたはずのコンピュータの話をし、勇斗から逃  
げようとする少年達。

……事の始まりは約30分前に遡る。

「……スキルアウトの能力者狩り？」

「はい。なんだか最近増えて来てるらしいんですよ。」

9月8日、シエリー・クロムウエルによる学園都市への侵入事件から1週間たった日の放課後のこと。

いつものように勇斗と初春が会話していると、そんな話が初春から勇斗に教えられた。



「はあ……、9月1日の事件から1週間しか経ってなーのに早速増えだしたのか。」

9月1日の事件で第7学区、第22学区などで損傷が与えられたため、それ以来ぱったりと止んでいたスキルアウトによる能力者の襲撃。

それが、都市の復興が進むにつれ、再び増えてきたらしい。

「……しよーがない。ちょっと痛い目にあわせてくる。」

「……勇斗先輩、やりすぎはだめですよ?。」

「わーってるよ。」

そう言っつて勇斗は177支部を出た。

## 第7学区の裏路地

そこに着くと、勇斗は1人奥へ歩いていく。

すると案の定、数人のスキルアウトに取り囲まれた。

「おい。おまえこんなところでなーにしてんのーWWW」

「なんだー？迷子か？WWW」

「あ、オイコイツ。ジャマッジメント風紀委員だぞ。」

「おいおい。たった一人で俺達捕まえに来たのか？WWW」

「へー、すごいすごいWWW」

鉄パイプ、チェーン、スタンガン、折り畳み式ナイフ

各自おもいおもいの武器を持って勇斗の周りに群がる。

言葉の端々に www が付いているような、スキルアウトチンピラどもの言葉を無視し、溜息を吐いて言う。

「全く……、テメーらみたいなのがいるからスキルアウト全体が誤解されるんだろーに。……チンピラどもが」

「ああ？テメエ調子のもつてんなよ！！？」

そう言って、1人が鉄パイプで勇斗に殴りかかってくる。

しかし、勇斗は流れるような動作でそれをかわし、そのまま体を回して回し蹴りを腹に叩き込む。

「グボオ！！」と声をあげ、そのままノーバウンドで壁まで飛んで

いくスキルアウト。

それを見て呆然とする残りの面々に勇斗は声をかける。

「能力者、っても能力バカばかりとは限らないんだよね。」

勇斗はニツ、と笑った。

1分後、スキルアウト達は全員意識を刈り取られ、地面に転がっていた。

勇斗は1人1人に手錠をかけると、アンチスキル警備員に連絡をいれた。

「すみません。傷害事件の現行犯で4人狩捕まえたったのでよろしくお願  
いします。」

そう言って電話を切り、177支部に戻ろうとすると、表の道を2  
人の少年が歩いていていた。

片方の……、黒髪の少年は、携帯電話を耳に当て、誰かと話をして  
いるようだった。

それは別に、おかしくもななんともない、よくある様子だった。

しかし、もう1人、茶髪の少年が周囲をチラチラと見て、警戒して  
いる。

ただ、通話しながら歩いている友人に危険がないように、周囲を見  
ているだけかもしれない。

だが勇斗は、何処となく怪しさを感じ、こっそりと聞き耳を立てた。

「……………!!」

「はあ……、ただの口げんかか」

なんだ勘違いか、と思い、溜息をついて勇斗がその場を立ち去ろうとしたとき、衝撃的な一言が勇斗の耳に飛び込んできた。

「……………!!」  
ツリーダイアグラム  
レムナント  
樹形図の設計者の残骸の運搬日は今日じゃない!!」

その一言を聞いた勇斗の動きが一瞬止まり、それから言葉を吐き出す。

「……………」  
ツリーダイアグラム  
レムナント  
樹形図の設計者の残骸だって?」

「!!」

音の無い一瞬に漏れ出したその声に、茶髪の少年が気付き、黒髪の少年に合図し、2人組の少年達は脱兎のごとくその場から逃げだす。

「チツ……………!!」

怪しすぎる、と走り出しながら勇斗は思う。      あを感じ……………、絶対裏に何かある。

「……………たく、なんで学園都市このまちは騒ぎばっか起こんだよこんちくし  
よう。」

そして話は冒頭に戻る。

先行する2人組は裏路地に入り、右へ左へと進路を変え、勇斗をまこうとしている。

しかし勇斗はそれを的確に追いかけて行く。

「レムナント残骸を手に入れて何しよーってんだあいつら……」

2人組との追いかけてこをしながら、勇斗は考えをめぐらす。

(まず考えられるのはツリーダイアグラム樹形図の設計者の復活…… だとするとそのメリットは…… 研究時間の短縮、効率の上昇、妥当性の判断、天気予報の確実化…… くらいか？ …… 研究の妥当性の判断?)

ちょっと待て、と勇斗は思う。

(まさかあいつら……、レベルソフト絶対能力進化計画の再開が目的なのか？  
もしそうなら最悪じゃねーか)

勇斗は眉をひそめる。



（この街のイカれた研究者たちの差し金なら十分あり得る。）

レベル6と言う未知なる領域、その過程でもたらされる超能力に関するデータ。それらは研究者にとってはとても魅力的だろう。

富や名声と言った欲に駆られた研究者達が飛び付くだろうことは想像に難くない。

1万人以上の妹達シスターズを犠牲にし、一方通行アクセラレータを絶対能力レベル6に進化させるために行われ、勇斗の親友、当麻によって止められた、あの最低最悪な実験。

（そんな実験が再開されるような可能性は全て摘み取らなきゃならない）

そうでないと

（残った妹達シスターズも殺されて、御坂はまた絶望行きだ。それに……被験者アクセラレータの一方通行だって更に深い闇に叩き落されちまう）

「くそっ……!!ふざけんなよ!!」

勇斗は拳を強く握りしめ、走るスピードを上げた。

e p . 6 9 月 8 日 - 1 ( 後書き )

本編にない部分を考えるのが難しい……

勇斗がそのまま裏路地をしばらく走り続けていると、先行する2人組が突然走るのを止め、立ち止まった。

それを見た勇斗も10メートルほどの間合いを開け、立ち止まる。

「はー……、お前のせいで風紀委員ジャマッジメントにつきまとわれちゃったじゃないかよー!」

「う……、うめん」

「ったく、おめーはいつつm「ロゲンカ中の所悪いんだけどさあ……、残骸使レムナントって何するつもりか教えてくれない?」……まだおれ喋ってる途中なんだが? ……つーかなんだよ、残骸レムナントって。」

「とぼけんなよ。そっちの黒い髪の毛のやつがさっき電話に向かって叫んでたじゃないか」

「……風紀委員ジャマッジメントのくせして盗み聞きかよ。」

「たまたまだ。……で、どうなんだ？」

「……そんな簡単に教えてもらえると思ってんのか？」

「……そうか。ならとっ捕まえてじっくり聞き出すか。」

そう言っつて、勇斗は背中から白い翼を展開させる。

「ハッ！ なめんなよー!!」

茶髪の少年が右手を振るうと ヒュッ という風切り音と共に、不可視の何かは勇斗の顔の脇を通り過ぎる。

勇斗は頭を振ってそれを避けるが、頬に一筋の裂傷が走る。

(くっ……、エアロシューター風力使いか?)

「おれのこいつは エアロフラスト真空刃舞っつーんだよー!!」

ヒュパパパパパッ！！ と不可視の刃……カマイタチが勇斗に迫る。

「ちっ……！！」

ブオツ！！ パパパパパパッ！！

勇斗は翼を振るって目の前の空間を薙ぎ払い、カマイタチを消し飛ばす。

そして足に力を込め、強く地を蹴って一瞬で茶髪の少年に接近する。

が、

「俺のこと忘れてるよ？」

「！」

2人組のもう一方、黒髪の少年が勇斗に声をかける。

と、 ベガン！！ という音と共に宙を滑るように進んでいた勇

斗の身体が突然地面に叩きつけられた。

「ぐあつ……！！これは……重力操作！？」

「グラビトオーダー重力統制、さ。今君には地球重力の30倍の重力がかかっている。君の能力は……身体強化かな？それが無かったら、君の内臓はぺっちゃんこだったね。……ああ、もちろん、動くなんて無理さ。」

「ハッ……、わりいが意識をぶっ飛ばして、病院送りにさせてもらうぜ。しばらく目え覚まさないようになあ！！ノコノコについて来た自分の甘さを恨めよ！！」

茶髪の少年は右手をあげて風を集め、刃を生み出し、勇斗に向かって振り下ろそうとする。

と、そのとき、

バチバチバチッ！！と電撃が路地裏を走り茶髪の少年に命中する。

「ガッ……！！」

電撃に意識を刈り取られ、茶髪の少年は地に倒れる。

(電撃……？ まさか!?)

「全く……、アンタちよつと油断しすぎなんじゃないの?」

現れたのは、学園都市、7人しかいないレベル5の第3位、常盤台  
中のエース、

「御坂!」

彼女の姿を見て、そして名前を聞いた黒髪の少年は驚きに目を見開く。

「常盤台中の……御坂? まさか……、超電磁砲!？」  
レールガン

「その……、まさかよっ!」

再びの雷速の閃光。



黒髪の少年もまた、意識を奪われ地に崩れ落ちる。

「サンキュー、助かったよ、御坂。」

服に着いた汚れを払いながら勇斗は立ち上がる。

「いいわよ別に。それで？　なんでこんな所でボコられてたわけ？」

御坂が地面に横たわる少年2人に目をやりながら勇斗に尋ねる。

「ああ……、何かあいつらがツリーダイヤグラムの設計者の残骸がレムナントとかがって

話しててな、気になって追いかけてたんだ。」

「で、あっさりやられてたと。」

「……あーそーだよ。油断してたよコンチクショウ。……で、御坂はここで何してたん？」

「……アンタと同じよ。私も残骸を追ってたの。」

「……やっぱり『実験』か？」

「うん……、そうね。あの子たちの命が脅かされる可能性は、少しでも無くしたいから。あんな実験を、再開させる訳にはいかない。」

「だな。……御坂、おれも残骸の件、協力させてくれ。『実験』の時は何もできなかったけど……、今度こそ妹達の役に立ちたいからな。」

「……ありがと。助かるわ。」

「ああ、もし何かあれば当麻にも伝えておくよ。」

「えっ……、アッ、アイツは……、 ……わかった、お願いね。」

「……さっさとお前も素直になっちまえ。ま、まずはこの転がってる連中から聞き出すか。」

勇斗は2人組を拘束しようと倒れたままの2人に近づく。

と、そのとき、唐突に2人組の姿が消え去る。

「「!」「」

驚く勇斗と御坂、その後ろから女の声が路地に響いた。

「それが、そう簡単にもいかないのよね。」

2人が振り向くと、そこには茶色い髪を後ろで2つに束ね、裸の胸にピンクの布を巻き付け、その上からブレザーを肩に羽織っているのみという、露出多めの服装の少女がいた。

「!!! ……何なのアンタ?」

「あらあら、そう身構えなくていいわよ。第3位の超電磁砲とレベル4の御使顕現相手に、真正面から喧嘩を売るほどバカじゃないし。だから……、今日はもうお帰り頂こうかしら。」

そう言つてその少女はベルトから軍用の懐中電灯を取り、2人に向かって振った。

「!!!」

気付くと2人は表通りにいた。

「な……、空間移動!？」

「ちっ……!!」

勇斗が再び路地裏に向かって走る。

しかしそこには、倒れていた少年達も、突如現れた少女も、既にいなかった。

話の中で出て来た能力についての簡単な補足

エアロブラスト  
真空刃舞 レベル 4

風力操作系統最上位能力 カマイタチを生み出したり、空気の  
流れを操ったりすることが出来る。

グラビドオーダー  
重力統制レベル 3

自分の周囲半径 10メートルの範囲における重力を自在に操る  
ことが出来る。

e p . 8 9 月 1 4 日 - 1 ( 前 書 き )

ちよつと年度末のバタバタなどで更新が遅れてしまいました

申し訳ありません…

それでは第8話です!!

路地裏での件から1週間近く経ち、勇斗は風紀委員として社会のオモテから、御坂は学園都市最強の電撃使いとしての能力を駆使して社会のウラから、件の連中の調査を続けていた。

そして前日までの調査で、2人はいくつかの情報を掴んでいた。

「書庫バンクに検索かけてみたんだけど……、学園都市にいる空間移動能力者テレポーターは全部で58人。うち、私とアンタ……、つまり複数の物体を同時に移動できるのは19人。そしてあの時見た容姿と一致して、かつ、黒子と違って”自分の手を触れずに物体を飛ばせる空間移動能力者”はただ1人、……霧ヶ岡女学院2年、結標淡希。こいつよ。」

「……やっぱりこいつか。おれも調べる上でこいつにはつき当たった。まあ調べた結果、分かったのは2年前に能力の暴走起こして足に大けが負ったってことか。」

「そうね。それがきっかけで時間割りからドロップアウトしちゃったらしいわね。超能力者を目前にして。」



「ああ。あ、そしてもう一つ、結標、そしてこの前の黒髪、茶髪  
の一派は、学園都市の外部組織、科学結社（Associacion  
de ciencia）つてのと接触を図ってるらしい。回収し  
レムナントた残骸から、ツリーダイヤグラム樹形図の設計者を復活させるために。各々の目的ま  
では分からなかった。ただ、あんなハイスペックな超高度並列演  
ミレター算装置だ、欲しがらぬ奴はいくらでもいる。」

「……………そうなのよね。まったく、やることだけは無駄に多いんだ  
から。」

「その点なんだが……………、俺と御坂で別行動を取ろう。御坂は学園  
都市内部における残骸レムナントの回収、もしくは破壊に動く。俺は外部に  
出て、外部組織の方をブツ潰して来る。そうして、学園都市の内  
と外の2方向から同時に叩く。これが確実に手っ取り早い。」

「うん……………、そうね。そうしましょう。」

「……………御坂」

「……………何？」

「当麻なら妹達シスターズについての事情を知ってる。どうしてもやばくなっ

たらアイツを頼れよ。 アイツなら必ずお前の力になってくれる。」

「……うん。わかってる。……でも、今度は、今度こそは、私の力でどうにかしてみせる。 絶対に。」

「……ま、無理だけはすんなよ。」

勇斗の調査、そして御坂の連絡回線へのハッキングにより、学園都市による残骸レムナントの運搬日が9月14日であることを掴んでいた2人は、その日に考えられるであろう結標一派の襲撃・強奪に備え、準備を進めていた。

そして、9月14日、授業を終えた勇斗は職員室へと向かった。

「黄泉川先生、外出申請取ってきました。」

「おー、早かったじゃん？ まーよし、これで私は君を心おきなく『外』に連れて行けるじゃん。」

「はい。なんかあっさり申請通ったんですよ。良かったですよホント。」

「だなー。よし、午後7時20分に職員駐車場に来るじゃん。」

「わかりました。それじゃまた後で。」

勇斗は学園都市外部の組織を叩くため、警備員である黄泉川の力を借りる事にしたのだ。

シスターズ  
妹達についての事情は全て伏せた上で、とある能力者の一派が、学園都市に敵対する外部組織と接触し、反逆を企てていると説明したのだ。

すると黄泉川は

「自らの利益のために子供たちを手駒にね……　全く、いいご身分じゃない。　いいじゃん、君に協力するじゃんよ。　私は、子供を守ると言つゝ大事な目的があるからね。」  
と言つて、協力を約束してくれた。

勇斗は職員室を出ると、177支部へと向かった。

「勇斗先輩こんにちはー」

「おーつす初春。」

「お疲れ様です。お茶でも入れますか？」

「うーん……、じゃあ頼むよ。」

「わかりましたっ!!」

勇斗の返事に顔を嬉しそうに綻ばせて、紅茶の準備を始める初春。

(ふう……、やっぱりここにきて初春と話していると心が癒されるなあ。最近はどうもきな臭い事件が多いからなあ。)

お茶の準備をしている初春の後ろ姿を見ながら、勇斗はぼんやりとそんな事を考えていた。

「はい、先輩。お茶です。」

しばらくして、初春がカップに淹れた紅茶を持ってきた。

「一生懸命紅茶の本読んで勉強したんですよ。あと、マイカイ油っていう香料も準備してみました。うまく淹れたと思うので、味わって飲んでみて下さいね!。」

初春はとても嬉しそうに笑っている。

「うん、ありがと初春。」

勇斗は初春に微笑み返し、お茶を受け取って、早速一口飲んでみる。

「おー、スゲー……」

紅茶には、（というかお茶とかコーヒーとか、その辺全般には）全く詳しくない勇斗だったが、それでも、香りや味などがいつも以上であるように感じられた。

「うん、すっごく美味かったよ。」

「ありがとうございますっ！……」

満開の花のような笑みを浮かべて、初春は言った。

そんな、荒んだ心を癒してくれる至福の時間を紅茶を啜ったり、初春と喋って過ごし、そして現在午後6時40分。

（さて、……そろそろ仕事の時間か。）

溜息について勇斗はイスから立ち上がり、荷物をまとめる。

「じゃあ初春、悪いけど今日も先に帰るよ。」

「あ、はい。お疲れさまでした、先輩。……」頑張って来て下さいね”。

「……おうつ！」

おそらくは、初春も何かに気付いたのだろう。

御坂と初春は、白井や佐天と仲が良いようだし、内輪で話にでもなったのかもしれない。

それに、おれが何かこそこそやってるのに気付いたりとか。

なにがあるかはわからない。けどなにかあることはわかってる。

……そんな感じか？

まったく、かなわねーなー

苦笑いを浮かべながら、勇斗は177支部を出た。

1人残る支部の中、初春は呟く。

「何も聞きませんよ、先輩。 頑張つて来て下さい。」

誰に伝えると言う訳でもなく、独り言のようだ。

「心が荒んじやったりしたときは、いつでも助けてあげますから。」



そして、モニターの前に座って街並を見渡す。

「……それじゃあ、わたしはわたしの仕事を続けましょうか。」

少しでも、勇斗の助けになるように。

e p . 8 9月14日 - 1 (後書き)

なかなか新生活の準備が進みません……

いつ引っ越せるんだろう…？

勇斗は一度寮に戻って私服に着替えると、再び学校へと向かった。

「お、早いじゃん」

「少しでも急いだ方がいいかと思ひまして。」

現在午後7時、予定の時間まではまだ少しあるが、2人は集合した。

「どつちやら『ヤツラ』が動き出したみたいです。」

「そつなの？ じゃあ急ぐじゃん。」

「はい。」

2人は車に乗り込むと、目的地に向かって出発した。

学園都市を出て、しばらく走り続ける。

「『科学結社』の研究施設までは後30分くらいかかるじゃんよ。まだ少し時間あるから今の内に準備とかあればしておくじゃん。」

「おっけーです。」

と、そこに勇斗の携帯に着信が入る。

発信者を見てみると、御坂美琴、と表示されていた。

「どーした御坂？」

『……黒子が結標に襲撃されたわ。』

「何だつて!？」

『……どうやら強奪された残骸を黒子が回収しちゃったみたいだね。アイツ直々に回収に来たみたい。』

「チツ……あのバカが。」

『それでね、私、今からアイツをぶっ飛ばして来るから。アンタのほつもつまくやりなさいよ。』

「は？ ちよっ……」

ガチャッ、プープープー

言葉に苛立ちの感情が滲み出ているような声を最後に通話は切れた。

「どうしたんじゃん？」

「……おれの後輩ジャッジメント風紀委員が結標に襲撃されました。それで、対能力者について協力者である超能力者レベル5の第3位、御坂美琴が応戦するらしいです。」

「チッ、もう向こうも本気ってわけじゃん。　急ぐじゃん!！」

高速道路を走る車が、更にスピードを上げた。

「……ついたじゃん。」

午後9時

2人は目的地に到着した。

「……どうやら電子的な警備態勢セキュリティは大したことはないです。これならあと3分くらいで無力化出来ます。それと、なんか内部には物理的なバリケードもあるようなんですが……、これはどうとでもなりますね。」

勇斗は携帯端末を操作しながら黄泉川に言う。

「オツケーじゃん。こっちはもう準備は終わってるから完了次第教えるじゃん。」

「りょーかいです」

勇斗はそう言って指を動かし続け、セキュリティを次々に解除していく。

「……あと30秒くらいで解除完了します」

「よし。じゃあ60秒後、突入するじゃん。」

黄泉川はそう言うと、対能力者・暴徒鎮圧用のゴム弾を装填した銃を構え、突入の体制を取る。

勇斗も端末をポケットにしまい、準備をする。



そして、

「……5、4、3、2、1、突入！！」

その言葉を合図にして2人は建物の中に入っていく。

目の前には長い廊下、その向こうにはメインサーバールームがあるが、現在、その廊下をふさぐように机やイス、その他諸々で分厚く

バリケードが築かれている。

「全く、邪魔じゃんこれ。」

「下がってください。ふっ飛ばします!!」

勇斗は能力を発動、翼を展開し、それを振るい、烈風を生み出す。

その風はバリケードを吹き飛ばし、メインサーバルームの扉をひしゃげさせた。

「……すごいな勇斗、あれ、多分何百キロと重さあったじゃん?」

「気合いですよ、気合い」

バン！！ とひしゃげた扉を蹴り飛ばし、2人は部屋へと入る。

『こちらA0001よりM0000へ。符号の確認の後、状況の報告に……』

部屋の向こう側、恐らくは通信機器と思しき機械から少女の、結標淡希の声が響く。

「なっ……ななな何だお前ら!？」

モニターの前に座っていた連中と、護衛らしいスーツの男たちが慌てたように2人の方を見る。

「うっさいじゃん!!」

バババババ！！ と黄泉川はゴム弾を室内にはらまく。

弾が命中した人間は昏倒し、モニターや機械は致命的なダメージを受ける。

「くっ……、くそっ！」

そう言っつて何人かの黒スーツ達が銃を構えるが、

「遅えよ!!！」

勇斗は翼を振るい、薙ぎ払う。

と、1人の男がすんでの所で翼をかわし、ナイフを抜いて勇斗に切りかかってくる。

「くたばれ!!！」

殺った。                    男はそう確信した。

既に自分は翼の懐の中におり、能力は届かない。そして目の前の能力者は細身の体であり、接近戦であればプロの傭兵として鍛えられてきた自分が負けるはずがない。

（まずはこいつを殺す。それで学園都市に一矢報いてやる！！）

口元に笑いを浮かべ、勇斗の胸にナイフを突きたてようとする。

だが……

「だから遅いって」

「……」

勇斗はスツと半身になると、男のナイフを持った腕……右腕を掴み、ひねり上げる。

と、同時に足を払い、男を地面に転がす。

「くっ……!？」

男はすぐに起き上ろうとするが、勇斗は男の喉元に翼をつき付けていた。

「テメエ……!!」

「何かこの前も同じこと言った気がするけど、……能力者つても能力バカばかりとは限らないんだよねー」

ドガン!!

そして護衛の男たちは全滅した。

『こちらA001よりM000へ。こちらA001よりM000へ。こちらA001よりM000へ。』  
「って、聞こえているんでしょう!! 何でさっきから  
応答しないのよ!?!」

部屋の中に苛立った結標の声が響く。

しかし、『科学結社』の連中には、そんな声にこたえる余裕はない。

「や、やめろっ。う、うつなッ。殺すなっ。壊すなッ。」

「自分の利益のために子供たぶらかせて安全席からご見物とは良い  
ご身分じゃん? 私は子供に武器を向けない決まりを自分に課して  
るけど、子供のために武器を向ける事には迷わないじゃんよ」

「ひい……!?!」

バン!!

銃声が炸裂し、建物内にいる勇斗と黄泉川を除く全員が沈黙する。

「殺すと思うか、アホ。アンタらがどれだけの子供達をどう手なず

けていたか、きちんと吐いてもらわなきゃその子達を助けられない  
じゃんか。」

『ッ！！　こちらA001よりM001へ。返事してよ！！　ね  
え！！　こちらA001よりM002へ。誰でもいいから！！  
……………ッ！！　ああああああああ！！…』

ガシャン！！　ザ

通信機器からは雑音のみが響く。

「……………よし、これで終わりじゃん。」

「お疲れ様でした、黄泉川先生。」

「勇斗もじゃん。」





## 報告

9月14日 PM9:04 学園都市外部の敵対組織、『科学結社』  
の壊滅を確認。

同日 PM9:05 学園都市内部において、『レムナント残骸』の完全  
破損を確認。

これによって、ツリーダイヤグラム樹形図の設計者の演算機能復活可能性は0%に。

以上より、<sup>レベルのシフト</sup>絶対能力進化実験の再開可能性は消滅。  
通称『<sup>シスターズ</sup>妹達』欠員の可能性も消滅した。 量産型能力者、

ep.10 9月15日(前書き)

これで8巻まで終了です。

何だかんだで二桁話です。

まだまだ未熟者ですがこれからもがんばります。

よろしくお願いします。

『レムナント残骸』事件の翌日。

朝、勇斗と上条は学校に連絡を入れて遅れる事を告げ、とある病院にやってきていた。

治療のためではなく、黒子と御坂妹のお見舞いのために。

事件に関わったのにもかかわらず、珍しく上条は怪我を負っていなかった。

彼らふたりと上条家の居候シスター、インデックスは、病室から少し離れた自販機コーナーと喫煙所を合わせたような談話スペースのイスにすわっていた。

「きのうはほんとにおどろいたんだよ。夜遅くにいきなり短髪がうちに来て、すごく焦ってたから、どうしたの？って聞いたら『妹達をもう一度助けてって言うて。それでとうまと一緒に走って出て行って。』」

……で、『フリーなんか』とか『れむなんと』とかは知らないけど、とうまは”また”女の子をたすけて、でも『それなら、今から

残りの半分を果たしに行こう』とか格好良さげな台詞を吐いておきながら結局その後何の収穫もなかったんだって。」

「……うわー、マジかよお前……」

「うっ……。いや白井に教えてもらった予測ルートは辿ってみたさ。そしたら何か街の一角の窓ガラスが全部粉々になっててキャリーケースと精密機械っぽい残骸が木っ端微塵になって散らばっててそのビルの屋上にはポッコポコにされた女の子が引っかかってたんだよ……」

「……だから？」

「えっ……？ えっと、誰だか知らないけどありがとっって感じ？」

「はあ……」

「ちょっと待てなんで俺ばかりこんな扱いなんだよ俺だって今回頑張ったのに……」

「病院ではお静かに」

「くそー!」

上条の叫びが午前中の病院に響き渡る。

「なんか表がうるっせエなア。一体どこのお祭り野郎が騒いでんだア?」

壁越しに上条の絶叫を聞いた一方通行が呟く。アクセラレータ

「さあ?知らないよ、ってミサカはミサカは知らないふりをする。」

と、ラストオーダー 打ち止めは一方通行のベッドの上で足をバタバタさせて言う。アクセラレータ

「結局ヨミカワが、お姉様と『あの人』、の知り合いの風紀委員の人と『外』に出て『科学結社』とかいう外部組織をぶっ潰してきたんだって、ってミサカはミサカはミサカ達のネットワークを通じて得た情報を発表してみたり。」

「あアそオ……」

「また『あの人』達にたすけてもらっちゃったな、ってミサカはミサカはしみじみしながらどうやって感謝の気持ちを伝えようか悩んでみる。」

「ふん……」

「あ、もちろん残骸レムナントを直接ぶっ壊してくれたあなたにだってとつてもとっても感謝してるよ、ってミサカはミサカはやきもち焼いて拗ねちゃったあなたを労ってみる。」

「ば、バカなこと言ッてンじゃねエよッ!」

「ふふふー? そんな事を言ッてる割に顔が真っ赤だよ? ってミサカはミサカは驚愕の事実をお伝えしてみる。」



「ニッ、このクソガキイイイイ!!」

今度は、アクセラレータ一方通行の絶叫が病院に響き渡った。

その隣の個室では

「ほんとさつきからうるさいですね。全く……なんなんですか？  
……まあいいですわ。さーあお姉様。この白井黒子にウサギ  
さんカットのリンゴを食べさせる時間がやって参りましたのよ!」

「あーはいはい。食べさせてあげるからアンタはまず落ち着きな  
れよ……」

「あ、ああ……。お姉様の手で乱暴にベッドに押し倒されるこの感触。や、やはり体を張って肉弾戦で取り組んだのは正解でしたの。世界が、世界が今とても輝いて見えますわ！」

「アンタ絶対安静って言葉の意味知ってんの!？」

まったく、と言ってリンゴをむき始める御坂。

そこで会話が途切れ、静寂が訪れる。

その静寂を破るように、白井は口を開く。

「……………いつか私も、お姉さまの隣で、並んで戦えるようになってみせます。」

「黒子……………」

「今はまだ、今のわたくしでは、そこに立つ事もできませんの。無理についていこうとすれば、結果はこのザマですわ。」

「……………」

「それでもお姉様は笑っていてくださいな。失敗してそれでも無事に帰ってこれた後輩を見て、何やってんだこのへたくソと指をさして爆笑してれば良いんですの。わたくしはその楽しい思い出を糧として、もう一度立ち上がるうと思えるのですから。」

「……うん、わかったわ。待ってるからね、黒子。」

2人は互いに微笑みあい、そして白井はこの言葉を糧にさらに上へと手を伸ばすことを決意する。

所変わって、談話スペース。

いまだ勇斗とインデックスの2人は上条をいじっている。

「「まったく、このフラグメーカーが」」

「それに関しては今回かんけーねーだろうが！！　っつーかせっかくお見舞いに来たんだからさっさといいこーぜ！」

「ちっ、ごまかしやがったか。あー、あとちょっと待ってくれ。そろそろ来るはずなんだけど……」

「遅れてすみませーん！！」

「はあ、はあ……、待って下さい佐天さーん……」

「おー、やっと来たか初春、佐天。おはよう」

「おはようございます！　すいません、ちょっと寝坊してしまっ  
「！」

「おはようございます、勇斗先輩。　ほんとですよ、ふう、……何  
回も電話したのに全然起きなくてこまっただですよ」

「大方明日の朝学校行かないから少しゆっくりできるって思って夜更かしてもしてたんだろ。」

「ぎくつ!! あ、か、上条さんにインデックスちゃんじゃないですか! お、おおはようございますっ!!」

「佐天さん、いまごまかしましたよね……。しかもそれじゃ肯定してるのほとんど同じですよ? ……おはようございます、上条さんにインデックスちゃん。」

「ああ、おはよう2人とも。」

「おはようなんだよ、かざりにいるい。」

「勇斗、来るのってこれで全員か?」

「ああ。よし、それじゃ行くっぜ。」

総勢5人、彼らはぞろぞろと白井の病室へと向かう。

「お姉様お姉様お姉様ー！！」

「何で昨日の今日でもうそんなに活力溢れてんのよ黒子！  
いや溢れてない！？ 溢れてないのに気力だけでベッドから這い出  
ようとすんなアンタ本当に死ぬわよ！！」

白井の病室の戸を開けて5人が見たのは御坂との見つめ合いで興奮  
した白井を必死で止めようとする御坂の姿。

…  
（（（（（あ、ちょっとあの状態の白井には絶対関わりたくない…  
（（（（（

日本語が崩れながらも5人は意思疎通。

そつと、5人は扉を閉めた。

「ちょ、ちょっと!! 誰か助けなさいよー!!」

「さーあ お、ね、え、さ、ま もうお邪魔はいませんわよー、  
ぐへへへへへ」

「もー！！ だれかー！！」

絶対安静であるから電撃を放つ訳にもいかず、力づくで引き剥がす訳にもいかない。

「ぐふふふふ、ふふふ、ふふふふふ」

「ちよっ！？ こわいこわいこわいー！！」

御坂の絶叫も病院に響き渡った。



ep.11 9月19日・1 (前書き)

大覇星祭編、開始です。

……長くなりそう

「暑アあああー……」

「まったくだああああ……。くそつ……。毎年毎年、いくら大  
覇星祭が楽しいってこればかりは最悪だ……」

「この街は、校長先生が多すぎると思う……」

現在9月19日、午前10時30分。

学園都市内の全学校が合同で体育祭を行う、世界最大規模の体育行  
事<sup>かい</sup>、大覇星祭の開会式が人工芝のサッカースタジアムで行われ、そ  
の合成樹脂の人工芝すらも溶かすかのような厳しい残暑の中、1時  
間以上掛かって、ようやく終了した所である。

そのスタジアムの中、勇斗と上条がうだっていた。

彼らは半袖短パンの体操服を着て、頭には白い八チマキをまいてい  
る。

「つーか当麻、お前御坂と賭けしたんだって？ 学校順位で負けた  
方が何でも言う事聞くんって」

「ああ……。今更ながら何されるか不安になってきた。ま、……待  
てよ。まさか日が落ちるまで超電磁砲レールガンのキャッチボールとかじゃ……  
……？ ……でもまあ、勝てばいいか、勝てば。」

「はあ……。お前常盤台中学あんな学校と勝負するとかさー。もう勝負なんね  
ーって。……ご愁傷さま、当麻。」

「ひどっ！ー！ でもいくらあいつらが名門っても中学生でしかも女  
子校だぜー。体育の延長上のこの祭りで、ワタクシ達コーコーセー  
に勝てるわけないでしょーって上条さんは思う訳ですよ。うん！ー！」

「……生身でホワイトハウス攻略できるって言われてる奴等によく  
そんな事言えるなお前。」

「……へ？」

「ま、せーぜーがんばれよ。応援くらいはしてやるから。お前のことだから多分……いや絶対なんかの事件に巻き込まれると思うけどな。」

聞いてねー！！ と後ろの方で叫ぶ上条を連れて、勇斗はスタジアムを出る。

「とうまー。ゆうとー。」

と、不意に横から少女の、インデックスの声がかかる。

「2人とも……、私はお腹がすいたかも」

「まだ午前中なのにもう腹減ってんのか!?!?」

勇斗と上条は心の底からシッコむ。

「うう、でもそこかしこから何とも言えない匂いがただよってきて  
それどころじゃないんだよ」

大規模な運動会とはいえ、各生徒の競技時間は意外と少ない。屋台  
で稼いでおくと打ち上げが豪華に出来ると言う事で、180万人を  
超える学生の父兄や、大勢の観光客をターゲットにした屋台が多く  
出店している。

「あ、あうう……。日本の料理文化は食という名の誘惑の塊かも」

「大丈夫だインデックス。後で当麻と一緒に回ってくれる」

「そうだな。後で時間作ったら一緒に回るか」

「うん……。……ん？ 後で？」

「ああ、もう棒倒し始まるからそろそろ行かないといけないんだ。」

「そうそう。ほら、これがさつき家でも見せたパンフレット。ペン  
で印付してるトコが、今日ワタクシ達が参加する種目の競技場だか  
ら。お、勇斗、そろそろマジで時間やばいぞ。」

「だな、じゃあ行くか2人とも」

「わああ！ き、今日のふたりは何だかものすごくドライかも！」

そう言つて3人は歩き出すが、インデックスは あうっー……、と言いながらふらついている。

勇斗と上条は通りかかった売り子から弁当を1つずつ買い、それをインデックスに押し付けながら競技場へ向かっていく。

そして2人はインデックスと別れ、選手用入口から競技場へ入る。

そして控え所に着く。……が

「うっだー……。やる気なあーいーい……」

と言った青髪ピアス筆頭に、クラス全員熱中症寸前のような顔で沈み気味だった。

「ちょ、ちょっと待ってください皆さん。何故に一番最初の競技が始まる前からすでに最終日に訪れるであろうぐったりテンションに移行してますか？」

「にゃー。テンションダウンは致し方ないことですたい。何せ開会式で待っていたのは15連続校長先生のお話コンボに怒濤の喜び電報50連発。むしろカミヤんは良く耐えたと褒めてやるぜーい……」

と、土御門 科学にも魔術にも通ずる多角スパイ は言う。

「ま、確かにしゃ ねーわなあれじゃ」

勇斗もため息をつく。

と、

「な、何なの。この無気力感は！」

という声と共に、半袖短パンの上に大覇星祭運営委員のパーカーを着た少女、吹寄制理が到着した。



「……まさか上条、貴様がだらけたせいどころなったんじゃないでしようね!?!」

「え、いや。これ俺のせいじゃないし！ 今来たばっかだし俺!！」

「つまり貴様が遅れて来たせいね!」

「なにがあっても俺のせいにしたいのか吹寄は!！」

……そんな訳で、2人のドタバタは続く。

「……ひどい目であった……」

「ドンマイ当麻」

吹寄による上条への説教タイムが終わると、彼女は他のクラスメイ  
ト達にも喝を入れるべく、歩いていった。

だがそれでも、このだらだらムードはおさまらなかった。

「……これ、ダメじゃね？」

「かもな。」

ヤバイヤバイ、と上条は呟きながらふらふらと体育館の壁に寄りか

かり、勇斗もそれについていく。

すると、そんな2人の耳に体育館の陰の方から男女の言い争う声が聞こえてきた。

2人が覗き込むと、チアリーダーの衣装の2人の担任の月詠小萌と、この暑い中、スーツをびっちり着込んだ男の先生が居た。

嘲る男の先生に、小萌先生が食い下がっている。

「だから！　ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです！　でもそれは私達のせいであって、生徒さん達には何の非もない

のですよーっ！」

「はん。設備の不足はお宅の生徒の質が低いせいでしょうか？ 結果を残せば統括理事会から追加資金が下りるはずなのですから。くっくっ。もつとも、落ちこぼればかりを輩出する学校では申請も通らないでしょうが。」

ああ、そういえば、大能力者<sup>レベル4</sup>が1人いたんですけど。まあお宅のような学校で発現するなんてどうせまぐれでしょうが。早く転校させてあげた方がその子の為じゃないですかねえ？

それに、聞きましたよ先生。あなたの所は一学期の期末能力測定もひどかったそうじゃないですか。まったく、失敗作を抱え込むと色々苦労しますねえ」

「せ、生徒さんには成功も失敗もないのですーっ！ あるのはそれぞれの個性だけなのですよ！」

大能力者<sup>レベル4</sup>の勇斗ちゃんだつてみんなと楽しくやりながら努力してるし、みんなだつて、一生懸命頑張っているっていうのに！ それを……それを、自分達の都合で切り捨てるなんてっ！！」

「それが己の力量不足を隠す言い訳ですか。はっはっはっ。なかなか夢のある意見ですが、私は現実でそれを打ち壊してみせましょうかね？」

私が担当、育成したエリートクラスで、お宅のエースと落ちこぼれの仲間達を完膚なきまでに撃破して差し上げますよ。

うん？ ここで言う競技は『棒倒し』でしたか。いや、くれぐれも怪我人が出ないように、準備運動は入念に行っておく事を、対戦校の代表としてご忠告させていただきますよ？」

「なっ……」

「あなたには、前回の学会で恥をかかされましたからねえ。借りは返させていただきますよ？ 全世界に放映される競技場でね。」

「一応手加減はするつもりですが、そちらの愚図な失敗作どもがあまりに弱すぎた場合はどうなってしまうのかは、こちらにも分かりませんねえ」

はっはっはー、と男の先生スーツ野郎は笑いながら立ち去っていく。

「……、違いますよね」

ポツリと、小萌先生は言った。

「みんなは、落ちこぼれなんかじゃありませんよね……?」

泣くのを必死にこらえるような声で、

全ての責任を自分が背負い込むように、  
拳を握りしめて彼女は立ち尽くす。

2人はそれを黙って見つめ、そして振り向く。

2人と同じように、今のやり取りを聞いていたクラスメイトが立っていた。

「おいお前ら、今の話、聞いたよな。」

静まり返った空気の中、勇斗は言う。

そして上条が締めくくる。

「……デメエら絶対勝つぞ、この勝負。」

同時刻。

「……さっしほじ響いわねー」

「ですねー……。もう9月も後半なんですけどねー……」

御坂と初春は棒倒しが行われる会場の学生用応援席にいた。

2人の目的は上条と勇斗の応援である。

「それにしても……。最近御坂さん素直ですよ。前までなら上条さんの話題振るといつつもツンツンしてたのに。」

「えっ？ なっ、ななな何言ってるの初春さん？ わっ、わたしが何に対して素直になっただってっ！？」

「ふふふっ、御坂さん。顔真っ赤ですよ」

「！？」

御坂はバタバタバタ、と熱を帯びる顔に下敷きで風を送る。



誰か知り合いに今のやりとりを見られていないかと御坂が周囲を見渡すと、すぐ近くにインデックスがうつぶせに倒れていた。

その近くには、空になった弁当箱が2つ置いてある。

その状況で、インデックスは、

「…………お、おなか減った…………」

「…………今ここで弁当2つ食った直後じゃないのアンタ。」

「うー、…………あ、短髪にかざり。…………でなにしてるのー?」

突然の質問に御坂はどもる。

「え? な、なにっせ

「わたしは勇斗先輩の応援です…………それに、上条さんもいますしね。」

…………私もアイツの応援に来たのよ。」

「ふーん、それじゃわたしとおんなじだね。じゃあ一緒に応援しよう。」

「もちろん！ いいですよ。」

「ま、いいわよ。」

そう言って、3人はグラウンドに目を向ける。

ちょうど選手入場の時間だった。

「そついやアイツらの相手校ってどんな学校なの？」

「あ、はい。えっと……スポーツ重視の私立のエリート校ですね。」

「そんなところにとつまたち勝てるの？」

「いやー、まともじゃったら厳しそうねー」

「ですよねー……」

「むー、そうなんだー」

3人が相手校を見ると、スポーツのエリートらしく、簡単な柔軟体操にも専門的な匂いを感じさせているように感じられた。

適度な緊張を運動力に変換できるような顔つきをしていて、公式試合にも慣れているようだ。

彼らは校庭の自陣側に集まり、各クラス一本ずつの棒を立てていく。

3人は首を振って、対する勇斗や上条達の学校へ目を向ける。

2人の学校は進学校でも何でもなく、本当に個性のない『極めて一般的な学校』だ、と御坂と初春は思っていたが、

そこに、……本物の猛者<sup>も</sup>達<sup>た</sup>がいた。

無言のまま、勇斗と上条の2人を中心に肯定に横一列に並んでいる。

数百単位の能力の余波がぶつかりあい、ドゴゴゴゴ、という音を立てる。

「な……、何なのアレ？」

「なんか……、すごく気合い入ってますね……」

「いつものとうまたちとは違うかも……」

状況を呑みこめない少女達を尻目に、競技開始のアナウンスが入り、いよいよ棒倒しが始まった。

e p . 1 2 9 月 1 9 日 - 2 ( 前 書 き )

そ う い え ば 。

こ の 作 品 で は 御 坂 と イ ン デ ッ ク ス は 原 作 よ り 仲 が い い で す 。

… … 完 全 に 作 者 の 好 み で す 。

ご 了 承 く だ さ い ま せ ) 。 - 人 - 。

で は 、 最 近 の 時 間 の 都 合 で 少 し 短 め で す が 1 2 話 目 で す 。

競技開始の合図と共に勇斗は白い光の翼を展開し、2枚の翼で空気を叩き、烈風を巻き起こす。

その風は、水をまき、湿らせてあるはずのグラウンドから土を引きはがし、強烈な砂嵐となって敵陣に着弾する。

「みんな行きなさい!!」

吹寄のその声に応え、何人もの生徒が、防御によって初動が遅れている敵に向かって走って行く。

「吹寄せ!! 俺も出るぞ!!」

「わかったわ!! 行ってきなさい!!」

「こっちがやばくなったらすぐ呼べよ!」

そう言っつて勇斗も敵陣へ向けて”飛ぶ”。

飛びながらも敵陣から飛んでくる攻撃を翼で打ち払い、最前線を走る上条に追い付く。

「行くぞ当麻。小萌先生にあんな顔させた連中、許すわけにはいかねーだろ。」

「もちろんそのつもりだ。絶対勝ってやる」

と、そこへ、

(勇斗くん、上条くん、聞こえる? 敵とぶつかると5メートル手前までいったら、いくよ?)



( (了解!!) )

2人は頭に響くテレパシー念話能力に返事をし、互いに、そして後続の味方とアイコンタクトを取る。

そして、  
両軍衝突の直前、

( 行くよ!! )

( (おっ!!) )

「おっ!!」

と、勇斗は急停止し、背の翼を周囲の地面に叩きつける。

後ろからはテレキネシスト念動能力者達が能力で地面を抉り取る。

競技場に土煙が舞い上がり、一瞬にして視界が0になる。

「「「「今だっ！」「」「」」

と言つて勇斗や上条達は一気に敵陣の棒に襲いかかる。

正面からスポーツとして争えば絶対に負けるに決まってるど踏んだ彼らは、両軍が激突する寸前で能力を地面に放つて土煙を上げ、敵軍の視界を奪つて奇襲を仕掛ける電撃戦に出たのだった。

1本の棒には20人掛かりで飛びかかり、抵抗させる間も与えず、棒を引きずり倒す。

また、他の1本には遠距離から勇斗達の学校のテレキネシスト念動能力者達が棒の上部に念動力を叩き込み、棒を弾き飛ばす。

視界が奪われ、自軍が襲撃されているというプレッシャーの中、相手校のエリート共は言葉を漏らす。

「く、くそっ……。こんな大能力者<sup>レベル4</sup>1人くらいしかまともな戦力がないような学校に負けてるなんて……」

「フン……」

返事とばかりに勇斗は翼を振るい、自陣に能力による攻撃を加えている連中を薙ぎ払う。

「確かに俺らの学校はレベルは総じて低いし、大能力者<sup>レベル4</sup>の俺が飛びぬけてるってのもあるけどさ……」

勇斗に向かって薙ぎ払った敵からの反撃……  
発火能力<sup>パイロキネシス</sup>による火球が複数飛んでくる。

ただそれでも、勇斗は全く動く素振りを見せない。

そして火球が勇斗に当たる直前、全ての火球が吹き飛ぶ。

勇斗達の学校の風力使いエアロシューターや念動能力者テレキネシストが能力によって全ての火球を吹き飛ばしたのだ。

「アイツらは背中預けられる大事な仲間だ。それを見下してかかるお前らみたいな連中は足元すくわれて終わりなんだ。……お前らには絶対負けねーよ。それに……」

そう言つて勇斗は付け加える。

「お前らの先生には俺らの先生がお世話になつたみたいだからな。……なおさら負ける訳にはいかねー。」

敵陣の棒は残り2本。

片方の棒では上条が幻想殺イマジンプレーカーしで、青髪ピアスがバレリーナのようにクルクル回転して、敵の注意を引き付けその隙に別動隊が棒を襲撃している。

「……じゃあこれで終わりだな、エリート集団」

勇斗は再び翼を振るい、もう一本の棒を弾き飛ばす。

それが地に転がるのと、上条達が棒を倒したのは、ほぼ同時だった。

「ど、どうしてみんな、あんな無茶してまで頑張っちゃうのですかーっ！ 大覇星祭はみんなが楽しく参加する事に意味があるのであって、勝ち負けなんてどうでも良いのです！ せ、先生はですね、こんなボロボロになったみんなを見ても、ちっとも、ちっとも嬉しくなんか……ッ！！」

小萌はそう言っていたが、生徒たちは微笑むだけで何も言わず、それぞれ競技場を去って行く。

「じゃあ当麻、俺たちもそろそろ出るか。」

「ああ。……時に勇斗サン。このあと何か予定とかありますでしょうか……」

「ん？ ……ああ、これから初春と一緒に見回りだな。風紀委員ジャッジメントの仕事だ。」

「そうか……。くそつ、インデックスの食費を助けてもらいたかったのに……!!」

「……」

勇斗はポン、と手を上条の肩に置いて言う。

「……がんばれ」

そのころ、女性陣は。

「まさか……、勝っちゃうなんてね……」

「……勇斗先輩達、すごい迫力でしたね……」

「いつもの比じゃなかったかも……」

ついさっき、目の前で繰り広げられていた光景に、3人はまだ驚いていた。

と、その直

ぐピピピっ！！

と携帯のアラームが鳴る。

「ッと……。誰のケータイ？」

「あっ、私のです。……もう見回りの時間なっちゃったみたい  
です。」

「え？ ……あー、私もそろそろ借り物競走の準備しないとー。」

「むー、もうみんないっちゃうの？ ……まあ、がんばるんだよ。」

こっちもこっちで、解散の時間とあいなつた。





ep.12 9月19日・2(後書き)

タイピングのスピードを上げたい……

とてもとても切実に……

ep.13 9月19日・3(前書き)

時間がある限りがんばって更新します！

それでは第13話です。

よろしくおねがいします。

「さて……、見回りか。」

勇斗は上条と別れ、スタジアム前の公園に来ていた。

「でー、初春は、と……」

「勇斗せんぱーい!!」

勇斗が声のした方を見ると、初春が噴水の傍のベンチに座って待っていた。

「おー、初春。わりい、待ったか？」

「いえー、だいじょうぶですよ。あ、先輩、棒倒しすごかったです。おめでとうございます。」

「ん、まーホントよく勝てたよなー。まあある意味、相手の先生様々だな。……ムカつくけど」

「？ 何かあったんですか？」

「んー、実はな……」

と、勇斗は初春に、競技前に聞いた小萌と相手校いけすかないの先生スーツ野郎のやりとりを説明する。

「そんなことがあったんですかー。　なんかホント嫌な先生ですねー……」

「全くだ……。　まあ鼻ノーズつ柱は叩き折ってやったから、これで多少は懲りただろ。」

「ですねー。」

「ま、あんなやつの話しててもしょうがないから、見回り行くぞ初春。」

「了解です」

「……なんかいきなり楽しそうだな、お前」

「えー、まあ（先輩と一緒に大覇星祭まわれますからね）」

「ん？　何か言ったか？」

「いえー。なんでもないですよ。」

「そうっ？ じゃあまあ行きますか。」

「はい」

そして2人は見回りに出発した。

「……全く、初春ったら。デートではありませんのに。」

「まじっすっけいぐうかねてましたねー。」

見回りに出た2人の様子をたまたま公園に来ていた車イスに乗った白井とそれを押す佐天が見ていた。

「……ちゃんと仕事してくれるんでしょうね？」

「まー勇斗先輩と一緒になんだし、大丈夫じゃないですかー？」

「……だからこそ心配と言えば心配ですわね。」

「……ですよー。」

あははー、と佐天は笑う。

「まったく……。……。あら？」

と、白井と佐天の耳に競技場のアナウンスが聞こえて来た。



『四校合同の借り物競走でしたが、やはりというか期待を裏切らないというか、常盤台中学の圧勝でした。中でもトップ選手は他に比べて7分以上も差をつけた状態でのゴールという快挙を成し遂げ

』

公園近くのビルの壁面に取り付けられた巨大ディスプレイに、何処かの陸上競技場が映る。

『 1位を獲得した御坂美琴選手はゴール後も体勢を崩す事はなく、まだまだ余力を感じさせる姿を見せてくれました』

「おー！ 御坂さんやっぱりさすがですねー！」

と佐天は言うが、白井は俯いたまま何も言わない。

「あれ？ …… 白井さん？ おーい、白井s 「おっ姉様ー！！  
やはり完全なる圧勝という形で、その躍動する肢体を皆へ見せ  
つけていますのね！ 生はおるか録画すらできなかったこの不出来  
なわたくしをお許しくださいですのー！！」 ……」

映像を見て、満面の笑みを浮かべ、目を輝かせる白井を、佐天は苦笑しながら押さえ付ける。

「はーい白井さん落ち着いてー。 …… えーい落ち着けー！！」

佐天の話も聞かず、お姉様お姉様お姉様ぐふふふふ、と怪しげな笑みを浮かべ車イスから立ち上がって喜ぼうとする白井にしびれを切らした佐天が白井の右肩を、  
つい数日前の事件で負傷した場所の1つ を軽く叩く。

「ひびく……!!」

「はいはい、落ち着きましたかー?」

「くっ……。佐天さん、ひどいですわよ……!!」

「いやー。なんか今日白井さんを引き受けるとき『黒子が暴れたらとりあえず肩とわき腹たたけばおさまるわよ』って御坂さんが。」

「……さすがですわお姉様。わたくしの弱点も全てお見通しですね!! お姉様!!」

「だから落ち着いてくださいって!! 絶対安静って意味わかってるんですか!?!」

「……さっき傷を思いつ切り叩いた人の言葉とは思えませんわね!!」

と、2人が騒いでいると、そこへ、

『一緒に走ってもらった協力者さんをいたわる所も好印象でしたね。この辺りが名門、常盤台中学の嗜みと言った所でしょうか』

「あー、御坂さん上条さんと一緒に走ってますね……。……うわー、あんなに顔真っ赤にしちゃって、御坂さんかわいいー！！」

「……………こっ、殺す！！ ウラヤマシイウラヤマシイウラヤマシイ妬ましさをオマエをコロスー！！！」

「ちよっ！ 待って白井さん！ 日本語ももうおかしくなってるしそんな暴れたらホントに傷口開きますよ！？」

「あの若造がー！！」

「だから落ち着いてくださーい！！」

佐天は、今度は右肩に加え、わき腹も同時に叩く。

声にならない断末魔をあげ、白井は沈黙した。

歩いて見回りを続けながら、勇斗は初春に話しかける。

「で、今年の大覇星祭は何か問題起きてる？」

「えーっと、今の所はそんなに。焼きイカ屋台に化けた産業スパイが生徒の唾液からDNAマップを盗み出そうとしてたぐらいですねー。」

「あー、そんなん易しい易しい。去年の反学園都市勢力の武装集団突入未遂とかに比べりゃまともなほうだって。なんか他にもいろいろあつたからなー。」

「うえっ！？ 去年は裏でそんな事が起きてたんですか？」

「そうそう。一般客にはねないように対応するのが大変だったなー。」

「うわー……」

そんな感じで勇斗が去年の大覇星祭の舞台裏を初春に教えていると、30メートルくらい先の道端で白人系の5歳くらいの外国人の少年が泣いているのに2人は気付いた。

「迷子かな？」

「そうみたいです。まあ人の数が半端じゃなく多いので、仕方ないと言えば仕方ないんですけど。」

「まーな。」

と、2人はその子に近付いて行く。

「えっ、えくすきゅーずみー？」

と初春が話しかけると少年は、初春と勇斗、そしてその腕の風紀委員の腕章に気付いたようで話しかけてきた。

「  
x      ~~~  
x      x      !!!  
」

もちろん外国語で。

「えっ……？ あのっ……」

「~~~~~！！」

「……先輩。」

「んー、フランス語か。おっけー、初春、ちょっと替わって。』ど  
ーしたのかなー？ 迷子かな？』」

「『わっ！！ お兄ちゃん言葉わかるの！？。』」

「『うん、わかるよ。それで、きみはどうしたんだい？』」

「『……パパとはぐれちゃったんだ。』」

「『んーわかった。だいじょうぶだよ、すぐに見つかるからねー。』」



そう言つて勇斗はその子の首に掛かった学園都市発行の大覇星祭入場パスを見て、情報を初春に伝える。

「初春！。大覇星祭臨時発行ID：1437784の子が迷子だ。アンチスキルに連絡入れて。」

「了解です！ …… あ、鉄装先生ですか？ 実は迷子が……、はい……、えっと、大覇星祭臨時発行ID：1437784です。 あ、はい、わかりました。ありがとうございます。 …… お父さんの名前がわかつて、今からアナウンス入れてくれるそうなので、近くのアнтиスキル詰所に連れてくるように、だそうです。」

「おっけーわかった。 『アナウンスいれてもらうからもう少しでお父さん見つかるよ。それまでお菓子とかジュースとかある場所待ってよう。』」

「『うん！ ありがとうお兄ちゃん！！ あ、そっちのお姉ちゃんにも伝えておいてね！』」

「『わかつてるよ。』」

そして2人で少年をアンチスキルの詰め所に預け、見回りを再開した。

「……先輩ってフランス語話せるんですね。」

「ん。まーねー。一応英語とヨーロッパ圏の言葉なら一通りはいけるかな。」

「ホントですか!?! すごいです! あー……わたしもフランス語とか話せるようになりたいな…… なんかこう……お嬢様って言うか、すっごく上品な感じがしますよね!」

「……おい、ういはるー？ 帰ってこーい。」

苦笑しながら、勇斗は初春に声をかける。

と、そこで勇斗の携帯がなった。

「お、電話だ。 はい、もしもし」

『もしもし千乃？ いまどこにいる？』

「おー吹寄か。 今は……第7学区第3競技場前だな。 どうしたんだ？」

『ならちようどいいわね。 これから第3競技場で玉転がしがあるんだけど風紀委員ジャッジメントの仕事ちよつと抜けられるのなら手伝ってほしいんだけど。』

「ああ、大丈夫だ。 すぐ行く。」

そう言って勇斗は電話を切り、初春に声をかける。

「その競技場でこれから俺らの学校の玉転がしあるらしいからちよっと手伝ってくるな。」

「はっ……！ わたしは今何を…… わかりました。応援行きますよ。」

「ん、じゃあ頼む。」

「はい。」

こうして2人は見回りを一時中断して、競技場へと向かった。

ep.13 9月19日 - 3 (後書き)

ちょっとキャラの口調が曖昧……かな？

がんばって勉強します……！

e p . 1 4 9 月 1 9 日 - 4 (前書き)

新生活開始のドタバタで更新が遅れてしまいました……。

しかも新居の回線工事の予定も未定で、次回の更新も遅れてしまう  
かもしれません。

なるべく早く更新できるよう頑張りますので、お待ちいただけると  
幸いです。

「よしとつちやーく。」

「あれ勇斗、……ジャッジメント風紀委員の仕事は？」

「もう終わったのかにやー？」

勇斗が玉転がしの会場、第7学区第3競技場に着くと、そこには既に上条と土御門がいた。

「あーうん、ちょっとさぼってきた。」

「……それでいいのかジャッジメント風紀委員。」

「まあさっさと終わらせちまえば大丈夫だろ。んー、つーか当麻

……」

「……………何だ？」

「お前……………、また事件か？ ……しかも、魔術師がらみの。」

「うっ！？」

「凶星か……………」

「……………何でわかったんでせうか？」

「いやー、だつてお前さっきまでより明らかにテンション下がってるし。『また事件か？』って聞いたとき土御門が苦笑いしてたからな。」

「うー……………」

「にゃー、まさかそんなことで気づかれるなんてにゃー。おれもまだまだ修行が足りないかにゃー。」

「まあ普通の奴なら絶対気づかぬーだろ。……………で、手伝ったほう



「が いい の か？」

「んー。 今回の事件ってやつは、ローマ正教の魔術師たちが学園都市内部に侵入、そして何者かと霊装『スタブソード 刺突杭剣』を裏取引する、  
ってやつですたい。」

「……その霊装の効果ってのは？」

「ざっくり言えば、聖人を即死させる。 そんな代物だにゃー。」

「！！……わかった。 続けてくれ。」

「ああ。 で、魔術サイドと科学サイドのせめぎあい、そして魔術サイドの内部でのせめぎあい。 そいつらのせいで学園都市、イギリス清教必要悪の教会、ネセサリウス そのどちらもが表だって動けないんだにゃー。 だから、オレとステイルがカミヤんの個人的な知り合いとして対処にあたって。 ジャツジメント だから風紀委員である勇斗に直接協力を求めるのは厳しーんだにゃー」

「……なるほど。 そいつら 魔術師たちもそれを狙ってわざわざ今学園都市に潜入してんのか。  
つくづく小細工好きだよな、魔術師って。」

「まーそこは仕方ないにゃー。で、オレたちはこのクソ広い学園都市からその潜入した魔術師を探し出して、裏取引をぶっ潰さないといけない訳ですたい。」

「……マジか!?!」

「そーなんですたい。」

「うー、そうだ。魔術師探すんだったらインデックスに協力頼めないのか?」

「あー、それは俺も土御門に提案したんだ。でも……」

「その件に関しても、魔術サイド内部でのせめぎあいの都合上、禁書目録はこの事件に絶対に関わらせちゃダメなんだぜい。」

「……あー、なんとなく言わんとしてることはわかった。」

「多分それであってるぜい。……で、だ。この件に関してオレ達には不利な条件しかないと言ってもいい。だから正直猫の手も借りたいつていう状況なんだ。だから勇斗には風紀委員ジャッジメントの立場を使っバックアップて後方支援をお願いしたいんだにゃー。あくまでも間接的に、索敵や追跡、カミヤン不在時のインデックスの保護とかをにゃー。」

「んー……。まあ、索敵とかに関しては正直どうにかなる。見回りを口実にすればな。ただインデックスの保護については……。流石に見回りに連れてく訳にもいかないからちよつと厳しい。」

「んー、わかつたにやー。……。それじゃあカミヤんはインデックス問題も担当するって方向で！ 学園都市で事件が起きてる匂いは極力隠すって感じでだにやーっ！ 適当に辺りを見て回るとか約束して、魔術戦の起きそうな所からさりげなく遠ざけといてくれってトコですたい」

「あん？ 何だそりゃ！ お前は簡単に言っけどさあ……。ッ！」

「大丈夫だって！ フラグまみれ上条当麻ならどうってことないぜい！」

「何だその根拠ゼロの自信の塊は！ 大体、俺達の競技はどうすんだよ。黙ってサボったら吹寄絶対キレるって！ それこそ目も当てられない感じでー！」

「それこそお前のフラグ構築能力で何とかなんじゃねーか？」

「だにやー。今大事なのはインデックスの方だぜい。つつても、あ

んな禁書目録なんぞ適当に食べ物与えてりやどつとでも制御できそうな気はするけどにゃー。困ったらとりあえず事件の現場と逆方向にお菓子を投げるにゃーっ！」

「インデックスには悪いが、おれも同感だな。」

「……お前ら、インデックスが今のこと聞いたら頭蓋骨までかじられるかもしれないぞ。いや、アイツが俺以外の人間に噛み付きやつてる姿は見た事ないけど……！」

「……よし！ 役割分担が終わったところでそろそろ競技時間だにゃー。」

「よし、そろそろ集まるか。」

「はい？ ……え、ちょ、ま、……もう決定なのかよ!？」

勇斗と土御門は出費インデックスの手付のでかい仕事を上条に任せることにし、それぞれ競技の準備を開始した。

「と、いうわけで競技開始の時間だ!!」

「さっさと終わらせて仕事いくにゃー」

「だな。……罰ゲームを逃れるためにもどうにかして勝ちたいな  
」。

「んーカミヤん。罰ゲームって何のことだにゃー?」

「御坂の学校とうちの学校で総合学校順位で負けたほうが勝ったほうの言うこと何でも聞かなくちゃなんねーんだよ。」

「……御坂って、もしかして常盤台のレールガンのことかじゃー？」

「ん、お前よく知ってんな。そーだよ、あのビリビリ中学生ですよ。」

「……カミヤんテメエまたフラグがこの野郎!!」

「ちよっ……!!? まて土御門! いきなり殴りかかってくんじゃねーよ! しかも毎回毎回フラグとか訳わかんねーよ!!」

そうやって上条と土御門が乱闘を始めたところで、ピー!!--と競技開始の笛が鳴る。

「おい土御門!! 競技始まっちゃったぞ!!」

「そんなこと言っただけよーってもそれは問屋がおろさないぜカミヤん！！……勇斗！！ 打ち合わせ通りやっちなまえ！！」

「任せなさい！！」

そう言っただけ勇斗は背中に翼を展開させ、おもいつきり力を込めて翼をしならせていく。

競技に先んじてあった学年の打ち合わせの時に、時間短縮のために勇斗と土御門が提案した作戦。

### 全部ふっ飛ばしちゃえ大作戦

大玉転がしのルールが、号砲と共に左右両サイドの25個ずつ合計50個の大玉をそれぞれ敵軍の後方にあるゴールラインへと転がしていき、先に半数以上の大玉がゴールラインを割った学校が勝利する、といった変則的なものであるからこそ、可能な作戦。

通常の大玉転がしと異なり、自軍と敵軍の大玉が最低一度は必ず交差するため、この瞬間に大玉をぶついたり、能力を飛ばしたりして相手を妨害する事も可能となっており、まともにやりあえば乱戦は必至である。

だが、勇斗、上条、土御門には一刻の猶予すらも惜しい。

だからこそ提案した、この一瞬で終わる作戦。

(まさかあっさり通るとは……。みんなただ棒倒しでやる気使い果たしたんだよ。)

活躍やら手柄やら、全部勇斗1人のものになってしまふというのに反論がほとんどでなかった(吹寄が少しごねはしたが)打ち合わせの様子を思い出し、苦笑いしながら、勇斗は更に翼に力を込めていく。

「……まあいいか。好都合だし。……んじゃ、本日2回目行くぞー……」

勇斗は自軍に一声かけ、みんなが頷いたのを確認し、込めた力を解放し翼を振るう。



ビュゴッ！… という凄まじい音を立てて吹き荒れる本日2度目となる烈風が、敵軍の大玉諸共、自軍の大玉をほとんど全て敵軍の後方にあるゴールラインの向こう側に吹き飛ばした。

ピポー！！ と、競技終了の笛が鳴る。

「……さて、お仕事タイムの再開だ。」

背から伸びる白い翼を虚空にとかしながらフィールドに背を向け、勇斗は上条と土御門のもとに向かった。

「おい土御門！！ もう競技終わってんぞ！！」

「なにい！？ ……チツ、まさかこんな早く終わるとは…… 早すぎるゼイ、勇斗。」

「早すぎるってなんだよテメエ！！ 願ったりかなったりじゃねーか！！」

「……命拾いしたなカミヤン。覚悟しとくんだぜい。」

「なんか理不尽だっ！！」

そんな感じにぎゃあぎゃあやって騒いでる2人のもとに、勇斗が到着した。

「……この学年、ほんとに何もしねーんだな。お前らに至っては最初から最後まで大乱闘だし。」

「まーせっかく大能力者がいるんだからうまく使わない手はないって事ですたい。それにカミヤんのフラグ体質に対しては、負けるとわかっていても立ち向かわなきゃいけない時があるんだにゃー。」

「……………激しく同感。」

「勇斗が寝返った？ くっ……、味方してくれると信じてたのにッ  
！！」

「お前のフラグに関しては男なら多分1000人中1000人味方しねーよ。」

「だにゃー。」

「くっ……………」

Orzそのままにうなだれる上条を見ながら、勇斗は土御門に言う。

「じゃあ俺は頑張ってお前らの後方支援バックアップまわるから、何かわかったら情報くれ。いくら魔術について知ってても、流石に潜入した魔術師見つけるのは無理だからさ。」

「了解だにゃー。頼んだぜい。」

そして勇斗は上条、土御門と別れ、初春と合流し再び見回りを再開した。

e p . i 4 9 月 1 9 日 - 4 (後書き)

なんか8割がた会話で埋まってる気が……

しかも前話からほとんど話が進んでない o r z

ep.15 9月19日・5(前書き)

まさかまだネット工事が無いなんて・・・!

・・・6月中旬〜7月にならないとネット工事が入らないそうです  
(泣)

・・・かなり遅れてしまいましたf^|^;

待っていただけかたも、そうでないかたも、  
楽しんでいただけたら幸いです。

競技が終わると、勇斗は再び初春と合流した。

「先輩、お疲れ様でした。」

「全くだ。あいつら全部おれに押し付けやがって。」

「あ……、ごめんなさい先輩。こないっばい競技入ってるのに、無理言っつてシフト変えていただいちゃって……」

本来であれば、勇斗の見回りのシフトは強豪校との競技に一段落ついた午後からであったのだが、先日の1件で黒子が負傷してしまっただためシフトの変更を余儀なくされ、初春と黒子の強い希望でこの時間帯に変更したのだった。

「気にすんなよ。先に仕事終わらせた方が気が楽だし、十分競技に出れてる。」

それに、女の子と祭まわれてるんだ。嫌な訳無いだろ」

「……っ!!」

あっ、ありがとうございますっ!!……!!」

初春を真っ赤にさせるフォーローを勇斗はのたまう。

「……っと、もう見回り終わりの時間か。」

「あ……、みたいです。」

「よし、じゃあまたな初春。……暇なとき連絡くれれば一緒に回ってやるから。」

「はい                    ありがとうございます。                    お疲れ様でした、勇斗先



輩。  
「

そういつて、たたた、と初春は走って行った。

「……さて、そんじゃお手伝いといきますか。」

厄介事の前の癒しの時間の終了を自ら告げ、携帯を取り出し、土御門に電話をかけた。

「で、今はどうなんだ？」

『ナイスタイミングだぜい勇斗。一財銀行周辺にでっかい看板を持った外国人の女がいなか探してくれ。カミヤんの幻想殺しが、その女の何か……、おそらく隠蔽用の術式を破壊した。そいつがどうも怪しい。』

「了解」

勇斗はズボンのポケットから携帯端末を取り出し、風紀委員の権限で学園都市の監視カメラネットワークにアクセスする。

「……、……いた。金髪で作業着姿でつかい看板抱えた女。

一財銀行から北に150mの大通りだ。」

予想外にあっさり見つかった女の姿を端末のモニター越しに見ながら、勇斗は土御門に告げる。

『さすが勇斗だにゃー。サンキュー。』

そういつて電話は切れた。

が、30分後、土御門から勇斗に電話が来た。

『勇斗。第7学区南中学周辺でもう1回探索を頼む。』

「さっきからずっと追跡中だ。そんなん忘れるくらいなんかあったのか？」

『……ステイルがやられた上に吹寄が巻き込まれた。そんなとこだ』

そっけなくも、苛立ちを隠せない声で土御門は言う。

「……魔術師ってのは一般人を無差別に巻き込むような人間だったか？」

『普通はありえないな。ま、この件に関しては完全に向こうさんも予想外だろう』

「・・・なるほど。で、だ。位置は地下鉄二日駅、北A1入口前だ。北上中。」

『了解』

「ナビ続けるからそのまま追いかける。」

『了解。カミヤん回収して追いかけるにやー』

勇斗は土御門に指示を出して走らせる。

しばらくすると土御門、そして合流した上条が、金髪の女が映る端末画面に映るようになった。

・・・と、画面奥で女が突然立ち止まった。

それにあわせて上条と土御門も10メートル弱の間合いを空けて立ち止まる。

モニター越しに女が何か話始めたのを見た勇斗は、監視カメラを集音モードに切り替える。

無音だった映像に騒音と話し声加わる。

『・・・お前が仕掛けた術式で、全く関係のない人間が倒れたぞ。覚えてるか、お前と初めて会った時に、俺と一緒にいた女。お前の目には、アイツが魔術と関係あるように見えたのかよ。』

怒りを内包して、わずかに震える上条の声がある。

が、それに対する女の返答はあくまでも軽い。

『この世に関係のない人間なんていないわ。その気になれば、人は誰とだって関係できるものよ?』

それを聞いた上条の表情を見て、女は言葉を付け足す。

『……今さら何を言っても無駄だろうけど、あの子はホントは傷つけるつもりはなかったわよ。』

少しだけ、声のトーンを落として、女は言う。

が、すぐに不敵に笑って

『……お姉さんだって、一般人を傷つけたくはないもの。……ま、プロの子は違うけど。』

そう言い、女は単語帳の1ページを口で破る。

ジジッ、と甲高いノイズのような音を捕らえた端末のモニターの向こう側で、土御門の体がくの字に折れ曲がり、ガタガタと震え出す。

慌てて駆け寄る上条の姿をくすくす笑いながら眺め、

『ふふつ。再生と回復の象徴たる火属性を青の字で打ち消したわ。多少は耐性があるみたいだけど・・・』

そう言って、土御門を眺め回す。

『それだけではお姉さんに敵わないわよ』

同時、土御門の体が崩れ落ちるのが見えた。



「……くっ、まずいっ……！」

土御門が戦闘不能に陥ったいま、魔術師の女に相對しているのは上条のみだ。

いくら上条が対魔術師に有効な幻想殺しを所持していても、経験の絶対数が違いすぎる。

「チツ……、悪いな土御門。約束破るぜ。」

勇斗はそう言って能力を発動、背中に翼を出現させてそこへ飛んで行った。





上条の右手が迫って来る分厚い氷の壁を殴りつける。

だが、氷の向こう側にいたはずの女、オリアナ＝トムソンの姿は、崩れ落ちる氷の向こう側には無かった。

想定外の出来事で一瞬停止する上条の思考。

その隙をついて飛来する極薄、鋭利な石刃が上条に迫る。

(まずっ・・・!!)

鈍く光り迫って来る石刃を目では捕らえているものの、体の反応が遅れる。

「くっ・・・!！」

ギリギリのタイミングで上がる右腕。

・・・が、右腕が上がるより早く、上条の視界がブレた。

「!?!」

驚きの色に染まるオリアナ「トムソンの目に飛び込んできたのは、上条の体育着の首根っこを掴み、背から伸びる白い翼で空を叩き、宙に浮かぶ勇斗の姿だった。

ep.16 9月19日・6 (前書き)

いつもより、ちょい長めです。

やっと9巻終わるかな……

「ゆっ……、勇斗っ!! くっ、苦しい……!!」

「お!? わりっ!」

勇斗は地面に降り、上条の首を解放する。

「ゲホッゲホッ……! ……助かったぜ。サンキュー勇斗。」

「どういたしまして。」

そして2人はオリアナに向き直る。



「……まるで天使の翼ね、それ。」

オリアナは単語帳を口に近づけながら言う。

「ふふ。そっちのツンツン頭の子とさつき握手した時にも感じたんだけど、学園都市<sup>チカラ</sup>ってずいぶん珍しい能力<sup>チカラ</sup>持ってる子を集めてるのね。」

言って、単語帳のページを口で破る。

彼女が左腕を横にまっすぐ伸ばすのと同様、黒い闇の剣がオリアナの腕にまとわりつくように出現し、一気に長さを増して2人に迫る。

「伸びる剣なんざ、……御坂相手で見慣れてんだよ!!」

上条は前に出ると右手を伸びてきた剣に叩き付ける。

右手が剣に触れた途端、闇の剣が剣先から根元まで一気に弾け、霧散する。

「!!」

そこでできた隙を、勇斗は見逃さない。

脚に力を込め地面を蹴って、瞬間の後には約10メートルの間合いを一気に詰めて、オリアナの正面にまで踏み込む。

が、

「んふ。甘いわよ。」

「!?!」

勇斗はそこで、オリアナが1枚のページをくわえているのを見た。

虚空に水球が現れ、一瞬にして膨張し、指向性を持った水蒸気の爆風が、至近距離から勇斗に向かって炸裂する。

「くっ……!?!」

とっさに翼を使って身を守るも、後方に吹っ飛ばされる。

それと入れ替わるように、上条が一気に距離を詰めるべく、前へ出る。

対して、オリアナは単語帳のページを再び口で破る。

直後、上条の後方から突風が吹く。

強い風に背中を押され、足をもつれさせた上条は前のめりに倒れていく。

「ふふ。舌をかまないようにちゃんと歯を食いしばってね。」

オリアナは距離を詰め、右脇に挟んだ看板を跳ね上げ、上条の顎へ強烈なアッパーを繰り出す。

凄まじい衝撃を受け、上条は動きのベクトルを無理やりに変えられ、後方へと吹き飛ぶ。

「!? 当麻!!!」

「よそ見は、ダメ。」

「!!!」

体を大きくひねって放たれた左足の蹴りが、勇斗をとらえる。

「ぐあっ!!」

勇斗の体が後方へと飛ばされた。

「くっ……!!」

「んふ」

余裕の姿勢を崩さないオリアナに対し、勇斗と上条は早くも全身を痛みに襲われている。

その痛む体にムチ打って2人は追撃に対して構えようとするが、オリアナは不敵に微笑んだまま動こうとはしない。

「……お前は どうして 追い打ちを かけない？」

それに違和感を覚えた勇斗がオリアナに言う。

「お前の目的は『スタフソード 刺突杭剣』とかいう霊装の取引を成功させること  
のはず。なんでさっさと追い打ち……例えばさっきの昏倒術式を使  
ってさっさと逃げない？ こんな所で余裕を見せつけてたって良い  
ことは無いだろ。」

「あら。いい質問ね。」

笑みを崩すことなく、オリアナは言った。

「お姉さんは一度使った術式は二度と使わないのよ。だからお姉さんは複数の色と属性を組み合わせてたくさんの手札を用意して、作った魔道書<sup>カード</sup>を日めくりカレンダーみたいに破り捨てて使ってるの。それで、さっきの術式はもうないから、どうやって君たちを排除しようか考えてるのよ。」

「……複数つてもたかだか4つか5つのものの組み合わせでしかないのに、何でそんなに術式にバリエーションがあるんだ？」

今度は上条がそう言う。

「またまたいい質問ね、うふふ。……組み合わせているのはそれだけではないのよ。よくお姉さんを見ていれば分かるかもね？」



オリアナは左手の単語帳を、自らの口へ持っていく。

だが、オリアナは術式を発動させることなく単語帳の厚紙をくわえるだけだ。くわえる位置をずらしながら、2人をずっと見つめている。

先に気付いたのは勇斗だった。

「……そうか。角度だ当麻。角度は西洋の占星術の基礎だったはずだ。」

その能力の外見ゆえ、一時は神学系の研究機関の集まる第12学区の学校にいた（いさせられた）ときに、そんな話を聞いたことがある気がする。

「あら。そつちの子、かなり物知りね。正解よ。………0°から9  
イオ オボシテイオ クワルトゥス トリヌ  
、171°から189°、81°から99°、111°から12  
セクストゥス  
9°、54°から66°、0°から1°、その他色々な座相法則。  
パラレル アスペクト  
『星座と惑星の関係はその角度によって役割を変える』っていう理  
論よ。あなたなら聞いたことがあるんじゃない？」

オリアナの問いかけに勇斗はうなずく。

「それに、この魔道書カードにはページ数の数秘的分解も構成要素の1つ  
として取り入れているから、厳密に言えば同じ魔術は二度と使えな  
い。過ぎた過去を繰り返せないように、一度めくったページは二度  
と返らないから。」

オリアナは淡く笑って言った。

「……さて、おしゃべりはこれくらいかしらね。そろそろ思いつい  
たから、これで鬼ごっこはおしまい。」

単語帳のページの角で自分の上の唇をなぞりながら、しかし、ページは破らずに。オリアナは告げる。

「次に放つは赤色で描く風の象徴、角度にしてジャスト0°のコンコネクティオ、総ページ数にして577枚目の使い捨て魔道書、『フレドクレーター明色の切断斧』……あなた達、もし今いる場所から動いちゃうと死んじゃうから、動いちゃだめだよ？ ま、どうにかして動かないと次でチェックメイトだけどね」

笑って、オリアナは単語帳のリングからカード魔道書を引き抜く。

地面に、オリアナを中心として半径約1メートルの円が浮かび上がり、その円周上から幾本もの文様が伸びていく。

……無力さに憤り、右手を強く握りしめる上条の横で、勇斗はぼんやりと地を走る文様を見ていた。

なぜだろう。さっきから、正確に言えば、オリアナ魔術師トムソンと相対してから、自分の力がゆらいでいる気がする。

243

強弱のゆらぎではなく、何か根本のところまで。

自らが内包する何かが、動いているかのように。

(……なんだ、これ)

この能力を発現してから今まで感じたことのなかったゆらぎ。

決して不快なものではなく、どこか、そこはかとなない懐かしさをも感じる。

そしてなぜか、こんな言葉が口から出た。

「……当麻。準備しとけ。」

「!?!」

そう言ったきり、上条が驚いた顔で見つめても、再びゆらぎに沈む  
勇斗。

確証はないが、不思議とこの状況を打開できる確信があった。

「それじゃあ……行くわよ。」

そういつてオリアナがくわえた厚紙を吐き捨てると、術式が完全に  
発動する。

『ブレードクレーター  
明色の切断斧』

真空の刃が、真逆のギロチンのように文様から吹き上がる。

そのギロチンが、勇斗と上条の周りをあっという間に取り囲み、2人を戒める檻となる。

「おい、勇斗！！ どうするんだ！？」

焦り、憤る上条とは対照的に、完全に落ち着き切った勇斗は一言だけ

「しじする」

と言って、背中に翼を出現させる。

その翼は、ジジツ、とノイズがかったようにゆらいでいる。

「勇斗……？ 翼が……」

「いいから構える当麻。……行くぞ」

そう言いつと、勇斗は翼をふるった。

真空の刃で隔離された2人を見ながら、オリアナは新たな術式、  
『ドロップレスト昏睡の風』を発動しようと再び単語帳を口元に近づける。



（魔術に精通していない一般人の割には、頑張ったわね、少年たち。まだまだ弱かったのがちょっぴり残念だったけどこっちも仕事だから、悪く思わないでね。）

そして単語帳のリングから魔道書カードを引き抜き、勇斗と上条にむけて『昏睡ドロップレストの風』を放とうとする。

が、その瞬間。

何かの力が吹き荒れ、『明色ブレードクレターの切断斧』の文様と、それによって生み出された真空の刃がすべて吹き払われた。

「!?!」

オリアナは目を見開いて驚愕する。

視線の先には背に翼を出現させた少年がいる。

（な、今のは一体……？ ……今の感じは、術式の魔力をそれ以上の魔力でもって消し飛ばした？ いやでも、今の力は……普通の魔力とは全然違っていた くっ！ ただの学園都市の能力者が、なぜこうも魔術に干渉できるの！？）

困惑するオリアナ。

そんな彼女に向かって、右手を握りしめた上条が踏み込んでくる。

状況を呑み込めないオリアナは、とにかく目の前の敵を倒す事に専念する。

プロの運び屋としてくぐってきた経験がオリアナの思考を切り替え、彼女は魔道書を吐き捨て、『昏睡の風』を放つ。

「喰ら　ッ！..」

だが、最後まで叫ぶ前に、上条の右手が『昏睡の風』の先端を殴り飛ばす。

そのたったの一撃で昏睡をもたらす風の槍が碎け散り、霧散する。

（な、んで……ッ!?　今度は、触れられただけで異能の力が消し飛ばされた……!）

理解不能な状況が重なり、オリアナは目の前の敵への更なる対処法がなかなか浮かばない。

そして、両者が近接攻撃圏内に入る。

もう単語帳など使っている暇はない。

「くっ……!!」

右の脇に挟んだ看板を振り下ろし、オリアナは本気で上条の頭頂部を狙う。

しかし、重なった混乱のせいでそれには威力も正確性も欠けている。

上条はぐるりと身をひねって振り下ろされた看板をかわし、更に踏み込む。

(……………ッ！！)

そしてゼロ距離で、上条の右拳が炸裂した。

オリアナの体が後ろへ吹っ飛び、彼女の手から手放された看板が上条のすぐ横へと落ちた。

「……やったのか？」

「……みたい、だな。」

上条の呟きに、勇斗が答える。

「とりあえずこれで『スタッフソード 刺突杭剣』は回収できる。土御門や、学園都市に潜伏してるらしい取引相手は心配だけだな。」

「……一応、一番の危機は脱する事ができたと考えて良いのか？」

「……まだわかんねーけどな。」

と、そのとき、2人の耳に笑い声が聞こえてきた。

2人は慌てて視線を戻す。

「ふふ。全く……、意外と乱暴なのね。ボタン取れちゃった」

仰向けに倒れていたオリアナが、眠りから覚めたような動きで、むくりと上半身を起こしていた。

「な……、効いて……なかつたのか!？」

「……やっぱりこういうオチかよチクシヨウ。」

「ふふふ。別にお姉さんがとつてもすごい!! ……っという訳ではないわよ? キミ。体に溜まったダメージのせいでインパクトが完璧じゃなかったし。まあ……素人の握り拳にしては上出来でした、といった所かしら。」

不敵に笑ってオリアナは言う。

「ただ、プロのお姉さんにとってはまだまだ欲求不満が募るレベルだけど、ね。」

彼女は左手の単語帳を口へ持っていき、単語帳の1ページを引き抜く。



オリアナの周囲で風が吹き、彼女の体が小型の竜巻に吹き上げられ、ものの一秒も経たずに建物の屋上へとたどりつく。

「……おい、忘れ物あるけどいいのかよ。」

『スタブソード 刺突杭剣』を指さして、勇斗は言う。

「ふふつ。それは一度あなたたちに預けておくわ。た・だ・し、燃えてくるのはこれからよん」

「……何でだ？」

今度は上条が疑問を放った。

「何でこんな重要なものをみすみす敵に渡すんだ？ どうしてそんな簡単に引き下がるんだ……？」

「ふふふ。なぜかしら、ね。それを考えるのも楽しみの一つよん」

そう言っただけで彼女は建物の死角へ移動し、オリアナは姿を消した。

勇斗と上条の二人は『スタッフソード 刺突杭剣』に向き直る。

土御門の携帯からステイルに連絡を取ると『スタッフソード 刺突杭剣』を破壊しろという単純明快な答えが帰ってきたので、そうしようというわけだ。

「く……ッ！何だこれ。結構……。硬いな。」

「プロの梱包を真似てるみたいだな、これ……。」

しばらく布地を引っ張っていると、きつく巻かれた布が緩んでいった。

2人は巻かれた布を外していく。

しかしその先に、『スタブソード 刺突杭剣』はなかった。

そこにあつたそれは、ただの看板だった。学生が作ったような、手製のちやっちい看板。

「何だ……これ？」

「一体どうなってる……？」

2人は呆然と呟いた。

答えてくれる者のいない、静寂の中で。

オリアナ「トムソンは街を歩きながら、通信用の霊装でリドヴィア  
「ロレンツエッティと会話していた。

その姿は先程までの作業服とは違う。

「……この学園都市、なめてかからない方が良いわね。」

『それは、どっぴいじいじとでしよっ。』

「2回も、お姉さんの魔術、破られちゃった。」

『……計画の方に支障は？』

「……わからないわね。だから、」

『だから？』

「ここからはお姉さんががんばっちゃおう」

あくまでも軽く、ただ、目に決意を秘めて、彼女は断言した。

e p . i 6 9 月 1 9 日 - 6 ( 後書き )

ネット開通は6月26日以降です

……もう少し

e p ・ 1 7 9 月 1 9 日 ・ 7 ( 前 書 き )

いよいよ今日ネット開通(予定)!!

嬉しいので友人の協力で e p ・ 1 7 アップします!!

ではでは、よろしく願いします!!



「クローチエディビエトロ使徒十字』……か。まったく、なんて話だ」

ステイルは携帯電話の通話を切るとポツリと呟いた。

道端のカフェのテラスの一角を、勇斗、上条、土御門、ステイルの4人で陣取り、話し合いをしているところである。

「ペテロの十字架、ねえ。たしかペテロってももとのローマ教皇領の持ち主じゃなかったっけ。」

「そうだけい……。今ではバチカン市国と呼ばれてる教皇領バチカンのある土地をもともと持ってたのがそのペテロさんですたい。」

勇斗のつばやきに土御門がこたえた。

「ペテロさんの死後、遺体が埋められ、十字架が立てられ、墓が作られた。元々はそんなでなくなかったんだが、そこにルネサンス期の大改築で現在の聖<sup>サン</sup>ピエトロ大聖堂が出来上がったわけです。ローマ正教の総本山がにゃー。」

「うーん……要するに偉い人を奉ってるっていうことか？」

と、今度は上条が尋ねる。

「聖人の死体を利用して新しく建てる教会の権威を補強したとも言えるけどにゃー。ま、それくらいのことならイギリス清教<sup>じやうきやう</sup>もやってるけど。」

「ふーん……、で。オリアナが運んでたのはそっちのペテロさんの十字架だったと。それって危険な物なのか？ それとも国宝級の骨董品よろしくレア価値がついてんのか？」

「まあ十二使徒の1人が関わってる霊装だからそれ相応の価値もあるけど、気にするべきは、もちろん前者だね。さつきも言ったようにローマ教皇領の始まりは広大な土地にペテロの墓、つまり『使徒クローチェ十字架ディビエトロ』を立てたことだ。そして逆もまた然り、つまり『使徒十字架クローチェディビエトロ』を立てた場所は、漏れなくローマ教皇領と同質の空間になる。たとえばこの学園都市であっても例外ではない。」

「「!?!」」

勇斗と上条の表情が驚きに染まる。

「バチカンという国は、その内部全体が巨大な教会になってるようなものなんだよ。バチカンという範囲内に、指向性のある魔力が充

満っていて、それによって常にローマ正教にとって都合良く話が進むようにできている。」

「なるほどね……」

と、そこで勇斗が口を開いた。

「やつらの目的は『使徒十字』クローチエディビエトロのその効果を利用して科学サイドト  
ップの学園都市を支配下におさめて、魔術サイド最大勢力としての  
面子を取り戻すってところか。」

「ああ、多分そついうことだ。……全く、君の理解の早さにはいつも驚かされるよ。そつちの男にも見習ってほしいものだね。」

「おい、それはおれのことか？」

と上条が言つと、

「君以外誰がいるんだい？」

「……くっ、反論できない……！」

「まあ君の理解の遅さはこの際おいておくことにして、だ。……止めるよ、この取り引き。さもなければ、世界は崩壊よりも厳しい現実に直面する事になる。」

声に、勇斗と上条、土御門は頷いた。

「ま、とりあえずは一旦休憩だにゃー。勇斗とカミちゃんは昼飯でも食べて腹ごしらえして、また午後がんばるにゃー。おれたちはいろいろと調査してくるぜい。よーし、一時かいさーん。」

そういって、魔術師2人組はさっさと行ってしまった。

「……よし、おれらももう行くかー。」

「だな。あ、おれは177支部で昼飯食うから。……インデックスがんばれ。」

「……がんばります。」

これから先のインデックスの子守りを思って気が重くなる上条と別れ、勇斗は177支部に向かった。



「あつ、勇斗先輩。お疲れ様でした。」

勇斗が177支部につくと、勇斗の心の清涼剤、初春がテーブルで弁当を食べようとしているところだった。

「おう初春。なんだ、お前もここで昼飯食うのか。」

「はい。荷物もここに置いてありますし、……競技が伸びて出遅れて場所取りできなかつたんです。」

「それに涼しいしな。」

そう言つて勇斗は荷物から弁当を取り出し、初春の向かい側に座つて弁当を広げる。



「にしても、一人で食うつもりだったのか？」

「いえー、もう少しすると白井さんと佐天さんがくることになって  
ます。」

「なるほど。」

「はい。……と、すみません。佐天さんからメールが」

そしてしばらく携帯を操作し、携帯を閉じて言った。

「白井さんが暴れたそうで傷口が開いてしまったそう……。まだ  
病院にいて遅れるそうです。」

「あいつ……何やってんだよ……」

勇斗は呆れてため息をついて言った。

「まあ待っててもしょうがないから一緒に食おう、初春。」

「そうですね。ぜひ一緒に一緒にさせてください」

そう言って2人は昼食タイムを開始した。



「いやー、初春の肉じゃがうまかったな。」

時間は現在14時50分。昼食後に初春と散歩してまったりとした時間を過ごした勇斗は、午後の競技へと向かった初春と別れて公園のベンチに座っていた。

「心は癒されたし、天気もいいし、にぎやかだ。平和だな……と言いたいところなんだけどな。」

そうつぶやいた勇斗がやっているのは、学園都市の監視カメラネットワークにアクセスしてのオリアナの搜索である。

（ふう。なんか最近当麻の事件巻き込まれ体質でもうつつたか？最近妙に大事件に巻き込まれてる気がするんだが。……まあ自分から首突っ込んでるってのも否定はできないけど。）

そんなことを思いながら、第7学区の監視カメラの調査を終えた勇斗は次に隣の第5学区のカメラの調査を始める。

（『クロッチェディビエトロ使徒十字』は土御門やステイルがネセザリウス必要悪の教会のメンバーと調査を進めてくれてる。ならおれもできることをしないとな。）

オリアナの姿の特徴をもとに検索するカメラの数を絞り込み、一つ一つ調べていく。

それから数分して、

「見つけた……」

第5学区、地下鉄西部山駅の出入り口の監視カメラ。

そこにオリアナの姿が映っていた。

勇斗はすぐに土御門に電話を掛けた。

「土御門、オリアナを見つけたぞ。」

『!!! ……機械はあんま魔術に対応できないから警戒してるはずのあいつらには使えないと思ってたんだがにゃー……。どこだ?』

「第5学区、地下鉄西部山駅の監視カメラに30秒前には映ってた。ただ、たった今監視カメラから消えた。魔術を使ったか単に死角に入ったか、どっちはわかんないけどな。」

『了解、だにゃー。すぐにカミヤン達に伝えてくれ。そしたら勇斗も一応そこに向かってくれ。オレもすぐに向かうにゃー。』

「わかった。」

そう言って通話を切り、すぐに当麻に電話を掛ける。

「オリアナを発見した。場所は第5学区、地下鉄西部山駅。その監視カメラに1分前に映ってた。ステイルを連れて急いで向かってくれ。」

『わかった。』

勇斗も携帯と端末をポケットにしまい、移動を始めた。





地下鉄を使って移動しようと最寄りの地下鉄の駅までたどり着いたとき、勇斗の携帯が鳴った。発信者は上条当麻となっている。

「どうした？」

『西部山駅に着いたんだけどどこに行けばいいんだ？』

「……学園都市のセキュリティシステムで自動探索かけてるけど反応が全くない。多分術式か死角を通ってるかしてるんだと思う。ステイルに頼んで魔術で探せないのか？」

『それが専門外らしくて……』

と、途方に暮れているとステイルの声が聞こえてきた。

『土御門が探索魔術をかけてくれるらしい。僕たちは先にオリアナを追うよ。』

どうやらステイルはステイルで土御門に電話をかけていたらしい。

「あいつ魔術使うとやばいんじゃないか？ ……まあこの際しょうがないか。わかった。」

そう言つと電話は切れた。

（待てよ。確かオリアナは魔術による魔道書への干渉を察知して迎撃できると土御門は言っていた。ならもしかすると探索魔術の魔力

をたどってオリアナが土御門の位置を割り出すことも可能なんじゃないか……)

そう考えた勇斗は、端末に土御門の携帯の番号を入力して土御門の居場所の検索を開始。土御門のもとに直接向かうことにする。

おそらく今土御門は電話で上条とステイルに指示を出していて電話はつながらないだろうし、魔術を使った後、例外なくボロボロになってしまっからだ。

自分1人加わってどれだけできるか不安だが、いないよりはマシだろう。

しばらくして、検索の結果が出る。

土御門は今西部山駅から歩いて10分弱の地下道にいるようだ。

なぜそんなところにいるか不思議に思ったが、大覇星祭のパンフレットを見るとちょうどその周辺が10キロ走のコースに指定されている。

どうやら10キロ走のコースにバスが引っかかってしまい、自力で移動しているようだ。

しかし、何にせよ早めに合流しておこう、と勇斗が思った瞬間、端末から土御門の携帯の電波の反応が突然消えた。

「!?!?」

突然の反応の消失。それが意味しているのは

「ちっ！！ 早すぎるだろ！！」

勇斗は翼を広げ空を舞い、一気に土御門のもとへ飛んで行く。

地下道の通路は完全に崩壊していた。

通路の崩落それ自体は免れているが、壁、天井、床、その全てが砕かれ、スプリンクラーが破壊された天井からは、大量の水が床に降り注いでいる。

そんな惨状の中で、オリアナは地に倒れた土御門を見下ろしていた。

「……結界を破壊して通信用霊装で聖人、カンザキカオリを呼ぶなんてね……。なかなか面倒な真似をしてくれるじゃない。」

「ふん……。私達が運んでいる物は『スタブソード刺突杭剣』です、って素直に主張し続けてれば良かったものを。そうでないとな分かれば、こちらだつて遠慮なくアイツを戦力投入させる事ができる。むしろ、『ス刺突杭剣』がないならアイツを待機させておく理由なんてないだろう。何せ、一番の弱点が消えてしまったんだから。」

「ちっ！！……なら探索魔術の使い手のあなたを殺して、さっさとこの場から逃げさせてもらおうわ！！」

そう言ってオリアナは魔道書単語帳の『原典』を口にくわえ、破り取ろうとする。

土御門は一瞬観念したような表情を浮かべたが、すぐに不敵に口を吊り上げた表情を浮かべ言った。

「勝手にしろ。……逃げられるんならな」

「？」

訝<sup>いぶか</sup>しげな表情を浮かべるオリアナの背後。

翼で空気を叩いて宙を舞い、体を大きくひねって今にも蹴りを放とうとする勇斗がそこにいた。





「!?!?」

蹴りが放たれる寸前に勇斗に気づいたオリアナは、とっさに腕で防御の構えを取る。

が、ろくに体勢を立て直す暇もなかったオリアナの体は、勇斗の運動エネルギーを乗せた蹴りで、いともたやすく吹っ飛んだ。

吹っ飛ばされ、地面を転がるオリアナを横目に見ながら、勇斗は土御門のもとに駆け寄る。

「まったく……。心配してきてみれば案の定過ぎる展開でいつそ笑えてくるよ。」

「……でも助かったにゃー。サンキュー勇斗。」

「どづいたしまして。」

「（……助けに来たついでにちょっと協力してくれ。仕掛けたいハツタリがある。おれが怪我で動けず、戦闘要員が勇斗しかない今、第1目標はあいつを追い払うことだ。無茶はできない。）」

「（了解。捕まえるべき敵を追い払うつてのが悔しいけどな。まあよっぽど変なのじゃなかったらいくらでも合わせてやるよ。）」

「（ふっふっふ。まあ適当に話を合わせてくれにゃー。）」

そう言つと土御門は立ち上がったオリアナに向けてこう言った。

「どうだオリアナ。神裂が来るまでこいつがお前の足止めをするぞ。」

「……さっきも戦って思ったけど、その子、ジャッジメント風紀委員よね。そんな子が魔術サイドに干渉してもいいの？ たしか不可侵条約でも結んでいたんじゃないかしら？」

蹴り飛ばされたことによるダメージをそれほど感じさせない気丈な声で、オリアナは尋ねる。

「ふん。お前らがすでにそれを破ってるんだ。どうしてそれをおれらだけが、律儀に守る必要がある？」

そんなオリアナを嘲笑うかのような口調で土御門は応えた。

「お前らの目的が『スタッフソード刺突杭剣』の取引でなく、『クローチェイビエトロ使徒十字』による学園都市の支配であるということが分かった時点で、オレ等学園都市暗部の人間　ほんの一握りだが　に学園都市統括理事会の通達があった。『敵の学園都市に対する敵性が明らかになり、実際に敵対行動が行われている今、迎撃・捕縛等に限るが、魔術側への攻撃を認める』とな。」

そして土御門は一度言葉を切って、してやっつたりの表情を浮かべ、言った。

「そして更に学園都市統括理事会は、科学サイド科学サイドの隠し玉をこの事件の担当に当たらせることにした。……もう、ここまで言えばわかるだろう?。」

「……まさか……。」

「そう、こいつが科学サイドの隠し玉。学園都市の対敵性魔術勢力への対抗手段の1つさ、オリアナ・トムソン。」

「……っ!」

「そんなの信用できないか？ おれが嘘をついていると思うか？  
もしそうなら気の済むまでこいつと戦っていけばいい。いくら魔術  
に疎くても、お前程度相手なら時間稼ぎくらい朝飯前だぞ。」

土御門のそのセリフに合わせて、勇斗も薄く笑う。

オリアナは判断に迷う。

さっき一度戦った時の感触では、倒すのはそれほど難しくはないかもしれないとも思っている。

体術のレベルは少なくとも互角以上。それにオリアナには曲がりなりに『原典』がある。

ただし、この翼をもつ少年は、得体がしれない。

その翼に秘められた力。

さつき一度魔術を打ち破られた身としては警戒しておくに越したことは無い。

(ちっ……)



オリアナは心の中で舌打ちした。

（カンザキカオリが実際にここに向かって来てるのか来ていないのか、判断がつかない……。実際にここに来てると考えても、絶対負けるとは思ってないけど……。大きな事を成し遂げなければならぬんだから、下手に傷は増やせないわね……。）

と、オリアナは現状を整理する。

（探索術式は、魔道書カードのページごと破壊したからもう使えない。相手の坊やたちは1人が完全な足手まとい。こんなに逃げるのに好条件なのはそうそうない。ここは今のうちに逃げる！！）

オリアナはトムソンは魔術を発動させて爆発を起こし、粉塵を巻き上げると、勇斗と土御門に背を向け、地下道の出入り口へと走り、地下道から逃げ出した。



巻き上げられた粉塵の向こうで、オリアナが逃げる気配がする。

勇斗は牽制として、翼を振るって衝撃波を飛ばすが、吹き散らされた粉塵の向こうにオリアナの気配はない。

どうやら本当に逃げたようだ。

「……………ま、ミッションクリア、ってところか？」

「第1目標は、クリアできたみたいだにゃ……………」

「ほんとはここでとっ捕まえたかったけどな。」

「まあそれがベストではあるが……、あいつは強い。おれ等必要悪ネセサの教会リウスのメンバーでも1対1はキツイかも、しれないにゃー……。だから、無理は、させられなかった、にゃー。」

「確かにあいつと1対1でやるのはキツそうだな。やりようはありそうだけど絶対それ相応の傷は負わされそうだ。」

「……学園都市の能力者にそんなことやられたら対魔術師専門戦闘機関、イギリス清教第零聖堂区、必要悪ネセサの教会リウスの面子が丸潰れだからなるべくやめてほしいにゃー……。」

土御門の声にはいまだ力は感じられないが、軽い口調を取り戻したようだ。

「ちょっと、オートリパース肉体再生使わせてくれ、勇斗……」

「おう。見守っててやるよ。」

「……頼むぜい。」

そう言って土御門は能力を使い、できるだけ怪我を直していく。

そんなボロボロにされた友人を見ながら、勇斗は絶対にさっさと事態を終結させようと、強く思った。

ep.18 9月19日・8(前書き)

最近デイスガイア4にはまっています。

あれはなんかクセになる……

と、いうわけで、今日も夜更かしです^^;

土御門は肉体再生オートリパースを使い終わると、「ちょっと待っててくれにゃー。」  
「と言ってちよっと姿を消し、10分後、手に新品のケータイを持って再び現れた。」

「……さっきの戦闘で携帯壊れちゃったから新しいの貰ってきたんですわい。」

「……お前、盗んだりとかしてないだろうな……。」

「いやー、……学園都市とイギリス清教の両方のエージェントをやっておりますオレには、そんなことする必要がないんだにゃー……。」

「……お疲れ様です。」

いつもの口調は少し戻ってきたものの、呼吸は浅く、土御門の声はまだ弱々しいままだった。

そして、どうやら土御門は、新しい携帯を貰ってすぐに上条とステイルの2人と連絡を取っていたようだ。

「あいつらはもうすでにオリアナの搜索を再開している。……さっきの事があるからあいつらも警戒して逃走してるはずだ。となると学園都市のセキュリティはあまり当てにならない。だからこっからは自分たちの力で見つけ出すしかないゼイ。」

「だな……。かなりキツイけどやるしかないな。」

と、そんな2人のもとに上条から電話が入った。



土御門の携帯が音を立てる。

「どづしたカミヤん？」

『……………土御門、勇斗……………』

土御門が手に持った携帯のスピーカーから聞こえてくる上条の声は、怒りや悲しみをこらえるかのように、震えている。

「どづしたカミヤん！？ 何があった？」

土御門が焦ったように上条に尋ねる。

『ふざけんじゃねえよ……。 姫神がオリアナに襲撃された……。』

「なんだって!?!」

驚く勇斗とは対照的に、土御門は冷静だった。

「……………容態は?」

『今ステイルが魔術で治療してくれてるはず……。 ……かなり危ないらしいけどな。』

「……………そうか。」

『……………ふざけんじゃねえ!! なんてあいつが襲われなくちゃならなかった!?! なんてあいつが傷つけられなくちゃならなかった』

た！？　なんで大霸王祭「のまじり」を、ローマ正教なんかに邪魔されなくちゃなんねえんだよー！！』

「……当麻……」「……カミヤん……」

『……わりい。八つ当たりしちまった。……ごめん2人と  
も。……まずはあいつらをとっ捕まえる。そして絶対姫神と吹寄に  
謝らせてやる。だから勇斗、土御門。……絶対あいつら見つけ出す  
ぞ。』

「……もちろんだ。」「……言われなくても、わかってるにゃー。」「

上条の決意に、2人は頷いた。

『……っても、手掛かりが無いんだけど……。』

と、上条は息を吐きながら言う。

『……バス停でオリアナを見失った。このあたりにはいるはずなんだ。どうにかして見つけられないか？』

「……ちよつと厳しいにやー。『理派四陣』の触媒になるオリアナの魔道書カードももう無いからにやー……。……オリアナが、どの路線を使つてそうかとか……。分かんねーかにやー……。？」

『このバス停からは、第7学区の外周を回るルートのバスが出るみたいだけど、オリアナがこのバス停で降りるのが分からない。まだバスに乗つてる可能性もあるし、2番目のバス停の近くには地下鉄の駅がある。それに4番目は各学区行きのバス路線が集まるターミナル駅だ。そのどこかで乗り換える可能性もある。』

「チツ……。八方ふさがりだにやー……」

土御門が、悔しそうに唇を噛んだ。

2人の問答を聞いて勇斗も考えを巡らせる。

全く予想のつかない、オリアナの動きに。

そして、彼女の目的に。

(……ん?)

そんな時、勇斗は違和感を感じた。

……オリアナの目的

最初は、『スタッフソード 刺突杭剣』の取引があるから、止めるのを手伝ってくれと言われてこの仕事を手伝い始めた。

ローマ正教の魔術師たちが、どっかの魔術組織と学園都市の中で『スタッフソード 刺突杭剣』の取引をするから、と。

だが実際問題、オリアナ達が持っているのは『クローチエデイビエトロ 使徒十字』だった。

しかも、取引などなく、それはローマ正教が学園都市を支配下に置くための、学園都市で『クローチエデイビエトロ 使徒十字』を使うための嘘情報だった。

……なら、なぜあの時、一番最初に上条がオリアナを見つけたとき、オリアナは学園都市をうつろっていたのだろうか。

取引がないのなら、余計なリスクを負わずに、ホテルにでも籠っていればよかったのに、なぜそんな敵に見つかるようなことをしたのだろう。

一体、なぜ。

「……土御門。気になったことがある。」

勇斗は、悩み続ける土御門に向かって言った。

「何だ勇斗？」

「オリアナが街の中をうろついている理由だよ。」

一拍おいて勇斗は続ける。

「この追いかけてここが始まったのは、午前中に上条がオリアナの術式を偶然破壊した所から。……じゃあ、オリアナはあの時、何の目的でそこにいた？ オリアナ達の目的は、『使徒十字』を、……あの時はまだ『スタフソード 刺突杭剣』って言ってたけどな、取引するつもりでは無かった。だから人と会うため、つてのも可能性は低いはず。それに、午前中はオリアナは、『クロウチエディビエトロ 使徒十字』を持ってなかったぜ。」

「……確かに……。……なのに歩き回ってたって事は……。……きつと何か理由がある。」

そう言って土御門は思考の渦に沈む。



「……『クローチエディビエトロ使徒十字』は、まだ発動されてない。それと絡んでるのか……？　もしかしてオリアナの目的は、条件探しか……？」

『……そうだ土御門。ステイルが『クローチエディビエトロ使徒十字』の保管について、イギリス清教から情報が入ったって言った。何か役に立てねーか？』

「ホントかカミヤん？　……些細な事でも、良い。ちょっと詳しく話してくんねーか……にゃー？」

『ああ。まず1つめ。保管庫は窓がふさがれドアが二重になってるという事。確か、光が入るのを防ぐため……だったかな。』

「光……か。『クローチエディビエトロ使徒十字』は強大な霊装だし、不用意な発動を防いでるのか……？」

『……なあ、その『クローチエディビエトロ使徒十字』ってのは、太陽の光に当たっただけでヤバイのか？』

「いや、多分、それは違うにやー。もしそうなら、今だって太陽は……出てる。それで、『使徒十字』クローチエディピエトロを発動できるなら……とっくにやってるはずだぜい。ただ、はるか昔の、十字教のはじまりを考えれば、霊装の発動に……何らかの、光が関わってる可能性はかなり高い……。大昔の、まだ十字教が分派する前は、光を用いる術式も珍しくなかったからな。……ただ、如何せん情報が少ないな……。……カミヤん、他に情報は無いのか？」

『もう1つある。オルソラからの報告メールがステイルから転送されてきたやつが。ただ、外国語で書かれてて全然読めなかったけどな。』

「……とりあえず送ってみてくれ。」

『わかった』

そう言って通話は一度切れ、そして上条からメールが送られてくる。

「……………これは……………、イタリア語だにゃー。」

「イタリア語か。えーっと、なにになに……………。」  
『クローチエディビエトロ使徒十字』保管担当部署について』……………なるほど。保管するってことは不用意な靈装クローチエディビエトロの発動を防ぐことも必要だろうから、これを見れば『クローチエディビエトロ使徒十字』の使用、発動条件もわかるかもな。」

「だにゃー。えっと、続きは、と。『クローチエディビエトロ使徒十字』保管庫担当部署のやつら、年2回の大掃除で、昼に掃除するの忘れてるからやれって言うてんのに、夜になったらなつたで勤務時間中だつてのにホロスコープで星占いして遊んでやがる。何て奴らだ。掃除の日決まってるから、今日やらなきゃいけないのに、昼の内に済ませなきゃいけないですよ、とか言うてまた今日も働こうとしないで帰りやがった。くそっ……………、怒られんのはおれなんだぞてめえら。』……………って、大半は、監査官の愚痴だな……………こりゃ。」

そう言うて土御門は、上条の携帯電話に電話を掛ける。

「カミヤん、メールは読んだ。……学校にある、日直が書く日誌みたいなもんだったな。『使徒十字』クローチエディビエトロには、年2回の大掃除があつて、いくつかのルールがあるみたいだ。1つ目は、決められた日付に行わなければならないという事。2つ目は、昼の内に済ませなければならぬという事。だ、にゃー。……やっぱり……大した情報じゃねーかもにゃー……」

土御門は言い終わると頭をかきながら再びメールの文面を見返し始める。

「……?? ……ちょっと待て土御門。ちょっとメール見せてもらっていいか?」

土御門の話したことに、わずかに違和感を覚えた勇斗は、土御門のケータイを見る。

「……変だな。『使徒十字』クローチエディビエトロって、ローマ正教にとって大切な霊装なんだよな?」

「そうだにゃー……。それこそ、やつらにとっては、涙を流して跪くぐらいの神聖さはあるはずだぜい。」

「じゃあなんでこんなに管理がいい加減なんだ？ 普通そんなすこい物だったらもっと丁寧にしっかりと扱うと思うんだけど。」

「……確かに。……各部署から集められたエリート集団なんだから……クロウチエディビエトロ『使徒十字』の価値だって知ってるはずだ。……一体どういう事だ？」

「気になるのはまだ他にもある。2重扉を用意して光の侵入を防いでるくせに、掃除は日中にする。『決められた日にやる』というルールを破つてでも日中に掃除をしようとしていた。ってことは、この霊装にとつて危険、つまり『クロウチエディビエトロ使徒十字』の発動を握るのは昼ではなく、夜に出る光の可能性が高いってことだよな。」

「……夜にある光、か。確かに十分ある話だにゃー。」

勇斗と土御門はそう言って考え始める。

「でも、夜にある光って何だ？」

「月明かり……、いや、違うにやー……。月齢周期はカレンダーの流れ、つまり太陽暦と……一致しない。行事の日付だって、気分で決めてるわけじゃなく……。宗教的な意味がそこにあるからこそ、その日に決まってるんだにやー。月齢周期が……。キーポイントだとしても、月齢の方がズれてくるから、使用に適切な特定の日付を、……。決める事ができない。それに、月明かりだけでアウトなら、大掃除の日付を厳密に定めておく必要がないしにやー。」

「……夜にある光、か。」

『おーい……。2人とも……。置いてかないでくれ……。』

携帯から流れてくる、上条の寂しげな声も気にせず2人は考え続ける。

『はあ……。さすが朝の星座占いランキング第11位の上条さんなだけありますね。全く友人に相手されませんよ。』

携帯から上条の声がする。

「後でかまっつてやるから頑張れっ……ん？……星座……？」

上条がポツリと言ったその言葉をもとに、一気に考えがまとまっていく。

勇斗が横を見ると、土御門も顔に笑みを浮かべている。

「……サンキュー当麻。お前のおかげでわかった気がする。おそろく、クローチエディビエト『使徒十字』の発動のキーとなる光は……星座だ。」

「そうかも、しんねーにやー……。星座を利用した霊装を使った魔術ってのは、それほど……珍しくないからにやー。」

「……なあ……。クローチエディビエト『使徒十字』を発動させるには星座の力が必要だって事だけど……そもそも星座を使うってのは、具体的にどんな感じなんだ？」

「……カミヤん、覚えてないか？……夏休みの終わり、エンゼルフォール御使墮しガブリエルの時、大天使『神の力』だって星座、あれは夜空1面だったけどな、を使って魔術を放とうとしたことをにやー。つまり、星座を使う魔術ってのは、占星術から天使の術式に至るまで、いろんな魔術に通じるところもあるってことだにやー。……それに、星座を形作る星1個1個の間にとつもない距離があったとしても、地球上からの見た目の形だけに注目して、フナタリウム夜空というスクリーンに浮かぶ、規則性のある図形そのものだけを、魔法陣として組み込むから、単純な形であっても、スケールがでかく、比例して強力になる。これほど使い勝手の良い魔法陣は……そうそうないって訳だにやー」



そして、土御門は自分の考えを述べる。

「おそらく、『クローチエディビエトロ使徒十字』は、見た目の星座の図形を利用した霊装なんだろう。オリアナがあちこち移動してたのは、星座の力を、最も適切に利用できる魔術的な位置を探っていたからだ。……だが確かに、その説であつてる可能性が強いんだが……、いくつかの矛盾点が、クリアできてないにゃー。」

「それって何だ？」

と、勇斗が質問する。

「いいか勇斗。……カミちゃんも聞いててくれよ。『クローチエディビエトロ使徒十字』ってのは、一二使徒の1人であるペテロの死に深く……関わる霊装だ。ただ、ペテロが死んだのは6月29日。今とは3か月くらいずれち

まってるから、その頃の星空の様子とは、変わっちまってるはずだ……。それに、日本とバチカンの空じゃ……緯度や経度の関係で見える星座も若干だが違う。見た目の星座の図形を利用した霊装にとつて、そのズレは大きい。その点をどうにか説明しないと、この仮説は成り立たないにゃー。」

「……て、ことは。……今、クローチエディビエトロ『使徒十字』は使えない、ってことか？」

「……使えないものをわざわざ持ち込むってことは無いだろーから、多分使えるようにするための条件があるのかもしれないにゃー。」

土御門は考え込むような顔で言った。

「……だが、実は、それについてゆっくり考えてる暇はもう無いぜい。」

土御門はそう言って時計を指し示す。

「オリアナ達が『使徒十字』クローチエディビエトロを使うために夜空に星座が出てくるのを待っていると仮定すれば、発動のタイムリミット……おそらく日没だが……は、おそらく午後7時前。日没前に光り出す星もあるから、場合によっては午後6時でも危ない。……そして今は午後4時からい。……つまり、残された2時間ちよつとの時間で、あいつらと、『使徒十字』クローチエディビエトロを見つげなくちゃなんない。……とにかく今は、動くしかない。オレはこれからオリアナのルートを占星術的に洗い出してみる。上手くいけば……オリアナが次に目指している場所が分かるかもしれないからにゃー」

『ちよ、待った！ お前、そんな状態で動いても大丈夫なのか！？』

「そんな、状態？ ハッ。……カミヤん、このオレがどんな状態だつてんだにゃー？」

「ボロっボロのボロっボロじゃねーか。」

「……せつかくの人の強がりには素直に受けるもんだぜい。……時間が無いんだ。やるしかないだろ。」

土御門は笑ってそう言った。

「勇斗はカミヤんと手分けして、あいつらを探してくれ。……おそろくもう監視カメラは役に立たない。気合で頑張ってくれ。」

「……ああ、やってやるさ。」『……ああ、わかっている』

「……よし。……ここからが正念場だ。おれらがあいつらを止められるか、それとも学園都市がローマ正教に支配されるか。すべてが決まる。それじゃあ、……行くぞ。」

「おっ！ー！ー！」『おっ！ー！ー！』

そして3人は、再び動き始めた。

e p . 1 8 9 月 1 9 日 - 8 ( 後 書 き )

そーいえばバカテス2期始まりましたね^^

見たいなー

ニコ動だけじゃなくyoutubeでも配信してほしいかなー

e p . 1 9 9 月 1 9 日 - 9 ( 前 書 き )

説明が多くてほぼ本文と同じな気が……

……そろそろオリスト入れたいと思います。

現在時刻は午後4時30分。

勇斗はさっきの電話の後、1度上条と合流し、上条がオリアナを見失ったバス停を中心とした、円形に周辺を搜索していた。

表通りから裏道まで、隅々まで歩き回る。

ほぼ確実にオリアナは自律バスに乗って逃げているだろう。

だが、オリアナを見つけないことができず、魔術的な技術不足で土御



門を助けられない勇斗と上条にとってできるのは、こつこつ地道に歩き回って探すことのみである。

(……………流石に焦るな……………)

勇斗はため息をついて思う。

(時間は限られてるのに、探さなきゃいけないところはいっぱいある。しかも、その手掛かりはないときだ。)

……………本来だったなら、心が折れて、あきらめそうになっても仕方ない。そんな状況のはずだ。

だが。

勇斗は周りを見渡す。

歩道には、楽しそうに歩いている学生達の姿がある。

スクリーンには、楽しそうに競技に参加する学生達の姿が映し出されている。

そんな彼らみんな、そして自分自身にとっても、学園都市は大切な居場所だ。

この生活を、居場所を、失う訳にはいかない。

(……ジャックマン……) 風紀委員として、この街を守る。絶対に学園都市を、口  
ママ正教には渡さない。( )

勇斗は、改めてそう決意した。

更に搜索を続けること15分ほど。

時刻は午後4時50分。

勇斗の携帯が着信を知らせた。

表示に映るのは、上条当麻の文字。

勇斗は急いで通話に出た。

「どうした？」

『……………ステイルから連絡があった。』

と、上条はそこで1度言葉を切り、

『……………姫神はなんとかなってくれたみたいだ。』

と、安堵のため息をついて言った。

『ステイルがかけた回復魔術でショック症状を脱して、あの先生の病院に運ばれたらしい。だからたぶんもう……、大丈夫だ。』

「……だな。ならもう安心だ。」

勇斗もその結果を聞き、心から安堵する。

「……なら後やることは……、あいつらを止めて、吹寄と姫神に謝らせるだけだな。」

『……ああ。絶対やってやる。』

上条は静かに、力強く言った。

『あ、そしてステイルから伝言。土御門が何か発見したらしい。いったん合流しようぜ。』

「ああ。わかった。」

そう言って通話を切り、勇斗は事前に集合場所に決めておいた喫茶店に向かった。

勇斗、上条、土御門は、集合場所である喫茶店に集合した。



「……お前、顔色も良くないし冷や汗も出てるけど……ホント大丈夫か？」

「にゃー、意外と何とかなってるぜい。」

勇斗の心配に土御門は苦笑いで返す。

「で、調査結果についてだが、わかった事は2点。あいつらは秋の星座を使って使徒十字クローチエディビエトロを使おうとしているという事。もう1つは、オリアナがまわっていた各『天文台』は、そのどの地点から眺めても、ある一定の星座を全く同じ魔術的意味で、読み取れるように工夫がされていたという事。……だにゃー。」

どこから星空を眺めても、同じように見えるというのは、一見すれば当たり前のような理論だが、これが魔術的な意味を含むとなると事情は異なる。

星座とは、いわば地球上から見た星空の仮の姿で、厳密に言えば、一歩でも異なる地点から星空を観測すれば、星座はほんのわずかに形を変える。その肉眼ではわからないレベルの誤差でも、術式が暴走してしまう場合があり、それゆえ、星の力を借りるギリシアやエジプトなどの術者が、より精密な天文台を求めて巨大な神殿を築いていた。

星空自体は誰にでも利用できるが、準備にえらく手間がかかる、というのが星座利用型術式の特徴である。星座は様々な術式に応用できるが、それを行うために、各術式にそれぞれ対応する天文台を別個に建てる必要があるほどだ。

ほんの少し動いただけで魔術的意味が異なってくるにも関わらず、まわったいくつかの天文台から全く同じ意味が読み取れる。それはつまり、何らかの魔術的な仕掛けがあるということだ。ゆえに、偶然という訳が無く、オリアナ達が秋の星座を使って使徒十字クローチエティヒトロを使おうとしているという事は確定事項である。

と、土御門は補足する。

しかし、こつも言った。

「確かにオリアナが歩き回ってた理由は星座に関する事だった。おそらくそこに『使徒十字』クロッチェデイレエトロ発動の鍵があるってのも間違ってるだろう。だが『使徒十字』クロッチェデイレエトロが歴史上使われたのは夏だ。どう考えても今現在の秋の星座で、代用できるとは思えないんだにゃー。」

やはりその矛盾点について、最後まで疑問を拭い去れない。

その不確かさが、彼らの思い切った行動を拒む。

「ステイルが英国図書館にいるイギリス清教のメンバーに情報収集を頼んだとか言ってたが……、まだなのかにゃー……」

が、土御門が渋い声でそう言った所で、携帯電話が鳴った。

「！！ よし、イギリス清教からだ！！」

いつもは冷静な土御門が少し慌てたように携帯電話を操作し、スピーカー機能をオンにする。

新たな情報を期待して、3人は携帯電話に注目する。

わらにもすがるような思いで、3人は耳を澄ます。

そして、携帯電話から聞こえてきた声は、

『あら。そちらはステイル＝マグヌスさんで合っているのじゃないか』

「ましようか？」

「「「間違い電話かよ!!!」」」

『…申し訳ございませんでした…』

3人が同時に叫ぶと、電話の向こうから女性のしょんぼりした声が聞こえた。

「あーあー、こっちは土御門元春。ステイルと一緒に動いてるから、報告ならオレの方で受けとくにゃー。……で、なんかわかったのか？」

『そんなのでございますよ。英国図書館の記録を当たってみた所、クロッチェディビエトロ『使徒十字』に関する新情報を手できましたので、そのご報告でございませす。』

「ん？」の声……もしかしてオルソラか？」

と、上条が尋ねる。

……

（土御門、オルソラって誰だ？）

（今月の頭くらいにあった『法の書』騒ぎの時に、カミヤんのフラグメーカーの餌食になったシスターだにやー。）

(なるほど)

上条がオルソラの天然っぷりに苦勞している間、勇斗と土御門が話している、

『では本題なのでございますよ。良く聞いていてください』

と、さっきまでのふわふわした声と違い、芯の通った声で、オルソラは話し始めた。

それを聞いた3人の緊張度が一気に増す。

『英国図書館の記録からわかった事は、クローチエディビエトロ『使徒十字』の使用条件についてなのでございます。……何でも、クローチエディビエトロ『使徒十字』は星座の力を借りて使用される大規模霊装なのだから。その力は、ローマ正教の

誇る10の高位霊装、『聖霊十式』の1つに数えられるほどです。十字架を大地に立てるのは、夜空の光を正確に集め、角度を合わせて星座の光を的確に受け止め、術式に組み込んで魔術的效果を発動させるためでございますね。そして、ここからが最も重要な点でございます。

と、ここで1度、オルソラは言葉を切る。

『………』  
『クローチエディピエトロ使徒十字』は88星座全てを用いて、世界全土で自由に発動することが可能です。』

「「「!?!?!」」」

勇斗と上条と土御門は驚愕で目をむく。

『聖ピエトロ……、英国では聖ピーター、スタンダードでは聖ペテ



口でございますが、彼が殉教したのは6月29日とされているのでございます。当然、バチカンで『クローチエディビエトロ使徒十字』が使われたのは、その直後だったと思います。まあ……ようは、バチカンという地方で使われたのが6月末から7月初めと覚えていただければオッケーなのでございますよ。……あくまで、バチカンという地方ではですが。

』

その言葉に土御門が反応する。

「……バチカンという地方では？」

『はい。歴史上『クローチエディビエトロ使徒十字』が使用されたのは1度きりでございますが、その十字架はバチカン以外の地方でも使用できるように作られていたようでございます。……6月29日に使えるのはバチカン地方のみ。他の場所で使うには、それぞれ対応した日付でなければならぬのでございます。エリア特定と星座の選択に、魔術的・科学的共に、複雑で高度な知識が必要である上、様々な制約が生まれるものの、この方法なら世界のどこであっても、ローマ正教による支配化が可能となるのでございます。』

「ちょっと待って。」

と、勇斗が質問する。

「『クローチエディビエトロ使徒十字』作成のきっかけは、ペテロの死じゃなかったっけ？  
だったらなんで、ペテロが死んだ日時や場所以外でも使えるよう  
になってるんだ？」

「……実はペテロ様は当初、ご自身がどこで殉教すべきか熟考して  
いたらしいのでございます。今日において、ペテロ様の眠る地がロ  
ーマ正教の中心地となっている事からも分かる通り、ご自身の殉教  
地がその後の十字教の歴史に大きく関わると存じていたからと思わ  
れます。……従って、ご自身がバチカン以外の場所でも……ローマ  
正教にとって、より相応しい場所があるならそこを選べるよう、『クローチエディビエトロ  
使徒十字』の使用条件に幅を持たせておくために、生前から霊装を  
準備し、霊装完成の準備を進めていた可能性が高いのでございます。」

「でも……」

と、今度は上条が質問する。

「場所はともかく、日付の方は変えられないんだろ？ で、実際にペテロさんは6月29日に処刑された。ちょうどバチカンで『使徒クローチェ十字架デュービエトロ』が使える日付に。……ってことは、その日に合わせて、わざと捕まっただってことか？」

『……その可能性が高いかと。……どうやら、処刑の瞬間まで、色々と魔術的細工をしていたようですし……』

「ありえない話じゃ……ないにゃー。……おそらく、ペテロは、自分の死が最もローマ正教の為になるタイミングを見計らってたんだろくにゃー。」

土御門は感心半分呆れ半分といった微妙な表情を浮かべて言った。

「……さすが高位霊装だな。由来のすごさが半端ない。」

「だな……。」

イギリス清教2人の話を聞いて、勇斗と上条は驚く。

「…………で、オルソラ。今日……9月19日に日本で『使徒十字』クローチエディビエトロを使う事が出来るポイントってのも、もう分かってんのかにゃー？」

『はい。もちろんなのでございますよ。』

土御門が聞いた言葉に、ふふ、っと笑って、オルソラは返答した。



土御門は携帯電話の通話を切った。

現在時刻は午後5時20分。

「ここまで長かったが、ようやく事態が好転してきたって感じだにやー。このまま上手く進んでくれるとありがたいんだが。」

土御門が指し示した、最後のチェックポイント。

第23学区、鉄身航空技術研究所付属実験空港。

学園都市の航空・宇宙開発分野を一手に担い、トップクラスの警備態勢で守られた場所である第23学区のど真ん中である。

「オリアナがこれまで回ってた天文台ポイントは、みんな警備が手薄な所ばかりだった。実際に足を運んでみてわかったが、警備の少ないエリアから順番にリスクの高いエリアへと向かった。オリアナやリドヴィアは、こっちが思ってる以上に学園都市って場所を警戒してる。てことで、オリアナが警備網で上手く足止め喰らってることを祈って、こっちもさっさと追撃かけるぜい。ヤツらが向かってるのは、事実上ラストの天文台ポイントだ。ここで捕らえて全部終わりだ。」

「ああ。」  
「もちろんだ。」

3人が決意を固めていると、ステイルが走ってこちらにやってきた。

「はあ……。遅れてすまないね……。」

疲れた様子で言うステイルに、土御門は不審そうな目を向けて、

「全く……。どこほつつき歩いてたんだにゃー。」

「いや……。」

歯切れの悪い返事をするステイルを、勇斗と上条が擁護する。

「あー、ステイルは姫神を助けてて大変だったんだよ。慣れない魔術使ってたな。」

「そうそう。そんで小萌先生を大感激させて、たいそう懐かれて困り顔だったんだよ。」



……この場では、明らかに逆効果だが。

「ぶっ！？ ば、馬鹿げた事を言うな！！ 僕は……………」

ステイルは焦ったように弁解するが、光のないにごった目で、土御門は冷たい視線をステイルに向ける

「……………にやー。これがあれか。カミヤン病か。このクソシリアスな時に、人が血まみれなんて必死に探索魔術とか使ってたつてのに、お前はその頃ラブコメ空間満喫中かよ。しかも相手はインデックスじゃなくて小萌先生だし。なんなんだよお前ら。男ならちゃんと一本筋を通せよ。後輩風紀委員ジャッジメント一筋の勇斗を見習えよ。」

「カミヤン病とか言うな。義妹一直線のテメエに何だかんだ言われてもちつとも実感湧かぬーよ。つーか勇斗が後輩一直線つてのに驚

きだよ。」

「まあ確かに気を配ってるっちゃ気を配ってはいるけど。」

「「「このロリコンが」」」

「……予想通りの反応をありがとう。だがステイル以外の2人にはその言葉をそっくりそのままご返却してやるよ。こんにちは同類。」

「なっ!?!? だっ、誰がロリコンだ!」

「いやだって後輩がアウトならお前だって御坂がいる時点でアウトだろ。土御門は……この前自分で言ってたし。」

言い合う3人を見ながら、ステイルは静かにため息をついた。



「……とまあそろそろこんな不毛な争いはやめるか。おい土御門、第23学区って警備きついんだろ。どうするんだ？」

「ああ。今回はおれのエージェントとしての特権を使う。」

「さっきの話をおっさり流せるこいつらは一体……。……………で、特権って？」

「ああ。」

土御門はニヤリと笑って携帯電話を操作して言う。

「学園都市統括理事長って知ってるかじゃー？」

ep.19 9月19日・9 (後書き)

もう9月19日だけで9話分か……

……おそらく、次で終わります!!

e p . 2 0 9 月 1 9 日 - 1 0 ( 前 書 き )

..... 終わりました。

そして展開も無理やり感が..... ^^ ;

第23学区。そこは、学園都市内部に住む人間にとってすらも、あまりなじみのない学区である。

そこは、わずかに丸みを帯びている地平線が、はるか先に広がるのが見えるほど、広く開けている。

その広大な敷地の大半は滑走路やロケットの発射場であり、その平坦な地面が背の高いフェンスでいくつもの区切られている。

建物はかなり巨大だが、その数も少なく、周辺の滑走路のサイズが半端な大きさではないため、正しい大きさが頭で理解できない。



そんな灰色の広大な土地を、勇斗、上条、土御門、ステイルの4人は走っていた。

「しかし……、こんなに楽に侵入できるなんてな。すげーな土御門。」

「はははー。もっとほめるにゃー。」

真剣な表情は崩さずに、土御門は言う。

そんなやり取りを聞いて、ふと勇斗は20分ほど前のやりとりを思い出す。



地下鉄のホームに、列車が入ってくる。

そんななか、土御門は列車に全く目を向けず、勇斗と上条とステイルの方を向いて言った。

「学園都市統括理事長に話をつけて、第23学区の警備配置と警備方法をちよっぴり変えてもらったぜい。その切り替え時の隙をついて入り込むにやー。」

そんな土御門の話を、正確には学園都市統括理事長という言葉聞いて、勇斗は思考の渦に身を落とす。

(……学園都市統括理事長、アレイスター、クロウリー、か。)

勇斗がまだ、第12学区の神学系の学校にいた（あくまで短期間いさせられただけだが）ころ、世界最大の魔術師として、その名前を聞いたことがある気がする。もちろん、教師は魔術なんて存在しないものを研究していた、ただの変人だと言っていたが。

（今月の頭に色々あったらしい『法の書』だって、昔アレイスターⅡクロウリーが聖守護天使エイワスから伝えられたことを書いたものらしいし。）

近代の魔術史に大きな影響を与えた人物、それが、アレイスターⅡクロウリーだ。

（科学サイドのトップでありながら、世界最大の魔術師の名前を名乗る。……一体何を考えてんのかねー。）

さっきの電話では、科学にも魔術にも通じる土御門と対等以上の立場で話しており、世界の相当深い場所に位置する人間だということとは何となく想像がつく。

（ま、そんな人間だからこそその考えつてもあるのかね。何を考え  
てるかはわかんねーけど。）

勇斗はそれ以上考えるのをやめ、土御門の話に意識を戻す。

気づくと、列車はホームに止まっていた。

「……この列車に乗ったら、もう後戻りはできないにゃー。待っているのは、学園都市の命運をかけた戦いだぜい。覚悟は決まったか、勇斗、カミヤん。」

土御門が、勇斗と上条に問いかける。

「そんなのはどうにできてるよ。」

「……ああ。ここで全部終わりにする。」

勇斗と上条はそう言って、電車に乗り込む。

それを聞いて、魔術師2人も乗り込む。

4人の後ろでドアが閉まり、発進した列車は、地下鉄のトンネルを  
23学区に向けて進んでいく。



そんな感じで、23学区についた4人は、広大な飛行場を走っていた。

現在時刻は午後5時40分。

タイムリミットまであと20分から80分。

その時間帯になれば、いつ『クロッチェディベヒエトロ使徒十字』が発動してもおかしくはない。

焦りを感じながら4人は走る。



そして、彼らの前にフェンスの壁が見えてくる。

「よし、ここが目的地だぜいー!!」

土御門はそう言い、フェンスに手足を引っ掛け、一気に飛び越えようとする。

が、そのとき、偶然上条は見つけた。

夕日に照らされて光を反射する、唾液に濡れた2枚の単語帳のペー  
ジを。

そして、上条が声を上げる間もなく、フェンス全体が、高熱でオレンジ色に変色した。

フェンスに両手足をつけていた土御門の体が、電気を浴びたように跳ね、しゅう、という肉が焼ける嫌な音が土御門の手足から聞こえる。

目を固く閉じ、思い切り歯を食いしばり、やけどに苦しむ土御門を見て、勇斗、上条、ステイルの足が止まる。

しかし、フェンスにはさんであつたページは2枚。

オリアナの先制攻撃はまだ終わらない。

突如、虚空に現れた槍が、ステイルめがけて飛ぶ。

「!？」

ステイルはとっさによけるが、その槍がステイルの腕をかすめる。

バチッ!!

という音がして、閃光が走り、ステイルが地面に倒れこむ。

突然のことに勇斗と上条が驚愕していると、

「行け、勇斗、カミヤン……。おれは火傷をくらったし、ステイルは多分、強烈な電撃でやられた……。すぐの復帰は無理だし、ここで時間を食ってる余裕もない。行ってくれ!!」

と、土御門が叫ぶ。

「くっ……!!」

そして、勇斗は視線をフェンスの向こうに向け。

そして見た。

およそ500メートルほど向こう、小さな滑走路を挟んだ向かいの建物の壁に、オリアナが寄りかかっているのを。

彼女の手には、金属リングで束ねられた単語帳があった。

「来るぞ当麻!!」

「分かってる!!」

そう言うと、上条はフェンスを殴りつける。

高熱で赤く輝いていたフェンスから、その熱が失われる。

それを見た上条は、フェンスに手足をかけ飛び越える。

勇斗は能力で生み出した翼をはばたかせて、飛び越える。

同時、オリアナは単語帳のページを口で破り取った。

魔道書の原典が起動し、爆音が勇斗と上条の500メートル先から響いた。

オリアナが生み出した、渦を巻く空気のできた巨大なハンマーが、2人のもとに襲い掛かってくる。

渦巻く強大な圧力が建物をなぎ倒し、アスファルトをめぐりあげながら、飛来する。

「……ふん。強風対決ならまけねーぞ。」

『原典』の発動と共に周囲に満ち始めた魔力、それに呼応するかのよう能力が再び揺らぎだすのを感じ始めながら、勇斗は翼を振るった。

勇斗の翼によって放たれた烈風が、オリアナの空気のハンマーと激突する。

そして、大量の空気をまき散らして、空気のハンマーが霧散し、アスファルトの壁を吹き飛ばす。

「……その翼、マジでどうなってんだ？ めちゃめちゃノイズがかつてるように見えんだけど。」

「……今日が初めてだからよくわかんねー。ただ、さっきも……魔術オリアナ

師と戦ったときもこうなってたし、なんか秘密でもあるのかも、な  
！！」

お返しとばかりに、翼を振るって衝撃波を飛ばす。

砕け散ったアスファルトごと、衝撃波がオリアナへ向けて飛んでいく。

驚きと苛立ちが両方表れた表情で、オリアナが単語帳のページを口で破り取ると、衝撃波とアスファルトの破片がオリアナの左右に弾かれる。

「……やっぱり甘いか。」

「いや、十分すげーだろ。」



そんなことを言い合いながらも走り続けて、2人と1人の距離が縮まっっていく。

3人の激突が始まった。

タイムリミットまで、あと最短で15分。

「んふ、女同士で楽しむのも面白いと思っていたのに。あの聖人は  
やっぱり来ないのかしら。」

勇斗と上条との距離は、約200メートル。

「追加の警備員アンチスキルや増援の魔術師もやって来ない。ふう、ギャラリーが多くても、それはそれで楽しかったのに。」

約150メートル。

「まあいいわ！ 私の相手は科学サイドの奥の手の少年に、不思議な右手を持つてる少年！ 相手にとって、不足は無いわ！！」

あと約100メートル。

愉快そうに叫び、オリアナは単語帳のカードを噛み破った。

ガラスの割れるような澄んだ音が鳴り響き、直後、周囲の音がすべて消える。

「!?!」

「……結果、ってやつか？ ま、関係ないな。」

勇斗と上条は走り続ける。

そして、オリアナが勇斗の翼の間合いに入る。

「行くぞっ!?!」

勇斗は軽く飛び上がり、その勢いも利用して、2本の翼をオリアナに向けて振り下ろした。

鋭い翼がオリアナに迫る。

対してオリアナも、カードを噛み千切って迎撃する。

光でできた壁が展開され、翼とぶつかって火花が散る。

「んふ。やっぱりあなた、なかなかやるわね。」

「……そりゃどうもー!」

と、オリアナの視界から勇斗の姿が一瞬で消える。

驚愕の表情を浮かべ、一瞬動きの止まったオリアナめがけ、拳を握って上条は突っ込む。

同時、背後に回った勇斗は体をひねって蹴りを放とうとする。

先に届くのは上条の右手。

右手が、オリアナの体に触れる。

……と、オリアナの姿が、風船が割れるように弾けた。

「「!?!?」」

「……やっぱり警戒しておいて正解だったわね。そのスピードに。」

驚愕で動きが止まった2人の前に、再びオリアナが現れる。

「……幻術!？」

「んふ、お姉さんに同じ手は通用しないわよ。」

そう言いつと、一瞬で勇斗の懐に潜り込み、掌底で顎を打ち抜く。

一瞬の後、体を翻し、左足の蹴りを勢い良く上条の脇腹へと叩き込む。

「ぐっ!!」

上条の体が真横に吹っ飛び、その体が碎けたアスファルトに叩き付けられる。

「……翼の子のスピードはさっき身をもって体感したからね。悪いけど、対策くらい練っちゃわよ。」

薄く微笑んで、オリアナは言った。

「くっ……」



先の一撃で軽く脳震盪を起こしながらも、勇斗が立ち上がり、続いて、上条が立ち上がる。

2人とも、もう体がふらついている。

「ふふつ。腰が碎けるのが早いわね。それでお姉さんと渡り合おうっていうのは、子供の背伸びも良い所じゃない？」

「だから、どうした。」

ふらつく体で立ち上がり、まだ少し焦点の合っていないような目でオリアナをにらみながら、勇斗は言う。

「お前はここで、おれ達が止める。『使徒十字』クローチエティビエトロ なんぞ使わせない。おれは絶対学園都市じのまちを守る。おれ等の大切な居場所は、渡さねえ！」

言っ、勇斗は翼を槍のように撃ち放つ。

「ちっ!!」

オリアナは横に跳び、2本の翼の槍をかわす。

「……ローマ正教の支配下についてちゃった方がずっと安全だと思うけど？ それに、イギリス清教から何を吹き込まれたかは知らないけど、『使徒十字』クローチエティビエトロ は、人と世の幸せを『最も都合が良いように』組み替えるもの。もしかしたら世界中の人々を幸せに導くかもしれないのよ？ もちろん、学園都市の人達だって例外じゃないのよ？」

「お前らにとつてだけ都合がいい、捻じ曲げられた幸せなんぞ願ひ下げだ。」

と、勇斗は即答する。

「自分たちの居場所くらい自分たちで守るし、自分たちの幸福くらい自分たちで見つけてみせる!!」

今度は、その翼を横薙ぎに振るう。

「くっ……!!」

オリアナは単語帳から一枚のカードを噛み取り、魔術を発動する。

魔力の通ったアスファルトが隆起し、翼が受け止められる。

だが同時に上条が真正面から突っ込む。

オリアナはとつさに腕をクロスさせてガードの体勢をとるが、そのガードの上に、上条の全体重の乗った右拳が叩き付けられる。

387

「ぐっ……！？」

衝撃を逃がす暇がなく、オリアナの両腕に鈍い痛みと振動が伝わる。

「……おれだって言わせてもらっけどな」

そう、上条は言う。

「……なんでテメエらみたいな魔術師ごときに大覇星祭を潰されなくちやなんねーんだよ。」

5本の指に力が入り、拳がさらに強く握りしめられる。

「科学と魔術のバランスだの、テメエらの面子だのなんだのは正直どうだっていい。伝説の霊装だ？ そんなもんでごまかしてんじゃねえよ。……テメエらの勝手な行動でこの祭りが潰されること。そして、テメエが傷つけたやつらにまだ魔術を使おうとしていること。おれが許せねえのはそこなんだ。」

と、そこで上条は言葉を切って、

「……だから、テメエのふざけた幻想は、……おれ達がここで全部ぶち殺す!!」

そう強く言い切った。

赤から紫に変わりつつあり、一番星が瞬き始めた空の下。

3人が再び動き出す。

再び上条は、正面からオリアナへと突っ込む。

対してオリアナは単語帳のページを口で破り、魔術を発動させる。

青白い炎が吹き上がり、いくつもの炎の剣ができる。

そしてオリアナは、それを上条に向けて放った。

上条の右手だけでは対処できない量の炎剣。

しかしそれは、勇斗の翼の一振りで消し飛ばされた。



(また術式の魔力以上の『力』で消し飛ばされた……。いつたい、どうなっせ)

思考の渦に陥ったオリアナを、上条の声が強制的に引き戻す。

「うおおおおお!!」

「!?!」

気づくと、上条はもう目前まで迫っていた。

とっさに、拳が当たる直前、オリアナは足で、上条の片足を内から外へと大きく払い、上条のバランスを崩させた。

「おわっ!?!」

「ふふ。なめてかかっちゃだめよ。」

バランスを崩して膝をつく上条、その無防備にさらされた頭に、オリアナはカウンターを叩き込もうとする。

が、

「させるかよ!?!」

と、オリアナの右側に瞬時に移動した勇斗が、強烈な蹴りを放った。

「がつ……？」

わき腹を強<sup>したた</sup>かに打ち据えられたオリアナが吹っ飛んだ。

「……サンキュー。」

心の底から安堵したように、上条はじぶせく。

「気にすんな。……油断すんなよ。」

そう、勇斗は返す。

その前方で、オリアナがゆっくりと立ち上がる。

「……さっき、……あなた達、言ってたわよね。」

言いながら、一歩一歩オリアナは近づいてくる。

「自分たちが負けられない理由を。」

勇斗と上条は、オリアナが近づくにつれ、空気が凍っていくような気がした。

「そんなもの、私にだってあるの。」

場の空気を、オリアナが支配していく。

「絶対に負けられない理由……止まれない理由が!!」

痣だらけで、所々に擦り傷を負いながらも、目には強い意志の力が  
浮かぶ。

「B a s i s 1 0 0 4礎を担いし者!!」



その言葉を聞いて、勇斗と上条の体に緊張が走る。

魔法名。

魔術師が、戦闘で魔術を行使するときの名乗る名前。

それは、一部の魔術師にとっては『殺し名』であり、自身の覚悟、信条を表すことと同義だ。

「……………」  
「……」  
「……」  
「……」



「……みたい、だな。」

2人が構えを取る。

が、その瞬間

オリアナが恐るべき速度で上条の懐に突っ込む。

「な……ッ!!」

回避も防御も許さないスピードで上条の至近距離に迫ったオリアナは、単語帳のページを口で破り、その手で上条の腹から胸を撫で上げた。

その直後。

オリアナの手が触れた場所から空気が吹き荒れ、

ポツ！！

という鈍い音を上げながら、上条の体が鳩尾みぞおちを中心に突き上げられる。

そしてそのまま、オリアナは宙に浮いた上条の鳩尾を、拳で打ち抜いた。

「じ、がつ……!？」

その一撃で3メートル以上吹っ飛んだ上条には目もくれず、勇斗の方をむいたオリアナは再び単語帳のページを破り取る。

巨大な黒い、影を固めてできたような槍が打ち出される。

「!?! ……何度やっても同じだ!?!」

そう言って、勇斗は翼を振るう。

原理や正体すらいまだに曖昧な力が、その槍を吹き飛ばす。

「……やっぱり出力じゃかなわないわね。」

無表情にオリアナは告げる。

「でもね、……力でかなわないなら数で押すわよ!!」

「!?!」

気づくと、勇斗の周囲、全方位を、黒いカケラが漂っている。

そしてそれらが、一斉に勇斗に向かって放たれる。

「ちっ！！」

消しきれないと判断した勇斗は、とっさに飛び上がるが

「！！………ホーミング追尾型！？」

飛び上がる勇斗を追いかけて飛ぶカケラが、勇斗に直撃した。

「ぐあっ！！」

とっさに振るった翼で7割のカケラは吹き飛ばしたものの、残り3割のカケラと、落下によるダメージが勇斗を襲う。

「……………油断なんかしてたら、死んじゃうわよ。」

そう、オリアナは皮肉めいた笑みを浮かべながら言う。

そのオリアナをにらみつけながら、勇斗と上条は立ち上がった。

その2人のもとへ、オリアナが向かってくる。

無造作に見えてその実、全く死角のない動きで。

「あ、それともう一つ。」

楽しげに、オリアナは言う。

「……何だよ。」

と、勇斗は返す。

「……高速移動は君だけの専売特許じゃないのよ？」

「……」

何かの光が閃く。

勇斗がそう思った時には既に、斬られていた。

オリアナが生み出した氷の剣で、左肩から右のわき腹まで、袈裟懸けに。

「ぐ、ああああああ!？」

倒れこんだ勇斗と、それを見て動けずにいる上条にむけ、オリアナは言う。

「……殺しはしないけどね。 ああ、そういえば。 高位の魔術師で、体術とかの戦闘術を極めてる人たちだったら、音速を超えて動くのなんて、難しいことじゃないの。 ま、……君たちが言った聖<sup>カンザ</sup>人が来るっていうハツタリが、役に立ったのよね。 これだって、対聖人用に考案した術の1つなんだから。」



鮮血を流す勇斗を見ても、オリアナは表情を変えない。

むしろ楽しげに、声が響いた

戦いを続ける、2人の足音がする。

上条を排除しようと、オリアナが魔術を放つ音がする。

その魔術を、上条が『殺す』音がする。

オリアナが、飄々と話す声がする。

上条の怒号が聞こえてくる。

地面に倒れる勇斗は、学園都市の運命をかけた戦いの音を聞いていた。

もちろん、勇斗は何もしようとしなかったわけではない。

だが、

（痛みで、……まともに演算ができない。）

左肩から右のわき腹にかけて走る激痛が、勇斗から立ち上がる力と、能力を使う余裕を奪う。

(……でも、アイツは1人で戦ってたんだ。右手に宿る、不思議な能力だけで。)

勇斗は拳を握りしめる

(おれだって、こんなところで寝てる場合じゃないだろ!!)

だが、その意識に逆らって、体は動かず、だんだんと意識が薄れてゆく。

(くそっ……!! どんじりかなんねえのかよ!?)

……そんなとき、勇斗は気づいた。

自分の中のゆらぎが、どんどん大きくなっていることに。

(……これは、一体なんなんだ?)

勇斗は頭に疑問符を浮かべる。

が、その間にもどんどんゆらぎは大きくなっていく。

……あたかも、何かが抑圧から抜け出そうとしているかのようだ。

(……………これは、いったい……………)

そこまで考えが及んだ時、勇斗は薄れゆく意識の隅で、上条が地面に倒れ伏すのが見えた。

そこまで見た見た勇斗は、意識を手放す。

無意識に、ゆらぎの中に身をゆだねながら。



残る全てのページを解き放ち、上条を撃破したオリアナは、誰ともなしにつぶやいていた。

「……これで、お姉さんの願いがかなう。」

オリアナはそう言って、その場を立ち去ろうと歩き出した。

……だが、その後方で、力が渦巻き始めるのを、彼女は感じた。

「……？」

彼女が後ろを振り返ると、そこには翼を背に出現させ、立ち上がった



ている勇斗がいた。

依然として血は流れ続け、顔はうつむいていて見えない。

「……まだやるの？」

そう問いかけるオリアナの声に、しかし勇斗は一切の反応を返さない。

ただ、代わりに答えてでもいるかのように、翼のノイズがひどくなっていく。

そして、そのたびに強くなっていく『力』。

「チツ……………!! やっぱり殺しちゃうべきだったかしら!？」

そう言って、拳を握り、勇斗に向かうオリアナ。

……………その目で、勇斗の背中が弾け飛んだ。

「くっ!？」

その余波で吹き飛ばされる、オリアナ。

地を転がされ、それから立ち上がる。

……そして顔を上げ、彼女は驚愕する。

それは、瀕死に近かった勇斗が立ち上がったことではなく、

体に負ったはずの傷が消えていることについてもない。

「……何なの？」

オリアナは目の前の光景を受け入れられないといった様子でつぶやく。

「一体何なの？」

.....

「.....その水晶の翼と、金色の輪っかは？」

e p . 2 0 9 月 1 9 日 - 1 0 ( 後 書 き )

次こそ、次こそ終わらせる!!

.....はず

e p . 2 1 9 月 1 9 日 - 1 1 ( 前 書 き )

やっと9月19日編終了!!

みなさんお待たせいたしました^^;

そして気づいたらpv50000、ユニーク6000超え!!

みなさん、この駄文を見てくださってありがとうございます。

オリアナの数メートル先、そこに立つ……否、30センチほど宙に浮かぶ勇斗の背には、これまでの白い光の翼ではなく、青っぽい鋭い光を放つ、水晶でできているような鋭利な翼が、頭上には、金色に光る輪が出現していた。

その姿はまるで天使のようであり、勇斗から感じられる力の量も、天使と呼ばれるに足る、膨大な量だった。

勇斗のその姿を見て、オリアナは言葉を失う。

そして今、オリアナは気づいた。

あの、翼のノイズから感じられた、正体不明の力。

……あれは確かに天使テレズマの力だった。

だがそれは、オリアナがよく知るテレズマではなかった。

オリアナにはよくわからない、『謎』の力によって干渉を受けており、既存のものとは全く異なるものになっている。

それだけではない。

オリアナが感知したテレズマは、現代魔術でよく扱われる、『神ウリの火』・『神ラファエルの薬』・『神ガブリエルの力』・『神ミカエルの如き者』に対応するもので



はなかった。

「……………まさか、……………これは」

そのテレズマは、かつて、神の右側に座する天使であったが後に反逆し、天使の3分の1を率いて神に逆らったことで、天界より墮ちたとされる大天使に対応するもの。

『明けの明星』の名を冠し、墮天使とされながらも、人間に光を与えた者として崇拜されることもある存在。

「……………これは……………、ルシフェル光を掲げる者……………?」



上条は立ち上がることができずにいた。

オリアナから受けた最後の攻撃のダメージのせいではなく、場を支配する、圧倒的な雰囲気だ。

(あれが……)

8月の終わり、『エンゼルフォール御使墮し』の時と、似た感覚を、上条は覚える。

胃袋に石を詰め込んだような感覚、呼吸は乱れ、心臓は早鐘を打つ。

その威圧感、存在感。

あの時の『ガブリエル神の力』と比べれば、まだまだ弱いが、それでもあの天使と同質のものを上条は感じる。

（あれが、勇斗の本当の力……！？）

なぜ勇斗がこんな魔術的な力を持っているのか。

なぜ学園都市の能力者が、こんな魔術的な力を振るっているのか。

気になることはいくらでもある。

聞きたいことはいくらでもある。

しかし、上条は答えを知らないし、その場のだれもがその問いに対する答えを持ってはいない。

ただただ、てんし勇斗が、そこに君臨するという事象だけが、たつち確固たる事  
実だった。

「……………どうやら、覚醒しちゃったみたいだにゃー……………」

少し離れた場所で、土御門は呟いた。

その場所にも『天使』が発する圧倒的な力、威圧感、存在感は伝わってくる。

「……………オリアナが原典任せにめちゃくちゃ強力な結界張ってくれたおかげで、外部に漏れてないのは助かったにゃー。もし漏れてたら今頃禁書目録は大騒ぎしてどうやってでもこっちに来ようとしてただらうからにゃー。」

と、土御門は安堵の息を吐く。

「それにしても、……………力の質は『光を掲げるもの』<sup>ルシフェル</sup>、か。……………アレイスターの奴、魔術サイドに……………、いや、十字教にケンカ売る気満々じゃねーかにゃー。」

苦笑しながら言っが、実際問題、ばれてしまえば相当まずいだらうと土御門は思っ。

科学サイドの人間がテレズマを、しかも、墮天使の力を使っ。

（特にローマ正教あたり人間だったら、ぶちぎれて学園都市に乗り込んでくるぐらいするんじゃないかねーかにゃー？）

そうなれば、待っているのは壮絶なお仕事タイム。

自分の目的は、舞夏のいる学園都市を守ることなのだから。

（全く……………、先が思いやられるにゃー。）





そんな中、勇斗が動いた。

うつむいていた顔を上げ、まっすぐにオリアナを見る。

「.....」  
「b f s h l d v g h e o v b f j o v j f v b i l .....」  
「.....」

聞き取れない、謎の言葉をつぶやいて、ゆっくりと右手を上げていく。

オリアナはそれを見て、いや、それと同時に高まっていくなりの魔力のうねりを感じて我に返った。

(これは……………、まずい!…!)

オリアナはあわてて、保険として持っていた、1枚の防御術式のカードを発動させる。

同時、勇斗の手が空に向く。

そして、

光が降り注いだ。



音が炸裂し、閃光が走る。

全てが収まったとき、勇斗の前方、150メートルの範囲が、半円形に破壊しつくされていた。

ただ、オリアナが立っていた場所だけが、破壊を免れている。

(くっ……。原典で防御したとはいえ、ここまでダメージを負うなんて……。今の出力は、並の、魔術師なら、一瞬で、消し飛んでる……。)

そして、オリアナは意識を失い、倒れた。

それを見ている勇斗の背中から翼が溶けるように消えていく。

同時に、頭上の輪っかもだんだんと透けていく。

その勇斗の後ろから、上条の声がした。

「……………勇斗。大丈夫か？」

勇斗は振り返ってそれにこたえる。

「……………c r s f あ n j o i i あ。何と c j i o h u r e i な。」

「……………わりい。今、何て言った？」

勇斗はそう言われると、翼と輪っかが完全に消えるのを待って、口を開いた。

「ああ、何とかな。って言った。」

「そ、そうか。……………で、今のは何だったんだ？」



「……………わかんねえ。ただ、おれがなんかの力を使ったのは覚えてる。天使みたいな姿になったのもな。……………ぐあっ!？」

そこまで答えたとき、強烈な頭痛が勇斗の体を襲った。

「!?!? だ、大丈夫か!?!？」

「……………やばい、かも」

頭痛と同時に、体全体をだるさが襲う。

「わりい……………。任せた……………」

そう言って、勇斗は意識を手放した。



「……………、ここは……………、病院、か。」

勇斗が目を覚ますと、そこは第7学区の病院だった。

外は暗く、もう深夜のようだ。

鈍く痛む頭に気をつかいながら体を起こして、時計を見ると、時刻は1時30分。

オリアナとの戦いからはだいぶ経っている。

「……………！！　　そういえば、『クロウチヒデキヒツアロ使徒十字』はどうなったんだ？」

全く情報がない。

自分がオリアナを倒したのは覚えている。

しかし、そのあとどうなったのか。

と、混乱している勇斗のもとへ、1人の来客があった。

「どつせら、目が覚めたみたいだね。」

「！……………先生。」

それは、上条がよくお世話になっている、カエル顔の医者だった。

「さて、いくつか話しておくことがあるから、よく聞いてほしいんだがね。」

そう言って一旦言葉を切つて、

「まず一つ目、君の友人たち、……………上条君と金髪の彼と長身の英国人からの伝言だが、『万事解決！』だそうだ。また何かの事件に首突っ込んでみたいだね？ 君たちは。」

「いやー……………、ははは。」

「……………気を付けないと君まで病院マスターになってしまいそうだね。」

呆れたように少し笑って、続ける。

「そして2つ目、君の症状についてだ。どうやら慣れない量の演算をこなして脳に負担がかかってたみたいだね。まあそこまでひどいものじゃあなかったからよく寝れば治るだろう。ま、安静のため明日……………いや、今日か。今日一日は能力の使用を控えるように。」

「……………はい。わかりました。」

「ま、普通に散歩するのは問題ないからね。君………君たちが守った大覇星祭をめでいいっぱい楽しむといい。」

「……………はい。」

一体どこまでこの人は知っているのだろうか。

思わず苦笑いを勇斗は浮かべる。

「さて、そして3つ目だが……………」

と言ってカエル顔の医者には部屋の出口に向かっていき、

「そこの彼女にもちゃんとお礼を言ってあげるんだよ?」

と言って、部屋を出て行った。



「その彼女？」

勇斗はポカンとした表情を浮かべると、あたりを見回す。

……すると、ベッドの縁、ベッド脇の椅子に腰かけ、上半身を  
ベッドに乗り上げる形で眠る、初春がいた。

どうやら見舞いに来てくれていたようだが、昼間の疲れと眠気に負  
けてしまったらしい。

「見舞い、来てくれたのか。」

自分の身を案じてくれる初春の行動が嬉しくて、勇斗は初春の頭を  
撫でる。

「サankyū！」

もう夜も遅く、初春を起こすのはかわいそうだったので、これ以上は朝に持ち越すことにして、勇斗は再び眠りはじめた。

第7学区、窓のないビル内部

昼も夜も問わず、モニターや計器類の光があふれ続けるこの建物にある生命維持槽のビーカーの中で、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、アレキスター、クロウリー

は口元に笑みを浮かべていた。

「ハイブリッド。『似て非なる他者の境界を超える者』。演算によつてテレズマを操り、非科学的法則に基づいてAIM拡散力場に干渉をかける、科学と魔術の境を超える者。……やはり、素晴らしいな。」

心の底から愉快そうに、彼は言う。

「君の研究は、プランに縛られる私の人生のいい気晴らしだよ。」

アレイスターの進めるプランにおいて、勇斗の位置づけは、いい気晴らし。

もちろん、プランに組み込む気も満々なのだが。

科学と魔術の境を越える勇斗の力、それをうまく利用、解析すれば、虚数学区の制御可能化を早められるのではないかと、アレイスターは考えていた。

「……………まあ、まだまだ『光ルシフェルを掲げる者』のテレズマの演算統制には苦勞しているようだが……………。これからどんどん慣れていってもらわなければな。繰り返し繰り返し、反復作業が勉強の基本だろつ。フッフ……………」

そして朝、勇斗は目を覚ました。

上半身をベッドから起こし、周囲を見回す。

深夜、ベッドの端で寝ていた初春の姿は無い。

どこに行ったのだろうかときよろきよろ見回していると、入り口の  
スライド式のドアが開いた。

前髪の前がかすかに濡れ、タオルを持ち、何より、いつもの花飾り  
を外した初春だった。

どうやら、顔を洗いに行っていたようだ。

「おう、おはよう初春。」

「！ 勇斗先輩!？」

と、とても驚いた声を上げた。

「昨日は心配かけたな。悪かった。ごめん。」

「……………ほんとですよ。どれだけ心配したと思ってるんですか！」

初春は少しほほを膨らませて言う。

「ごめんごめん。あと、ありがとな初春。お見舞い来てくれて。」



が、勇斗が素直にそう言っていると、ふふつと微笑んで、

「どういたしまして、ですね」

と言った。

「さて、そついや今日も見回りあったよな。」

「はい。今日の担当は第7学区北側で11時から13時です。」

「……よし、お詫びとお礼を兼ねて昼ご飯は馳走するよ。楽しみにしてくれ。」

「ホントですか!?! ありがとうございます」

「いやいや、気にすることないさ。よし、先生呼んでさっさと退院するか。」

「はい!」

そう言って、勇斗は立ち上がった。

自分たちが守り抜いた平和を実感しながら。

(……………ま、まだまだ謎はいっぱい残ってんだけどな)

昨日の顛末や、クロウチエディビエトロ使徒十字の行方はもちろん、1番は自分の能力について。

自分が振るった力の正体とか。

テレズマではないかと目星をつけているが、確証はない。

(ま、考えててもわかんないし、後で土御門に聞いてみよう。)

そうやって思考を放棄し、<sup>まろみやげ</sup>勇斗は退院の手続きをするために早足でカエル医者のもとへと向かう。

大覇星祭でやりたいことは、まだまだいっぱい残っている。

勇斗はさらに早足になる。

さっさと祭りを楽しもうと、病院を出るために。



e p . 2 1 9 月 1 9 日 - 1 1 ( 後 書 き )

大覇星祭自体は、あと10r2話ほど続きます。

ご了承くださいませ^^;

設定資料2（前書き）

設定というか……………

短い短い補足です^^；



## 設定資料2

勇斗の能力について

9月19日、オリアナとの戦闘中に、能力に『ゆらぎ』が発生する。その『ゆらぎ』が発生している間は、魔術を、“術式を構成している魔力ごと吹き飛ばす”という形で、無効化できる。

実はこのゆらぎとは、勇斗の体に内包された『光を掲げるもの』のテレズマであり、このテレズマを

翼をはたかせて生んだ風に乗せ、飛ばしていた。

しかし、このテレズマは、何らかの力の干渉を受けており、既存のテレズマとはだいぶ異なっている。

”術式を構成している魔力ごと吹き飛ばす”というのは、ある量の水を大量の水で押し流すのに近い。

アレイスターからは”ハイブリッド”と呼ばれ、『似て非なる他者の境界を超える者』。演算によってテレズマを操り、非科学的法則に基づいてAIM拡散力場に干渉をかける、科学と魔術の境を超える者、と称される。



ep・22 9月20 - 25日：大覇星祭Other Days(前書き)

遅くなりました^^；

バイトの準備の息抜きで書いてたつもりが……

全部書いちゃいましたwww

読んでいただければ、報われる思いです^^；

9月20日。

カエル顔の医者に退院の許可をもらった勇斗は、初春と一旦別れ、クラスの方に合流した。

上条は頭や腕などに包帯を巻いていたが、元気そうにしている。

土御門も少し疲れたような顔をしているが、上条たちと騒いでいた。

(……………やけど負ってた割には元気そうじゃねえか土御門)

他のクラスメイトに聞かれてはまずいため、勇斗は小声で土御門に話しかける。

（おお、勇斗か。いやー、これでも一晩中肉体再生オトリバース使い続けて頭疲れてるんですたい）

（ああ。表情見たら疲れてんのはよくわかった。）

（……………全く、演算ってのは苦手だにゃー。）

（しゃーねーだろ。）

（おっしゃる通りで。ところどころ……………勇斗、後で昨日のことたじ

いて伝えておきたい。時間とれるか？ …………… そうだな、昼休みとか大丈夫かにはー？)

(あー、悪い。昼はジャッジメントの見回りで抜けるぞ。)

(……………一応聞いておく。誰と見回りだ？)

(あー。……………初春だが)

(……………やっぱりか。……………ようこそこちらの世界に、勇斗。………いや、ロリコン。)

(……………テメエ、そろそろいい加減にしやがれ。そしてその不名誉なあだ名をやめろ！！)

声を抑えて、だがしかし、強く握った拳で、勇斗は土御門につっこみを入れた。

「ぐぼあー!？」

割とマジな勢いで、土御門は飛んで行った。

「おはよう当麻。」

「おはよう勇斗……………あいつ何したんだ?」

苦笑いしながら上条は土御門を指さす。

「うーん……、ま、いつものことじゃん？」

「ま、確かに。」

「だろ。……ま、土御門の事は置いて、さっさと今日の競技の準備しよつぜ。」

「ああ。えーっと、今日は。」

「騎馬戦の予選だな。」

「……………復活早々上条さんは身の危険を感じます……………」





という上条の言葉とは裏腹に、珍しく『不幸』は起こらず、無事に騎馬戦は終了した。（勇斗達、win!）

昨日の無気力はどこへやら、テンションが上がり、優勝したかのように騒ぐ同級生を苦笑いで見ながら、勇斗は見回りに向かう。

その後ろで、吹寄の怒声と、頭が頭を打つ鈍い音が聞こえたがスル  
ーした。

「お疲れ様です、勇斗先輩。

体調は大丈夫ですか？」

「うん、問題ない。ありがとう初春。」

初春と合流した勇斗はそんなやりとりをかわして、見回りへ出発した。

その後、特に変わったこともなく平和な雑談の時間だった仕事を終えて、2人は第7学区のレストランへと向かった。

「よくここに、御坂さんと白井さんと佐天さんの4人で来るんですよ。それで、ずっと食べたいと思ってたパフェがあつて……」

「今日はおれのおごりだから、何でも頼んでくれていいよ。」

「ホントにいいんですか!？」 ああ………、ついに、ついにあの

憧れのビッグパフェが……………!!」

初春がうつとりした視線を向ける先、見れば、高さ30センチほどありそうな、というか、バケツパフェとでも言いそうな、巨大パフェが鎮座している。

「いつもだとちょっと贅沢になっちゃって食べられなかったんですけど……………今日はお言葉に甘えちゃいますね」

満面の笑みを浮かべた初春に、勇斗は引きずられていった。

昼食を済ませ、午後の競技に向かった初春と、勇斗は別れる。

すると、ちよつとそこに土御門から電話が入る。

「おーす勇斗。さっきは、お楽しみでしたね！」

何も言わず、勇斗は電話を切った。

再び携帯電話が鳴る。

「……………デメエ。」

「悪い悪い。それで用件なんだがな、今から時間大丈夫か？ 昨日の事だ。お前に関わることもあるから、なるべく早く話しておきた

「いんだが。」

「流しやがった……………。まあいいや。大丈夫だ。ちょうど俺もいろいろと聞いこうと思ってたし。どこに行くといい？」

「んー……………、じゃあ第7学区第2公園でいいか？」

「おう。ちょうど今近くにいますから、すぐ行くよ。」

「了解だにやー。」

そう言って切れた携帯をポケットにしまい、勇斗は公園に向かう。

途中、自販機でコーヒーを買って、公園のベンチに座って一服する。



そうやって土御門を待つ間、先程のレストランでの光景を思い返した。

ドン、とテーブルを揺らして、置かれる巨大パフェ。

実物を目の前にして若干顔が引きつる勇斗の前で、キラキラした瞳でそれを食べ始める初春。

すごくおいしそうに食べてくれて、おごった甲斐もあるというものだった。

（あそこまで嬉しそうにしてくれると、またおごってやるつもりで気分になるね）

そんなこんなで勇斗が5分ほど座っていると、公園の入り口に例の金髪グラサンの姿が見えた。

「おう、勇斗。待ったかにゃー？」

「まあ少しはな。……………ほら」

さっき一本多めに買っておいだ缶コーヒーを土御門に放り投げる。

「っと、サンキュー。」

そう言ってコーヒーを受け取った土御門は、缶を開け、コーヒーを1口のみこむと、表情を真面目なものに変えた。

「……………さて、それじゃあ昨日の事について話そうか。」

「ああ、お願いしますよ。」

「じゃあまず使徒十字クローチエディビエトロについてだ。結果として、霊装が発動することとは無かった。ナイトパレードの花火が丁度霊装の発動時間に当たってな。お前も学園都市に結構いるからわかると思うが、あの光量だ。夜空の星の光なんざ全然見えなかったぜい。後はカミヤんから連絡をもらったおれと、意識を取り戻したステイルがリドヴィアの居場所を探させた。で、いろいろあって、使徒十字クローチエディビエトロは必要悪の教会スの方で回収完了したにやー。」

「……………オーケー把握。オリアナとリドヴィアは？」

「そつちも必要悪ネセサリウスの教会で回収済みですたい。」

「なるほど。」

「……………で、どっちかって言つとこの話はまあどうでもいい。重要なのはもう片方の話だ。……………勇斗、お前の能力についてだな。」

「……………おれもぜひそれが聞きたかったんだ。頼む。」

「了解だにゃー。まず、……………勇斗、お前、頭上の輪つかと水晶みたいな翼を覚えてるか？」

「……………ああ。ぼんやりとだけだな。」

「あの現象を引き起こしたのは、お前の体に内包された天使テレズマの力だ。それも現代で言われてる四大天使のものじゃない。ずっと昔、天より墮ちたとされる大天使……………ルンフェル光を掲げる者に対応してる。」

「……………やっぱりテレズマだったか。そんな気はしてたけど。」

そう言って、勇斗は言葉を切った。

「けど、何でおれは能力者なのにテレズマを扱えるんだ？ 普通ならお前みたいに拒否反応が出るんじゃないのか？」

「……………そこはまだよくわかってないにゃー。だがとりあえず言えることは、昨日勇斗が振るってた力はテレズマだつてことだにゃー。」

「そうか。……………しかもそのテレズマは墮天使のもんだと。」

「そつだにゃー。……………科学の街にいる能力者が、どんな原理かは知らないが、魔術側の力を使い、おまけにそれは墮天使の力だつた……………。まあ……………お前が光ルシフェルを掲げる者の力を振るつたのを知っているのは、オレとオリアナくらいのもんなだかな。それが魔術サイドの人間に知られちまうのはかなりまずい。ケンカ売つてのようなもんだからな。ただ、それが魔術サイドにはれようがばれまいが、ローマ正教からすれば、学園都市の能力者に自分たちが敗北したという事実だけで、学園都市ユニコに攻め込む口実にもなりかね

ない。」

と、一口コーヒを飲んで、話を続ける。

「お前は不可抗力とはいえ、力を振るって、ローマ正教の魔術師を追い払った。その報復を狙って、この街にやってくる魔術師たちと、下手すると殺し合いになるかもしれない。その覚悟があるか、聞きたいんだ。」

そう、土御門は言つと、じっと勇斗の目を覗き込んで、続けた。

「逃げ出すのも構わない。オレがどうにかしてお前の生活は保障しよう。戦うのも構わない。お前にはそれができる力があるだろう。」

そう言つて、今度は本当に黙り込んだ。

勇斗は考える。

自分がどうすべきなのか、どうしたいのか。

いや、そんなのは考えるまでもない。

勇斗は口を開く。

「戦つよ。」

意志を込めて、土御門の目をまっすぐ見て、言う。

「戦う。」

「……………ホントに、いいのにかにゃー？ 待ってるのは……………そうだな、カミヤン以上の厳しい生活かもしれないがいいのか？ 命の危機に、何度も何度もさらされる。それでいいのか？」

土御門はそう言うが、勇斗の意思は変わらない。

「ああ、やってやる。いつかどうせまた上条がどっかでいろいろやってるから、学園都市が狙われる事になるんだろ。おれはこの街を守りたい。だから、戦う。ただ、その立ち位置が風紀委員で収まるのか、お前や当麻と同じように科学と魔術の狭間になるか、それだけだ。」



勇斗の意思は強く、それがわかったからこそ、土御門も短く言葉を返す。

「……………わかったにゃー。なら、がんばろうぜい。」

「ああ。」

勇斗は残ったコーヒーを、一気に飲みほして言う。

「死力を尽くしてやらせてもらおうよ。」

「ふっ、頼んだぞ。」

決意を新たにして、勇斗と土御門は次の競技会場へと向かった。



9月25日。

学校対抗順位で、勇斗達の高校が常盤台中にコテンパンにされて上条が涙目になったり、能力者同士の場外乱闘を、勇斗と、退院した白井が鉄拳制裁で止めたり、上条がいつも通りのラッキースケベ的ハプニングを起こしたり、初春に誘われてフォークダンスを踊る勇斗の横で、御坂と踊ってた上条が白井と追いかけてここを始めて、キレた御坂が電撃をまき散らしながら白井を捕まえるのを笑いながら観賞したりしながら迎えた、大覇星祭最終日。

この日、勇斗達は競技が無かったので、勇斗、上条、インデックスは、閉会式まで屋台巡りをすることにした。

財政難にあえぐ上条家計をかんがみて、勇斗がインデックスに食べ物を与えていたのだが、インデックスの食欲はいつも通り凄まじく、勇斗の財布から、樋口一葉さんが1人お引越してしまった。

そんな犠牲を払ってインデックスを満足させ、3人が歩いていると、視界にベニヤ板と角材と釘で作ったいかにもお手製の屋台が入ってきた。

店番をしているのは霧ヶ丘女学院というお嬢様学校の女子高生だ。

「おー。当麻、これ『来場者数ナンバーズ』じゃねーか。結果見てもったらいいんじゃないか？」

「あー、だな。」

そう言っつて上条が受付に近づいていく。

「？　ねーねーゆうと。　『らいじょうしゃすうなんばーず』って何？」

「んー、まあ宝くじみたいなもんかなー？　大覇星祭中の総来場者数を予想して、紙に数字を書いて受付の人に渡すんだ。で、祭りの最終日の10時までの総来場者数と予想した数が近い人には豪華賞品プレゼント、みたいなやつ。」

「ふーん。じゃあとうまは多分だめだね。」

「多分n「えー、来場者数ナンバーズの結果、あなたの指定数字は見事ドンピシャー！！　1等賞です！！　賞品は北イタリア五泊七日のペア旅行です！！　おめでとぅございます！！」……………まじか

よっ！！??？」

「え！！??？ どうしようゆつと！！ なんか天変地異でも起こる気がするんだよー！」

「おれも激しく同意だインデックス！」

しかし、後ろで叫ぶ2人と違い、上条は落ち着いていた。

ガランガラン鳴り響くハンドベルの音を、呆然とした様子で聞いている。

そんな上条に向けて、半袖Tシャツ、赤いスパッツという姿のスポーツ少女なお嬢様は、屋台のカウンターの下にある物置スペースから大きな封筒を取り出して言った。

「本来は学生向けではなかったんですが、大覇星祭終了後の振り替え休日期間を利用して参加するプランです。旅行に関しての詳しい日程、観光予定、必要書類などは全てこちらにありますので、後で目を通しておいってください。なお質問がある場合は当女学院ではなく、ツアー担当の旅行代理店の方をお願いします。」

と、営業スマイルの少女から封筒を渡される上条。

が、上条は両手を組むと、首を傾げて、

「あー、ちょっと聞いても良いですか？」

と言った。

「旅行に関する詳しいご質問にはお答えできない場合があります。それでもよろしいなら。」

「1等賞って、あの1等賞ですよね」

( (……………え?) )

予想斜め上の質問で、勇斗とインデックスの目が点になった。

「……………ご質問の意味が分かりかねますが」

「一番運の良い人が当たるあの賞なんですよねッ!？」

「ええと、もう行っても良いですか」

「いや待った!! これは北イタリアの旅なんですよね？」



「これぐらいなら答えられるので答えますけど、書面にそう書いてあると思うのですが」

「気がついたら飛行機が得体の知れない科学宗教の私設空港に向かっていたりとかつていう壮絶展開はありませんよね？」

「……あ、分かった。もしかして海外旅行はこれが初めてですか？」

「いや、そう言われればそうなんだけどさあ……！」

「とにかく2等賞以下の発表がありますので、質問は旅行代理店の方をお願いします」

「あつ、ちよつと！ いやおれも分かってるよ、十中八九そんなイレギュラーは起きないって事ぐらい！ でもなんかありそうじゃね？ 飛行機がいきなりハイジャック犯に乗っ取られたり、目を覚ましたらそこは南極のど真ん中だったりとか！ 分かってるよ考えす

ぎだつて事ぐらいでもなんか落とし穴がありそうな気がするけどこ  
れ本当にペアで北イタリアに行けるんだよな！？　ねえってば！！」

上条がそこまで行ったところで勇斗が上条を強制回収。

店番をしていた女の子に「連れが迷惑をかけましたー！！」と言  
い残して、ダッシュで逃げた。

「……お前、テンパリすぎ。」

「……すまん。」

「後ろで見てたけど相当痛い人だったかも。」

「……………すみませんでした。」

とかなんとかやって、上条の精神のライフを削り取って遊んだ勇斗とインデックスだった。

その後、「今すぐ帰って準備しないと間に合わないんだよ!!」とせかすインデックスに引きずられていった上条を見送ると、勇斗は暇になった。

「ちて……………、これからどうするか。」

と、当てもなく歩き出そうとした勇斗の背中に何かが飛びついてきた。

「いえーい！！ 迷子捜索隊けっせーいっ！！ ってミサカはミサカははしゃいでみるー！！」

と、いろいろ気になるワードを発した謎の物体 おそらく少女であろう は首に手を回すと、おんぶのかっこうをとった。

「……………ミサカ？」

そつつぶやいた勇斗が背中 of 物体を地面におろし、その顔を見ている。

そこにいたのは、外見年齢10歳前後、肩までの長さの茶色の髪と同色の瞳、そして立派なアホ毛を持った、御坂美琴そっくりな姿の少女だった。

「……………お前、シスターズ妹達の1人なのか？」

「そーだよー。シスターズ妹達の最終ロット、シリアルナンバー検体番号20001号、ラストオー打ち止めだよってミサカはミサカは自己紹介してみる！！」

「……………なるほど。ミサカネットワークがバグった時のための上位個体ねえ。」

道端の屋台からジュースを買ってあげて、ついでに自分の分のジュースも買って、それを飲みながら、2人は公園で話すことにした。

「話が早くて何より、ってミサカはミサカは胸を張ってうんうん頷いてみる。」

「……………で、何しに来たんだ？  
打ち止め。  
」

「んーとー、あの人と一緒に大覇星祭を回ってただけど、はぐれちゃって困ってたところにあなたと上条当麻さんを見つけたから『実験』の時と『レムナント残骸』の時のお礼を言おうとしたんだけど上条さんがどっか行っちゃったからそっちへのお礼はまた今度にして今はまずあなたにお礼をしようと思って、もしよかったらジャッジメント風紀委員のあなたにこの後あの人を探すの手伝ってくれないかなーという期待を持って会いに来たんだよ、ってミサカはミサカは一息で説明したせいで酸欠になりながらも自分の現状を説明してみる！！」

「あー……………お疲れさん。」

「ねぎらいの言葉が少ない、ってミサカはミサカは……………酸欠が……………」



「まずは落ち着けて。」

「……………すーはーすーはー……………よし、落ち着いたよってミサカはミサカは報告します!!」

「それは良かった。なら一つ一つ、もう一回言いなさい。」

「わかったー。なら、まずはあなたへのお礼だね。残骸レムナントの時はありますがとうございました、ってミサカはミサカは誠心誠意感謝の気持ちを述べてみる。」

そう言って、ラストオーダー打ち止めはびよこんとアホ毛を揺らして頭を下げた。

「気にすんなよ……………と言いたところだけど、素直に受け取っておくよ。どういたしまして。」

その言葉を聞いて打ち止めは、再びぴよこんとアホ毛を揺らして頭ラストオーダーを下げた。

「……………で、2つ目は？」

「えっと、大覇星祭と一緒に回ってたあの人を見つけてほしいの、ってミサカはミサカは言ってみる。」

「なるほど。迷子搜索ってのはそう言う事か。」

「そうなんだよ。すぐにあの人はふらっ、てどっか行っちゃうんだからー、ってミサカはミサカは愚痴をこぼしてみる。」

「多分迷子になったのはお前だけだな。」

「むー。そんなことないもん！ってミサカはミサカは地団駄を踏んでみたり！！」

「はいはい。で、いなくなった奴の名前は？」

「全く聞いてないし………ってミサカはミサカはショックを受けただけだ。まあいいや、その人は一方通行アクセラレータって言うのーってミサカはミサカはちょっとなげやりに伝えてみる。」

「ぶっ！！  
一方通行アクセラレータ！？ 何であいつとお前が一緒にいるんだ？」

「あの人は自分の命を張ってわたしの命を助けてくれたの、ってミサカはミサカはあの人の優しさというか変化っぷりを伝えてみる。」

「……………そーか。あいつもいろいろあったんだな。っていつか命って！？」

「うん。あの人が能力使って私を助けてくれるところに、研究員

だった人が銃を撃つて、反射で弾けなかったらしくて……頭に被弾しちゃって、何とか助かったけど演算能力なくしちゃって、それで、今はミサカネットワークで代理演算してるの、ってミサカはミサカは事の顛末をお伝えします。」

「……………アイツ、すげーな。」

「そーなの、ってミサカはミサカは両手を組んでゆっくり頷いてみる。……………とゆーか気になったんだけど、あなたってあの人と面識あるの？ってミサカはミサカは聞いてみる。」

「んー、そーだなー。あれは年単位で昔の事か。実はおれも昔ちよろっと暗部にいたことがあるんだけど。」

「なんだかともないカミングアウト聞いちゃったかも、ってミサカはミサカはちょーびっくり。」

「まあ詳しい話は割愛するが。そこでたまたまアクセラレータと会ったんだけど、ああ、『レベル6ソフト実験』の前な、……………好みのコーヒーの話題で意気投合して仲良くなったんだよ。」

「それでそれで！！　ってミサカはミサカは続きを促してみる。」

「でな、ある時研究員の一人がいたずらしたんだよ。アクセラレータの好きなコーヒーの銘柄全部買い占めてな。実験施設に備え付けの売店みたいなところで売ってたんだが、おれ達は実験期間中でカンヅメだったからそこから出れないわけだよ。そしたらあいつぶちぎれて、……………必死になだめたな。外出許可なんかとる間もなく能力使って外出してコーヒー調達してきて。帰ってきたらもう機材はボロボロだったな。研究員は失神してたし。人的被害が0、ただし金銭的損害は歴代トップクラス。それがあいつと会った時の通称『コーヒー事件』だったな。」

「そーなんだ。って、ミサカはミサカは人に手を出さなかったあの事に驚いてる。」

「やっぱりあの『実験』<sup>レベル6シフト</sup>が歪めちまったんだろ。……………と、そして噂のあいつを探すんだったな。遅くならないように急ぐか。」

「あ、忘れてなくてよかったー、ってミサカはミサカは安堵のため

息を吐いてみる。」

「忘れてねーよ。」

そう言って、ラストオーダー勇斗は打ち止めを連れて、177支部へと向かう。

ジャッジメント風紀委員177支部の端末にアクセスしたところ、ラストオーダーの迷子届が出ており、（そのデリカシーのなさがミサカは頭にくるのーっ！ ってミサカはミサカは両手を振り回してポカポカやってみる！！ とか言っていたが）アクセラレータ届出主は例の病院にいたという事だったので、勇斗はラストオーダーを連れて、病院へと向かった。

「……おや、勇斗君。また来たのかい？」

第7学区の病院に入って早々、ちょうどロビーに出てきていたカエル先生に声をかけられた。

「……………いや、今日は迷子のお届けですよ。」

「迷子？」

そう言つと勇斗は、売店でお菓子を熱心に見て動かないラストオーダーを指さした。

「ああ。そういえばアクセラレータ君が迷子を1人置いてきたと言つてたね。」

「ちゃんと迷子センターに届け出てましたよ。あいつ。……………」



ところで、お見舞いしたいんですが、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ないよ。部屋の番号は教えるから、あの子も連れて行ってあげてくれ。」

「わかりました。」

そして、アクセラレータの部屋番号を教えてもらった勇斗は、ラストオーダーを引きずって、彼の部屋へと向かった。

「お邪魔します。」

「ただいまー、ってミサカはミサカは叫んでみるー!!」

そう言つて2人が病室に入ると、アクセラレータと、黄泉川がいた。

「騒がしいなあ。……………って、なんでお前がここにいんだア？」

「なんだアクセラレータ。知り合いか……………って、勇斗じゃん。何だ、こいつと知り合いだったじゃん？」

「はい。うーん、昔馴染みって感じですかね？」

「……………まア、そんなところだなア。」

「あー、ほつとしたじゃん。こいつに友人がいて。ちょうど困ってたじゃん。お見舞いに来てくれる人がいなくて、こいつも退屈してたじゃん。」

「黄泉川アアアアアア!!」

それを見ていた勇斗とラストオーダーは思わず嘔き出した。

「……………チツ、つーかお前は何しに来たんだア？」

「ああ、お前の迷子のお姫様を連れてくるついでにお見舞いしよう  
ラストオーダー  
と思っつてな。ま、そんだけ叫んでれば大丈夫そうだな。……………首  
元のそいつ以外は。」

首元のチョーカーを見つけて、勇斗はそう言った。

「なんだ、お前風紀委員シヤッジメンしてんのか。……………あア、まアな。おかげでこいつらがいねえと日常生活すら送れねエ。苦勞してんだよ。」

「……………もっと大切にしてくれよ。お姫様をな。」

そう言って、勇斗は立ち上がり、ドアの方へ向かった。

「なんだ、もう帰るじゃん？」

「はい。そろそろ閉会式があるので、そっちの手伝いに行ってきた。」

そう言うと勇斗はアクセラレータとラストオーダーを見て言った。

「退院したらまたコーヒーでも飲んで話しよう。」

「ああ。いいぜ。」

「やった！！ ミサカも楽しみにしてるよー！！ ってミサカはミサカは期待に胸を膨らませてみたり！！」

「まずは退院しろよ。じゃ、お大事に。黄泉川先生も、お疲れ様でした。」

「おう、お疲れじゃん。」

そう言って勇斗は病室を出て、閉会式へ向かった。



閉会式では、勇斗はイタリア旅行の嬉しさと、御坂との罰ゲームへのプレッシャーが渦巻いた微妙なテンションの上条を観賞しつつ、開会式同様の校長の長い話を受け流し、終了後、クラス全員で打ち上げへと向かった。

……打ち上げが終わったとき、疲労でぶっ倒れてなかったのは、勇斗、上条、吹寄、姫神の4人だけだったという。



e p . 2 2 9 月 2 0 - 2 5 日 : 大 覇 星 祭 O t h e r D a y s ( 後 書 き )

さて、大覇星祭もようやく終わりました、いよいよ9月末ですね。

書くのが楽しみですが、上手く書けるかどうかはわかりません^^ ;

努力してがんばります。

ep・23 9月26日(前書き)

大覇星祭も終わり、いよいよ次の話です。

少し短いですが、ep・23です。

どうぞ!!

e p . 2 3 9 月 2 6 日

勇斗は朝食を作っていた。

ごはん、わかめと豆腐の味噌汁、焼き魚、卵、おひたし。

和食で統一されたおかずをてきぱきと準備、調理し、テーブルに並べていく。

全ての料理が机に並んだのは午後1:00。

時間的には朝食と呼んでよいか疑問が浮かぶが、前日までの大覇星祭の疲れと、打ち上げでの夜更かしのせいで普段より遅く起きた勇斗にとっては、これが朝食となる。

「いただきます。」

そう言って、勇斗は食事を開始する。

絶品というわけではないが、ひとり暮らしの高校生のおなかを満足させることはできるくらい味の朝食あさじゆうを食べながら、今日から北イタリアはヴェネツィアへと旅行へ向かう2人組に、勇斗は思いをさせる。

「あいつら、ホントにちゃんとイタリアに行けるんだろーか……………」

「……………へっくちー!」

「ん？ 風邪でも引いたか、インデックス？」

「うー、きっと誰かが私たちの事噂してるんだよ。」

……………インデックスの安全ピン騒動で、飛行機に乗り遅れかけたという事を、勇斗は知らない。



食事を済ませ、やることがない勇斗は、散歩することにした。

家を出て、どこへ向かうという訳でもなく、歩いていく。

すると、そんな勇斗に声がかげられた。

「あ、勇斗じゃない。」

そう言って近づいてきたのは、御坂美琴だった。

「御坂か。どうした？」

「実はアイツと大覇星祭で賭けをやったのよ。学校対抗順位で負けた方が、勝った方の言うことを何でも聞くっていうやつ。」

「あー。何か当麻もそんなこと言ってたなー。」

御坂が言う『アイツ』。上条当麻 だという事はすでに常識だ。

「で、今日その罰ゲームを執行しようと思ってたんだけど、アイツが見当たらず。どこにいるか知らない？」

「……………アイツなら、今頃空の上だと思っけど。」

「……………は？」



「北イタリアはヴェネツィアへ、5泊7日のツアー旅行に出かけたぞ。今朝出発で。」

そんなこと全く知らなかったのであろう御坂は、最初は口を開けてポカンとした表情を浮かべていたが、次第に表情を険しくすると、バチバチッ！！と、周囲の空気を帯電させ始めた。

「あの野郎……………！！ 罰ゲームすっぱかして何やってんのよ……………！！」

「おれを巻き込まれても困るんだが……………。まずは落ち着いてその漏電をどうにかしろよ。」

「えっ！？ ああ、ごめん！」

そう言つと、漏電は収まったが、それでも怒りは収まらないらしい。

ぶつぶつと何かをつぶやいているが、『最大電圧でストレス発散：……』だの、『超電磁砲レールガンのキャッチボール』だの、『新技の実験台』だのと、所々で聞こえてくるその不穏な言葉の数々に、勇斗は上条への同情を禁じ得なかった。

(……………あいつ、終わったな。)

故に勇斗は、上条当麻しんげうの命を守るために、こんな提案をする。

「なあ御坂。罰ゲームを盾にしてアイツをデートにでも誘ってみたらいいんじゃないかねーか？」

「へ？」

勇斗の言葉に、間抜けな声で反応する御坂。

「デ、デートって……………あのデート？」

「そーだな。あのデートだ。」

「わたしが？」

「御坂が。」

「アイツと？」

「当麻と。」

そこまで言つと、急に御坂は黙り込んだ。

「……………御坂？」

「……………んふふ……………。罰ゲームなんだから、何でも言つ事聞かなくちゃいけないんだからね……………まずは何をしてもらおうかな……………ふへへへ」

何だかとんでもなく幸せそうな笑顔と共に、そんな言葉が唇から飛び出した。

「……………お前、どこまでぶつとんでんだよ……………。」

「……………はっ！？ え、あ！ いや、違うわよ…………… そっ、その……………何でもないわよ……………！」

そう言い残して、御坂は走り去った。

「あんなにバチバチ言わせながら走ってって、……電子機器が心配だな。」

冷静に見届けて、しかしあえてずれたツッコミを、勇斗はボソッとつぶやいた。

ところ変わって、ここは北イタリア、ヴェネツィアの玄関口、マル  
コポーロ国際空港行きの機内。

機内食が出され、今は食事の時間である。

ブラウスとスカートという普段では見慣れない服装のインデックスと共に、上条は食事を楽しんでいた。

が、しかし、上条の体に悪寒が走る。

「？      どうかしたの、とつま？」

「……………なんか、いやな予感がする。なんかこっつ、痺れる系の。」

「……………どうせいつもの事なんだから無駄に何か起こるフラグを立てるのは感心しないかも。」

「もっとおれを励ましてよっ!」

機内に、上条の悲痛な声が響いた。



御坂を見失った勇斗は、散歩を続行した。

( …………… そうだ、久々に遠出して第22学区のゲーセンにでも行ってみよっかな。 )

そう考えた勇斗は、第22学区の地下に向かうことにした。

第22学区。それは学園都市最小面積の学区で、地下数百メートルまで開発が行われており、その内部に地下施設が発展している学区である。

地上部分に一般的な家屋やビルは存在せず、太陽光発電や風力発電に頼れない地下街で用いる大量の電力を補うために設置された、ビル30階分程度の高さを持つ『巨大なジャングルジム』のように立体的に組み合わさった風力発電のプロペラが並んでいる。

その地下階層は全部で10の区画に分かれていて、地下へ至る道路は直径2キロの外周を這うように螺旋を描いており、上りと下りの車線を合わせると二重螺旋になる。

勇斗はその第3層、地下90メートルの深さまでエレベーターで降り、入り口ゲートをくぐる。

ここにはスパリゾート安泰泉という『お風呂の形をしたレジャー施設』があり、お風呂だけでなく、ゲーセンやらシヨッピングモールやらボーリング場が詰め込まれているのである。

「んー……………久々に風呂入ってくるのも悪くは無いかなー。……………ま、まずはゲーセンゲーセンっど。」

勇斗はスパリゾート安泰泉の建物に入ると、そのままゲームコーナーへと向かった。

「……ふっ、満足満足と。」

時間はすでに夕方。

音ゲーでハイスコアをたたき出し、対戦型クイズゲームでは優勝、『スキルアタック』という能力測定機械を応用した、耐衝撃機構を備えたミット型の標的に能力を叩きつけて力の強さを数字で出力するゲームでは、御使エンゼルライズ顕現の力を容赦なく（ただし、機械が壊れない程度に）振るって（具体的に言えば、翼を叩き付けて）優勝を搔っ攫って満足した勇斗は、ここで風呂に入っていくことにした。

「んー、どこにはいるのかなー。」

と、勇斗は悩んでいたが、そんな彼に向かって、後ろから声がかけられた。

「んー？ そこにいるのは勇斗かじゃー？」

聞き覚えのある声に勇斗が振り向くと、金髪グラサンの寮の隣人、土御門がそこにいた。

「おう土御門。奇遇だな。お前も風呂入りに来たのか？」

「そうだにゃー。ちょっとから疲れを取ろうと思ってここに来たんですたい。勇斗は？」

「おれは散歩のついでにふらっとな。」

「なるほどな。ま、とりあえず行くつぜい。」

「おう。」



「あー……………、いい湯だったな。」

プラネタリウムの星空の下、勇斗は言う。

「まったくだにゃー。……………これで空が本物の空ならよかったんだがな。」

「それは言わない約束だ。」

そんなことを言っていると、勇斗の携帯に着信があった。



名前を見ると、上条当麻、と表示されている。

「」  
「」  
「」

勇斗と土御門はそろって沈黙する。

(なあ土御門。これって出ても問題ないよな?)

(……ああ。多分、こっからイタリアの厄介事に巻き込まれることは無いだろうからにゃー)

(……だよな。よし。)

「もしもし？ どうした？」

『あ、もしもし、勇斗？ なんと……………無事何事もなくイタリア着いたぞー！』

「マジかっ！？」

予想に反した事実にも勇斗と、そばで聞いていた土御門は驚愕する。

『まあ……………他のツアー参加者とは合流できなかったんだけどな。』

「やっぱり無事じゃねえ！！」

『いや、でもオルソラとか天草式の人達と会えてどうにかなったんだよー！！ 珍しく幸運だろ！？』

「……………オルソラさんってこの前お世話になったシスターさんか。で、天草式はお前の知り合いの魔術組織か。確かに幸運だけど……………何でだろう。嫌な予感しかないんだが。」

『なっ！？』

「ま、とりあえず今のところは無事そうで何よりだよ。また定時報告でも入れておれ達を安心させてくれよ。じゃあな。」

ピッ

勇斗はそう言って電話を切った。

「もう一回言っけど……………、魔術サイドの人間と会っちゃってる

時点で嫌な予感しかしないよ。」

「……………全くだにゃー。」

人工的な星空の光のもと、勇斗と土御門はそろって苦笑いを浮かべた。

その後、勇斗と土御門は某牛丼チェーン店で夕食を済ませ、学生寮へと帰った。

上条の旅行も、この街も、とりあえず今は平和なようだった。

e p . 2 3 9 月 2 6 日 ( 後 書 き )

第22学区については、wikiを参照しました。

それにしても、wikiって見てて面白いですよね。

この前は、気づいたら2時間くらい経ってました^^;

e p . 2 4 9 月 2 7 日

前日、夜11時に寝た勇斗は、早朝5時に携帯の着信音で叩き起こされた。

「……………なんなんだ？」

寝ぼけ眼で電話を取った勇斗は、携帯を耳に当て、そう言った。

「起きたかにゃー？」

「……………土御門か。何だよ。まだ5時じゃねーか。眠いんだよ。」

「一応緊急だにゃー。」

「……………何だ？」

「……………キオツジア近海にローマ正教の聖霊十式の1つ、『アドリア海の女王』、ならびに『女王艦隊』が確認された。って言えばある程度の事情はつかめるんじゃないかにゃー？」

「……………アイツ、また魔術サイドの事件に巻き込まれたのかよ。今ので一気に眠気覚めたわ。」

「ま、そういうことだにゃー。で、ちよつと話しときたいこととかあるからちよつと家来てくれねーかにゃー？」

「……………はあ。しゃーねー……………。すぐ行くから朝飯準備して待っていてくれ。」

「朝飯については舞夏の当てがあるから期待してくれていいにゃー。」

「了解。」

そう言って電話を切った勇斗はてきぱきと着替え、準備を済ませて、隣の部屋へと向かった。

「おう、早かったな勇斗。」

「おー勇斗ー。おはようなんだぞー。」

「おう土御門、舞夏。おはよう。」

玄関を開けると、土御門兄妹が既に待っていた。



「……………よし、朝食の準備はしたし、勇斗も来たから私は帰るぞー。またなー。」

「また頼むにゃー、舞夏ー。」

「お疲れ舞夏。」

舞夏を見送った2人は、部屋へ上がり、テーブルを挟んで向かい合って座った。

「で、話しときたい事ってなんなんだ？」

「にゃー。今回の騒動で名前が上がってる聖霊十式の1つ、『アドリア海の女王』について説明しておこうかと思ってな。」

そう言つて土御門は一度立ち上がり、台所へと向かつて、お茶を取つて帰つてくる。

「ずっと昔、かなりの繁栄を見た都市国家ヴェネツィアに対して危機を抱いたローマ正教が、大事が起きた時に一撃でヴェネツィアを葬れるように整えたのが、『アドリア海の女王』だ。対都市専用の大規模術式だな。だがそんな大それたものを、ヴェネツィアの迎撃程度の事には使えない。故に、ヴェネツィア用の防衛網として『女王艦隊』が用意された。ここまではいいか？」

「ああ。………また随分と古めかしい物を持ち出してきたな。そんなものを用意して、一体何を始めるつもりなんだ？」

「……………正直そこがよくわからないんだにやー。大規模術式『アドリア海の女王』はヴェネツィアに対してしか発動できない。ただ、今言つたみたいに、ローマ正教とヴェネツィアがいがみ合つたのは、もう何百年も前の話だ。今じゃあむしろ世界的な観光地としてローマ正教が得る恩恵も少なくなはずだからにやー。ここにきて急に壊す理由がわからないんですたい。」

「ここにきてヴェネツィアを破壊する……………か。普通、そんな大それたことをやる理由と言えば……………権力の誇示か？」

「……………確かにその線はありそうだけにやー。実際この前、同じ聖霊十式の一つである『使徒十字』クローチエティビエトロで大覇星祭期間の学園都市を攻撃して、少しも通じなかったからにやー。ローマ正教が焦ってる様子が目に浮かぶようだぜい。でも、焦りを覚えた連中が動きを見せるにしても、何でヴェネツィアが狙われる事になるのか、という大きな疑問は依然として消えないんですたい。」

「やろうとするからには、絶対理由があるんだよな。……………もしかするとこいつも、大覇星祭の時みたいに何かからくりがあるのかもな。……………なあ土御門。『アドリア海の女王』って使って得することとかあるのか？」

「いや、そういうのではないにやー。『アドリア海の女王』には破壊以上の価値は存在しない。ソドムとゴモラに振るわれた天罰と同じで、『あらゆる物から価値を奪う』効果を持つからにやー。」

「ソドムとゴモラ……………っつーと、たしか大天使『神の力』が火の矢の雨を降らしたせいで滅んだっていうあの背徳の都か。」

「そう。『アドリア海の女王』は、まずヴェネツィアを背徳の都に対応させ、火の矢の術式を打ち込む。それによって、ヴェネツィアは街の中心から外周まで、その全てを完璧に破壊しつくす。これが第1段階だにゃー。」

「？ 第1段階？ てことは、それ以上があるのか？」

「そう。第2段階では、さらにヴェネツィアを離れていた人や物品をも狙って破壊する。ヴェネツィアに関わる全てのものが破壊されるんだにゃー。ヴェネツィア派っていう学問やヴェネツィアに関する歴史さえ、もしかすると一瞬で消え去ってしまうかもしれないんだにゃー。」

「なるほど。本体だけでなく、関連のあるすべてを破壊しつくすねえ。……………考えるだけでぞつとするな。」

「ああ。……………まあ、あくまで対象はヴェネツィアのみだから、学園都市にいるおれ達がそこまで警戒する必要はないだろうけどにゃー。」

「……………思ったんだけど、その『アドリア海の女王』の照準制限を解くなんて魔術は無いよな？ 科学サイドを目の敵にしてれば、『アドリア海の女王』で狙う相手なんて真っ先に学園都市になるんだからな。」

「それは確かにそうだが、その確率は低いんじゃないかやー？ この大規模術式は昔ローマ正教がヴェネツィアに対抗するためだけに生み出されたもんだ。それが現代向けにバージョンアップして制限が無くなりました、って、口で言うのは簡単だけど、実際やるには魔術構成の書き換えやらエピソード性の追加やらでかなりの手間とコストがかかる。教皇クラスの魔術師ですらこんなもんだからな。並大抵の、あるいは優れている程度の魔術師だったら手を出すことすらできないにやー。」

「なるほど。」

「ま、ここまで説明はしたが、後おれたちにできるのは、舞夏特製の朝飯を食べて、次の報告を待つことだにやー。」



それからやく4時間、イタリアから何の連絡もなく、時間は過ぎていく。

あの後、舞夏の絶品の朝食に舌鼓を打ち、それから土御門の部屋で待機しているが、そろそろ2人は退屈し始めていた。

「……………暇だな。」

「暇だにゃー……………。」

「まだ情報入ってこないのか？」

「にゃー。どうやらカミヤんと天草式と+ が『女王艦隊』の旗艦に乗り込んだっていうくらいにゃー。」

「何だよそれ!! 思いつきり事態進行してんじゃねーか!! 言葉よ!! そんな大事なことは早く言えよ!!」

「まあまあ。いつも通りなら、これで片が付く。はい解決! だからいいんじゃないかにゃー?」

「それとこれじゃ話が別だろうが!!」

と、勇斗が土御門に全力で突っ込んだとき、土御門の携帯が鳴りだした。

発信者は知らない番号である。



「……………今回の報告かもしれないにゃー。ちよつと席外すぞ。」

「ああ、了解。」

土御門は席を立ち、台所の奥へと向かっていく。

勇斗はぼんやりと上条の苦勞を労いながら、土御門が戻ってくるのを待っていた。

が、突然の「はあ！！??」という土御門の大声で、思考が中断される。

驚いて、電話を耳に当てる土御門に目を向ければ、さっきまでとは明らかに違う、真剣な様子の土御門が目に入った。

電話が終わったのか、土御門が居間の方に戻ってくる。

サングラス越しの瞳には、さっきまでのふざけた様子は全く残っていないかった。

「……………どうしたんだ？」

「ローマ正教の魔術師が学園都市に侵入した。前回の……………オリアナとリドヴィアの時とは違う。今回の連中は、学園都市を破壊しに来てる。」

「はあ!?!」

まさかの事態に一瞬頭がついていなくなる。だが、勇斗は何とか

疑問を口に出した。

「……………一体何があったんだ？」

「手短に話すぞ。……………さっきの電話はカミヤンからだっただ  
が……………さっき勇斗が言ってたな。『アドリア海の女王』の照準  
制限を解く術式は無いのかと。」

「ああ。」

「それがあつたっていうのが1つ。」

「……！」

「まあそつちはいい。カミヤン達が『アドリア海の女王』とぶつ  
潰してくれたらしいからな。これで、科学サイドの全滅は避けられ  
た訳なんだが、……………話はこつからだ。」

と、土御門は一旦話を区切って、再び話し出す。

「実はこの事件の黒幕は2人いたらしくてな、1人はカミヤんがイタリアでぶん殴ってくれたんだが。……………もう1人の魔術師が、部下と共に、『アドリア海の女王』の保険として、この街に潜り込んでたらしい。で、この街をぶっ潰す計画なんだそうさ。……………『アドリア海の女王』っていう大規模術式を使うことで、学園都市と同盟関係にあるイギリス清教の注意を集めて、何もなければ照準制限を解いた『アドリア海の女王』で科学サイドのすべてを破壊し、仮に失敗しても、別働隊が学園都市の破壊だけに行く。何ともえげつない作戦だろ。」

「……………だな。」

「そうさ。だからその侵入者をどうにかしないと、今回の騒動は終わらない。……………さてここで改めて質問するぜ勇斗。……………お前は命の危機を背負ってでも、この街を守るうという意志はあるか？」

その問いかけに対して、勇斗は即答する。

「……………何度も言わせんなよ。」

強い意志を持って、答える。

「あるに決まってるだろうが。」

ここは第7学区の裏路地。

普段から日が当たらないため、じめつとした印象を与える道に、10人ほどの男達が立っている。

10人は皆一様に『窓のないビル』を見上げている。

傍から見れば、10人の服装と相まって、とても異様な光景に見えただろう。

1人はどこかの民族衣装のような恰好。

そして残りは全員鎧をまとい、武器を持った、映画にでも出てきそうな騎士の恰好をしているからだ。

不審な集団以外の何物でもなく、見れば、スキルアウトですら通報してしまうかもしれない。

しかし、彼らは通報されることなく、そこに立ち続ける。

時間は午前10時。普段であれば人通りは多いはずなのに、なぜか。

それは、人払い、認識阻害、光の操作など、徹底した隠蔽術式群によって、完全に身を隠しているからだ。

その集団の中、1人だけ服装の違う男が口を開いた。

「まさかピアージオと『アドリア海の女王』で失敗するとはな。  
…



……だから油断するなと常々言っているのに。」

その言葉を聞いて、騎士の1人が口を開く。

「し、しかし、ビショップ・アイザック。いくら異教の者とはいえ、子供たちを殺すというのはやりすぎでは……………?」

それを聞いた他の騎士が口をはさむ。

「何甘いこと言ってるんだよ。異教徒なんてみんな人じゃないんだ。しかもこいつらはおれたちに敵対してる連中だ。十字教騎士団マイダークルセイダースの流れを引く私達ローマ正教騎士団がなぜ殺して悪い!? 大体……………」

手を上げ、ヒートアップしかけたその騎士を止めたのは、先程ビシ

ヨップ・アイザックと呼ばれた男だった。

「お前のいつた事はもつともだ。本来であれば、神の愛を説き、子供たちの考えを改めさせるのが正しいのだろう。しかし……………この街は『使徒十字』<sup>クローチエディビエトロ</sup>による支配さえはねのけた。あの聖霊十式の1つなの。それに今回、ヴェネツィアでは幻想殺し<sup>イマジンプレイカー</sup>、が同じく聖霊十式の『アドリア海の女王』さえ打ち破ってしまった。……………もうこの街は敵性だ。こうなればこれ以上放っておくことなどできない。それに……………」

突然言葉を切ったビショップ・アイザックに全員の視線が集まる。

「……………出迎えが来たようだな。」

「「！！？？」」

裏通りの向こう、ビショップ・アイザックが見つめる先を全員が見る。

そこを歩いてくるのは2人の少年。

緑色の腕章をつけた少年と、金髪にサングラスをかけた少年だった。

「くんには、ローマこりない正教の魔術師カスどもの皆さん。」

にこやかに、勇斗は言う。

「ジャツジメントだにゃー。『条約』を違反しての破壊行為未遂で  
テメエら全員ボッコボコにしてやるにゃー。」

あくまでにごやかに、土御門は言う。

笑顔の下にのぞく敵意に反応したのか、騎士団の面々から、敵意や  
殺気が溢れ出す。

572

「……………なんだガキども。俺たちを止めにも来たのか？」

「はん！！ 科学の能力者ごときに俺たち騎士団が止められるとで  
も思ってたのか？」

「おい、まずはこいつらから殺しちまおうぜ！…！」

盛り上がる騎士団から溢れ出ていた敵意や殺気が、魔力という具体的な力へ変わる。

「……………こいつら、話し合う気がみじんもないのな。騎士団が聞いてあきれよ。ただのDQNじゃないか。」

「ま、最初から敵意全開でいったおれらに言えた事じゃないけどいやー。」

「……………まあな。」

周囲に溢れ出す力を、勇斗は感じ取る。

そして、呼応するように、自らの根底でゆらぐ力。

9月19日、その日には自らの意志で制御することができなかつた  
チカラ  
ゆらぎ。

だが今は、不完全ながら、自らの意志で統制できている感覚がある。

それを感じ取ったのか、土御門が言う。

「……………勇斗、いけるか？」

「……………ああ。」

そう言つて、勇斗は前に出る。

「せつてやるわ。」

直後、勇斗の背から翼が飛び出す。

今までよりも鋭く、青白い光を放つ1対の翼。

そして、頭上には白い輪が浮かぶ。

「こんだけヒントもらえれば、ミスなんてしねーよ。」



天使は不完全ながらも、圧倒的な力を持って、そこに君臨する。

「な……………」

それを見た騎士団は言葉を失った。

なぜ、この科学の街に、天使の姿をした者がいるのか。

全く持って理解できない。

そしてそれは、やがて怒りへと変わってゆく。

「貴様あー!! その姿、我らが神の威光を愚弄しているのかっ!?!」

「この見かけ倒しめ!! お前から血祭りにあげてくれる!!」

そういって、騎士団のうち3人が、各々の武器を持って襲い掛かってくる。

「この3人での攻撃は我らが十字教の『三位一体』が反映されている術式だ!!」

「最後に我が主の威光を知って死ね!!」

「くられ、異教のサルが!!」

そう言って3方向から突っ込んでくる騎士たち。

「勇斗!! だいじょうぶなのか!?!」

「……………まあ、見てなつて、土御門。」

そう言つと勇斗は、無造作に翼を薙いだ。

一瞬にして術式は破壊され、突っ込んできた3人はそのまま弾き飛ばされる。

意識を刈り取られ、地に転がる仲間の姿を見て、他の騎士たちは言葉  
葉を失う。

そんな静寂の中、勇斗は言った。

「普通騎士団とかの人間だったら何かこう………相手の雰囲気と  
かから力量差が分かったりすると思ってたのになあ。それすら分か  
らず突っ込んでくるなんて、その程度なのかよ、ローマ騎士団って。」

その一言は、残りの騎士団の面々を怒らせるのに十分すぎた。

各々の武器を手に取り、天使ゆってに向かって走る騎士団。

……ビショップ・アイザックは、勇斗が翼と輪っかを現出させた瞬間から、魔術的な目で勇斗を分析していた。

(……………どうなってる。これは。……………こいつの翼と輪と、身に纏う力の力場は確かにテレズマに酷似している。ただ、正体がかめない……………。それに、総量がおかしすぎる……………。この量は……………テレズマに換算すれば軽く見積もっても聖人に匹敵するぞー!?!???)

そこまで分析を行ったところで、彼は騎士団が全滅しかけていることに気づく。

無理もない、と彼は思う。

聖人と同等の力を持つ人間に、ただの騎士団がかなう訳がない。

「お前ら!! 逃げる!!」

無駄とは感じつつも、叫ぶ。

勇斗の口元に笑みが浮かんだのを、彼は見た。

ある者は壁に叩き付けられ、ある者は翼による打撃を受け、またある者は翼から生み出された衝撃波をまともにその身にくらい、倒れ伏す。

早い話が、騎士団全員がのびていた。

「さて、残ってるのはあなた1人なんだけど、………まだやるの？」

「………あれだけの力を振るっておきながら1人も殺さないかとんだ甘い人間だな。」

勇斗の問いかけを無視して、アイザックは言う。

「そんな甘い人間にやられるとは、騎士団も弱くなった。」

そして勇斗を見据えて、告げる。



「まあいい。もともとこいつらになど期待はしていない。ここにいた騎士団全員でかかってきても、どうせ私には敵わないのだから。……………行くぞ能力者。次は私が本気を見せる番だ！」

その言葉を聞いて、勇斗は気を引き締める。

騎士団が発したものは比較にならない魔力が周囲に満ちる。

「……………数値。40・9・30・7。合わせて86。メモッテトッラメドッザイン。照応。水よ、蛇となりて剣のように突き刺せ……………」

ズバン！！と地下の水道管を破って、地面から噴水のように水の柱が飛び出す。

その水の柱がまるで蛇のように動き、何本もに枝分かれした水の蛇が、槍となって勢いよく勇斗に襲い掛かってくる。

「!?!」

勇斗は右手をあげ、不可視の『力』を放って水の槍を破壊する。だが破壊を免れた槍は、容赦なく周囲を切断する。

切断された街灯が、アスファルトにひびを入れ、めり込んだ。

「な!?! 対能力者用に強度が上がってる街灯をこんなあっさり切った!?!」

「ふん!! この程度で驚かれても困るなあ!! ..... 世界に満ちる四大元素が一、我が声に答え給え!!」

アイザックがそう言うと、さっきよりもさらに広範囲の水道管が弾け、水がアイザックのもとに集まってくる。

「……………我が名はアイザック。属性は水。水を統べる力はある方々に比べればまだまだだが、それでもローマ正教でナンバー2だ！水の力……………とくと味わえ！！」

その言葉の直後、瞬間的に凍りついたたくさんの水粒が空気を切り裂き、散弾のように勇斗に飛来する。

「くっ!?!」

翼をふるって氷粒を全て打ち砕き、そのまま翼で空気を叩いて後へ飛び、アイザックから間合いを取る。

「遅いぞ!?!」

アイザックは右手を振るって周囲を漂う水から再び槍を生みだし、

勇斗に向かって打ち出す。

「……………甘いんだよ!!」

勇斗は再び右手を上げ、『カ』を放って破壊しようとするが、

パチン!! とアイザックが指を鳴らすのが聞こえた。

直後、槍を形作っていた水が、水蒸気へと変わる。

(……………!! 体積変化による爆発か!!)

そこまで気付いたところで、水蒸気が撒き散らされた。

「……………今の爆発はただの水蒸気爆発ではないぞ。」

水煙が充満する中、アイザックは告げる。

「高密度の魔力と、少量ではあるが『神の力』<sup>ガブリエル</sup>のテレズマ。それを水蒸気に加えて、物理的に撒き散らす。いわば魔術的な衝撃波を喰らわせる術式だ。戦車程度なら、鉄クズにできるだろう。……………さあ、どうした能力者。もう終わりなのか？」

と、それに答えるように水煙が吹き散らされる。

そこにいるのは、全く変わらない勇斗の姿。

「終わりとかって………本気で言ってるの？」

「まさか。」

吹き散らされたはずの水煙までが宙を舞い、アイザックの支配下に戻る。

「久しぶりの全力なんだな。この街の破壊を止めたいのなら、この程度では困るということだよ。」

「なら安心しろ。この程度なわけないだろ。」

そう言つと、勇斗は地面に転がった街灯を片手で持ち上げ、構える。

「おれも、本気で行くぞ。」

「！！」

その言葉にアイザックは反応する。

手を広げ、言葉を紡ぎ、再び水槍を作りだそうとした。

しかし同時、勇斗は手に持った街灯を振るって、アイザックに向かって突っ込む。

正確には彼の頭上で形を変えつつある水球に。

振るわれた街灯で叩き飛ばされた水が、霧となって辺りを舞う。

数瞬遅れて、ドバン！！ という轟音が響く。

アイザックは、何が起こったか全く知覚できなかった。

「……………音速を超える移動速度、数百キロ単位で重さのあるだろ  
う街灯を振るう腕力……………。その力、やはり聖人と同じか……………  
…っ—！」

「……………らしいな。」

「……………くっ—！貴様は一体何者だ—！ この科学の街にいなが  
ら聖人と同等の力を振るうとは—！」

「ただの学生だよ。……………多分。」

そう言い返すと再び勇斗は構え、告げる。

「生憎、おれは眠いからな。さっさと終わらせるけど、許してくれ  
よ。」



直後、アイザックが何も言い返す間もなく、彼の体が打ち飛ばされる。

超音速で飛び込んだ勇斗が、街灯を横薙ぎに振るっただからだ。

「しっがつ!!!??」

吹き飛ばされ、道路を転がるアイザック。

『アドリア海の女王』の保険として学園都市に侵入していたローマ正教の一団は、こうしてあっさり全滅した。

## 窓のないビルの内部

『……………なかなか豪快だったにゃー。』

『ま、あいつ身体強化みたいなのでたし大丈夫だろ。なんかの力纏ってたし。』

『確かにそうだにゃー。……………さて、それじゃ後片付けでもするかにゃー。』

『だな。』

モニター越しに勇斗と土御門の話をしているのは、『人間』アレ  
イスターⅡクロウリーである。

「……………魔術現象への感覚鋭敏化。テレズマの制御能力の向上。  
ふふふ、どれもすばらしい成長ぶりだな、ハイブリッド。」

口元には笑みが浮かぶ。

「残る大きな課題は、内包するテレズマへの自己干渉可能化だが…

……、ふむ、この調子ならすぐにでも克服するだろう。」

そう言って、再びモニターへと目を向ける。

「さて、愚かな魔術師諸君ら。次は一体いつ来てくれるのだろう。」

心底愉快そうに、彼は呟いた。

ep.24 9月27日(後書き)

戦闘をもっとうまく書きたいです……………

e p . 2 5 9 月 2 8 日 ( 前 書 き )

遅くなりました^^ ;

e p . 2 5 だ す 。 ど り り ー !

「お帰りなさい、上条当麻君……………ふっ。」

「今笑いやがったな!!」

「いえいえ。そんなことは……………ふふっ。」

「笑ってんじゃねーか!!」

ここは第7学区、いつもの病院ふりだしに戻って、そのまま入院していた上条を、勇斗と土御門がお見舞いに訪れたところである。

「……………また厄介事に巻き込まれやがって、一回研究してみた方が良いんじゃないか？不幸ソレ。」

「いやー……………上条さんも激しく同意ですよ……………。なんか、

どっか出掛ける度に事件に巻き込まれてるような気がするなー……  
……。」

「それに関しても激しく同意だけど、カミヤんの場合どこにいても事件に巻き込まれるからもうあきらめた方が良くと思っただけだよー?」

「それに関しても激しく同意だな。」

「………否定できないところが悲しくなりますからもうやめて上条さんのライフは0よー!!」

「………まあ、それは置いて。お前、結局イタリアにいたのはどれくらいなんだ?」

「あっさり置いておかれたっ!? ……イタリア行ってその日の夜に事件あつて次の日の朝に超音速旅客機で帰ってきたから24時間もいませんでしたよー!!」

上条は叫ぶ。



「つーか何なんだよ超<sup>あれ</sup>音速旅客機！！ このケチヨンケチヨンにされた体であれはねーだろ！？

以下、回想

『マルコポーロ国際空港に学園都市製の超音速旅客機が停まっているはずだから。あれだね、最大時速7000キロメートルオーバーだそうだから、日本まで1時間ちよつとって感じかな？』

『大型旅客機で！？ それは幻のノースアメリカンX-15研究機とかじゃねえの！？ そんな並のミサイルより速い飛行機に何の訓練も積んでない俺が乗れるもんか！！』

『大丈夫大丈夫。実際に乗った僕だから言えるけど、ちよつと無重力を感じる程度だから』

『それを1時間もか！？ 胃袋の中身が全部逆流しちゃうと思えますけど！！』

『大丈夫大丈夫。実際に乗った僕だから言えるけど、そんな事を考えている余裕は最初の10分で消えるはずだから』

『何がどう大丈夫なんだよ！！』

『まあ、僕から言えるのは1つだけかな。……………無理なものは無理だから諦めて帰って来い。』

『いやだあああああああ！！』

以上、回想終わり。

……あれはあり得ないだろ。しかもおかげでインデックスがせつかく科学に慣れ始めてたのに心閉ざしちまったよ。……まあ、あの強烈なGと内蔵の苦しみの中で無理やり機内食頼んでトラウマくらったのはアイツの自業自得なんだけどな。」

「……なんつーか、ご愁傷様。……あ、そういうえば。」

「……何だ？ まだこの上条さんに対して何かあるって言うのですか勇斗さん!？」

そう言うっておびえる上条に向かって、勇斗は告げる。

「大覇星祭の罰ゲームは覚悟しなさい（はーと） from 御坂美琴……だってよ。」

土御門と共に、勇斗は上条の肩をポン、と叩いて言った。

「」「」「……ファイト。」「」

「ぎゃあああああああああ！？ すっかり忘れてたあああああ  
あああああッ！！」

病院中に、上条の悲鳴がこだまする。

ひと騒動が落ち着いた後、売店で飲み物を買ひ、上条の病室に戻った勇斗と土御門。

3人は真面目に話し始める。

「さて、じゃあここで、昨日の1件について話をまとめておこうか  
にゃー。まずはカミちゃん、何があったか教えてくれないかにゃー？」

「ああ。ま、一昨日イタリアに行きました。そこで偶然引越し中のオルソラと手伝いの天草式と会って、飯とかごちそうになってたんだが、深夜に突然氷の船が出てきて。それに乗っちゃった俺とオルソラはその船の中でアニメーゼってやつと会ったんだ。そいつと別れて1度脱出して、ルチアとアンジェレネってやつとも会って、ピアージオってやつがいるラスダンに乗り込んでやつつけた………って感じ。」

それを聞いた勇斗は、小声で、

「……………土御門。」

「何だ勇斗。」

「女と会って事件巻き込まれて事件解決してまたフラグを立てたという認識でオケ？」

「万事、問題ないにゃー。」

という会話を土御門とかわした。

「……………なるほど。で、そしたら学園都市の内部に別働隊がいたよ。」

「そつだにゃー。それが昨日のあいつらだにゃー。」

「でも何かたいしたことなかったよな、あいつら。」

「……………そりゃあ聖人クラスのやつにかかれば楽勝だろうけどにゃー……………」

「聖人！？ 勇斗が!?!」

聞き捨てならない土御門の言葉に、上条は反応した。

「いや、そういう訳じゃねーんだけど。」

「こいつ、能力で翼だけじゃ飽き足らず遂に輪っか出しやがってにゃー。そしたら超音速移動+超腕力とかっていう聖人チート野郎になってたんだにゃー。」

「……………もしかして、アレか？」

アレ、というのは、9月19日、対オリアナ戦で現れた、あの天使化のことだろう。

「いや、まだそこまでは扱えてない。ちょっとさつき確かめたんだけど、昨日の一件でコツをつかんだみたいで、普通に演算して能力発動したら輪っかついてたよ。多分、最近魔術師とばかり戦ってたから、あのゆらぎの統制も演算領域に入ったんだろ。ただその先は、……………多分もうちょっと練習しないと無理だな。」

「そうか……………」

「ま、どうせすぐに戦いが起こる。それくらいの力は持つておくに越したことはないにゃー。」

突然、土御門は低い声でそう言った。

「……………どういふことだ？」

上条は問う。

「簡単な話だにやー。……………カミヤんがイタリアで『アドリア海の女王』を破壊。勇斗とオレ……………ま、オレは居合わせただけだがな、はこつちでローマ正教を撃退。それに以前の『使徒十字』クローチエディピエトロの件。『聖霊十式』で失敗、直接乗り込んでも失敗。そろそろ、アイツらも本気で来るだろう。もしかすると、今この瞬間にも、準備は進んでるかもしれないしな。」

それは当然の懸念だろう。

そしてそれはいずれ、現実のものとなる。

……………

……………



⋮

⋮

同時刻

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。

ここは、ローマ正教の総本山たる世界最大の聖堂だ。

その神聖で荘厳な空気の中、荒々しい足音が響く。

「チツ、結局あのバカが失敗したってコトよ。しかも『アドリア海の女王』の核部分まで破壊されて、二度と再現できないときた!!  
……………まったく、照準解除の術式を考案し、組み立て、実用にまで漕ぎつけられたのは誰のおかげだと思ってんだか。全く納得いかないわね!!」

「……………いくらお前であったとはいえ、あれは少し事を急ぎ過ぎだ。」

暗く、闇の帳とぼの降りた中、歩くのは2人。

1人は腰の曲がった男性の老人。

もう1人は19世紀のフランス市民に見られた格好をしているが、色は全身真黄色の出で立ちの若い女性である。

そして、女性が口を開いた。

「アンタ誰にモノ言ってるんよ？ 私がやれつつあったコトはやんの。それが世界の法則ってモンでしょ。バカバカしい。この期に及んでまだそんなコトも学んでないの？」

「貴様こそ、誰に口を開いているか理解は追いついているか。」

その一言で、場の空気が一変する。

一瞬にして、神聖な空気に、目に見えない威圧感が混ざる。

しかし、

「たかだかローマ教皇でしょ。それがどうしたの？」

女性は再び一瞬で、その場を、空気を、あっさりと打ち砕いた。

「アンタも分かってるでしょ、ローマ正教を動かしているのがいつ

たい誰なのかっていうコトくらい。別にアンタがここで消えようが、別の人間がアンタが今いるその座に就くだけなのよ？ でも私が消えたら代わりは利かない。自分の命でもかけて試してみたい？」

その言葉を聞いた老人      教皇マタイ・リースは、女性から1歩分だけ距離を取る。

忌々しさと、同時にわずかな羨望を込めて、彼は呟く。

「く……………」 『神の右席』。教皇程度では響かぬか……………」

『神の右席』

それはローマ正教の最暗部に位置する組織の名だ。

元々は十字教社会のピラミッド内には存在せず、歴代の教皇の影の相談役として設置された機関だった。

しかし、歴代教皇が彼らを頼りすぎてしまったが故に、いつしかローマ正教の中心に据えられ、指導者としての権力が逆転してしまった。

「……………私が属するその『梓組み』の名前を知ってるってだけでもアンタは割と上部にいるってコトなんだけど。やっぱりそれじゃ満足できないんだ？」

そう言うと、彼女は笑ったまま、言う。

「コイツに目を通してサインをしなさい。」

「……………この私に命令形か。…………、待て、この書類は…………。無知なだけの者達にここまでやるとなると、私もさすがに否定的な意見を述べねば……………」

「この私に否定形はない。」

教皇マタイ・リースの言葉を、女性は一言で打ち切った。

「私は『神の右席』、前方のヴェント。受動形、命令形、連用形、連体形、已然形、未然形、終止形、仮定形、その他。こいつらはどうでもいいが、私は否定だけは認めない。私がやれつつたコトはやる。例え誰に対してであろうと、その法則は変わらない。だからアンタは書類にサインをする。分かった？」

老人は苦い表情を浮かべながら、小さく頷く。

「よろしい」

肯定の意思を確認し、そう告げると、ヴェントは去っていった。

彼女が去っていく後ろ姿を眺めながら、マタイ・リースは再び書類に目を落とす。

わずかな月明かりのもと、彼は書類に書かれた文面を追い続ける。

そこに書かれているのは、

『上条当麻。上記の者を速やかに調査し、主の敵と認められし場合は確実に殺害せよ。並びに、学園都市内部に確認されている協力者を並行して調査し、必要であれば同様に殺害せよ。』

と……

つまりそれは、ローマ正教が総力を挙げてでも上条や勇斗を排除しようとするための申請書類だ。

(……………少々早急すぎる。それがあやつの癖だな……………)

彼は思うが、彼女が言った通り、彼女に否定形は存在しない。



苦々しくため息をついて自分の居室へ戻り、書類にサインをする。

これをもって、マタイ＝リースの本意には関わらず、上条、そして  
勇斗の調査、殺害の命令が発効された。

ローマ正教の、科学サイドへの逆襲が幕を開ける。

自分たちのあずかり知らぬところで暗殺が決定された彼らは、互いが持っている情報を共有し、少し話し合いを行い、そして解散した。

「……………戦いか。」

病院を出たところで土御門と別れた勇斗は、寮への道すがら、歩き

ながら呟いた。

『きっとそろそろローマ正教も奥の手とか出してくるはずだ。最近何度も言ってるが、この街を守るってんなら………魔術サイドを敵に回すことも覚悟しとけよ。………お前は強い。きっと誰が来ようと、ほとんどの敵はお前の本気でどうにかなる。ただ、お前の本気は、ほとんどが魔術サイドあつちの力で成り立ってる。その力を振るえば振るうほど、魔術サイドから狙われる可能性が出てくることを忘れるなよ。』

ついさつき、土御門に言われた言葉がよみがえってくる。

(確かにこの力は、魔術サイドの不興を買うだろうな。なんせ能力者のくせに魔術を使い、その力の源が墮天使テレスマの力と来てるからな。)

そう考えて、薄く笑う。

(………けどな、見くびるなよ土御門。そしてローマ正教ども。おれはこの力で、この街を守る。)

.....

（決めたんだ。絶対に負けないと。）

だが、勇斗が歩く路地に、突風が吹きぬける。

.....それは、向かい風だった。

あたかも、この先の厳しい戦いを暗示するかのような、強い強い向かい風だった。

ep.25 9月28日(後書き)

なんかこう、最近地味に忙しいなあ……………

e p . 2 6 9 月 3 0 日 . 1 ( 前 書 き )

ようやく0930に突入します。

頑張って書きますので、読んでいただければ嬉しい限りです^^

9月30日。

残暑が厳しかった9月も、もう最終日となったこの日。

衣替えを翌日に控え、180万人以上いる学生の大半が動くため、学園都市の全ての学校で、衣替えの混雑対策として午前授業が実施される。

622

そんな日の、今は授業と授業の10分休みの時間だ。

勇斗と上条は廊下の窓を開けて、ぼけーっと外を眺めていた。

「……………何だよあれ。退屈過ぎんだろ、数学。」

「上条さんは激しく同意します……………、うだー。」

前の数学が退屈で退屈で眠気に襲われていた2人は、休み時間が始まると同時、水飲み場で目覚ましがたら顔を洗ってきたのだった。

「……………簡単すぎる。説明が下手すぎだし。」……………難しかったよな。さっぱりだったー。」

「ん？」

勇斗と上条が同時に声を上げる。

「……………勇斗、お前、今なんて……………。」

「え？ 簡単すぎる、って。」

「……………ダメだ。ついていけねえ……………！！！」



「……………せめてお前はもっと頑張れよ。」

「……………言い返せねえ。」

「……………」

ポン、と勇斗は、手を上条の肩に乗せた。

「おーす、勇斗。カミヤん。」

「おーっす。」

丁度その時、そう言って教室から土御門と青髪ピアスが出てきた。

「おーす。」

「……………カミヤんはどうして燃え尽きてるのかにゃー？」

「……………世のはかなさを嘆いてるのさ。……………で、2人してどうしたんだ？」

「ああ、そやそや。ちょっとこれ見てみ。」

と言ったのは青髪ピアス。

彼は、持っていた週刊の漫画雑誌の裏表紙をめくる。

そこには通信販売のカラー広告が載っていた。

「ほら、この欄に『肩もみホルダー君』ってのがあやう。」

「だな。」

「気になるねんこれ。ここんトコ右肩の辺りが妙に痛いし、自分で自分の肩をグニグニしとると今度は左の肩が痛くなってくるんや」

「……………そういや、これ深夜の通販番組でも宣伝されてたな。」

ようやく復活した上条が言った。

「そやるー！ こんだけ派手派手に紹介されてるって事は、きっとこの肩もみマシンはものすごく気持ちええんよー！」

「「「えー」「」」

青髪ピアスを除く3人が、同時にうさん臭そうな声を上げた。

「こりや多分ブラフだぜい。特に『気持ち良かったか良くなかったか』なんてのは明確な数字で示せるものじゃないしにゃー。やっぱり義妹が1番だにゃー。」

「『あくまでも個人の感想です』ってオチだろうな。」

「……………俺としても効果なんかねえと思うけどな。肩こりって一言で

言っても痛む場所、レベルは人それぞれだろうし、男女でも効果が違ったりすんじゃないの？ それら全部をみんなまとめて『肩こりなら何でも解消！』って言ってる時点でちよっと怪しいよな。」

土御門、勇斗、上条はそれぞれ反論する。

「そんなの実験してみんと分からんやないかい！！ そもそも肩をもんでくれる女の子がいると思ってるのかよこのシスコン軍曹が！！」

と青髪ピアスが絶叫し、土御門とポカポカ殴り合いを始める。

「……………なんて不毛な争いだ。」

「全くだよな……………」

上条が呟き、勇斗が反応した。

「あ」

すると、上条は何かに気づいたようで、土御門と青髪ピアスを引きはがしながら言った。

「だったらこれから実際に試してみようじゃねえか。しょっちゅう肩こりに悩まされていて、なおかつこつこついう通販グッズに目がない人間を、俺は1人知ってる。」

「誰？」

「吹寄。」

そう言ひつゝ、

「吹寄はいるかーっ!？」

教室のドアを勢いよく開け放ち、上条が叫ぶ。

突然の大声に、吹寄はわずかに身を退かせたが、叫んだ相手が上条、青髪、土御門というクラスの三バカデルタフォース(+勇斗)であることに気づくと、3人を睨み付け、これから何があっても平常心を保とうと気合を入れなおした。

しかし上条はそこへ、

「一生のお願いだからもませて吹寄!!」

と、誤解しか生まないような一言をのたまった。

(!!!?? 凄まじい殺気!!!)

殺気を感じて震えあがる勇斗をよそに、吹寄は飛び掛かる土御門と青髪。ピアスを正拳突きで迎撃し、そのまま流れるような動作で上条に硬いおでこを叩きつけて吹き飛ばす。

それを廊下で見ている顔をひきつらせていた勇斗に声がかかった。

「はい勇斗ちゃん。教室入ってくださいーい。」

歩いてきた小萌先生は、そのまま教室に入っていく。

「さーて皆さん、本日最後の授業は先生のバケガクなのですよー…  
…って。ぎゃああー!? ほのぼのクラスが一転してルール無用の不  
良バトル空間っぽくなってますーッ?」

小萌先生の叫び声が聞こえてきた。

「一体なぜこんなことに!?!」

床に上条、土御門、青髪ピアスの3人が転がっているという大惨事

にうつらたえる小萌先生に、吹寄は極めてクールな顔で、

「平和のためです。」

と言った。

「一体何があったのですか？ 吹寄ちゃんが平和維持部隊みたいになってるのです！！」

「……………收拾つけないとな。」

そう呟いて、勇斗は教室に入った。

そして、状況を説明しようとするのだが、しかし、それを上条の声が遮った。

上条は床に倒れたまま、吹寄の顔の少し下を指さして、



「……………だって、吹寄さんはすごく気持ち良さそうなのを持って  
るのにちっとももませてくれないんですッ!!」

(……………ダメだこいつ。地雷踏みやがった。)

その一言で小萌先生は顔を真っ赤にするとボタンと真後ろに倒れ、  
それを確認するまでもなく吹寄が追撃の拳とこめいちげきを握り締め、ゆらりと上  
条に迫る。

ぎゃあああああ!!?? という悲鳴を聞きながら、

「……………ご愁傷様。」

と、勇斗は呟いた。

現在時刻は12:20。

授業が終了し、下校時刻となり、勇斗と上条は教室を出た。

「……………ひどい目にあつた。」

と、上条は歩きながら咳く。

「……………あれは自業自得だな。」

それを聞いた勇斗は、呆れたように言った。

「あれじゃあどストレートに『胸を触らせてください』って言うてるようなもんだぞ。」

「……………反省しております。」

「ならいいんだけど……………ん？」

「？ どうした勇斗？」

「……………どつちら姫のお出ましですね……………がんば。」

「……………姫？」

勇斗の突然の言葉に混乱する上条。

そんな上条の耳に、聞きなれた声が届いた。

「いたいたいたやっと見つけたわよ!!」

声のしたを向けば、常盤台中学の見目麗しい（はずの）女の子、早い話が御坂美琴が、ダッシュで接近してくる所だった。

「まさか……………、あの飛行機の中で感じた痺れる系の不幸はこれの事だったのか……………」

「さあな。」

そんなことを言ってるうちに、御坂が2人のもとに到着した。

「……………アンタ、罰ゲームの事忘れてたでしょ？」

「いや、覚えてたけど。たまたま北イタリア旅行が当たったから行くしかなかったんだよ。」

「……………まあいいわ。」

御坂は一度ため息をついて、しかし口元にわずかに笑みを浮かべて言った。

「罰ゲームよ」

「……………不幸だ。」

がっくりと肩を落とす上条。

勇斗は上条の肩に手を置き、無言で首を横に振った。

「ちょっと!!」 内容まだ言っていないのに何勝手に絶望してるのよ

「!!」

「……………どうせ御坂の事だ。『超電磁砲キャッチボール』<sup>レールガン</sup>だの『新技の実験台』だのそんなもんばかりなんでしょー!? 上条さんはもうわかってるんですよ!!」

「……………まあ、確かに。それも最初に考えたわよ。」

その一言に上条がビクッッ!! っと反応する。

「……………まさか、それ以上がある、だと……………?」

「違っわよ!! えっと、……………今日1日付き合ってもらおうと思っで。」

「「入?」」

御坂のその言葉に、勇斗と上条はそろって間抜けな声を上げた。

「……………ダメかな？」

「うっ……………」

上目づかいをまともにくらった上条がうめく。

(……………なるほど。ホントに罰ゲームをデートにしたみたいだな、御坂。)

先日のやり取りを思い出し、勇斗の口元に笑みが浮かぶ。

そして勇斗は上条の肩をポンとたたくと、

「楽しんで来いよ。」

と言って、その場を後にした。

去り際、目があった御坂に、グッ！っ！と親指を立てたら、とても嬉しそうに微笑んだ。

不覚にも一瞬、上条をうらやましく思った勇斗だった。

「……………そして携帯を教室に忘れるって言うね……………」



上条と御坂のいる場所から立ち去った後、携帯を忘れたことに気づいた勇斗は、あんなふうに出てきた手前、再び上条と御坂に遭遇するのが何かこう………ちょっとアレな感じだったので、職員出入口の方に向かった。

すると出入り口の前、担任の小萌先生と強能力者<sup>レベル3</sup>程度<sup>3</sup>の能力者なら盾一つで叩きのめすというトントンデモ体育系教師黄泉川、そしてもう1人の大人の女性、そして一方通行に打ち止めというちょっと見慣れない不思議な状況を、勇斗は見つけた。

「お疲れ様です。小萌先生、黄泉川先生。………よう、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>、<sup>ラストオーダー</sup>打ち止め。」

「ン？ おウ、勇斗じゃねエか。なんだ、ここの生徒だったのか、オマエ。」

「あー！！ また会ったね、ってミサカはミサカはまさかの再会に喜んでみる。」

「お疲れ様なのですよー、勇斗ちゃん。」

「おう、お疲れじゃん、勇斗。」

「……………ねえ愛穂。この子は？」

「ああ。こいつはここにいる小萌先生のクラスの生徒で、ジャッジメント風紀委員  
やってる勇斗って言うじゃんよ。……………勇斗、自己紹介でもして  
やってくれじゃん。」

「あ、はい。わかりました。」

そうやって勇斗はアクセラレータ一方通行とラストオーダー打ち止めの横に立っている女性の方を  
向いた。

「さっき紹介にもあったんですけど……………ジャッジメント風紀委員やってます、  
千乃勇斗です。」

「私は 芳川桔梗よ。よろしくね。」

「よろしくお願ひします。」

そう言って、勇斗は会釈した。

そして一段落したところで、勇斗は一方通行アクセラレータに尋ねた。

「で……………、どうしてこんなところにいるんだ？」

が、一方通行アクセラレータが答える前に、その質問に代わりに答えたのは黄泉川だった。

「ああ、これからはこの私がこの子+桔梗のお世話をすることになったからじゃんよ。部屋は余ってるし、こっちは居候ができて問題なしだったからね。」

「……………あくまで暫定的だな。」

一方通行アクセラレータはそれに対してつまらなそうに応えた。



その後、勇斗は黄泉川のマンションに向かうという一方アクセラレータ通行達4人、そして職員室へと戻る小萌先生と別れ、教室で携帯を回収し、2回目の下校の途についた。

その途中。

「あ、勇斗先輩。お疲れ様です。」

「あれ……………初春か？」

勇斗は初春と会った。

下校途中のようで、まだ制服姿だった。

「ここで会うのは珍しいな。」

「あ、ですよな。」

にこのこと、初春は答える。

「んー……。よし、初春。もう飯食ったか？」

「いや、まだですけど。」

「おごってあげるけど。飯行くか？」

「!!! いいんですか!!!???」

ガバツ！ という擬音が聞こえてきそうな勢いで、初春は顔を上げた。

「もちろん。」

「（……………まさか、勇斗先輩から誘ってくれるなんて思ってもい  
ませんでした。」

「ん？ どしたん初春？」

「いえいえ！ 何でもないです！ ……………ぜひ、お願いします」

「おっけい。じゃ、まず私服に着替えてからだな。……………30分  
後に、そうだなー、なんか久々にパエリアとか食いたいなー……………  
…。初春、スペイン料理でいいか？」

「はい。いいですよ。」

「よし。じゃあ30分後に オリヤ・ポドリーダ集合でいいか？」

「はい。そこちょうど行って見たかったので、楽しみです。」

「ならよかった。じゃ、また30分後な。」

「はい。」

そして勇斗は初春と別れ、寮へと向かう。

寮では隣人たちの騒ぎを耳に入れつつ（インデックスの咆哮が聞こえてきたのにはさすがにビビったが。）素早く着替えを済ませ、オリヤ・ポドリーダへと向かった。



ep.27 9月30日・2(前書き)

0930 2話目です。

今回は初春回ということでは……

上手く書けたかどうかはわかりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

学生寮から徒歩で10分弱。

オリヤ・ポドリダに到着した勇斗は、初春の到着を待つ。

「……………ちよつと早かつたかな？」

初春と別れてからまだ20分。

約束の時間まであと10分ある。

「……………ま、普段の当麻<sup>アイツ</sup>見てるから多少用心深くなってもしょうがないか。」

上条の不幸に思いをさせ、入り口の前のベンチに座って初春を待つ。

それから5分後、初春が到着した。

「あ、すみません。待たせちゃいましたか？」

「いや、大丈夫だよ。じゃ、入るか。」

「はい!!--」

嬉しそうに顔をほころばせる初春を連れて、勇斗はレストランへと入っていく。

「いらっしゃいませー!」

昼時という事もあって、混雑したレストランの中、ウエイトレスの明るい声がする。

「何名様でしょうか? ……って、初春!? 勇斗先輩!」

「え!?!」「お!?!」

初春と勇斗が間抜けな声を上げ、その視線を向けた先にいたのは、ウエイトレス姿の佐天だった。

「おー、なんだ。佐天ここでバイトしてたのか。」

「はい! そうなんですよ。」

と、佐天はそこまで言うのと初春に目を移し、ニヤツ、と笑い、

「……………勇斗先輩。ちょっとだけ初春借りますよ?」

「ふえ!?!」

初春に肩を回して、ぐいっと顔を近づけた。

「（勇斗先輩とデートだなんて。やるねえ初春くん。）」

「（……………実は先輩から誘われまして。）」

デート、という単語に反応して赤くなりながら、初春は言った。

「（おおおおおっ！！ まったくうらやましいことだなあ！！）」

「（でも……………多分先輩からすれば、これはあくまでただのお食事会ですよ。）」

少しだけさびしそうに、初春は言う。

しかし、佐天はあくまでも明るく、

「（それでもわざわざ2人つきりで食事連れてきてもらってるんだから。年下とはいえ『女の子』を。もっと自信持って良いと思っつよ！！）」

そう言うと、初春の背中を一発、バシッ！！と叩く。

「がんばれ初春。応援してるから!!」

「（佐天さん……。はい、ありがとうございます。）」

そして、佐天が初春を開放する。

「いやー、お騒がせしました。それでは、2名様ごあんなーい!!」

佐天は明るく叫び、勇斗と初春を席に案内した。

「さて……………、何食べたい？」

席に着き、メニューを開いて勇斗は言う。

「うーん、一口にパエリアって言うてもいろいろあるんですねー。」

「だな。」

2人を見るメニューには、シーフード、トマト、カレー、和風……と種々様々なパエリアが並んでいる。

「うーん……………じゃあ私はシーフードにします。」

「了解。じゃあおれは……………トマトだな。」

「あ、いいですね。先輩、デザートはどうしますか？」

「んー……………。お、チュロスのアイス添えとかうまそうじゃん？」

「わわっ。すごくおいしそうですねー!!」

「よし、決定だな。」

ボタンを押して店員を呼び、勇斗がパエリア2つ、デザート2つ、それに、トルティーヤを2つ注文し、それを聞いて、店員が戻っていく。

「今日はありがとうございました。勇斗先輩。」

「うん。どういたしまして。」

「優しい先輩がいてくれて、私、すごく嬉しいですよ。」

「おう。言ってくれるねえ。」

「たまには私だって言う事はしっかり言っんですよ。」

「知ってるさ。」

ふふっ、と笑いあう。

穏やかな時間が過ぎていった。



「お待たせしました！！　こちら、デザートになります。」

数10分後、パエリアとトルティーヤを食べ終えた勇斗と初春のもとに、佐天がデザートを運んできた。

「お、サンキュー佐天。……………なんだコレ。頼んでないけど。」

「おっきいパフェですねー。どうしたんですか、これ？」

頼んでおいたチュロスのアイス添えのほかに、大きなパフェが一緒に運ばれてきた。

「ふっふっふ。サービスですよー、お客さん」

「……………サービス？」

「えっとー。何のサービスなんですか？」

「ふっふっふ。実はこれ！ カップルパフェですー！！」

「……………カップル？」

声をそろえて聞き返す勇斗と初春。そんな2人に佐天は説明する。

「実はですねー、このお店では現在カップルご優待期間でして、男女のペアでお越しのお客様にはパフェをサービスしておりますー！！」

と、そこで一旦佐天は言葉を切って、そしてニッコリ笑顔の営業スマイル&口調で続ける。

「まあ、ただちよつとした条件がございます。これはあくまでもカップルの方々が対象ですので、サービス提供に当たって『この2人はカップルである』事を証明するために、当店では『はい、あーん』を基準とさせていただいております。……………ま、ちよちよつとやってもらえれば、たとえばまカップルでなくても提供できるんですよねー。」

その佐天の言葉に、ふと違和感を感じながらも、勇斗は言う。

「……………ならなんでもう持ってきてるんだ？」

「いやー、普通はこういう事無いんですけど、2人を見た店長が持つて行けど。」

「……………なるほど。」

苦笑して、そしてそう言っつて初春の方に目をやる勇斗。

「どつする初春。やるかー？」

最初に声をそろえて佐天に聞き返してから静かなままの初春に、勇斗は軽いノリで聞く。

だが、

「……………いいんですか？」

と、初春は、ちょっと顔を赤らめ、目を少しだけ潤ませながら、勇斗を見返してきた。

……………上目づかいで。

(ぐはっ!!)

勇斗は心の中で血を吐いた。

(この……破壊力は……半端ない……!!)

どンドン顔が熱くなってくる気がして、勇斗はとっさに初春から目をそらす。

視界の隅っこに、顔をにやけさせる佐天が映っていて、それが余計に恥ずかしさを助長する。

(まあ落ち着け……。まずは深呼吸だ……)

すー、はー、と一度大きく深呼吸する。

……ちょっと落ち着いた。

「……うん、もちろんだよ。」

勇斗の自覚としてはちょっとひきつった表情で、………傍から見ればとても嬉しそうな顔で、勇斗は言った。

「っ……………!」

それを聞いた初春は、少しうつむいて、「……………やっぱり嫌になつたかな？」と勇斗が心配になりはじめたとき、顔を上げて、今まで勇斗が見てきた中で最もいい笑顔で、

「ありがとうございます!」

と言った。

う。……………この人達、青春してるなー。うらやましいなーちくじよ  
)

2人の様子を脇で見ていた佐天は、そう思った。

「……………はいはい。では、『あーん』をやってくれるという事  
でオーケーですか？」

「……………オーケーだ（です）」

少し顔を赤くしながら口をそろえて言う2人を微笑ましく思いなが  
ら、佐天はパフェをテーブルに置いた。

「それでは説明させていただきます。条件ですが、男性から女性、  
女性から男性の両方をやること、とさせていたいただきたいと思いま  
すでは、どうぞ。」

そう言っつて、勇斗と初春に、それぞれスプーンを手渡す。

「あ……………じゃあ私から……………。……………勇斗先輩。はい、あ  
ーん」

初春がスプーンでパフェをすくって、勇斗に差し出す。

「……………2人でならまだしも、第三者さてんがいる前でこれはかなり恥  
ずかしいよなあ。」

普段の調子を取り戻してきている勇斗はそう呟きながらも「んっ」と一息で食へる。

「おー。いい食べっぷりですね。」

「どーも。……………よし、次はおれだな。」

勇斗はそう言って、スプーンでパフェをすくって、初春の前に差し出す。

「ういはるー。はい、あーん。」

余裕が出てきたのか、自然な感じの笑みを浮かべて、勇斗は言う。

それを見て初春は顔を真っ赤にしていたが、意を決したように、

「んっ」

と、一息で食いついた。

が、そのとき。



パシャ！！ というシャッター音が鳴った。

びくつ、とした2人が音の方を振り向くと、佐天がカメラを構えていた。

「……………何してんの？」

「いやー。言い忘れてたんですけど、撮影サービスつてのがあったんですよねー。もちろん現像して2人にお渡しいたしますし、微笑ましい写真であれば、店内に飾らせていただきますー！！」

カメラ片手に、ニッコリ、いやニンマリとした笑みを浮かべて、佐天は言った。

「あー、今回はとっても微笑ましーい写真が撮れましたので……………  
…、これはお店に飾られるかもしれないですね」

初春の顔が、一瞬でゆでだこのように真っ赤になった。

「……………なんか、精神的に疲れました……………」

「奇遇だな初春。おれもだ……………」

現在時刻は14:00.

勇斗と初春は食事をすませ、公園に来ていた。

……………というか、写真を撮った後、にやにやしながら勇斗と初春をいじってくる佐天から避難にげだしてきたのである。

しかし、もちろん会計で、『あーん』の写真は渡されている。

……………写真を手渡す時のレジの店員さんのにやにや顔が、忘れられない。

「……………ま、でも。」

勇斗は、渡された写真を取り出して、それを見る。

作り笑いでもなんでもない、心の底からあふれてきたような笑顔で、『あーん』をする勇斗と初春が写っていた。

「喜んでくれたみたいで嬉しいよ、初春。」

そう言って、勇斗は初春に笑いかけた。

「あ、……………えっと……………」

初春は、顔を真っ赤にしながら、口を開く。

「……………はいー！！嬉しかったです　この写真、大切にします

ね!」

にっこりと、笑顔を見せる初春。

「……………っ!」

なんだかおかしい。初春に笑顔を向けられるだけで、顔が赤くなる。

(……………さっきのあれで、初春に惚れたかね)

勇斗は心の中で考える。

(……………ま、それは……………大歓迎なんだけども。惚れ直したよ  
うなもんだし)

そこまで考えが及んだところで、勇斗に声がかかった。

「勇斗先輩? どうしたんですか?」

……………どうやら考えに没頭しかけていたようだ。

その声で、意識を外面に向ける。

「いやいや。何でもないよ。……………さて、これからどうしようか。」

完全下校時刻まではまだまだ時間はある。

別れて帰るといふ選択肢はさらさら無かった。

今一緒にいて、勇斗は心地よさを感じているから。

そして、それは初春も同じだった。

一緒にいて嬉しい。心地よい。

だからこそ、勇斗に

「よし、もっとどっかにデートに行こう。」

と言われて、断るといふ選択肢はさらさら無かった。

「はいっ！！」

今日何度目だろう、満面の笑みで、初春は答えた。

e p . 2 7 9 月 3 0 日 . 2 ( 後 書 き )

そろそろ、次くらいにはもつきな臭くなる予定です。

ep.28 9月30日・3(前書き)

前話に引き続き、前半は 男性陣が女性陣の笑顔に心奪われる話。  
後半は いよいよ始まる科学vs魔術の戦いの幕開けです。



現在時刻は17:00。

勇斗と初春、そしてそれに白井を加えた3人は、ジャッジメント風紀委員177支部にいた。

「……………なんなんだ、これ。」

「……………」

目の前の光景のあまりのひどさに、勇斗はぼやき、初春は言葉を失い目を白黒させる。

「さっさと取りかからないと徹夜になるらしいですよ。」

「うげっ！！」

「……………ですよねー。」

3人の前にあるのは、事務書類と会計書類と指示書類の束、いや山、いや山脈とでもいうべきだろうか……………とりあえず、とんでもない量の未処理の書類の塊だ。

生半可な量ではない。

「……………さつさとやるか。」

「はい……………」

勇斗がポツリと言葉を漏らし、初春と白井がそれに応えた。

…………… いったいなぜ、デートをしていたはずの2人が、こんな所でこんな大量の書類と向き合う羽目になっているのか。

少し、時間は巻き戻る。

……………

……………

……………

……………

16:15

公園を出た後、2人でぶらぶらと散歩しながら、カラオケ、買い物と、一通りデートを楽しんでいた勇斗と初春は、地下街のゲームセンターにいた。

「勇斗先輩、その……………、一緒にプリクラ撮りませんか？」

と、初春が勇斗にお願いしたからだ。

特に断ることなく、むしろ喜んで、勇斗は初春と連れ立ってここに  
来ていた。

「……………先輩、今日はほんとうにありがとうございます」

プリクラを撮り終わり、現像を待つ間、初春は言った。

「いえいえ。どういたしまして。」

笑って、勇斗は言う。

「初春が今日付き合ってくれたから、おれも楽しめてるよ。」ちら  
こそありがとう。」

「どういたしましたか、ですね」

ふふっ、と笑いあふ。

ちょうどその時、現像が終わり、写真が出てきた。

「お、よし、じゃあ分けるか。」

「はい!!--」

そう言って、2人ははさみの置いてあるテーブルへと歩く。

「……………ん?」

「? どうしたんですか?」

「……………いや、何か見慣れたやつらがいる気がする。」

勇斗の目線の先、そこにはどこかで見たようなツンツンうに頭と、  
某お嬢様中学の制服を着た栗色の髪の少女がいる。

「あれって……………、上条さんと御坂さんですか!?!?」

ちよつと声が大きかったのだろう。その声で上条と御坂がこっちに  
気づいた。

「あれ……………、初春さん?」「……………勇斗?」

「どーもー。」「よっす。」「

そう言って、勇斗と初春は2人のもとに近づいていく。

「いやー、デートは楽しかったかな、君たち。」「

勇斗は上条と御坂に言う。

「……………っ!」「」

その言葉に、そろって2人は顔を赤くする。

「ふんふんなるほど。その様子を見るに、なかなか楽しいデートができたみたいだな。なーういはるー。」「

「ですよねー。」「

その様子を見て、勇斗と初春はにやにやを深める。

「そっ、そんな……………、いつと、デートだなんて、いせ、デートはしたけど……………」

うつむいて、耳を真っ赤にして、何事かを呟く御坂。

「なっ、なら!! 勇斗達はとうだったんだよ!？ お前らだってその様子じゃデートしてたんじゃないのか!？」

どもりながら、何とか反撃の糸口をつかもつとする上条。

それらに対して、勇斗と初春は、

「ああ、してたよ。楽しかったさー。な、初春。」

「はい!! とっても楽しかったですよ」

わずかに顔を赤くはしているが、にっこりと笑って、あっさりとそれを認めた。

「もっと素直になれよおまえらー。」

「ですよねー。」

勇斗と初春はそう言った。

……………と、そこへ。

「なんだかいろいろととっても面白そうな状況になってるみたいだからミサカも混ぜてっ！！　ってミサカはミサカは背中に飛びついてみる！！」

との声が聞こえ、勇斗の背中に急に何かが飛びついた。

「うおっ！？　この声は……………ラストオーダー打ち止めか！？」

「正解だよー、ってミサカはミサカは見事正解したあなたを労つてみる。」

背中に加わる、のしっ、とした重みと背中を伝う丸っこい感触。

ラストオーダーそのせいで背中がぞわぞわした勇斗は、それから逃れるために打ち止めを背中から降ろす。

「あー！！　せっかくの安定感を誇ったミサカの定位置があっさり拒絶されたっ！！　ってミサカはミサカはわなわな震えてみたり



っ！！」

「ごめんごめん。背中ぞわぞわして。代わりにこいつの背中に乗ってなー。」

ひよい、と勇斗は打ち止めを抱き上げると、そのまま上条の背中に乗つけた。

「おー！！ 素晴らしい安定感！！ ここ、ミサカの定位置に決定だ！！ ってミサカはミサカは宣言してみる！！！」

と、嬉しそうにはしゃいでいる。

ここで、勇斗は残った3人に目を移す。

ちよっとうらやましそうな表情をしている初春。

面食らいながらも、少し複雑そうな表情をする御坂。

何が何だか全く分かってない表情の上条。

(説明しないとな……………)

勇斗は思った。

シスターズ  
妹達の件を知らない初春がいるため、あたりさわりのない範囲で説明をした。

- ・彼女は御坂の従妹である
- ・学園都市で生活し、能力はレベル3の発電能力であること。
- ・大覇星祭期間中、迷子になっていた時に初めてあった。

という、少し嘘は混じっているが、まあほとんどは正しい説明だ。

「へー。そうだったんですか。」

初春が打ち止めをじーっと見ながら言う。

「ミサカをそんなにじーっと見ているあなたは誰なの？ ってミサカはミサカは聞いてみる。あ、ミサカは打ち止めて言うんだよ、ってミサカはミサカは自己紹介してみたり。」

「あ、ごめんね。私は勇斗先輩と同じ、シヤッジメント風紀委員の初春飾利です。えっとー……よろしくね、アホ毛ちゃん」

「！？ ミサカの識別名は打ち止めラストオーダーであってそんな名前じゃないもん！！ ってミサカはミサカは抗議してみたり！！」

その言葉を聞いているのかいないのか、初春は打ち止めのアホ毛を触って、おー、とかやっている。

その様子を勇斗は微笑ましく見守っていたのだが、

「……………お、初春。そろそろ行くか。映画始まっちゃう。」

ふと、時計を見て、言った。

勇斗と初春の次の予定は映画だったのだが、気づくと時間は少々ヤバイ事になっている。

「あー！！ ですね。それじゃあ、また会いましょう、アホ毛ちゃん

上条さんも御坂さんもデート楽しんでくださいー!」

そう言って、勇斗と初春はゲームセンターを出て行った。

「だからミサカの識別名は打ち止めなんだって言ってるじゃないか、ってミサカはミサカは……………」

ラストオーダー  
打ち止めが叫んでいるその横、上条は呟く。

「あの2人って、付き合ってたっけ……………」

「多分付き合ってたはずだけど……………」

御坂が応えた。

「そうか。……………仲良いよなアイツら。」

「……………うん。」

わずかな羨望が浮かぶ表情で、御坂は言う。

「……………御坂。」

「……………何？」

「……………また今度さ、遊び行こうぜ。誘ってくれてもいいからな。」

上条は、そう言って御坂に笑いかける。

「……………っ！！ うん！！！」

最初は御坂も驚いていたが、大輪の笑顔で、その言葉に応えた。

現在時刻は16:40。

勇斗と初春は第7学区の映画館の前にいた。

上映開始は16:50である。

「よし、チケット買ってさっさと入ろうか。」

「はい!!--」

そう言って2人は建物の中に入ろうとする。

.....と、そこへ勇斗の携帯に着信が入る。

「ったく、誰だよ……って、固法先輩!？」

急いで勇斗は電話に出る。

「もしもし千乃です。」

『あ、千乃君？ 実は、ちょっと頼みたいことがあって。』

「何でしょう。」

『いや、本当だったら非番のあなたに頼むのは悪いんだけど……  
……ほら、今月って何かといろいろあったじゃない?』

「ええ……、まあ。」

『そのせいでかなりの量の書類が増えちゃってるのよ。しかもちよ  
うど前後期の切れ目で書類が多いのに。だから、その事務処理手伝  
ってくれないかなーと思って。』

「あー……、ちょっと待ってください。」

そう言って、勇斗は1度携帯から顔を離し、初春の方を向いて言っ  
た。

「固法先輩からのお助け要請だった。映画はまた今度かなー。」

「あー……それは仕方ないですね。」

残念そうに、初春は言う。

「あ、……私の携帯に連絡入ってました。……あれ？ 勇斗先輩にも一斉送信できてますよ？」

「……マジ？」

『それ、やっと気づいたの？ まったく、い……く……ら……デ……ー……ト……の……最……中……だ……か……ら……っ……て。ちゃんと携帯は確認しなさい。』

なんだか聞き過ぎせないセリフが聞こえた気がする。

「……あれ、何でデートしてるって知ってるんですか？ 固法先輩。」

『そんなの途中からばっちり見てたからに決まってるじゃない。うらやましいわね、デート。』

「……プライバシーは？」

『シヤッシヤメン風紀委員だからいいのよ。』



「そーゆーのをきつと職権乱用って言うんですよね……………」

勇斗は、はー、と一息ため息をついて、

「まあわかりました。これから初春と一緒に177支部に向かいま  
すんで。」

『ありがとう。お礼に映画のペアチケットあげるから、今度はこれ  
使っって見に行きなさい。』

「あ、はい。ありがとうございます。では、また後で。」

勇斗は電話を切り、初春に向かって言った。

「と、言う訳で……………行くか。」

「ですね……………」

あはは、と苦笑いを浮かべて、2人は177支部へと向かった。

16:55

勇斗と初春の2人は177支部へと到着した。

「お疲れ様ですー。」「お疲れ様ですー。」

そう言って入り口をくぐり、中に入っていく。

すると中には、ツインテールな常盤台少女白井しかいなかった。

「あら、どうやらお楽しみだったようですね。」

「うるせー。……で、固法先輩は？」

「坂本先輩と一緒に夕食のお弁当を買いに行ってますの。わたくしも書類は見ましたが、……………あれはひどかったですわね。」

「……………あの2人+白井+おれ+初春でやって、確実に夕食が必要になるようなレベルなのか!？」

坂本先輩というのは、勇斗の1学年上で、固法と同じ年の男の先輩だ。

能力はレベル3の念動力テレキネシスである。

……………ところで、この風紀委員ジャッジメント177支部というのは、全風紀委員ジャッジメントの中でも、情報処理などの面で非常に優れている。

それはなぜか。

理由として挙げられるのは、その支部にいる学生たちの演算能力による。

レベル4である勇斗に白井、レベル3の坂本に固法とレベル3以上が4人。

加えて、能力強度自体はレベル1ではあるが、レベル3かそれ以上にもなる演算能力を持つ初春。

これだけの面子がそろっているため、基本的に仕事は早いのだ。

しかし、今回はそんなこと関係なしに時間がかかるらしい。

「あれですわよ。」

と、白井に言われ、白井の指がさす方を見る。

「……………なんなんだ、これ。」

「……………」

目の前の光景のあまりのひどさに、勇斗はぼやき、初春は言葉を失い目を白黒させる。

「さっさと取りかからないと徹夜になるらしいですわよ。」

「うげっ！…！」

「……………ですよねー。」

3人の前にあるのは、事務書類と会計書類と指示書類の束、いや山、いや山脈とでもいうべきだろうか……………とりあえず、とんでもない量の未処理の書類の塊だ。

生半可な量ではない。

「……………さつさとやるか。」

「「はい……………」」

こうして勇斗、初春、白井の3人は、いつ終わるともしれない、書類の整理を開始する。

ここで、話は冒頭に戻る。

その10分ほど後、坂本と固法の2人が弁当を買って、帰ってきた。

「おう千乃。来てくれたのか。悪いな、お楽しみのところ邪魔しちゃって。」

「くそっ!! ダメだこの人も職権乱用してやがる!!」

坂本の言葉に、勇斗が思いつきり反応する。

「でもまあいいですよ。……この焼肉丼さえもらえればっ!!」

「ばっ!?! てめ、それは俺のもんだ!!」

「はははー!! 知りませんよそんなの。初春!! 早く選んで職権乱用なんかする悪い先輩を困らせてやれ!!」

「はい!!　じゃあ私はこの中華丼で。」

「え、ちょっとそれは私が食べようか……!!」

「「はははー、自業自得じゃー」です!!」

そのバカ騒ぎを横目に、白井は

「……………これは、ダメかもしれないわね。」

と、1人、ため息をついた。

学園都市外部、第3ゲート前。

そこに、全身黄色の服装をした女性と、黒づくめの服装の男性がいた。

「……………やっぱりおまえ、ついてきたの？」

「ああ、まあな。」

女性　　神の右席、前方のヴェントが問いかけ、男性が答える。

「……………私の術式があれば助けなんかいらないうって教皇サマには言っておいたんだけどなー。くそ、雑魚が。余計なことを。」

「そうカツカすんなヴェント。アイツの指示じゃねーよ。つーか、俺みたいなやつが教皇様にお呼ばれすると思ってるのか？ この、悪魔の力を使う、俺が。」



「……確かにね。」

「俺の目的は、同類の調査兼お前の手伝いさ。お前が『右席』に入  
ってからはめつきりなかったから、久しぶりだぜ。」

「ふん。せいぜい足を引つ張らないように気を付けるんだな。……  
ベラナバス。」

そう、言葉を交わすと、2人は歩きだす。

『外』と『中』を隔てるゲートに向かって。

勇斗達はあの後しばらく現実逃避を続け、さすがにまずいことに気づき、作業を再開していた。

そしてそれから、ひたすら無心に作業を続け、約2時間。

現在時刻は19:00

「あー……………疲れたー……………」

勇斗はそう言って、席を立ちあがる。

「そろそろ晩飯にしましょう。晩飯。」

「んー、そうだな。そうするか。」

など言っつて、残り4人もそれぞれ立ち上がる。

結局、晩ご飯争奪戦は勇斗と初春の強奪が成功した形で決着がついた。

ので、勇斗が焼肉丼、初春が中華丼を取り、残りの各人も各々の分の夕食を取り、応接スペースに集まる。

「……………残り3分の2、くらいですかね。」

作業スペースのテーブルを見て勇斗は呟く。

「だな。まだまだ残ってるぞ。」

「えっと、2時間で全体の3分の1ってことは……………やっぱり日付超える羽目になりそうですね……………」

「……………全く、だるいことこの上ありませんわね。」

「はあ。夜更かしは健康の大敵なのに……………」

それに反応し、坂本・初春・白井・固法の順で返答が帰ってくる。

はああ、と5人そろって大きなため息をついた。

そして5人が夕食に手を付けようとする。

と、その時、

ピ　ピ　と、スピーカーが鳴り、続いて機械の音声がこう告げた。

「コードレット第一級警報を発令します。アンチスキル警備員、及びジャッジメント風紀委員の皆さんは緊急事態の対処に当たってください」

突然のコードレット第一級警報の発令に5人は面食らった。

「チツ……初春！　パソコン！！」

「はい！！」

勇斗が叫ぶと、初春はパソコンを起動し、学園都市のセキュリティシステムにアクセスする。

「……………来ました！　……………18時33分、学園都市の第3ゲートが物理的に突破され、何者かが学園都市内部に侵入しています！！」

初春がそう叫ぶと、残る4人がその画面に注目した。

「……………これが、先程監視カメラに映った侵入者の映像です。」

そう言っただけで見せられたモニターには、全身黄色い衣装で身を包んだ人間が映っている。

初春は続けて言う。

「侵入と同時に、……………おそらくこの人物が放ったとみられる正体不明の攻撃で、アンチスキル警備員、及びジャッジメント風紀委員の大部分が壊滅状態になっているようです。……………いったい何が……………っ！！??？」

「!? 初春!!」

突然、初春が糸の切れた操り人形のように支えを失い、椅子から転げ落ちかける。

それを何とか抱きかかえ、床との激突を防ぐ。

「初春!! 初春!!」

すると、それにつられるように、白井、坂本、固法の3人が、同じように倒れる。

「!?!? 一体何が起こってんだ!?!?」

そつと、ソファアーに初春を寝かせて、それから4人の呼吸を調べることが、異常はない。

どうやらただ気絶しているだけのようだ。

しかし、どうやっても目を覚まそうとしない。

(くそっ!! 何なんだよこれは!!)

勇斗は心の中で悪態をつき、そしてパソコンの画面の中の黄色い侵入者の姿をにらみつける。

敵意が、侵入者に向く。

その瞬間。

ゾーン!! と勇斗の脳に、唐突に衝撃が走る。

「が……ッ!？」

全身から力が抜けていく。

体の芯から指先まで、全ての力が抜けていく。

(なんだ、……これ)

と、今度は急速に視界が狭まりだす。

(な、にが……起こってる)

訳の分からないまま、理解が及ばないまま、勇斗の意識が落ちていく。

(ぐ、くそ、が……)

しかし、このまま抗うことができずに終わるかと思ったその時、

ドッ!……!

つといつ音が響く。

「くそっ……」

声が出る。体に力が戻る。

その勇斗の背には、少し青みがかった無機なる白色の翼が、

頭上には同色の輪っかが現出している。

「……なんなんだ？」

今の瞬間、勇斗には演算をする余裕などなかった。

ほぼ無意識に、その翼と輪っかは現れた。

あたかも、正体不明の、何らかの力によって、体から押し出されたように。

そして、現出と同時に、勇斗を縛める、その謎の力を破壊して。



「……………」

ようやく戻ってきた思考能力をフルに使い、勇斗は考える。

この身に宿る翼に異常が現れるという事が一体何を表すのか。

思い出す。

9月19日、そして、9月27日、それぞれ何があったのか。

「多分……………」

思考がまとまり、一つの回答が導き出される。

「これは……………魔術攻撃だ……………」

つい先日、土御門の言葉は早くも現実となり、今ここに、科学と魔術の死闘の幕が上がった。

e p . 2 8 9 月 3 0 日 - 3 ( 後 書 き )

累計アクセスは 90,000アクセスを超え、累計ユニークも  
10,000人を超えました。

読んでくださっている方々に、多大なる感謝を…… ^^

e p . 2 9 9 月 3 0 日 - 4 ( 前 書 き )

ちよつと展開が強引過ぎたかもしれませんf^^;

ご容赦をば.....

9 / 2 8 若干ながら改稿

勇斗は177支部を出た。

魔術攻撃であることは分かったが攻撃の原理が分からないため、  
気絶した4人に更なる危害が起こらないようにするためだ。

(くそっ!! 何考えてやがる侵入者!! ..... ツ!!)

ドンッ!! っと音が響く。

(またか.....)

勇斗は思う。

謎の攻撃を勇斗の力が打ち消す音。

現在、学園都市を覆っている、魔力。

それを源にして放たれる不可視の攻撃を、勇斗が寄せ付けない音。

177支部を飛び出した後、何度も何度もこの音が響いている。

故に、必然的に能力使用状態、早い話が翼と輪っかを出しっぱなしの状態を維持せざるを得ず、

(……………敵さんからすればもったいのだよなあ……………)

奇襲を警戒しながら、一步一步で10メートル以上ずつ、飛ぶように学園都市を飛び回る。

所変わって、窓のないビルの内部。

モニターに映る、飛び回る勇斗、それぞれ歩き回る黄色づくめと黒づくめの魔術師。

それを見ながら、アレイスターは笑みを浮かべていた。

「これほどまでに早くこの街に来てくれるとはな……………愚かな魔術師諸君ら。」

アレイスターは心底嬉しそうに続ける。

「面白い。最高に面白い。これだから人生はやめられない。プランに縛られた現状では、イレギュラーこそ最大の娯楽だな。」

フッフ、と声が、静かなビル内に響く。

「虚数学区・五行機関の展開によるヒューズ<sup>II</sup>カザキリの現出実験。  
ベクトル制御装置へのAI<sup>M</sup>拡散力場の数値入力。  
イマジンプレイカー幻想殺しの成長。

ハイブリッドの魔術への自由干渉、そして暗部への再回収。全て、済ませてしまおうか。」

そしてアレイスターは、『作業』を再開する。

生命維持装置の中、動くことなく操作命令を飛ばし、暗部組織へと指示を出す。

「……………さあ、魔術師。この街の本質を知るがいい。」

笑みと共に紡がれたその言葉は、闇に消えていく。



学園都市の内部を、勇斗は飛び回っていた。

(……………やっぱり。この感覚、魔術だな)

おそらく、学園都市を覆うように広がる魔力を、勇斗は感じ取る。

(まずは術者を探すのが先決。……………しかし、どこにいるんだ？)

魔力が放たれているのは分かる。

しかし、出所がつかめない。

そんなとき、

勇斗は、ふと、魔力を感じた。

(……………これは……………)

今、学園都市を覆う、『謎の攻撃』から感じる魔力とは違う、これは、もっと禍々しい。

それに、

(……………この力、あの時おれが使った力と似てる……………)

自分が内包する力と似た力を感じて、力が泡立つ感覚がする。

あの時、9月19日。

突如現出したゆらぎと、更にそのゆらぎを手掛かりに顕現した、天使の力。

それと、感じる力の根底……………根つこの部分がとてもよく似通っている。

(現状での手がかりはこれしかねえ。……………行くしかないか。)

勇斗は方向を変え、翼をはためかせ、地を蹴る。

一瞬で、勇斗の姿がかき消えた。

第18学区。

霧ヶ丘女学院、長点上機学園といった学園都市トップクラスの学校があるこの学区の道。

そこを黒づくめの男、

魔術師ベラナバスが歩いていた。

降り出した雨に、体をぬらしながら、静かに歩いている。

そしてふと、顔を上げる。

「……………来たか、同類。」

彼が顔を上げると、突如、前方に人影が現れる。

背から延びる青みがかった1対2枚の白銀の翼、頭上には同色の輪っかを持つ少年だ。

「……………へえ。やっぱりこいつはそっちなのか。」

ベラナバスは、唇を吊り上げ、そう呟いた。

勇斗は感じ取った魔力をたどり、第18学区に入った。

飛び続ける勇斗の視界を、街並みがすごいスピードで流れていく。

すると、勇斗は前方に黒づくめの服装をした人物が立っているのに気付いた。

勇斗がたどってきた魔力は、その人物から放たれている。

(……………あいつか)

警戒し、十分な距離を取って勇斗は立ち止まった。

「……………何の用だ、魔術師。」

勇斗はその人物に向かって話しかける。

しかし、その人物は答えようとせず、肩を小刻みに震わせ笑っている。

「……………なるほど。学園都市に天使がいるっていう未確認情報を聞いてはいたが、まさかこいつのことだったとはなあ。なるほどなるほど。」

「聞いてねえし。」

「ああ、いや。悪かったな。ちょっと自分の才能と運の良さに喜んでいただけさ。」

そう言って、その男は勇斗を見据える。

「俺はローマ正教の中の異端中の異端の魔術師、ベラナバス。こんにちは、……………いや、こんばんはかな、千乃勇斗君。」

「……………!?!」

「おっと、そう身構えるなよ。人の名前なんて、ちょっと本気出せば簡単に調べられるさ。」

飄々とした態度で、ベラナバスは言う。

「……………そうかい。で、何の用なんだ。」

「……………ああ、そうだったね。今回、魔術師がこの街に侵入したのは他でもない。『神の右席』が、直々に上条当麻を排除するためさ。」

「………つまり、この街にケンカ売りに来た、ってことでいいのか。」

「まあ、そういうことさ。けど意外だねえ。君の友達を殺しに来たって言ってるのに、ちょっと驚くくらいだなんて。もっと反応してくれると思ったのに。」

「フン……………今までアイツがしてきたことを考えれば十分予想はできるさ。……………それに、アイツはそう簡単にくたばるような奴じゃないからな、なんとかするだろ。それより気になるのは……………」

と、一旦言葉を切って、それから勇斗は言う。

「お前の目的は何なんだ？」

じっと睨み、続ける。

「もしお前の目的もそれと同じなんだったら、多分この街を覆つて  
る魔術の術者と一緒になつて暴れまわつてるだろ。少なくとも、こ  
んな所で魔力垂れ流しにしたまま突っ立ってるなんてありえない。」

「……へえ、よく考えるね。いかにも、今、街中で暴れまわつて  
るのは上条当麻を殺しに来た『前方のヴェント』だし、この『天罰術  
式』の術者も彼女だ。そして、俺の目的は若干彼女とは違う所もあ  
る。」

「ご名答だよ、と彼は付け足し、そして更に言葉を続ける。

「彼女、ヴェントの目的とは違う方から済ませておこつと思っ  
てね。」

「……で、結局。お前の目的は何なんだよ。」

「君だよ、千乃勇斗。いや、正しくは君の力というべきか。」

ベラナバスは即答する。

「俺は実はローマ正教の中で悪魔について調べる仕事をしていてね。  
……まあ、だからこそ異端なんだが、俺みたい人間も必要なのさ。」



……神に齒向かいしもの。敵をよく知るためにな。で、そのためのデータが少なくて、色々とデータを集める必要があった。それで……、光<sup>ルシフェル</sup>を掲げる者たる君に協力してもらいたいんだ。」

「……………何故、おれの力が光<sup>ルシフェル</sup>を掲げる者だと知ってるんだ？」

「ふふふ、何故か。」

ベラナバスは不敵に笑う。

「それは簡単。俺と、君が、同類だからさ。」

「は？」

「呼び出し、借り受けるのではなく、その身に直接墮天使の力を宿し、それを振るうもの。十字教世界における、異端中の異端。さげすまれるべき存在。しかしそれでいて、貴重な検体。故に、深い所で何らかのつながりを持つ。……………俺は天才だからな、『力』をたどれば、そういう人間を探すくらい造作もない。……………いきなり同類と言われてもわかりにくいかな。なら、その目で確かめな。」

反応を返す間もなく、言い終わると同時。

ゾグン！！ と体の内側に直接氷を突っ込まれたかのような悪寒が走る。

ベラナバスの体から、見えない何かが噴き出したのだ。

両足は地面に縫い付けられ、胃袋に鉄球をぶち込んだような感覚がする。

ビリビリと、体の内側が震えるような感覚。

ズバン！！ と、ベラナバスの背中が爆発した。

その背から飛び出したのは、漆黒の翼。

それは圧倒的な禍々しさを秘めた、6枚の翼。

今は夜。

ただでさえ暗い夜の闇、それが一段と濃さを増していく。

勇斗の体が、緊張で凍りつく。

手のひらは気持ち悪い汗でぐっしょりと濡れる。

「何、驚くことは無い。」

あくまで、軽く、ベラナバスは言う。

「この力も、お前が内包する力も、もとは同じだ。ただ、俺のこの力が、光ルシフェルを掲げる者の悪魔だてんしとしての性質を極端に表し、お前が内包する天使テレスマの力が、光ルシフェルを掲げる者の天使としての性質を極端に表してるっていうだけなんだからな。」

ハハツ、と笑うベラナバス。

「俺のこの力はまだまだ未完成なんだ。だから協力してくれると嬉しい。……………あ、そうそう。別に協力的じゃなくても構わないんだ。たとえお前が死んでいようと力の解析はできるからな。そうすれば、ヴェントの手伝いにもなるし。さあ、どうするんだ？」

「……………そこまで言われて、わかりました、とかいってついてく奴がいるとでも思ってたのか。」

「いや、思ってたないさ。」

あっさりと、ベラナバスは言った。

「今言っただろ？ お前が死のうが構わないと。……異端中の異端ではあるが、俺だつて魔術サイドの、ローマ正教の人間さ。『天罰術式』……神の判断を跳ね除ける、ローマ正教の邪魔をする異教のサルどもなんざ、どうでもいい。つまりだ。」

両手を広げ、空を仰ぐ。

「お前を殺せば一石二鳥だ。取りあえず、死ね。」

死闘は、突然に幕を開ける。

黒い6枚の翼が、勇斗のもとに殺到した。

必殺の翼、それがアスファルトを砕き、土煙を上げる。

「…………外したか。」

勇斗は、音速を超えるスピードで、それらを全てかわしていた。

回避しながら、勇斗もその翼を振るうが、全て受け止められる。

翼1枚を構成する力の量は、わずかに勇斗が勝っている。

しかし、勇斗は1対2枚の翼。

対するベラナバスが振るう翼は3対6枚だ。

単純に手数で負ける。

現に、勇斗が振り下ろした翼は、4枚の翼で十二分に受け止められ、残る2枚の翼が勇斗に迫ってくる。

「チツ……!!」

地を蹴ると同時、翼の『力』を炸裂させて、勇斗は一気に距離を取る。

「今のは……」

至近で『力』を浴びたベラナバスは不思議そうな顔をする。

「……フン、どうしたよ。」

「……試してみるか。」

勇斗の言葉に対して、ベラナバスは返さない。

ただ、独り言を呟くのみだ。

「おい……ッ!?!?」

バンー!! とベラナバスの背にある翼が弾け飛ぶ。

全てを塗りつぶす漆黒。

それが、空気を走り、レーザーのように飛んでくる。

「……ッ!!」

幾本も放たれたそれを、勇斗は身体能力でもってかわしていく。

と、レーザーが止み、動きを止めた勇斗は、ヒュッ、という風切り音を聞いた。

見れば、再び現れた漆黒の翼が、虎ばさみのように勢いをつけて、勇斗の方へと向かってくる。

「チッ!!」

勇斗はとっさに、その背の翼で受け止める。

「ぐ……ッー！」

6枚の翼全てを使ったその攻撃の衝撃全てを受け止めきることはできず、勇斗は弾き飛ばされる。

「……………なめんなよっ！！」

弾き飛ばされ足が地に着く瞬間、強く地を蹴り、一瞬でベラナバスの背後へと回り込んで、そのスピードを乗せた蹴りを放つ。

ベラナバスは吹き飛ばされ地を転がるが、それほどダメージは無いようで、あっさりと立ち上がった。

擦り傷を少し負っているが、それだけ。

どうやら、身体強化も十分らしい。

「……………その音速を超える移動速度、聖人にも匹敵する。しかし、解せないな。お前の翼を構成するその力。純粹な光ルシフェルを掲げる者の天使テレスマの力じゃないな。むしろ、大元は天使の力じゃない。……………まさかお前、使いこなせてないのか？」



「……………ああ、そうみたいなんだ。残念だよ。あんたたちがもつと遅く来てくれてれば、使いこなせてたのかもしれないのに。」

皮肉を言うように、勇斗は言い放つ。

が、それを聞いてベラナバスは、少し安心したように、フッ、と短く息を吐くと、口を開く。

「……………運が良かったぜ。面倒になる前にお前を殺せるみたいだな。」

瞬間、ベラナバスの力が跳ね上がった。

「!?!?!?!」

勇斗は、目を見開く。

しかし、反応することは許されない。

ドドッ!… っと、何かが肉を突き破るような音がした。

見れば、漆黒の翼が2枚、勇斗の胸と腹に突き刺さっている。

「ぐ……ぼッ……!!??」

血を吐き、そして顕現させる力を失ったのか、勇斗の翼と輪が溶けるように消えていく。

「……………で、だ。せつかくだからな。この力、貰ってくぞ。」

体内に直接触れるその翼が、強引に勇斗が内包する天使の力へと術的なラインをつなぐ。

「ぐ、おああああああ!!?」

「ハッ、俺の研究の礎になって死ぬ、千乃勇斗。」

少しずつ、内包する力が移動していく。

(くそ!!… どうか、しないと……………)

少しずつ、少しずつ、天使の力が翼を伝って、ベラナバスへと流れっていく。

猶予は、もう少ない。

ep・29 9月30日・4（後書き）

次話あたりで、勇斗君覚醒の予定。

こっご期待！！

……………ほむほむ。

e p . 3 0 9 月 3 0 日 - 5 ( 前 書 き )

少し短くなりましたが、なんとなく、ここで区切りました。

物足りないかもしれませんが、急いで続きを上げるので、ご容赦くださいませ

f ^ ^ ;

自らを貫く漆黒の翼。

そして、奪われていく自らに内包された力。

「……フン、これだけあれば充分だろ。」

そう言ってベラナバスは、勇斗から翼を引き抜く。

途端、血が吹き出し、支えを失った勇斗は地に転がった。

「……くそ、質が違いすぎるな。いくら元が同じでも、さすがにこれはすぐにはまとめきれないか。」

ベラナバスは吐き捨てるように言う。

(これは……致命傷だ……)

その言葉を感覚の隅で聞きつつ、勇斗は考える。

漆黒の翼は胸と腹を貫き、体の中の重要な臓器、血管、その他諸々のものをことごとく引き裂いた。

その上、とどめとばかりに、内包する天使テレズマの力や魔力も、半分以上奪われている。

意識も、何とか保とうとするだけで精一杯だ。

しかし、それでも意識はどんどんと薄れていき、勇斗を「死」へと誘う。

状況は、絶対絶命。

このままでは、勇斗はいずれ死ぬ。

それは、疑いようのない事実だ。

だが、

（まだ……だ……）

薄れていき、ぼやけ始める意識と視界を気力で奮い立たせる。

力が抜けていく体に鞭打って命令を送る。

（まだ……なんだ……よ！）

投げ出された手に再び力を込め、地面を掴み、強く思う。

立ち上がる。

（まだ……諦めるわけには……いかないんだ！！）

学園都市このまちを、

自分にとって大切な人達の居場所を、

アイツが笑顔を見せてくれる居場所を、

守るために。



勇斗は立ち上がった。

……そして、世界が暗転する。

自らが呼び起こした漆黒の翼が、目の前の少年に突き刺さっている。

その翼を媒介にして、少年に内包された力を奪っていく。

「……フン、これだけあれば充分だろ。」

そう言っつて、ベラナバスは勇斗から翼を引き抜く。

だが、ベラナバスはその奪った力と自らが持つ力が、競合しているのを感じた。

元は同じもののはずなのに、混ざり合わない。

「……くそ、質が違いすぎるな。いくら元が同じでも、さすがにこれはすぐにはまとめきれないか。」

ベラナバスは吐き捨てるように言う。

しばらく『研究』でもすればまとめられるのだろうが、性質の違いのせいで、今すぐに統合はできない。

無理にまとめれば、反発しあって起爆する危険をはらんでいる。

(まあ、……焦る必要はないだろ。もうこいつには致命傷を与えたからな。ほっとけば勝手に死ぬ。)

そして、地に倒れこんだ少年へと、彼は視線を向ける。

だが、そう考えたベラナバスの視界に、信じられない光景が写りこむ。

自らの翼で貫いたはずの少年、千乃勇斗が、力を振り絞って、再び立ち上がるようにしている。

ありえない。

自らが放った漆黒の翼は、間違いなく少年の体の内側をずたずたに切り裂いた。

立ち上がるという事など、本来ならありえないのだ。

(……ハハッ、おもしれえ!! おもしろいぞ、千乃勇斗!!)

ベラナバスの顔に、笑みが浮かぶ。

「……面白いが、だからこそ……お前はここでぶっ殺す!」

9月19日以来、勇斗は超能力ではない力……魔術を構成する魔力、そして天使テレスマの力といった力を、漠然とではあるが、感じられるようになっていた。

だからこそ、この騒ぎの中でベラナバスのもとにたどり着くことができたわけなのだが。

……故に、勇斗は、自らの内に膨大な量の天使テレスマの力が内包されていることにも気づいていた。

だがこれまで勇斗は、どのようにすればその天使テレスマの力を扱えるのが分からなかった。

一体どうすれば、その力を振るえるのかが分からなかった。

その力を振るえたのは、9月19日の1件ただ1度のみ。

しかも不完全にしか制御できずに、だ。

しかし……

勇斗の視界が暗転する。

ゾグン…… と周囲の空気が変質する。

目に映る世界は、勇斗がこれまで見てきたものとは変わっていた。

(……………見える……………)

勇斗は心の中で思う。

(……………前よりも、魔力がはっきりと見える……………)

超能力とはまた違う超常現象を引き起こす異能の力。

学園都市の能力者である自分には、本来扱えるはずがなかった力。

それを、その存在を、より強く感じる。

そして……………

(……………手が届く)

勇斗は確信した。

(今なら、おれの天使テレヌマの力に、手が届く。)

根拠などない。

しかし、確信はあった。

勇斗は目を閉じ、意識の中に手を伸ばす。

(……手を伸ばせばそこにあるんだ。掴み取れ!!)

ソレに手が届くと、勇斗は、

……ソレを、握りつぶした。

ソレが、力が、いくつもの光の粒子となって、勇斗の意識に降り注ぐ。

魔術……超能力とは異なる力。

それを受け入れても、勇斗の体には、何の拒否反応も起きない。

ずっと昔から扱ってきたかのように、違和感なく、勇斗の体に馴染んでいった。

ベラナバスは再び、その背の6枚の漆黒の翼を大きく展開し、そしてそれらを真っ直ぐ、血を撒き散らしながら立ち上がった。勇斗に向けた。

目的はただ一つ。

加減も容赦もなく、勇斗をただ『消す』。



6枚の翼は、まるで引き絞られた弓のようになり、1つ1つが勇斗の急所に正確に定められている。

（こいつが覚醒すれば確実に面倒事になる……！！……あれだけテレズマを奪っても、それでもまだ聖人クラスの容量が残ってやる。こいつは消す。今ここで消す！！）

壮絶な笑みを浮かべながら、奥歯をギリギリと噛み鳴らす。

（風穴開けるだけじゃなく、グチャグチャの肉の塊に変えてやる！！）

自らの持つ、光を掲げる者の悪魔としての性質をもった力を、より自らの翼に流し込み、必殺の一撃を放つために、更に力を加えていく。

そして、

それは、

恐るべき威力の一撃となって、

放たれる。

「ハッ！！！！ 終わりだ！！ 同類！！」

ベラナバスは翼を振り下ろす。

後はこれで残るのは肉塊だけ。

しかし、そう思っていた彼の前で、ソレは起こった。

ガギイツ!! と、硬い物同士をぶつけたときのような音が響く。

それは決して、肉がつぶれるような音ではない。

その硬い音が、ベラナバスの耳を打つ。

ベラナバスは、目の前の光景に目を見開いた。

「なぜ……」

いよいよ、目の前で起きていることが、彼の思考を超えた。

「なぜ……!!」

魔術的な目で見れば一発でわかることなのに、驚愕が、彼にそれをさせない。

「なぜこの一撃を止めることができる!?! 千乃勇斗!!」

彼は叫ぶ。自分の理解を超えた出来事に。

彼が全力をかけた翼の一撃。

それが、勇斗に触れることなく、すんでのところで何かの力に受け止められている。

彼は叫んだ。そんな出来事ふじごじに対して。

「な、にが……。まさか……」

少しずつ、目の前の光景を認識し始めたベラナバスに、魔術による知覚が戻ってくる。

それで勇斗を見て、彼は気づいた。

「まさか……覚醒……!?」

さっきまでは感じられなかった、濃密で莫大な天使テレスマの力の感覚。

それが、満身創痍の勇斗から放たれている。

「クソがッ!! まさか、このタイミングで……!!」

ベラナバスの悪態。

それに反応するかのようになり、勇斗は血に濡れた顔を上げる。

そして、笑った。

「v r e g 前 b v i v w 陰 g i j k b v l ……」

ノイズまみれの言葉。

自分の口から発せられたそれを聞き取った勇斗は、一度目を閉じ、集中する。

するとどうだろう。

あれだけ莫大で、荒れ狂う荒波のようにうねっていた天使テレスマの力が、一瞬で勇斗の支配下に置かれた。

「な……！！ ……くっ!？」

驚愕するベラナバスから、勇斗から奪ったはずの『力』、そしてそれ以上の『力』さえも抜け落ち、それらまでもが勇斗の支配下に置かれる。

(他人の力さえも自分の支配下に置く、だと……!?)

再び笑みを浮かべて、勇斗は言う。

「……ありがとよ、魔術師<sup>ベラナバス</sup>。お前のおかげで気づけたよ。……自分の力の扱い方に。」

言葉が言い終わると同時、勇斗の背中が弾け飛んだ。

現出するは、9月<sup>いづか</sup>19日と同じ、水晶のように青く透き通る、鋭い存在感を放つ、2対の翼。

そして、頭上に浮かぶ金色の輪っか。

すなわち、天使の象徴。

更に加えて、勇斗が軽く振った右手に現れた、翼と同じ、透き通る青色の剣。

ベラナバスの物とはまた違う威圧感、存在感が周囲を満たす。

「……さあ、ここから仕切り直した、ベラナバス。」

そう言って、そのクリアブルーの剣を構えて、勇斗は笑った。

「こっからは全力で行かせてもらう。そしてお前をブツ飛ばす。」

笑いながらも、勇斗は強い意志のこもった目でベラナバスをにらみつけた。

勇斗とベラナバスの戦いが、幕を開ける。



ep.30 9月30日・5(後書き)

次回はいよいよ天使化勇斗君vs悪魔ベラナバスさん決着(予定)  
です!!

ep.31 9月30日・6(前書き)

決着つきませんでした!!

しかも今回はいろいろな人たちにスポットあててみました。

では、ごうぎ。

その身に墮<sup>ルシフェル</sup>天使の力の一端を宿す2者。

その力のおかげなのか、勇斗の体に開いていた『風穴』は、9月1  
9日の時と同様、すっかりふさがっていた。

そして、力で見れば、聖人と同格の2人が、ぶつかり合う。

一瞬

音を超えた速度で勇斗はベラナバスに接近し、そのまま剣を振り下  
ろす。

自らが内包する天使<sup>テレスマ</sup>の力によって編み上げられた剣 すなわち、  
莫大な力の塊。

それは、ただひたすらに、切断<sup>はかい</sup>をもたらす必殺の一撃だ。

だが……

「クッ……!!」

苦しげな声を上げながらも、ベラナバスは翼を使い、勇斗の一撃を受け止める。

響き渡るのは、爆音・衝撃波。

降りしきる雨が、吹き飛ばされ巻き上げられ、霧となって2人を包む。

ギギギギギギギギギギ!!

と硬質な音を響かせて、剣と翼が火花を散らす。

視線が交わされ、敵意が渦を巻く。

と、勇斗は剣の力を爆発させ、その勢いで元居た位置に戻った。

同時、パリン!! とガラスを割るような音がして、ベラナバスの

翼が砕けた。

「……どうした。この程度か？」

「ハッ！！ なめるなよ！！」

ベラナバスがそう言うと、轟！！ という音と共に、再び6枚の翼が現れる。

「そのセリフはまずこれをかわしてから吐くんだな！！」

ビュゴッ！！ という凄まじい音と共に漆黒の翼が振るわれ、巻き起こる烈風が砕けた翼の破片を巻き込み、勇斗に向かって吹き荒れる。

「……悪いけど。この程度、かわすまでもない。」

言って、勇斗は右手を その手に持った水晶の剣を振るう。

ガガガガガガガガガガガガガガガ、ギン！！！！

破片を全て弾き、打ち砕き、烈風すらも霧散させた。

「やるじゃねーか。ケガ人の動きとは思えないぜ。」

「!?!」

気づけば、ベラナバスが動いている。

攻撃を防いだその一瞬の心の油断について、今度はベラナバスから仕掛けたのだ。

「相手の攻撃1回防いただけで良い気になってんなよ。ターン制RP Gとは違うんだぜ!!」

「……言われなくても知ってたよ!!」

振り下ろされる漆黒の翼。

それを水晶の翼が受け止め、残りは右手の剣が斬り飛ばす。

「まだまだだぜっ!!」

ベラナバスの翼が、いくつもの羽カケラへと変わり、再び勇斗へと殺到す

る。

「　　ッ！！」

ドガガガガザザザガガガギギギッ！！！！！！　　つと無数の  
火花が散った。

至近距離から放たれるそれに対して、勇斗は再び右手の剣を振るい、  
加えて翼をも振るって対抗する。

「おおおおおっっ！！！！」

最後に、剣を大きく振るい、1度少し距離を取る勇斗。

ドッ、という音をだし、ベラナバスの背中には再び漆黒の翼が現れ  
る。

対する勇斗は、羽のほとん<sup>カケラ</sup>どを撃ち落としたとはいえ、体には微細  
な切り傷が蓄積している。

「……いやらしい手を使いやがって。」

「ハッ、お前を殺すのが目的だからな。」

「……そうですかい。」

(……長期戦にしてもリーチにしても経験値の差にしても、有利なのは向こうだ。さっさと決めるのが得策か。)

そう考え、勇斗は1度深呼吸して、乱れた呼吸を整える。

一瞬の間。

そして剣を投げ捨てると、勇斗は、フッ!! っと鋭く息を吐き、地を踏みつけて一気にベラナバスの懐へと潜り込む。

その衝撃でアスファルトが砕かれ、勇斗の後方で瓦礫が舞い上がる。

投げ捨てられた剣は、形を維持する力を失い、光の粒子となって虚空に消える。

それらすべてを無視して、ベラナバスは勇斗を見た。

「!?!?」



この至近距離では翼を振り下ろせない。

カケラ  
羽も遅すぎる。

そしてハナからそれが間に合うようなスピードでもない。

勇斗はすでに拳を握り、突き上げている。

ズドン！！ という腹部への強烈な一撃。

ジャッジメント  
風紀委員としてかじった体術に、テレスマ天使の力でブーストを掛けて放ったこの一撃は、ベラナバスの身体強化の術式をも突き破る。

「じ、ぼっ！！？？」

苦しげな声を上げ、彼の体はその勢いのまま浮き上がる。

そこで再び フッ！！ っと鋭い息を吐き、勇斗は体を大きくひねって、宙に浮かぶ形になったベラナバスに向かって渾身の回し蹴りを見舞う。

ドゴツ!!… という凄まじい音と共に、ベラナバスの体が吹っ飛んでいく。

その一連の動きはあまりの速さ故、常人であれば目で追う事すら難しいだろう。

ドガン!!… と道端のビルに突っ込み、ようやくベラナバスが止まった。

「がはっ……ぐっ!!」

そして、その声を発し、がれきの中からベラナバスは立ち上がる。

しかし、ダメージが大きいのか、若干足元がおぼつかない。

「今のは効いたんじゃないですかねえ。っーかやっぱりあれじゃ意識とばねーか。」

勇斗はぼそつと言っ。



(…………魔術か!!!)

勇斗は目を見開く。

「走り、満ち、集うこの力は、仇なす者を飲み込む深遠の力なり。光すら塗りつぶす終焉の法。現出せよ。」

同時、曼荼羅マンダラのように幾重にも重なった魔法陣が勇斗の足元と頭上に展開される。

「なっ…………!!?」

「牙をむく大地の抱擁。歪み、破綻する時と空間。死にゆく者を飲み込む棺となれ。」

言葉と同時、魔法陣から放たれた『重力くわいりき』が、勇斗を覆い尽くす。

「せいせい足搔け、同類。」

勇斗を覆う『棺くわん』、それを見て、ベラナバスは言った。

同時刻。

第7学区の路上。

上条と打ち止めは立ち尽くしていた。  
ラストオーダー

2人とも、ずぶ濡れになりながらも、傘も差さずに道端に立ち尽くしている。

ラストオーダー  
打ち止めから『知り合い』が襲われていると助けを求められ、彼女に連れられて、上条はここにやってきていたのだが……

地下街の出入り口からは、たいして離れてはいない大通りの一角。

最終下校時刻をすでに過ぎている、暗くなった道路に、普通の人影は一切ない。

「……………」

地面には複数の人間が倒れている。

水たまりに体を沈めているというのに、全身を黒で統一した人間達はピクリとも動かない。

街灯の光を照り返す、合成素材の装甲服。

水たまりに沈んでいる禍々しい黒さを放つそれは、サブマシンガン。

その他にも、顔を覆うヘルメットや伸縮性の高いマスク。

一瞬、アンチスキル警備員に見えなくもないが、明らかに違う。

誰がどう考えても一般人ではない人間達。

意識を無くしてくれていて良かったとすら思わせる出で立ちだ。

そしてその横で、パチパチ、と何かが燃えている音が聞こえる。

それは、人間達が倒れている所から、ほんの数メートルの位置にあるワンボックスカーだ。

何か、途轍もない力でグシャグシャにひしゃげさせられたように破壊されている。

その光景を見て言葉を失う上条に、ラストオーダー打ち止めは倒れている人間達を指差して言った。

「……この人達に襲われたの、ってミサカはミサカは本当の事を言ってみる。」

それを言う顔は真っ青だった。

「……何なんだ、こいつら。」

上条は呟く。

「アンチスキル警備員に見えるけど、こいつらは違う。……でもそうじゃないから一体……。しかも襲ってきたはずのこいつらがバタバタ倒れてやる。」

状況がつかめない。

「……ここで襲われてたのは、お前の知り合いなんだよな。」

「そうだよ、ってミサカはミサカは答えてみたり。」

「これは……、そいつが返り討ちにしたのか？」

「それはないかも、ってミサカはミサカはミサカは首を横に振ってみる。あの人は気が短くてケンカっ早いから、あれだけやられて仕返しがこれっぽっちだなんて考えられないの、ってミサカはミサカは推測し



てみたり。」

「……そいつもそいつで何者だよ。」

思わず顔をひきつらせて、上条は言う。

「でもまあ、とにかく通報しないと……。お前の知り合いも危なそうだし。…………？」

ポケットから携帯電話を取り出しボタンを押そうとした上条は、ふと、違和感を感じた。

「……なあ、ラストオーダー打ち止め。」

「なーに、ってミサカはミサカは聞き返してみたり。」

「普通こんだけの事が起きてれば、もう警備員アンチスキルとかに通報が行ったり、誰かが大騒ぎしてもおかしくないよな。」

目の前の惨状を見ながら、上条は言う。

「うん、普通だったらすくなるはずだよな、ってミサカはミサカは考えてみる。」

「……………なら、何で誰もいないんだ？」

「……………!!」

「……………いつたい、何が起きてるんだ……………?」

2人は周囲を見回す。

いつもより明かりが消えていて、騒ぎも起きず、雨に打たれる街は徹底して静寂を貫く。

(もしかして…………騒いでないんじゃないかなくて騒げないのか?)

恐ろしい想像が、頭をよぎる。

(…………学園都市全体でこんな事態に陥ってる?もしかして、アンチス警備員もやられた…………?)

上条は考える。

今、学園都市で起こりつつある事態について。

(自然現象の線は……ありえない。俺や打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>が無事な理由が無い。でも、どっかからの攻撃だとして、いったい誰が。……！)

そこでふと、上条は1つの考えに思い至る。

(まさか……魔術サイド……！？)

この科学サイド最先端の街で、科学的な手法でテロを起こそうとしてもたちどころにバレる。

しかも、例えば学園都市外部の敵対する科学組織の技術レベルなどというのは、それこそ2〜30年差　　雲泥の差だ。

学園都市内部で何らかの反乱があった可能性もあるが、それにしても静かすぎるだろう。

したがって、おのずと可能性は絞られてくるのだが。

(でも、この街の機能を丸ごと停止に追い込むって……どんだけの力があるんだ?)

と、まだ見ぬ『敵』について考えに沈んでいた上条の裾すそを打ち止めが引つ張った。

「あ、悪い、ラストオーダー打ち止め。どうした？」

上条が答えると、今度は上条の手を引つ張って、そして言った。

「早く、ってミサカはミサカは警戒を促してみる。」

異様に切迫した声だ。

「ヤツらが来た、ってミサカはミサカは路地裏へ体を隠しながら報告してみたり！！ 早く！！」

訳もわからないまま、上条はラストオーダー打ち止めと共に路地裏に隠れる。

巨大な水たまりに足が浸かってかなりの不快感を覚えるが、文句は言わない。

2人の視線が、一点に集まる。

低いエンジン音を響かせ、この暗闇の中、ヘッドライトを点けていないあからさまに怪しい奇妙な黒いワンボックスが近づいてきたからだ。

そ……う……目的で作られたかのようなその車は黒づくめの人間達が倒れている場所で停車し、開かれた後部スライドドアから倒れ伏していた人間達と全く同装備の人間達がぞろぞろと出てくる。

ちらつと見るだけでも確認できたのは10人。

しかも揃いも揃って同じサブマシンガンを肩紐で掛けている。

(……とてもとても友好的には見えないな、あいつら。)

上条は思う。

とりあえずここにいってもいいことは無いと、上条は逃げることを選  
択した。

……が、

「ああいたいた。こんな所にいたのねえ!!」

背後から、甲高い女の声が出た。

ビクッ！　　っとして振り返るといつの間にか、2人の背後に全身黄色づくめの女が立っている。

その声に気づいた黒づくめの連中が一齐にこっちに銃口を向け、引き金に手をかける。

「！！？？」

(ま、ず……！?)

一瞬、生きた心地がなかった。

しかし、その連中が引き金を引くことは無い。

パシャパシャと音を立てて、先に倒れていた連中と同様に崩れ落ちたからだ。

「なっ……！？」

倒れた黒ずくめたちは、起き上がらない。

(……………同じだ、さっき倒れてたやつらと同じだ。)

「……………まったく、学習しないのねえ。さっきからわらわらと湧いてきやがって。真っ黒いし、ゴキブリかよっ!! っっていうの。」

雨の音だけが響く中、黄色づくめの女の侮蔑を含んだ声だけが響く。

(……………この状況はこいつの仕業……………? ……こいつ、一体……………)

上条は観察する。

服装は、中世ヨーロッパの女性が着ていたようなワンピースに見える。

髪は全て束ねた布で覆われ、毛が1本も見えない。

顔は、口も鼻もまぶたにも大量のピアスを取り付けられていて、顔

面のバランスが崩れているほどだ。

その目元には、強調するようなキツイ化粧がされている。

そして、その女の手には、全長1メートルを越す巨大なハンマーが握られていた。

柄を掴まれないためのものか、それとも儀礼的な装飾なのか、判断はつかないが、鋭く尖った有刺鉄線が巻きつけてある。

「……………まさかお前、魔術師か？」

現代の戦場とはかけ離れた格好。

故に上条はそう判断する。

「へえ、正解よ正解。何だ、なかなか頭もまわるじゃない。」

やはりバカにするような口調で、彼女は言う。

「ローマ正教『神の右席』の1人、前方のヴェント。」



ヴェントは名乗り、小ばかにするよつに舌を出す。

「目標発見。まあそんなワケで、さつさとぶっ殺される上条当麻。」

言って、ヴェントはハンマーを薙いだ。

破壊の嵐が、炸裂する。

同じく第7学区。

雨の中、インデックスは道を走っていた。

「そろそろ着いてもいいころだけど……あ、着いた！」

彼女の視線の先にあるのは、いつも上条が入院している、カエル顔の医者がある病院だ。

「早くあの先生に頼んで？ミサカネットワーク接続用電極のバッテリー？を持って行ってあげないと……！」

先刻、アレイスター学園都市統括理事長直轄の暗部組織、ハウンドドッグ「アクセラレータ獵犬部隊」に襲撃されていた一方通行に出くわし、その後彼と共に逃げていたのだが、彼に「この近くの病院のカエル顔の医者からミサカネットワーク接続用電極のバッテリーを貰ってこい」と頼まれて、夜の街を走っていた。

インデックスを戦闘に巻き込むまい、という一方通行アクセラレータなりの嘘思いやりを素直に信じ、走る。

(いつつもとつまが入院してるから、あの先生がどこにいるのかもわかってるし、急ぐんだよ)

そう考えてスピードを上げようとするインデックス。

だがその直前、どこか遠い所で莫大な魔力がぶつかり合った感覚があった。

「……………また光を掲げる者の天使の力だ……………」

立ち止まることなく、インデックスは考える。

「……………まったく。今日の学園都市はなんだかおかしいんだよ。」

魔力に対して鋭敏な感覚を持つインデックスは気づいていた。

暗くなつて、雨が降り始めたくらいからこの街を覆い始めた謎の魔力。

そして、それとはまた違って突然炸裂した2種類の墮天使の天使の力。<sup>マ</sup>

気になることはいくらでもあった。

103、000冊の魔道書を抱える彼女ですら、不可解で、知りたくて知りたくてたまらないことが。

しかし今は、今このときは。

(困ってる人がいるんだから早く助けてあげないと!!)

それらを無視して、病院へと走る。

インデックスの走る道は、ただひたすらに、真っ直ぐだ。

そして、これもまた同じ時間。

第7学区の端、第5学区との境目だ。

一方通行はカエル顔の医者と連絡を取っていた。  
アクセラレータ

「ソッチが知ってる情報を渡してくれ。あのガキはどオなってる？」

『今はハウンドドッグ猟犬部隊の別働隊が追っているようだね。彼女はたまたま居合わせた一般人と一緒にだが……正直に言う。このままなら時間の問題だ。』

少し、意味ありげに強調された部分が気になったが、それらを見無視してさらに聞く。

「場所はどこ？」

『彼女自身も掴めていないようだ。どこかの  
第7学区のフ  
アミリーレストランの近くの路地裏にいるようだけどね?』

「……そうか。」

アクセラレータ  
一方通行は思う。

それは自分が倒れた場所だ。

ラストオーダー  
打ち止めは彼を助けようと、助けになりそうな人間を連れて戻って  
いたのだ。

「……チッ」

そこまで考え、忌々しげに舌打ちして、アクセラレータ  
一方通行は再び口を開く。

「そつちに白い修道服を着たガキは来たか?」

『いや、まだ来てないよ。』

「なら、そろそろ着くだろうからそのガキは保護しろ。おそろくこ  
れから24時間程度は命を狙われるはずだからな。目を離すなよ。」

『……やれやれ。警備員には任せられない問題なのかい。』

「フン……平和主義の教師どもになんざどうにもできねエよ。死人を増やしたくなけりゃ、イイ加減に意識を切り替える。」

『……いいだろう。まさか、患者以外の命を守る羽目になるとはね？』

「なら患者も追加だ。もオ少ししたら背中を刺された男がソツチに届く。ソイツを適当に処置したら、襲撃に備える。ソツチにどんだけの戦力がある？」

『戦力とは、また随分と物騒な話だね？ ……調整中の量産軍用妹達シスターズが10人ほど。あとは実験当時使われていた、対戦車ライフルレベル6ソフトのメタルイーターMXとF2000Rオモチャトイソルジャの兵隊が人数分……だね？』

「……それじゃ足りねエ。……病院にいる職員と患者を全員退避させられるか？」

『……やるしかないようだね。よしわかった。やるう。』

口調が、いつもの飄々としたものから、全く別のものへと切り替わっていた。

「……、悪リイな」

『全力を尽くすさ。……それで、問題は君の方だ。』

カエル顔の声が、再び変わる。

『君は、何を目標に動くんだい？』

「木原は殺す。獵犬部隊<sup>ハウンドドッグ</sup>も潰す。そしてあのガキを無傷で助け出す。」

『不可能だよ。』

「……………知ってるさ。ホントはこうしてエッていうただの幻想だア。ただ……………絶対にあのガキだけは助ける。他はあくまでオプションだア。……………ム力つくけどなア。」

『……………君もだんだん成長してきたようだね？　こんなセリフを聞けるとは思わなかったよ？』

カエル顔はわずかに笑ったような声を出して、続けた。

『……………どんなにボロボロになると、腕が折れてようが皮膚が剥がれてようが内臓が潰れてようが、生きて僕の元まで連れて来れば必ず治す。命を守り傷跡も残さず精神的なケアまで含めて完璧な形で君の大切な人を救ってみせよう。その期待に応えるのが僕たち医者<sup>ドクター</sup>つてものだ。だから一方通行<sup>アクセラレータ</sup>、君はそのまま、ただただ打ち止<sup>ラストオー</sup>めの命を助ける事だけを優先しろ。それが一番大切なものだ。僕みたいな未熟者の腕では取り返せない唯一のものだからね。』

一度言葉を切って、再び続ける。



「木原？ 獵犬部隊？ ハウンドドッグ そんな退屈な前哨戦はどうでもいい。大事なのは決勝戦だ。 ラストオーダー 打ち止めを早く僕の元へ回して決勝戦を始めさせてくれ、 アクセラレータ 一方通行。」

その後、カエル顔の医者が見病院を一時放棄したらどこへ身を隠すのかを教えてもらい通話を終える。

使っていた公衆電話のガラスの扉に背中を預ける。

「命を助ける事だけを優先しろ、かア。」

もう余裕も猶予もない。

だから一方通行は、 アクセラレータ 覚悟を決める。

「上等じゃねエか……」

今まで自分の力は、ほとんど人を殺すためだけに振るってきた。

今回は珍しく、他人の命を守るために使う。

しかし、突き詰めれば変わらない。

「あのガキを救い出すためなら、善人でも悪人でもぶつ殺してやる。」

ただただ、ラストオーダー打ち止めの命を守るためなら、全てを殺す。

『ハウンドドッグ 獵犬部隊』はきゅうかく嗅覚センサーを持っている。

この位置もすぐに突きとめられ、襲撃をかけられるだろう。

まずはこれを迎撃し、少しずつ少しずつ、しかし急いで、ラストオーダー打ち止めを助け出すための土台を固めていく。

そのための戦場が欲しい。こんな所でのんびりしている暇はないのだ。

もう、アクセラレータ一方通行は迷わない。



ep.31 9月30日・6(後書き)

地味に長くなりそうです……

バイト忙しいですが、頑張ります!!

e p . 3 2 9 月 3 0 日 ・ 7 ( 前 書 き )

今回は……ご都合主義？

まあ、軽く流していただければf^^;

いや、かつこいいですよね？

お父さん。(マダオじゃないですよ?)

魔法陣から放たれた『闇』が、勇斗を覆い尽くす。

その正体は重力。

時間や空間すら歪ませ、光すら逃さない、いわばブラックホール。

その莫大な重力で敵を覆い、破壊しつくす。

光を掲げる者が墮天した時の、罪の重さから地の底に引きずり込まれそこで地獄を作り上げた、というエピソードに由来する、闇と重力を操る術式。

莫大な重力＝ブラックホール と言えば、科学的にも説明できそうではあるが、実際、既存の物理法則では到底実現不可能である攻撃。

既存の物理法則とは一線を描き、『ただの偶然を必然とし、見えないうルールを思い描く』魔術だからこそ、可能な事象。

そして、魔術により物理法則の穴を強引に埋め、強引に発動したその術式は、その莫大な重力で全てを平等に押しつぶす。

ふと、路上駐車車が引き寄せられた。

最初はゆっくりと、しかし近づくにつれて、二次関数的に一気にスピードを上げ、闇に飛び込む。

それは、『闇』に触れた途端、触れたところからあつという間に潰れ、そして消えた。

否、無限に一点に押しつぶされ続けているのだ。

「……少し、制御が甘かったか。」

ベラナバスはそう言って、集中する。

「……これは魔術によって生み出したブラックホールだ。……知ってるか、お前じゃかわせないぜ。」

誰ともなしに、呟く。

光ルシフェルを掲げる者は、人間に光を与えた大天使としてあがめられることもある。

しかし、ブラックホールとは、その光ですら逃れることはできない。

「お前が天使としての光ルシフェルを掲げる者の性質を持つ限り、抗う事なんてできないんだよ。」

光という『十字教的神の恩恵』すら呑み込む、闇の力。

「今度こそ終わりだ、同類！！ せいぜい天国で楽しめよ！！ ク  
ハッ、ハハハハハハハハハハ！！」

全てを破壊する、ブラックホール闇。

それを見ながら、ベラナバスはたまらなく愉快そうに笑った。



と、そこに

「……で、そんなあからさまな死亡フラグ口にしてアンタは何がしたいんですか？」

「……!!!」

バカにするような声色で、殺したはずの人間の声が響く。

驚愕の表情を浮かべるベラナバス。

そんな彼の目前で、魔力が高まっていく。

それがある程度の量を超えたところで、

『闇』が切り裂かれた。

一瞬にして術式の構成が引き裂かれ、ズバン！！という轟音と共に、『力』が霧散する。

「な……なに……？」

目の前で起こったとんでもない出来事に茫然自失とする彼の前に現れたのは、ほぼ無傷なままの勇斗の姿だった。

「……敵に技かけて、自信満々に説明するって……結構な死亡フラグだと思っんですけど、どうっすか？」

やはり口元には笑みが浮かび、ダメージを負ったようには見えない。

「お、……まえ、なん……で……」

途絶え途絶えな声で、ベラナバスは言う。

「これは、力の質じやくてんを的確じやくてんについて放ったはず……。天使おまえが、墮天使オレに勝てるわけが……」

「ああ……。確かに最初はビビったけど……。意外と力技でどうにかなるもんなんだな。」

「何！？ ……ッ！？」

ベラナバスは気づいた。

自分が思い違いをしていたことに。

(こいつの天使テレスマの力の量……なんなんだ、これ……)

あまりの衝撃に呼吸が止まりそうになる。

(『あれだけ天使テレスマの力を奪っても、それでもまだ聖人クラスの含量が残ってる？ そんなもんじゃない。これは、確実に聖人の2倍以上はある……！！ てことは、万全の状態なら、アイツよりも上……！！！)』

そんなベラナバスの混乱を知ってか知らずか、勇斗は言う。

「……ま、制御がムズ過ぎて自滅するかと思ったけどな……。……正直もう2度とあんなバクチはうちたくねーよ……。」「

言って、勇斗は本気で体を震わせた。

「……まあ、抜け出せたからよかったんだけど。……で、今度はこっちの番だな。」「

「……」

「……おれはお前と違って他人を殺そうとは思わねーよ。そんな人格破綻者でもないし。」「

少しずつ、空気がざわめきだす。

「殺しはしない。だけどこれ以上この街で暴れられない程度にはボロボロにさせてもらう。」「

そう言って、勇斗はあるイメージを思い描く。

それは、勇斗がやりこんだ、とあるゲーム的一幕。

それに出てきた、『天使』。

その中で、最も印象に残っていた登場人物が使っていた、とある術。

(自分の能力で翼を発現してからは、いつか、一度でいいからやってみたかったんだよなあ )

苦笑を浮かべつつ、力を使う。

思い描くのは容易だった。

一体何周やりこんだかわからないくらいやりこんだのだから。

『ゲームのえいぞう見えないルール』を思い描き、それに沿って、テレズマ天使の力を流し込んでいく。

『やりこんだまきおく自分だけの現実』を思い出し、それに沿って、演算し、力を制御する。

溢れ出る力は膨れ上がり、言いようのない重圧や、鋭利な気配が空気を満たす。

「……次会う時までにはもうちょっとまともな魔術使えるようになっておくから、今日はこれで勘弁してくれよ。」

そう言って、勇斗は右足で地面を踏みつける。

すると、そこを中心にして、光でできた魔法陣が一気に広がっていく。

そしてベラナバスを魔法陣に呑み込むと、背中の翼が天を向き、それに倣うように、魔法陣から光が立ち上る。

「……これは……!!」

立ち上る光、それらをよく見てみると、鎖の形をしている。

（バカな……!! 光を掲げる者にとって、鎖は天敵のはず……!!）

本来なら、『神の如き者が最大級の墮天使を鎖で地獄の底に縛りつけた』という伝承によって、光を掲げる者の力を持つ者にとって、『鎖』とは弱点になるはずなのである。

しかし、勇斗は『力』と『能力』で、その無理を押し通す。

それらの鎖を構成するのは、やはり莫大な量の天使の力。テレスマ

鎖はベラナバスに巻き付き、突き刺し、それでもまだ立ち上る。

圧倒的な光量。

光が、その場を支配する。

「 聖なる鎖に、抗って見せる。 」

その中で、勇斗の声だけが響いた。

「 シャイニング・バインド。 」

吹き上がる光、炸裂する音。

それらが、夜を塗りつぶす。

第7学区、窓のないビル。

『人間』アレイスターは、モニターを介して、ソレを見ていた。



「……これで、ハイブリッドの覚醒は完了。ここまでくれば、後はじっくりと成長を待ってもいいだろう。」

彼は、満足げに呟いた。

「……さあ、残るは幻想殺しとベクトル制御装置と、ヒューズ<sup>イマジンプレイカー</sup>カザキリと前方のヴェントだ。数は多いが……楽しませてくれよ。この私を。」

言つと、彼は意味深な笑みを浮かべた。

『プラン』の達成まで、まだ道は長い。

この娯楽<sup>イレギュラー</sup>を利用して工程を短縮すべく、彼は再び動く。

「……あれー？ やっぱすごいよね、その右手。」

パシユウ！！ と音がした後、強風が路地裏を駆け抜けた。

ヴェントが放った謎の攻撃　おそらく風の魔術を、上条の右手が打ち消したのだ。

真っ暗闇の路地裏を、異様な緊張感が包む。

「……いきなり攻撃とか、話し合いすらできないとかって相当だよな。」

上条とラストオーダーの前に立ちふさがる、ヴェントと名乗った女

魔術師に向かって言葉を吐きながら、上条は内心焦っていた。

（おそらく、こいつが学園都市全域の都市機能を麻痺させてる。……  
……たった一人で、科学サイドにケンカ売るとかどんだけ強いんだよ  
こいつ！！……危険度で言えばさっきの黒服は軽く超えてるだろ  
……！！）

と、その時。

努めて冷静になろうと苦心する上条に向かって、声がかげられた。

「話し合いなんざするために来たんじゃないからねー。」

じゃらじゃらという音がする。

見れば彼女は、初見では気づけなかった舌の鎖を揺らしていた。

と、そこで、ヴェントは再び、右手の有刺鉄線つきのハンマーを無  
造作に振るう。

横殴りに振るわれた一撃。

ヒュオッ！！

という音と共に、何か 風の鈍器 が射出される。

「くっ！！！！！」

上条は打ち止めを突き飛ばし、とっさに身を屈めた。

ドカン！！ と、火薬が炸裂するような音をたてて、路地の両側の壁が砕け散る。

その砕けた破片すら、風の鈍器で再び砕かれ、塵と化する。

再びの強風が、路地裏を駆け抜けた。

「……………隠れてろ、打ち止め！！！」

そう言って、彼女が路地の陰へ移動するのを確認しつつ、上条は前へと踏み出す。

しかし、ヴェントは後ろに下がりながら再びハンマーを縦に横にと  
適当に振っていく。

それによって生み出された鈍器が、空気を切り裂いて上条に迫る。

「くそっ！！」

ドン！！ という鈍い音。

上条の右手が、空気の鈍器を打ち消す音が響く。

しかし、上条の表情は晴れない。

飛来する風の塊は、直線、右カーブ、左カーブ、うち降ろし等、様  
々な角度から上条を襲い、ヴェントに近づくことを拒む。

それに、一瞬でも気を抜けば、即座に体を貫かれ、打ち碎かれる。

「ハハッ、流石はウワサの右手。よく頑張っついでくるねえ！！」

ヴェントは笑いながら、ハンマーを左から右へと思い切り薙ぐ。

(横だ!!)

そう思った上条は慌てて右手を体の右に向けるが、生み出された風の塊は、上から下へと縦に打ち下ろす一撃だった。

(……ッ!?)

しかも直接上条を狙うのではなく、わずか手前のアスファルトに打ち下ろされる一撃。

それはアスファルトを打ち砕き、大量のアスファルト片を周囲にはらまく。

「じっ、あああああッ!?!」

全身をアスファルト片に打たれ、上条の全身を痛みが襲った。

衝撃で後ろへ飛ばされる上条。

いくつかのアスファルト片を頭にくらい、意識が朦朧としたすが、

歯を食いしばり、必死に意識をつなぎとめる。

「……………くっ……………!!」

「だっ、だいじょーぶ!? って、ミサカはミサカは ……!!」

押され気味の上条に向かって、ラストオーダー打ち止めが駆け寄ろうとする。

しかし、上条は見た。

ヴェントが再びハンマーを振り上げている光景を。

(まっずっ……………!?)

このまま振り下ろされれば、射線上の打ち止めはラストオーダー確実に巻き込まれる。

「おおおおおっ……………」

叫んで、上条が飛び出すのよ。

楽しそうに笑って、ヴェントがハンマーを振り下ろすのと、同時だった。

射出される風の鈍器。

しかもまた、振り下ろされたハンマーの軌道と、生み出された風の軌道が違う。

しかし今度は、何とか右手を体と風の間割り込ませ、打ち消す。

「わわっ!？」

圧縮された空気の鈍器を打ち消したことで、圧縮されていた分の空気が元に戻り、強風が再び吹き、後ろの方で打ち止めが転んだ。

その拍子にポケットの中身が道路に散らばる。

オモチャのようなグロスや、かわいらしい子供用の携帯電話。

打ち止めは立ち上がりそれを拾おうとするが、ヴェントを見れば、もうハンマーを振り上げている。



(くっ！！　まだどういうルールに則って鈍器が飛んでくるかわからない……………！！　早く、こっから逃がさないと！！)

上条はとっさにそう考え、叫んだ。

「拾わないで逃げろ！！」

「！！」

ラストオーダー  
打ち止めの体がびくつと震え、上条の方を見る。

「でもって、ミサカはミサカは」

「良いから早く！！」

言っ、再び飛んでくる風の鈍器を何とか打ち消す。

再び風が吹き荒れる。

しかし、ラストオーダー打ち止めは呆然としながらも、首を横に振る。

見捨てたくはないのだろう。

そう思ってくれることは正直嬉しい。

しかし、今ここでは、それはただ単に自分の命をみすみす危険にさらすだけだ。

「早く！！ 助けを呼んできてくれ！！」

だからこそ上条は、偽りの目的を彼女に与える。

「……わ、わかった、ってミサカはミサカは走り出して……！  
待ってて、ってミサカはミサカは叫んでみる！！」

そう言って、ようやく打ち止めは走り出した。  
ラストオーダー

それを見て、ヴェントがハンマーを打ち止めへ向ける。  
ラストオーダー

しかし、回り込んだ上条が右手で風を打ち消した。

「アンタって残酷ねえ。あーんな小さな子供にとって、命の危

機を感じながら暗闇の中をあてもなく逃げ続けるって相当の重荷だ  
と思うけど。恐怖でガチガチになって壊れ始めてるかもね。そんな  
事になるくらいなら、一緒に殺してあげた方が幸せなんじゃない  
？」

「……言ってる。お前のそのハンマーのトリックはもうわかった。  
ハンマーじゃなく、鎖の軌道をなぞってるんだろ。」

何度か見て、ようやく気づけた、風の鈍器のトリック。

「へえ。もう気づいたんだー。」

「……まあな。そしてそれさえわかれば簡単だ。さっさとお前をブ  
ッ飛ばして、俺が迎えに行つてやればいい。」

改めて右手の拳を握りしめ、上条は言った。

「……ま、確かに『本命』が効いてないからそう思いたくなる気持  
ちも理解してあげられるけど。」

その一言に対して、ヴェントはコキコキ首を鳴らして、ニヤニヤ笑  
いながら言っつ。

「『神の右席』を、ナメンじゃないわよ。」

それだけ言葉を交わして、2者は再びぶつかり合う。

照明のない工場の中、一方通行は息を潜めていた。  
アクセラレータ

第三資源再生処理施設。

第5学区にある、2キロ四方に及ぶ巨大施設だ。

(さて、腹アいっぱい喰わせてもらおうか、丸々太った獲物どもオ)

その中で、先の逃走で奪っておいたショットガンを持ち、壁に背を預け、構えている。

もうすでに、ダミーの無線と脳科学的に考えつくした恐怖をあおる作戦によって、『ハウンドドッグ 猟犬部隊』は個々人が孤立している。

故に、暗闇の中での同士討ちを、あるいは同士討ちされる事を恐れるため、彼らは銃器を使えない。

これに対し、アクセラレータ 一方通行はただ、『人影は全て敵』として行動すれば良い。

そう、『敵』。

しかし、この施設に入ってきた『ハウンドドッグ 猟犬部隊』の連中は、彼らの脅威の理由である『銃器』と『集団』、その両方をほとんど失ったと言っても過言ではない状態だ。

故に一方通行アクセラレータにとっては、

（オマエらはもう敵じゃねエ。ただの動く的ってやつだア！！）

そこまで考えて、ショットガンの引き金を引く。

暗闇の中およそ15メートル先、仲間とはぐれ、1人きりでビクビク索敵している獲物に向かって。

ゴン！！ と耳を破裂させるような轟音が響き、大きな衝撃が肩にかかる。

ばらまかれた散弾が、周囲の硬いコンクリートや金属プレートの壁で跳弾し、様々な角度から獲物に襲い掛かった。

絶叫が響く。

暗闇の中、液体が床に跳ねる音、そして人間が床に倒れる音がする。

それを確認して、一方通行はショットガンを杖代わりアクセラレータにして獲物へ

と近づいていく。

血の匂いが立ち込め始める中、観察する。

どうやらショットガンの銃弾で腕をやられたようだ。

もう片方の手も、転がった時にひねったらしい。

両腕を潰され、思うように武器を取れない、無様な芋虫。

アクセラレータ  
一方通行は再び近くの壁に体を預け、高ぶる感情に反して、冷静に獲物の頭にショットガンの銃口を押し付ける。

「じよ、冗談でしょ……!?!」

意外にも、聞こえた声は甲高い。

よくよく見れば、黒ずくめに包まれた格好であっても、女性的なラインが浮かび上がっている。

「うるせエよ。黙ってさっさと死ねクズ。」

獲物の鳴き声こゝろを、どうでも良い、と適当に切り捨てて、

一切の容赦なく、引き金を引いた。

ドバン！！ という鈍い発射の衝撃。

血が飛び散り、一方通行アクセラレータの頬に血が付着する。

ペロリ、とそれを舐めとって、動かなくなった獲物を蹴り飛ばす。

「……誰エ敵に回したか、分かってんのかねエ、オマエらはよ。」

顔は笑みの形にゆがむが、しかし、冷静さは保っている。

彼は今、そんな状態だ。

そして、再び彼は闇にまぎれ、動き出す。

もはや狩り終えた獲物になど、目をやることは無い。



「さアって……、次のエモノはどこにいのかなア……」

ラストオーダー  
打ち止めを救ったための、迅速で残酷で容赦のない狩りが始まった。

e p . 3 2 9 月 3 0 日 - 7 ( 後 書 き )

やはり、長引きますね。

ま、楽しいからいいんですが。

感想、評価などお待ちしています。

また次回も、よろしく願います。

e p . 3 3 3 9 月 3 0 日 . 8 ( 前 書 き )

長引く長引く。  
だが楽しい。

……お付き合いのほど、ごつかよろしくお願いします。

周囲を覆っている、巻き上げられた水煙が徐々に晴れてくる。

それによって、周辺の状況が徐々に見えてきた。

「……………やりすぎた？」

勇斗は苦笑いしながら呟いた。

その背中から、翼が溶けるように消えていく。

周囲に満ちていた魔力も、少しずつ霧散していく。

地面を見れば、勇斗を中心として、半径10メートルくらいの範囲のアスファルトが、円形に粉々に砕け散っている。

その半ばで、ベラナバスが倒れ伏していた。

体中に傷を負ってはいるが、まだ生きている。

しかし、『鎖』の術式によりその力は縛り付けられ、しばらくはその力は振るえない状態だ。

少なくとも身体制御程度はできる程度には力を使える。放っておいても特段に問題はないだろう。

そう判断して、勇斗はベラナバスから目を離す。

そして

「……………ふう。とりあえずは乗り切ったー、っだああああ……………」

再び静寂を取り戻す学園都市の街並み。

その中で勇斗は大きくため息をついた。

「まさかあんなにしつかりゲームの技が魔術として発動できるなんてなー。ホント助かったー……………」

本来なら、魔術師が何か月、何年とかけて行う新たな術式の構築。

それをあんな土壇場で、しかも事前準備無しで行うということが一体どれだけ特異なことなのか、科学サイドに生きる勇斗はまだ知らない。

「……………けど……………」

この場合、問題になるのは粉々に砕け散ったアスファルトだ。

能力者があふれているこの街では、器物損壊など日常茶飯事と言っていくらいである。

だが。

なのだが。

そうなのだが。

勇斗はあくまでも風紀委員ジヤウジツメンであり、それとこれとは話が別なのだ。

待っているのは始末書の山。

そして固法先輩によるO・H A・N A・S H Iタイム。

以前、能力者による強盗事件があった時に勇斗が犯人を捕まえたことがあるのだが、その時出した破損について、後でこっそり絞られたうえ、山のような始末書を書かされた。

「はああああああ………」

勇斗は長々とため息をつく。

「……………これって、ヤバいかね……………」

「正当防衛だし、別にいいんじゃないかにゃー？」

「……？」

ふと呟いた一言に突然返事があって、勇斗はビクッ！！と体を震わせる。

「……………何でこんなところにいるんだよお前。せつかく生き残ったのに今のでシヨック死しそうになったわ!!」

「いやー、悪いにゃー。」

土御門はさらっと（対して悪びれた様子もなく）謝罪の言葉を口にした。

「あまりにもハイレベルな戦いでちょーっと出るにすら出られなかったんだにゃー。」

「……………まあ確かにそうだけど。死にかけたし。」

「うん、そんなセリフが普通に出るようになってしまった勇斗には同情のこもった言葉をかけてあげるにゃー。……………ドンマイ。」

「……………何だろう。何故だかわかんないけどお前を思いっきりぶん殴りたくなった。」

「……………遠慮願うにゃー。」

「……………だろうな。」

そう言って、勇斗は口元に笑いを浮かべる。



「……………で、本題は何だ土御門。」

途中で声色を変えて、あっさりと、勇斗はそう切り出した。

「……………全く、単刀直入すぎるにゃー。」

そう言っつて、苦笑いして、土御門もその表情を変える。

「……………お前に注文オーダーを頼みたい。」

「……………と言っつと?」

今までとは打って変わって、土御門の顔は強張り、いつものような軽さを感じられない。

「今日、この街が魔術サイドに攻撃を受けているのはいいな?」

「ああ。把握はしてる。」

この街を覆う不可思議な魔力の存在。

それを思い出し、そして現在進行形で観察しながら勇斗は言っつ。

「学園都市のセキュリティで把握してる限りは、侵入してきているのは2人。うち1人は、今お前が倒したそいつだ。」

言って、土御門は親指でベラナバスを指して言う。

「……だが、いくら今回の攻撃の実行犯がローマ正教の最暗部、『神の右席』とはいえ……、ん、そうか。お前にはまだ話してなかったな。今回襲撃してきたのはローマ正教の魔術師だ。それもローマ正教という組織の、暗部の中の暗部所属のな。今はローマ正教の四天王+ が攻めてきた、って思ってくれてればいい。」

途中、『神の右席』という耳慣れない言葉を聞いて怪訝な表情を浮かべた勇斗を見て、説明を付け加えながら土御門は言った。

「……話を戻すぞ。いくら四天王であったとしても、1、あるいは2vs2、300、000じゃ勝負にならない。だからおそらく、そいつらとは別で、侵攻部隊がいるはずなんだ。……事実、学園都市外周部をサーチしてみたらくつか魔力反応があったしな。」

敵戦力の数も配置もはつきりとはわかんないんだけどな。  
と付け加えて、そして再び話し出す。

「……おそらく、現時点ではその数は少ない。待機組にある程度の人間がいれば、沈黙した学園都市なんか前にして侵攻を待つ必要はないし、それこそ『神の右席』が単身乗り込む必要なんてないわけだからな。……『神の右席』を先行させて、沈黙した街の後始末をするのが精々なんだろうさ。」

自虐気味に、土御門は乾いた笑い声をあげる。

「……学園都市の都市機能が回復するまで、街の外にいる侵攻部隊を絶対に敷地にいれないこと。それが、今回のオレの絶対目標なんだ。……ちなみに、オレと似たような連中は、そっちで別件があるから、正真正銘オレ1人でな。」

「……ちょっと待て。それじゃただの自殺行為じゃねーか。」

魔術師として万全だったころならまだしも（万全であっても大丈夫かどうかは不明だが）、能力開発によって自由な魔術の使用を封じられ、おまけにそれで得た能力もレベル0の『オートリバース肉体再生』と、戦いには到底間に合わない。

そんな状況で、どれだけいるかも不明の敵を、いつまで足止めすればいいのかわからないままに、たった1人で足止めし続ける。

普通、誰に聞いても誰もが「無謀だ」と言うだろう。

それでも

「それでも、この街には舞夏がいる。それだけで、オレには戦う理由がある。」

土御門は強く言い切った。

「……………手伝ってほしいならまどろっこしいこと言っていないでさつさと言えよ。」

土御門の言葉を聞いて、土御門の覚悟を目の当たりにして、勇斗は言った。

「まったく……………おれにだって、この街を守りたい理由はあるんだ。たとえお前のその注文オーダーが学園都市暗部からの注文オーダーだったとしても、何も言わず従うさ。」

言って、勇斗は笑う。

「受けさせてもらおうよ。お前の注文オーダー。」

「……………恩に着るぜい。」

土御門はホツとしたように表情を緩ませる。

しかし、すぐに怪訝な表情を浮かべて、言った。

「……に、しても。お前の口からそんな簡単に、“暗部”なんて言葉が出てくるなんてにゃー。まさかオレの周りの人間って、意外と背景真つ黒な人間多いのかにゃー？」

「……それは知らんけど。ま、おれは一時期だけだけど暗部　まあその一端でしかないけど、そこにいたからな。どーせお前は知ってんだろ？」

そう言って、フン、と鼻で笑って、勇斗は続ける。

「チャイルドエラー置き去り。『親』という後ろ盾のない子供の中で、何かしら素晴らしい『能力』持っていたら、嫌でも暗部に組み込まれんのだろ、この街は。で、すぐに使い潰されると。」

あっさりと、口を開く。

「ま、おれの能力がよっぽど希少だったのか、統括理事会権限で過度の研究が中止になって、暗部からも抜け出せたけどな。……汚れ

仕事というより研究メインだったから暗部というより深部か？ ……  
……研究員の奴らも割と良心的だったし、幸運にも死人が出るような事件にも関わったことが無い。」

ふう、と一度ため息をついた。

「ま、そんなこんなで、紆余曲折はあったがここまで健康に過ごせたよ。ま、それに報いるのも正解だろ。」

皮肉げに笑って、勇斗は肩をすくめてみせる。

「……お前も苦労してんだにゃー。」

「まーなー。」

苦笑いを交わしあって、そして再び2人は表情を切り替える。

「……さて、さあ行くっ、  
と言いたいところ  
なんだが。」

勇斗はそう言って、地に倒れたままのベラナバスに再び目を落とす。

「……………こいつからもいろいろ聞きたいことあるんだけどなー。どうする？」

「うーん……………ん？これは……………」

土御門が途中で言葉を切る。

それを見て、勇斗は不思議そうな表情を浮かべるのだが、

突如、ベラナバスの体を光がつつみこんで、一瞬でその姿が消えた。

「なっ……………!？」

「……………おそらく、事前に逃走術式でも用意してたんじゃないかにやー!。……………追いかけてよつと思えばできないことは無いが、そんな暇はない。今は放っておこう。」

「……………だな。さっさと出るか。」

自分を「同類」と呼んでいたベラナバス。

なんだかまた会うような気がするし、どうせなら次会った時に聞いてやるっ。

勇斗はそう考えて、目の前の出来事から意識を切り替え、再び集中

を始める。

「……そう言えば土御門。移動手段はあるのか？」

「無いわけではないけどにゃー。一応車ならあるぜい。」

「……なら飛んだ方が早いな。」

そう言うと、ドッ！！という音がして、勇斗の背中から翼が飛び出し、頭上には天使の輪が浮かんだ。

「……いつの間にかここまですごいことになっちゃったにゃー……」

水晶の翼に金色の輪っか。

それを見ながら土御門は呟く。

「……正当防衛だ。仕方ない。……よし、調子はいいな。じゃあ、i b u f v d k k b d s y。」

「勇斗、言葉が崩れてるにゃー。」

「あ、わ r g n n u i。……いや、悪い。」



一度深呼吸。

「……よし、大丈夫だ。じゃあ改めて行くぞ。舌噛むなよ!!」

「がってん!!」

土御門を抱えて、勇斗は大きく翼を羽ばたかせる。

弾丸のような猛スピードで、2人は学園都市の『外』を目指す。

上条は劣勢に立たされていた。

上条を直接狙ったり、カーブを描いて迫ってきたり、周囲の路地の壁を砕いてその破片を飛ばして来たり。

ヴェントの攻撃は多岐に渡っている。

「はあっ、はあっ、はあっ……………！！」

既に体のいたるところに傷を負って、息荒くヴェントに対峙している。

(……………くそっ！！　いくらトリックが分かっても軌道が複雑すぎて初動が遅れちまう……………！！　それに、右手じゃコンクリの破片は防げない……………！！　このままじゃまずい……………！！)

「あらあらー、もう疲れちゃったのかな？」

わずかに動きを止める上条に、くすくすと笑いながらヴェントは声をかける。

「ほらほら。早く私を倒して迎えに行つてあげるんじゃないの？」

「くっ！！」

ヴェントが再びハンマーを振るう。

上条の体が上下左右様々に翻弄される。

かわして、打ち消して。

打ち消して、かわして。

無茶苦茶な動きを要求されて、スタミナが少しづつ奪われていく。

息が上がってくる。

上条はぼんやり考える。

(……『神の右席』。 何で俺1人を殺すためにそんな奴らが出てくる必要があるんだよ……!!！)

「あれあれー？ どうして自分が狙われているのかわかってないよ  
うな顔だねー？」

へらへらと笑いながら、ヴェントは言う。

「自分の価値に気づきなさいな！。私の目的は上条当麻。それ以外は全部おまけ……いや、アンタの友人？も一応標的だけど……ま、そっちはベラナバスが行ってるから別にいいわ。……ちなみに言うておくと、あの禁書目録ですら、アンタに比べりゃ軽いのよ。」

「……な、に……？」

あっさりど、そう告げた。

(……言い方は悪いけど、魔術師にとってあのインデックスより重要度が上だって……？ それに友人……まさか、勇斗に土御門か！  
?)

「今のアンタは間違いなくローマ正教の敵。……今までアンタがやったことを考えればわかるわよね？」

ハンマーを揺らしながら、ヴェントは上条を睨み付ける。

「……そして我々はどんな手を使ってでも敵を殺す。極端な発言をすれば……我々は、日本という一国家を消滅させてでもアンタを殺す。……と言っても、その右手の事を考えると、私のいつものパターンは使えないっばいから直接殺さなくちゃいけないみたいだね。」

言って、ヴェントはどこからともなく書類を取り出し、ヒラヒラと振った。

(あれは……何だ?)

辺りは暗く、日本語で書いてあるかも怪しいため、全く内容を読み取れない。

「はいはいこの通り。これはローマ教皇直々のサインつき命令書。内容はアンタとその友人、……えーっと、千乃勇斗だっけ？ の排除。これで、晴れてアンタらはローマ正教徒20億人から狙われる身ね。」

(何だそれ……)

上条はヴェントの言葉に愕然とした。

今までだって、魔術師に狙われることはあった。

しかし、今回はあまりにもスケールが違いすぎる。

これまでの『何らかの事件の中心に自分が巻き込まれていく』という状況とは違う。

自分自身を中心として、事件が起こるのだ。

一応、8月31日のアステカの魔術師の件という前例はあるが、やはりあまりにもスケールが違う。

そんな上条の前で、ヴェントは書類を再び手品のように隠し、

「冗談に聞こえるかな？ いやー、冗談じゃないんだよねー。」

ヒュン、とハンマーを振るつ。

「!?!」

反応が遅れ、着弾した風の鈍器が炸裂し、風を撒き散らす。

同時に、撒き散らされたアスファルトが上条を打った。

「!?!、……!?!」

ズシャア!! と上条の体が地面を転がる。

「さてさて。早速で悪いんだけど。さつさと死んでもらうわねー?」

ブラブラとハンマーを揺らして、ヴェントが上条に近づいていく。

(く、そ……!!!)

必死に体に鞭打って、上条は立ち上がるが、今の一撃で体力はぐっさり奪われ、動くことができない。

「うーん……。あっけなさ過ぎてちよーっと勿体なかったけど、  
…吹っ飛べコラー！」

咆哮と共に、ヴェントの右手が動いて、ハンマーが振るわれる。

上条の命を刈り取る一撃が放たれる。

……はずだった。

ガシャン！ という何かが地面に落ちる音と、ごぽっ という水  
つぽい音が、上条の耳に聞こえてきた。

ヴェントの方から聞こえるその音。

見れば、ヴェントがさっきまで持っていたはずのハンマーが地面に  
転がり、赤い液体がぽたぽたと地面にこぼれて水たまりに溶けてい  
っている。

それは間違いなく鮮血だった。

「じゅっ……が、は。ああ！！」



ハンマーを取り落とし、体をくの字に折り曲げ、口に両手を当てて、ごぼごぼと短く咳き込む。その指の隙間から彼女が吐く鮮血がこぼれていく。

その様子に余裕は感じられない。

(……助かった。けど……何なんだこれ。魔術の副作用?)

上条は予想外の事態に困惑する。

しかし、

(よくよく考えれば、これはチャンスだ。ここでこいつを止めないと、もっと被害が拡大する可能性もある。……ただでさえ、都市機能がこいつに落とされてるんだからな。)

いくら敵とはいえ、苦しんでいる人間に拳を振るうのは若干ながら気が引ける。

しかし、それを捻じ伏せて、上条は拳を握る。

「ぐ、アアああッ!！」

だが、上条が駆け出すその前に、ヴェントはよろめきながらもハンマーを拾い、上条に向かってハンマーを振り回した。

「ぐっ……!？」

さっきまでの軽々しい動きではなく、乱雑で暴力的な動きだった。

しかしそれでも、射出された空気の鈍器は上条の動きを止めて。

何らかの魔術を使ったのか、ヴェントの姿が一瞬にして見えなくなる。

「……、何だっただ？」

突然目の前に現れ、自分の命を狙ってきたかと思えば、今度はいきなり逃げ出す。

正直、状況が全くつかめない。

「……」

どれだけ考えてもわからない。  
なら、まずは分かることから。

「……よし、ラストオーダー打ち止めを探そう。」

今この場での、最優先事項をそう設定すると、上条は意識を切り替えて、再び動き始める。

御坂はコンビニにいた。

見ているのは雨具だ。

「参ったなあ。さっき一緒にアイツに送ってもらえばよかったなあ。」

ハア、とため息をつきながら、彼女はビニール傘を物色する。

「……どれもちっさいわねー。ここまで小さいと傘さす意味ないよ  
うな気もするんだけどなあ。」

そう言ってふと外を見れば、真っ暗な街に、割と粒の大きい雨が降  
っている。

御坂は、上条との大覇星祭だいはせいさいでの勝負で得た罰ゲームじほうびを上条と（打ち  
オウゲー  
ラスト）

止め含<sup>オミダテ</sup>）ともに堪能していたのだが、完全下校時刻が近づき、打ち止めを送っていくという上条と別れ（この時、『お前も送っていいか？』と言われていたのだが、上条の手間を考えて断っていた）、そのままコンビニで立ち読みをしていたのだ。

「……何でこついつ時に限って雨が降ってくるのよ。」

学生カバンと一緒につかんでいる携帯電話会社の紙袋に目を落とし、ポツリと呟く。

（折角ゲコ太とピョン子貰ったし、濡らしたくないんだけどなあ。

……黒子に迎え頼もつかしら。後が怖いけど。）

そうであるとはいえ、背<sup>ストラップには</sup>に腹は代えられないと考えて、白井に電話を掛けた。

ぶるるるるるるるるるる

と、コール音が鳴る。

しかし、普段ならすぐにも出てくるくらいなのに、全く電話に出ない。

(……？ 何か仕事でもしてんのかしら？)

少し、変だなあ、とは思ったが、それ以上は何も考えず、電話を切った。

(ハア……、しょうがない。歩いて帰るか。)

そう覚悟を決めて、傘を手にとって、御坂はレジへと向かう。

(せめてゲコストラップ太とピヨン子は守らなきゃね。)

しかし、そう考えていた御坂の思考が驚きに染まった。

何故なら。

視界の先で、レジ担当の店員が倒れていたからだ。

(え、ちょ、……一体、何が!?)

ふと、通路の方を見れば、客が2人ほど倒れている。



(これであらかた『ハウンドドッグ 獵犬部隊』の連中は片付けたかア。)

施設内、迅速かつ正確にハウンドドッグ 獵犬部隊を狩りまわったアクセラレータ 一方通行は、周囲を探りながら廊下を歩いていた。

(まア……この雰囲気、もう戦闘は終わったと考えてもイイだろう。)

そう考えて、アクセラレータ 一方通行は施設内で見つけた、ハウンドドッグ 獵犬部隊による追跡を振り切るための洗浄剤のボトルの蓋を開け、中身の透明な液体を頭から被った。

(……ここまで派手にやってやったんだア。木原は絶対に動くだろ。せいぜいうるたえてさっさとしっぽ出しやがれよクソ野郎。)



……と、そんなことを考えながら歩いてきた彼の目に、ある物が映った。

(…………この床の血の跡…………)

点々と続く赤い染み。

それを見て、アクセラレータ一方通行はわずかに眉をひそめる。

(…………チツ、まだ生き残りがいやがんのかア?)

舌打ちをして、血の跡をたどる。

その跡を見る限り、エモ敵の足はおぼつかず、集中集中もあちらこちらへ飛んでいる。

(ハッ、いい感じに怯えてるってカンジだな。…………あるいは、そう見せかけてオレを誘導しているか…………いや、ありえねエな。)

杖をつき、目と耳に神経を集中して、アクセラレータ一方通行はゆっくりと血の跡

を追う。

すると、先の方から何かガチャガチャという音が聞こえてきた。

(……確かこっちは、この関係者に逃げる時に使わせた通路じゃねエ。って訳で、狩り取り決定だぜエ、カスどもオ!!！)

そして、ショットガンを構え、発砲する。

先刻からそうであるように、放たれた銃弾は跳弾して、音源を襲う。

「ぎゃあああああああ!!??」

聞こえてくるのは薄汚い悲鳴。

どうやらバツチリ命中したらしい。

念のため用心しながら、一方通行は進み、アクセラレータそして目にした。

非常口を開けて外に逃走しようとした敵の姿を。クズ

「い、嫌だ！！ クソっ、あ、ああ、警備員アンチスキルにつ！！ あ、あと、後少しだったのに……！！！」

そのセリフを聞いて、さすがに一方通行は頭アクセラレータに血が上った。

カシャッ、っと銃口をそいつの頭に押し付けて、告げる。

「……闇に生きてる連中が、闇と闇との戦いに一般人巻き込んでんじゃねエよ！！！」

静かに、しかしそれでいて、莫大な殺意を感じさせる。

「闇にどっぶりつかったオマエが。闇の中で生きてるオマエが！！  
光いっほんじんに助けてもらえるなんてあり得るとでも思ってるのかゴミクス  
！！！」

「ひっ！！??？」

「答えはノーだ！！ わかったらさっさと死に晒せ！！！」

言って、容赦なくその手の引き金を引く。

ドバン！！ という轟音で銃弾が放たれ、敵を圧倒的に破壊しつくした。

「……ハッ、これが『闇』の宿命だア。」

そう言い残して、死体を一瞥すらせずに、一方通行は非常口から外に出る。

「オレ達が生きる『闇』には非常口こんなもんなんぞ存在しないんだよ！！」

一方通行は大声で叫ぶ。

敵に言い捨てているだけではなく、あたかも、自分自身に言い聞かせているかのようだ。

学園都市外周部。

様々な様相を呈するその場所の中で、勇斗と土御門が降り立ったのは都市部と森林部の中間のような所だった。

針葉樹で形成された深い森に埋もれるように、巨大な廃工場がいくつも並んでいる。

その建物の壁には繁殖力旺盛な雑草や蔦系の植物が絡み付き、不気味な印象を与えてくる。

「……さて、それじゃあお仕事の間始めるかにゃー。」

土御門は、そんな建物のうちの1つの前で立ち止まって言った。

「ああ。いいぜ。」

その言葉に、勇斗が応えた。

「……で、おれはどうすればいいんだ？」

勇斗は土御門に尋ねた。

すると、

「オレはこの周辺の魔術師を叩くにゃー。で、勇斗は機動力もあるから、学園都市外周部を見て回ってきて、いれば適宜魔術師をブツ飛ばしてほしい。」

と、至極まともな判断であるはずなのだが、ただの丸投げに聞こえる言葉が返ってきた。

だがしかし勇斗は

「了解。」

と、文句一つ言わずに了承の意を示す。

「おお……。まさかこんな簡単に許可が出るとはにやー。もっと」  
ねるかと思っただぜい。」

土御門も疑問に思ったのか、そう言った。

「……………適材適所だろ。」

あっさりと勇斗は言葉を返す。

「それより土御門。もちろん能力使っていいんだよな。」

「正当防衛だし、当然大丈夫だにやー。」

「オツケー了解。……………じゃあ、さっさと始めますか。」

そう言って、勇斗は能力を行使。

再び、水晶の翼と金色の輪っかを現出させる。

「……まあ、それがあから大丈夫だとは思っが……死ぬなよ、勇斗。」

「お前もな、土御門。」

ニヤリ、と互いに口をゆがめて、

そして2人は動き出した。

それぞれが守りたいものを守るために。



e p . 3 4 9 月 3 0 日 - 9 ( 前 書 き )

例によって例のごとく  
ご都合主義です。

タグに『丸くなってるアクセラ』をいれようか本気で検討します。

あ、主人公が不憫です……。

そして更新遅れて申し訳ありませんでした。

では……

ザザザザザザザザザザザザザザザザ！！

草をかき分け、森をざわめかせ、風を切って、

勇斗は空を舞う。

その背の翼はこれまで以上の力を生み出し、勇斗が思う通りにその力を発している。

その力を駆使して、勇斗はジェット機よりも早く学園都市外周に沿って飛んでいた。

(……土御門はアイツで心配だけど。こっちもやることやらなきやな。アイツの言うとおりだ。これ以上ローマ正教の好きにはさせてやるわけにはいかない！！)

そう考えて、

勇斗は右手を振った。

その手に、翼と同じ、水晶に似た剣が生みだされる。

500メートル先に魔術師達がいる。

音速近いスピードで飛ぶ勇斗にとっては2秒とかからない。

向こうが気づいて魔術の準備をする暇すら、与えない。

(……50人前後。5秒で片づける!!)

そして、

少し、周囲が開けたその場所に、ローマ正教の侵攻部隊の一群はい

た。  
認識障害の術式で身を隠し、学園都市内部へ突入する機をうかがっている。

上条当麻の暗殺と同時に、学園都市を陥落させようとしている連中。

ローマ正教徒こそが正義と断じ、子供たち全てを殺そうとしてはば  
からない連中。

彼らに、天罰が降り注いだ。

接近と同時に、勇斗は地面に右手の剣と背中の翼を突き立てた。

一瞬にして、テレスマ速さは0になり、勇斗の体を莫大な慣性の力が襲うが、内包する天使の力を存分に使った身体強化でそれを捻じ伏せる。

そして、超高速で飛行していた勇斗の速度ベクトルを一気に叩き付けられた地面は広範囲にわたってめくれあがり、山のように舞い上がった土砂が魔術師たちを飲み込んでいく。

「なっ、何だ!？」

「て、敵襲!?!??? ……ぐあああああ!！」

土砂の山が、天が崩れたかのように彼らに降り注ぐ。

そして、それだけにはとどまらない。

地を蹴り、翼を羽ばたかせて、勇斗は飛び上がる。

そして、両手を組んで頭上にさし上げた。

そこに、光が渦巻き、天使の輪のようになったそれが、雨を弾き闇を切り裂いて鋭く光る。

それから、その手を振り下ろして、

統括制御して集めたその『力』を、地面に向かって叩き付けた。

それは、重力にも似た、ただただ莫大な力の塊。

轟音。

力を受けて、“山”が陥没した。

悲鳴が、絶叫が、響き渡る。

しかし、ここまでの天罰であっても、死者はいなかった。

人を殺さない。

不殺。

それが、能力を得てから、勇斗が自らに課した約束事だ。

(……よし、次だ。)

再び翼をはためかせて、勇斗は飛ぶ。

夜の闇を切り裂いて、忍び寄る『闇』に打ち勝つために。

学園都市外周部、勇斗がその円周に沿って『狩り』を続ける中、土御門もまた走っていた。

そこは都市部と森林部の中間のような所で、針葉樹で形成された森に埋もれるように、巨大な廃工場がいくつも並んでいた。

雑草やツタといった植物類がコンクリートの壁に絡みつき、廃墟然とした印象を与えてくる。

（一般人……のはずの勇斗をこんな魔術戦闘に巻き込んだりしたっていうのは、プロの魔術師のオレからすれば不本意ではあるんだが、この際そんなことを言うつもりはない。あいつは戦ってくれてる。それに負けちゃあ男・土御門の名が廃るってもんだにやー。）

土御門は、そんな事を考えながら廃墟の中に入っていき、立ち止まる。

元々交通会社のバスの整備場だったであろう印象を与える空間のど真ん中。

そこに、1本の木の杭が床から飛び出していた。

巨大だった。

直径15センチ、長さ3メートル以上。

鋭く尖った先端が真上を向き、雨とわずかな照明のせいで、怪しく光っている。

「素材は……棕櫚<sup>しゅう</sup>か。ハツ、全くシユールな光景だ。」

彼がそう言った途端、杭の側面から全方位に、木の杭が勢い良く飛び出してくる。

しかし彼は、バックステップで全ての杭をかわしていく。

周囲の床や2階部分の通路、錆びた機材の山からも次々と杭が生み出されるが、それら全ても同様にかわしていく。

途中何本かが爆発して鋭利な破片が撒き散らされたが、屈み、あるいは機材の陰へ身を隠して全てをやり過ごした。

「……とんでもない光景だな。」

杭の動きが止まり、遮蔽物の陰から出た土御門が見たのは、床一面

を覆い尽くす数千本もの杭だった。

「……危なかったぜ。結界とか使わなくて良かったな。」

棕櫚は本来、『恵み』を示す木である。

『恵み』

すなわち、術者への加護。

転じて、術者へ仇なす者の排斥。

その特性から『食い止める』や『弾き返す』といった、術者に対して敵対的とみなされる結界のような術式を、すり抜ける性質を与える事も可能だ。

そしておそらく、これらの杭にはその性質が与えられている。

もし土御門が結界などを張っていれば、串刺し人間のオブジェが一体完成していただろう。

「……ここで勇斗クラスの火力があれば、全部まとめてぶっ壊したりもできそうだが……。」

ぐるりと周囲を見渡して、そして言う。



「  
『3』は天界、『4』は地上、そして天地の掛け合わせ、  
3×4の『12』で世界を示す。特定の『数』に意味を付加して、  
『莫大』という単位を得ているだけだ。大元の3+4=7本の杭さ  
え、……いや、世界の構成要素たる1本でもぶつ壊せば術式は破壊  
できる。……だろ？」

「……！！」

その、突然に呼びかける声に反応して、何もいなかったはずの暗が  
りから、白い人影が現れる。

存在感が希薄な、不思議な存在だ。

「……個人的には、これは上手い術式だと思うんだが……」

そいつに向かって土御門は言い放つ。

「これ、十字教じゃないよな。紀元前の、ギリシア系ピュタゴラス  
教団の理論だ。」

口元をゆがめて、相手を嘲笑うかのように。

「なあ……ローマ正教の人間達は、いつの間に『神の子』が生まれ  
る以前の世界を肯定するようになったんだ？」

と。

その言葉に相手は激怒したのか、轟音と共に木の杭が爆発した。

「……何も言い返せないからってぶちぎれんのはカッコ悪いぜい。」

しかしあっさりと、土御門はすべての木片を回避する。

それを目の当たりにして、曖昧で、雲のような人影が吼えた。

同時、轟音が炸裂し、新たな木の杭が爆発するようにいくつも生みだされ、様々な方向に突き出た木の杭が、残された全ての空間を塞ぎ、土御門を串刺しにしようと迫ってくる。

と、

杭が殺到し、人が生きるためのスペースが1分たりとも無くなったそこに、土御門の姿は無い。

カン、

という金属音がする。

音源は3階部分の通路。

そこに、土御門は既に立っている。

はるか下を見れば、不確かな人影が驚愕を浮かべている……少なくとも、そのように見える。

それを不敵な笑みを浮かべて見下ろす土御門。

ふと、その唇の端を血が伝った。

能力者の、魔術に対する拒絶反応。

(……全く。オレがこんなに苦労して魔術を使ってるのに。あんなにあっさり魔術を使う勇斗が凄まじくうらやましいぜい。)

不敵な笑みはいつしか苦笑いに変わっていた。

「……ま、今そんなのは関係無い。長期戦でこちらに得は無いし。」

そう言っつて通路を蹴って、床一面に広がる杭の、その中の1本に向かって飛び降りる。

「……残念だ。」

背後で、蹴った手すりガバキバキと折れていく音を聞きながら、土御門は落ちていく。

「そんな繊細な術式を見ると、壊すのが惜しくなってくる!」

そんな言葉とは裏腹に、

土御門の一撃は、7本の内の1本せかいのこうせいよつそであり、全ての杭を統括する弱点である杭を、正確に打ち抜いた。

(……次はおよそ5キロ先。規模は大体2000人か。)

勇斗は魔力による探知で正確な情報をつかみ、頭の中で戦略を組み

立てていく。

(……ただの雑魚だな。多分数の暴力でしか戦いを考えてない。突っ込んで蹴散らして、それで終わりだ)

そう考えるうちに、あっという間に敵との距離が縮まっていく。

勇斗は目視する。

強大な力が接近し、慌てふためく魔術師の姿を。

(遅いな。……まあ、間に合っても意味は無いんだけど。)

魔術師達から500メートルほど手前。

ここで勇斗は進路を急激に変えて、ほぼ垂直方向への上昇に転じた。

一気に高度1000メートルにまで上昇した勇斗は、一瞬動きを止めて、

一気に急降下し、真っ直ぐに、魔術師の群れのだ真ん中に着弾する。

今度は、1000メートルの高さから自由落下をはるかにしのぐ速度での落下による衝撃のベクトル、それに加え、地面に剣と翼を叩き付けてその力を炸裂させて、さっき以上の破壊を生み出す。

音が炸裂し、衝撃波が周囲の木をへし折っていく。

しかし、不自然なまでの指向性を持ったその一撃は、極めて狭い範囲にしか破壊をもたらさなかった。

本来であれば、周辺地域をM7を超えるクラス規模の大地震が襲ってもおかしくは無いほどのエネルギーを持った一撃。

それが、勇斗を中心とする周囲半径100メートルに圧縮されていた。

地が割れ、隆起し、それすらも破壊され、塵になった土砂が舞い上がる。

その一撃は、地殻を貫き、マントル層にすら破壊をもたらした程だ。しかし、無造作な攻撃方法とは裏腹に、高度に制御されたその一撃は、やはり人を殺すことは無い。

最初の衝撃で意識を断絶させて、その場から吹っ飛ばす。

演算によって、勇斗はそれを軽々に行っていた。

そして、舞い上がった土煙。

まるで、地表に激突した小惑星が舞い上げたかのような、それを。

吹き飛ばして、再び勇斗は飛び上がる。

敵はまだ多い。

立ち止まっている暇なんてない。

窓のないビル。

その中の生命維持装置の内部で、アレイスターはモニターを眺めながら呟いた。

「……凄まじい出力だな、ハイブリッド。」

そこに見えるのは、学園都市外周部で観測された衝撃のデータ。如何様にして観測されたのかは不明だが、とにかく、さっきの勇斗

の攻撃のデータがそこには表示されている。

それを見て、その口元には、明らかに喜びに起因する笑みが浮かぶ。

「内包する『力』の量は……8月29日の1件で観測された大天使、『神の力』にも匹敵するか。……実にすばらしいな。」

すると、そう言って笑うアレイスターの後ろ、暗がりから、突然に人影が現れる。

「……ふむ、あれが君がご執心の件のハイブリッドかね、アレイスター。」

それは、金髪の光り輝くような長身で、ゆったりとした白い装束を身にまとう『人物』

正確な性別はわからないが、少なくとも外観の見た目だけなら女性的だ。

喜怒哀楽の全てがあり、それでいて人の持つ感情とは明らかに異質なものを根幹に秘めた、極めてフラットな顔つきをした、『存在』

「……あなたか、エイワス。」



アレイスターは、その『存在』をそう呼んだ。

「あなたがわざわざ現出するとは。珍しい。」

「なに、君のお気に入りの少年に私も興味が湧いたというだけさ。」

その少年、千乃勇斗といったか。……よもやこの目で、私と同じ、科学と魔術を同時に扱う『存在』を見るとはな。おまけに彼は……『カケラ』なのだろう、アレイスター？」

「……ああ、そうだ。……天使の力を、呼び寄せるのではなく、元からその身に宿す者。聖人とも似ているが、それを超える天使の力テレスマの内包量に、その質は墮天使光ルシフェルを掲げる者だ。」

「……途轍もない希少種レタケースだよ、彼は。……おっと、『カケラ』と言えば、さっきのベラナバスとか言った『小物』もかな。まあ、ただの『カケラ』でしかないのなら興味はないがな。」

その声からは、小さい子供がおもちゃを見つけたときのような喜びがにじみ出ていた。

「研究もいいが、まずは大事に扱う事だアレイスター。」

「わかっている。だからこそその暗部への再回収だ。」

「……ふむ、まあいい。そのうち、私も会ってみることにしようか。」

「……余計な手出しは止めて欲しいんだが。」

「安心しろ。危害は加えないさ。それに、この街にいる限り、最悪私がお助けやることも可能だからな。大船に乗った気でいてくれていい。」

「……そこまであなたが肩入れするとは、本当に珍しいこともあるのだな。」

「なに、あくまでも『今』興味があるだけさ。この先どうなるかは私にもわからないよ。」

そう言つて、エイワスという『存在』は再び闇に消えた。

「……私達に興味を持たれる。それは幸か不幸か、一体どっちなのだろうな。」

静寂の中、アレイスターの笑いを含んだ咳きが、虚空に消えていく。

「……まあいいでしょう。さて、ここからは我々の逆襲の時間だ、魔術師。」

言うと、モニターが切り替わり、とあるオフィスの様子が映し出される。

白衣を着た男が一人。

その周囲には、4〜5人の黒づくめの装備で覆った人間達が立っている。

そして、そのオフィスの真ん中には場違いなベッドが1つあり、そこには1人の少女が横たえられている。

頭には機材、装置が取り付けられており、その体はガクガク痙攣し

ている。

その様子を見て、アレイスターは口を開く。

「……木原が最終信号の回収に成功した。どうやら、対象コード注  
入直後のようだが……この段階で、早くも学園都市の『場』に変化  
が生じ始めているな。この分ならまもなく、AIM拡散力場を利用  
した虚数学区・五行機関は展開完了するだろう。」

その口角が吊り上がった。

「さあ、ショータイムの時が近づいているぞ、魔術師。精々足掻い  
て、私を楽しませてくれ。」

雨が降りしきる学園都市の中。

様々な者たちが、戦い、そして闇で策を巡らすその時に。

ヴェントは雨の街中にいた。

(くそ……)

その、口元に当たった手の指の隙間からは、どろりとした血液がこぼれていた。

時折、大きく咳き込んで、赤い塊を地面に吐き出している。

(……クソ、何だこれ。誰かからの攻撃なのか……？ おのれ。あと少しで、かみじょうてい標的を殺害できたのに。)

咳き込んで、血を撒き散らしながらも、必死に思考を巡らせていく。

(それに……さっき突然現れた莫大な天使テレマの力が気になる……。力の質は光ルシフェルを掲げる者。これはおそらく……ベラナバスの言っていた『同類』……。例の千乃勇斗ってやつか？ クソ、アレイスターめ

！！ そんな隠し玉を隠し持つてやがったのか！！  
『ア  
レイスター』……どこまでも魔術を侮辱する男だ……！！  
………  
ベ  
ラナバスは やられてるだろうな。感じた力の量は、アック  
アすら凌駕する量だった。それじゃあ流石に勝てないだろう。』

怒り、困惑、諦観。

それらがごちゃごちゃになっていた。

そんな時、

ふと、デパートの側面の大画面から流れてきた、アナウンサーの切羽詰まった声がヴェントの耳に入ってきた。

『ええ、現在、突発的に意識を失う人が出ている、という報告が全国  
のあちこちから届いています。警察では原因の特定を急いでいま  
すが 』

その声が、ヴェントの意識を強引にニュースに向けさせた。

「……うるっ、さいわね。……しょうがない、じゃない。勝手に敵  
意向けんのが、悪いのよ。………バチカンに、被害が出  
てないと良いなあ。なんだかんだ始末書書けって、うるさいのよね  
え、アックアの奴。………あ、なんかムカついてきた。」

言っ、あっさりとハンマーを振るって。

ボン！！ という音と共に、大画面が破壊された。

「……まあいいわ。幻想殺しに、アレイスター、おまけに千乃勇斗。みんなみーんなグチャグチャにして殺す……！！ 見てなさい！！」

言って、歯を食いしばり、彼女は歩き始めた。

上条は、ラストオーダー 打ち止めを探して、ジャッジメント 風紀委員や警備員の詰所を回っていた。  
しかし、どこにも打ち止めの姿は無い。ラストオーダー

あれこれ捜し回っている内に、時間だけが経過していった。

黒ずくめ、前方のヴェント。

そう言った連中がこの街を歩き回っている今、これ以上時間はかけてられない。

(……悪いけど、緊急事態だ。使わせてもらおう。)

そう考えて、ポケットから携帯電話を取り出す。

自分のではなく、ラストオーダー 打ち止めの携帯電話だ。

電源を入れて、登録アドレスを表示させる。

ラストオーダー 打ち止めが知り合いに助けを求めれば、ここから連絡がつく人間をたどれば、再び探し出せるかもしれないから。

見ると、登録件数は極端に少なく、4件ぐらいしかなかった。

名前すら書かれていなかった。

デフォルト表示で『登録1』みたいなが並んでいる。

その、1件1件の登録番号に電話をかけていく。

しかし、うち3件は沈黙だった。

そして、残った最後の1件。

上条は祈るような気持ちでボタンを押す。

土砂降りの雨をBGMにして、単調な呼び出し音が鳴り始める。

ぶるるるるるるるるるるるる

……出ない

ぶるるるるるるるるるるるる

……やはり出ない

しかし上条が、その音が永遠に続くんじゃないかと思い始めたその時、

ピッ！……とついに反応があった。



ちょうどその頃、アクセラレータ一方通行は、第7学区の暗い病院の中にいた。

病院に攻め込んできていたハウンドドッグ猟犬部隊の1班を振り返り討ちにして、狩りつくしていたのだ。

冷酷で、非情で、冷静に。

と、その時、アクセラレータ一方通行の携帯電話が小刻みに震動した。

「  
」

アクセラレータ一方通行は、ポケットの中から携帯を取り出して、画面を見る。

そこに表示されていたのは、ラストオーダー打ち止めの携帯の番号だ。

(……あのガキか、それとも木原か。)

アクセラレータ  
一方通行はしばらく考えて、それから通話ボタンを押して、携帯電話を耳に押し当てた。

『良かった、ようやくつながったな!』

電話口から聞こえる声は、ラストオーダー打ち止めのものではない。

それに、木原数多のものでもない。

どこかで聞いたことのあるような、正体不明の男の物だった。

『今、ラストオーダー打ち止めの携帯電話に残った登録番号に片っ端からかけてんだ。応答したのはアンタだけ。状況がつかめないかもしれないが、協力して欲しい。あの子が危ないんだ!』

そう言って、その『声』はペラペラしゃべる。

それを、アクセラレータ一方通行は耳に神経を研ぎ澄ませ、一字一句聞き逃すまいと意識を集中させていた。

もちろん、木原による罠の可能性も否定はできない。

しかし、アクセラレータ情報や手がかりが全くないこの状況では、その罠に乗らない事には一方通行に活路はない。

『なあ。もしかして、アンタが……あの子の言ってた知り合いって事で良いのか?』

「ああ、そうだろオな。」

『良かった。そっちは無事か。ラストオーダー打ち止めの事もあるし、もし合流し

たら一緒に隠れててくれ。』

「心配いらねエよ。オレだって一応高位能力者だア。次は何かする。」

『……そうか。なら、次は離さないでやれよ。』

ラストオーダー  
打ち止めと

は今日初めて会ったけど……最初にゲーセンとか行った後は御坂妹と追いかけてこしてたし。元気な子みたいだから、「オイ、今何だったア？」

唐突に、電話口から聞き逃せない単語が聞こえて、アクセラレータ一方通行は話の流れを止めた。

『御坂妹』

学園都市第3位のレベル5、御坂美琴に兄弟姉妹はいない。

これは周知の事実だ。

なのに、わざわざそう言う呼称を出すという事は、

この電話口の男は『妹達』シスターズを知っているという事に他ならない。

それに、

(『御坂妹』……、オレがこの言葉を聞いたのは1度きり……  
……。あの、あの『実験』のときの……さんしたレベル0だけだア  
……！)

ドクン！！

と心臓が鳴る。

同時に、ふつつつと、あの時の屈辱感が湧きあがってきた。

しかし。

「……………なア、オマエ、8月21日のアレを覚えてるか？」

口から出た声は、驚くくらい冷静だった。

『……………っ!?!?』

電話口で、相手が息をのんだのが伝わってきた。

おそらく、その日、何があったのか思い出したのだろう。

「忘れるわけはねエよなア、三下。」

『……………まさか、一方通行、アクセラレータなのか!?!?』

「そオだ、三下。……………いや、上条当麻ア。」

『!?!……………なんでお前が、ラストオーダー打ち止めと一緒にいたんだよ。』

やがて、驚愕から立ち直った上条が、尋ねる。

当然の疑問だ、と一方通行は思っアクセラレータつ。

アクセラレータ  
一方通行という『殺してきた方』

ラストオーダー  
打ち止めという『殺されてきた方』

なぜ、その2者が知り合いで、一緒に行動していたのか。

「……………知らねエよ。ただ、……………アイツは、ラストオーダー打ち止めは、オレが『闇』に引きずり込んだと言ってもいいくらいだア。だから、……………アイツはオレが搦り上げる。そう決めたんだ。」

その質問には明確な答えを返さず、それでも、目の前の状況での、最優先事項を述べる。

殺してきた、殺されてきた、そんなのは関係ない。

ただ、アクセラレータ一方通行は、ラストオーダー打ち止めに『光』の中で生きてほしいと願う。

そのために、彼は戦っている。

「……………『アイツら』への弔いのためにやってるのか、他の理由なのかは知らねエがな……………」

『アイツら』

死んでいった、シスターズ妹達。

今の一方通行は、自分の罪を認めて、それでいて、ラストオーダー打ち止めと向き合おうとしている。

『お前、変わったみたいだな。』

「……フン、こんなこと言うのは癪だが、素直に認めてやるよオ。

……オマエのおかげだ、ヒーロー上条当麻。感謝してるぜエ。」

『……ああ、素直に受け取っておくよ。』

「そオしとけ。」

上条と一方通行は言葉<sup>アクセラレータ</sup>を交わす。

以前、本気で戦ったのが嘘であるかのように。

シスターズ妹達を巡って死闘を演じた2人が、ラストオーダー打ち止めを通じて手を結ぶ。

「……話を戻すぞ。あのガキとはどこで別れた。」

『第7学区のケンカ通り……じゃ、分かんねえか。ありやウチらの間だけで使ってる名前だからな。っと、……あつた。39号線の木の葉通りって書いてある。そのの、えーっと、オリヤ・ポドリーダって名前のスペイン料理系ファミレスから少し北に入った所だ』

「逃げた方向は？」

『……一応北の方に逃げたみたいだ。別れてからかなり経ってるから、正直、今どこにいるかは予測がつかないけど』

「ところがどっこい、わかるかもしれねエ。……後はコツチで回収しておく。オマエはそのケータイを捨てて、サツサと一般人に戻れ。」

『何言つてんだ！俺も手伝うに決まってるだろ！！』

一方通行はその答えを予想できていた。

そう言われるのは、正直嬉しかった。

『悪党』である自分以外の人間も、打ち止めを気にかけてくれる。

しかし、だからこそ、この場では上条当麻を巻き込めない。

今回の敵は、自分のような能力バカではなく、訓練された殺し屋だ。

あの右手では勝つことはできない。

ゆえに、一方通行は嘘をつく。

1人の方が動きやすいというか、下手に素人に状況を乱されたくない、という建前も確かにある。

しかし、本心では、自分を変えてくれた、上条当麻を死なせないために。

「……そオだな。ならオマエは第7学区のデカイ鉄橋に行け。あそこがいざという時の合流地点って事になってる。アイツが今も逃げてンならそこにいるだ。」

『分かった。……お前も気をつけるよ。なんか今日の学園都市は少しおかしい。変なヤツが街の外から侵入してきてるし、警備員とか

街中の人達がバタバタ倒れてるし』

「なに？」

『あれ、侵入者の方とはかく、街の異変の方も知らなかったのか？ 警備員とか、黒ずくめの連中も被害に遭ってたみたいだった。』

物理的に直接気絶させてんじゃなく、多分、何らかの力で。』

「嫌な感じがプンプンするが……、今は後回しだな。」

『多分そっちは俺がどうにかできる。けど、かなり無差別的な攻撃みたいだから、お前も気をつけるよ。』

「ああ、わかった……」

そして2人は、少しだけ黙り込む。

『……悪いな。本当なら、あの子は1人にするべきじゃなかった。』

「……、お互い様だ。俺もあのガキを1人にしちまったからな。」

そして、通話を切った。

少しだけ、手の中の携帯電話に目をやる。

思ってることは、いくらでもある。

しかし、一方通行は無言でそれをズボンのポケットにねじ込んだ。

アクセラレーター

そして、ショットガンについて、彼は病院の出口に向かって歩き出した。





e p . 3 4 9 月 3 0 日 . 9 ( 後 書 き )

バイト楽しいけどきついですね……  
やりがいはあるのでいいんですが。

次もなるべく急ぎます!!!

e p . 3 5 9 月 3 0 日 - 1 0 ( 前 書 き )

そろそろ0930もクライマックスです。  
頑張ります。

よろしくお願ひします。  
では。

一方通行は第7学区39号線、木の葉通りに到着した。  
アクセラレータ

「……このファミレスの北か。」

上条の言っていたファミレスもすぐに見つかり、上条の言葉通り北へと進んでいく。

「……、これは……」

しばらく歩いていると、目の前には横たわる黒ずくめの集団たち。

全員が気絶しているようだ。

「……これが、アイツ上条が言ってた攻撃か？」

ハウンドドッグ 猟犬部隊はピクリとも動かない。

( いくらコイツらが攻撃されてるとはいえ……味方とは限らねエ。  
早いところあのガキを見つけねエとな。 )

アクセラレータ  
一方通行は思考する。

(……あのガキは妹達のネットワークを介して、『実験』当時使われていた証拠隠滅マニュアルに従って逃亡してるはずだ。8月31日の天井亜雄と同じパターン。……監視衛星の目を盗み、なおかつ警備ロボットの巡回ルートを外れるような道だア)

おそらく、いや、ほぼ確実に警備員の詰め所は外れ。裏通りの方が怪しい。

そう判断して、一方通行はショットガンを杖代わりにして路地に入っていく。

必死に目を凝らし、何らかの痕跡を探す。

途中のビルの裏口などはすべてをチェックした。

電撃能力を使って強引にロックを外した痕跡が無いかどうか。

しかし、芳しい収穫は無い。

それでも、あきらめずに少しずつ進んで行って。

唐突に、『それ』を見つけた。

土砂降りの雨に作られた、汚い水たまりの上。

破り取られた布切れが浮かんでいる。

それは、男物のワイシャツの袖のように見えた。

アクセラレータ  
一方通行には、その袖のデザインに心当たりがある。

(……………ラストオーダー打ち止めが、あのキャミソールの上から羽織っていたワイシャツ)

アクセラレータ  
一瞬、一方通行はその姿を思い出して、そして彼の思考が止まった。すると、タイミングを計ったように彼のポケットの中で携帯電話が振動した。

その振動によって現実に戻されて、

アクセラレータ  
一方通行は、ポケットから電話を取り出した。

画面に表示されたのは見知らぬ番号。

アクセラレータ  
一瞬で、一方通行は無表情になった。

通話ボタンを押す。

耳に当てるまでもなく、大きな大きな声アクセラレータが一方通行の耳に届いてくる。

『元気かなーん、アクセラレータ一方通行。ぎゃははははっ！！』

耳障りな声でした。

あまりにも予想通りすぎた。

無表情ながら、憎悪と殺意が周囲を満たす。

一般人なら、……いや、プロの魔術師でさえ、この場にいたらおびえて何もできなくなる程に。

「なアンの用かなア、木原くウウン？」

無表情のまま放たれたその声は、見る者がいれば狂気を感じるであろう声色で。

しかし、電話の主は動じることなく、応える。

「遊び心だよ。将棋にしてもチェスにしても、勝負つてなあ宣言して幕を下ろすモンだろうが。昔の人間つてなヤルよなあ。散々ムカつきつ放しだったクソ野郎が、目の前で敗北に打ちひしがれる瞬間を存分に味わえるんだぜ。これ以上の勝利の醍醐味があるかよ、なあ？」

「宣言？ マジで言ってるのか、オマエ？」

「いやあ、信じねえんならそれでもいいけどよあ。つつか、そこにガキのシャツの切れ端とか落ちてねえ？ まだだつたら探してみるつて、わーざわざお前のために残しておいてやったんだからよあ」

「……  
……  
……」  
「学習装置ってのはすげーよな。人間の頭にウイルスぶち込めるなんて普通じゃねえよ。ハハッ！ このガキ身体あガクガクに震わせ

てやがるぜ！！ おい、テメエのアドレス教えるよ、動画メールで送ってやるからよ！！』

虫唾が走った。

木原が行っているのは、8月31日に天井亜雄が行った行為とほぼ同じ。

洗脳機械テスタメントを使って、打ち止めの脳ラストオーダーを直接書き換えること。

（こんなクソと同じ人間だとはなア……。まア、……。オレが他人の事言えねエってのは自覚してるがよ。）

『にしてもテメエ、分かってねえな。』

一方通行アクセラレータの思考を知ってか知らずか、

木原はさらに続ける。

『敵を殺さねえってやり方は、確かに有効だ。世の中には生き地獄という言葉がある。死ぬ事が世界一の恐怖だと勘違いしてる連中は、そういうプレッシャーに耐えられずにパンクすんだろうさ。例えばウチの部下とかな。だがなあ……。そいつを知ってる俺には通用しねえんだよ。安い演出だったのが丸分かりだボケ。いーかー、テメエみてえなクソガキに復習タイムだ。死体オラジエってのは、殺してナンボなんだよ。息の根を止めるってなあ、彫刻の顔を仕上げるようなモン



だ。 temeエのオブジェはギャラリーに飾る段階じゃねえ。 適当に石を削ってその辺に投げっ放したあどういう見だコラ。 そんなじゃ肉塊に対して失礼じゃねーかよー？」

「……………」  
「そんな訳でえ、1回 temeエにお手本つてのを見せてやる。 キレーなお肉の作り方つてのを教えてやるよ。 ガキの残骸眺めて思わずトンじまわらないように覚悟しておけよお！！」

下劣な笑い声が続く。

しかし、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行はそれをさえぎるように言った。

「ならさつさと死体でも送ってくるんだなア、忠犬アマ公。」  
「……………あ？」

「今回の件が単に俺を悔しがらせるためなら、オマエの性格じゃアあのガキはとつくの昔に死体になってンだろうが。 オレにまだ送りつけられてないってのが不思議だぜエ。<sup>テストメント</sup>学習装置？ まったくバカバカしい。」

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は嘲笑を上げる。

「どっかの誰かに雇われたに過ぎない犬コロ奴隷達。 ……惨めだねエ、木原クーン。 オマエはこのデリバリーだよ。 あんだけ焦つてたのは届けんのに30分経っちまうとご主人様に叱られるからだったのかア？」

『……………殺す』

ブツツ、と唐突に通話が切れた。

(……ここまで言われりや電話の前であのガキの目玉の1つぐれエは絶対弾くと思っただがなア。それがなかったって事ア、おやおや。コイツは本格的にパシリ確定だな。)

ハア、とため息をついた。

木原をそれだけ思いとどまらせるほどのバツク。ししゅじかたま

『ハウンドドッグ 獵犬部隊』の整った装備を鑑みれば、自ずとその可能性は1つに収束する。

(……学園都市そのものか。……いや、それを直接束ねる統括理事会がキテルな。木原の居場所は分かんねエが……統括理事会の連中なら話は別。次はそっちを調べさせてもらっぜエ、クソどもがア。……だが、その前に)

一度、目を閉じて。

「………宣戦布告だ!! コラアアアアアツ!!」

絶叫と同時。

首筋のチョーカー型電極のスイッチを指で弾き、ミサカネットワイクと接続。

莫大な演算能力を、彼は取り戻す。

そこは狭い裏路地。

四方をコンクリートの壁に囲まれている。

しかし、それでも関係無い。

11次元ベクトルに干渉。

対象の絶対座標を読み取り、位置情報を確実に手に入れる。

(敵は学園都市!! ソイツを束ねてんのは統括理事長!!)

その、黒幕が鎮座する窓のないビルの位置の。

「がっ、アアあああああああああああああああああああああああ  
あああああああッ!!」

アクセラレータ  
一方通行は手近なコンクリート壁に手を突っ込んだ。

そして、ベクトル操作によってまるで豆腐のように埋没した腕を振り回して、触れている全てのベクトルを統括制御した。

惑星の回転エネルギーという莫大な力すら操作によって自分の物へと変える。

地球の自転が5分遅れることになっても、この1撃は放たなければならぬ。

挟り出されたコンクリート壁は音速をはるかに超えて。

『窓のないビル標的』までの距離　およそ2キロ超の距離をあっという間に駆け抜けた。

恐るべき速度で、直撃する。

莫大な音の炸裂。

2キロ超の距離など全く関係無い。

射線上のすべてを消し飛ばして、コンクリート壁はそこに突っ込んだ。

灰色の粉塵が周囲に撒き散らされ、視界が一時的に奪われる。

そしてやがて、ゆっくりと視界は回復していく。

その粉塵の中、窓のないビルがびくともせず立ち続けた。  
いた。

悔しさが、無力さへの怒りが、浮かぶ。

しかしそれ以上に、決意の方が大きい。

「……………オレは絶対にオマエを出し抜く。覚悟してるよ、統括理事長。」

その赤い目には憤怒の炎が踊り、鋭い殺意と憎悪があふれている。

バチン、と電極のスイッチを通常モードに戻して、彼は踵を返して歩き出した。

(……………さて、12人のお偉いさん方。家庭訪問の始まりだぜエ。覚悟しておくんだなア。)

自分が学園都市の敵になるという最悪の事態。

その覚悟はもうとつくにできている。

「さて……………逆襲開始だぜエ。」

雨が降りしきる鉄橋の上。

苦しそうに咳き込む音と、雨粒とは違う液体がアスファルトに落ちる音がする。

「ぐっ、げほっ、げほっ……」

鉄橋の上で、ヴェントは苦しんでいた。

(……ぐ、……これは……一体、何だ……?)

自分の体に何が起こっているのか、どの程度のダメージなのか、体は大丈夫なのか、駄目なのか。

まったくもってはつきりとしない。

全く想像がつかない。

……そして、それでも彼女が思考を巡らそうとした、その時。

「ッ……!」

全身を震えが貫いた。

寒さからなどではなく、体が『何か』を感じ取ったのだ。

次いで、ヴェントの体から一斉に痛みが引いていった。

決して体調が回復したわけではない。

その感じ取った『何か』が、痛みを超越したからだ。

皮膚の上から内臓の奥まで、血管を1本残さず全て絞られているような、そんな感覚。

その正体は、『気配』。

学園都市そのものを覆い尽くすような、圧倒的な『気配』、さらに言い換えれば、存在感。

スケールが違いすぎて、情報が実感としてつかめない。

その上……、

(この『気配』、まだ膨らみ続けている……!!???)

その圧倒的な存在感は、世界を震わせ、いくつもの重なった層をたわませ、空間に横たわる魔術的法則すら吹き消そうとしており、しかもまだまだ序の口だと言わんばかりに圧力を増していく。

(……………くっ!! 十字教世界の『聖人』であってもここまで行かない……………!! ただの人間には、この『気配』は出せない!!……………そうか。コレが、学園都市の、私達オカルトに対する、最終防衛ラインか!!)

これは確かに、科学の、魔術に対する切り札ジョーカーになりうる。

……しかし。

「……関係、ない。何がでてこようが、私は目的を果たすだけってコトよ。」

そう言って、ヴェントは、口の中で短い言葉を呟いた。

それは、彼女が今ここにいる動機となった彼女の弟の名前。

それだけで、彼女に冷静さが戻ってくる。

いくつもの驚きに揺さぶられた心が、芯を得た。

(……この街の都市機能の9割はもう奪ってある。アレイスターはもう隠し玉を出さなきゃなんないほどに追い詰められてるってコト。だから……勝てる)

ヴェントは口元の血を拭って、口角を吊り上げる。

結論は出た。

標的である上条当麻と、千乃勇斗を殺すだけ。

(科学は、キライ)

ヴェントは手すりに両手を置きながら、思う。



(科学は、ニクイ)

自分をこんな風にした科学が嫌い。

弟の命を助けなかった科学が憎い。

腕で口元を拭って、ヴェントはゆっくりと深呼吸した。

そして、ヴェントが鉄橋から離れようとした所で、

唐突に、凄まじい轟音が鳴り響いた。

(……………何だ、今の？ 魔術的な力は感じなかった。と、

すると。……………何らかの能力者……………仲間割れか？)

ビルが紙きれのように吹き飛ばされ、いくつも倒壊している。

(……………相変わらず、この街は得体がしれない)

ヴェントの心に忌々しさが広がる。

と、その時、彼女は足音を聞いた。

目的は分からないが、走って近づいてくる。

(……………)

虚空から有刺鉄線を巻いたハンマーを生み出し、掴む。

そしてその人物が現れた。

「なっ……テメエ!!」

その場に現れたのは上条だ。

「何でテメエがここにいる！ 打ち止めをどこにやった？」

ラストオーダー

「?? ……わざわざ殺されに来たってコト？」

「あの子はどうしたって聞いてんだ!!」

「ラストオーダーだあ？ 知らねえんだヨそんなモンは!!」

2人は言い争いを始める。

しかしそれは続かない。

再び『何か』が、この場に現れたからだ。

ドッ!! と。

凄まじい閃光が夜の闇を切り裂いた。

「な……………!?!」

さらに、状況が掴めない彼らに、1歩遅れて莫大な音と衝撃が襲いかかった。

上条の体が浮き、そのままアスファルトの上を転がせられる。

鉄でできているはずの大きな橋。

それが、吊り橋のように揺れていた。

その想定外の動きに耐えられないのか、橋に使われているいくつものボルトが弾け飛ぶ音がした。

ヴェントは、それを呆然としながら見ていた。

突然の出来事で最初は空白だった思考が、理解が進むにつれて、怒りの感情によって覆われ始める。

ふつつつと、憎悪があふれ出す。

「あの野郎……アレイスターッ!!」

ここまでくれば、上条当麻などただの小物も同然。

今まで上条に向けていた殺意を、全てその『何か』に向ける。

「……殺してやる。そうか。これが虚数学区・五行機関の全貌か！  
！ ナメヤがつて!! そうまでして私達を貶めたいかああああ  
あああああああッ!!」

ハンマーをしつかりと掴みなおしてと、思い切り足元へ叩きつけた。

ガンン!! という轟音と共に、アスファルトが砕かれ、ヴェント

はその場から飛び去った。

(一体、何が……。アイツは何を見ていたんだ?)

いまだに事情がつかめていない上条がその場に残された。

(ヴェントは、俺を殺すためにわざわざココを襲撃したはずなのに……何なんだ!?)

そして、上条は立ち上がって。

………そして見た。

その、『何か』の姿を。

学園都市外周部。

既に戦いとは言えない、魔術師の殲滅をほぼ終了させた勇斗は、  
『ソレ』を感じ取った。

「……………！？ これは……………」

学園都市内部からのただならぬ気配。

その目で見ると、勇斗は飛び上がる。

「……………！！」

雨に包まれる、夜の学園都市。

普段と比べて極端に交通量が少なくなっている道路や建物には光も乏しい。

そんな街の一角。

莫大な閃光が溢れだしている。

「あれは……………!？」

巨大な光源が、学園都市内部に存在している。

そして、勇斗が訝しがるその前で、更なる変化が起こる。

轟! と、光源の中心点から、無数の翼のようなものが吹き荒れた。

まるで刃のように鋭い、数十もの光<sup>ツバサ</sup>。

1本の長さは10メートルから100メートルクラスにも及んでおり、それらが天へ逆らうように、高く高く展開されていく。

周囲のビルを、空気か何かのように引き裂き、倒壊させる。

それは、巨大な水晶でできた、孔雀の羽のようだった。

「……………あれは。」

翼、  
人外の象徴を身に背負うもの。

今の自分とほとんど同じ状態のそれ。

本来であれば、非科学極まりない存在であり、学園都市に存在などしないはずの存在。

「……………天使!？」

そうとしか、形容できなかった。

言葉を失う勇斗など意にも介さず、遠くにある天使の翼はゆっくりと動いている。

と、一際大きな翼と翼の間で、得体の知れない放電のような光が瞬き始めた。

似たような姿だからなのか、それとも勇斗が『力』を持っているからか。

どんと膨れ上がっていく力を、勇斗は感じ取った。

(……………これは……………!!)

莫大な力を持つ勇斗ですら戦慄する。

そして、直後。

ゴッ!と。

その光が、放たれた。

生み出された雷光が、蛇のような軌道を描いて学園都市の外へと飛んでいった。

丁度、勇斗がいるところとは反対に当たる位置だ。

そして、強烈な光が地面に突き刺さる。

その地点から、まるで土地の地下にまんべんなく爆薬が仕掛けてあったかのように、森と土と木々と人が上空まで舞い上げられるのが見えた。

数10キロ単位で離れた位置であるにもかかわらず、だ。

それほどまでに、途轍もない量の物質が噴き上げられたのだろう。

「…………ツ!」

これはまずい。

そう考えて、勇斗はその『天使』に向かって飛んで行く。

……………と、学園都市の外壁を超えたとき、不意に自分の力に『ノイズ』が走った。

「!?!」



一瞬、翼と輪っかから色が抜け、白色へと変わる。

しかし、自分の中で再び『ノイズ』が走ったのが感じられて、

再び翼は水晶のように澄んだ青に。クリアブルー

輪っかは金色に戻った。

(……テレスマ天使の力の展開が……妨害された?)

一瞬ではあったが、そんな印象を受けた。

しかし、もうそれは感じられないし、テレスマ天使の力も完全に統制できている。

(……問題は無いみたいだな。……悩むのは今じゃなくていい。終わしてから考えよう)

疑問を無理やり断ち切って、勇斗は再びスピードを上げた。

学園都市の街並みが、眼下をあっという間に流れていく。

真っ直ぐ『天使』のもとに向かおうとも考えていたのだが、『天使』の出現場所が第7学区という事もあり、一度177支部に様子見に戻ることにした。

直線距離にしておよそ700メートル。

『天使』からこれくらいの位置に177支部はある。

『天使』の出現に際する建物の破壊などは起こっていないようだ、  
勇斗は外観から判断する。

しかし、勇斗が建物の中に入ると、オフィスの方から物音が聞こえてきた。

(……何だ？ ……いや、誰だ？)

さっきここを出た時、しっかり施錠はしておいた。

しかも、指紋認証その他もろもろによる電子的セキュリティは万全であり、そんじょそこらの泥棒では侵入することなどはできない。

例え、学園都市全体のセキュリティが落ちていたとしても、初春謹製のプログラムのおかげで別系統のセキュリティが動くはずなのだ。

(セキュリティが動かなかったのか、それとも意図的に破ったのか……めんどくさいな)

勇斗はこの事態に乗じた泥棒かと真っ先に予想を立てて、慎重に奥へと向かう。

しかし、それを無視するかのように突然前方の扉があいた。

すわ泥棒か、と勇斗は警戒したが、

「……無事だったみたいね、勇斗。」

そこにいたのは、御坂美琴だった。

奥のオフィスに行くと、佐天もそこにいた。

話を聞くと、コンビニで御坂と佐天が偶然出会い、街の様子を不思議に思つて177支部に来たのだが、支部の全員も意識を失つていて、いるはずの勇斗もおらずに途方に暮れていたらしい。

「さつき『あれ』が何か攻撃したじゃない？ 正直、生きた心地がしなかったわよ……。……。ねえ勇斗。『あれ』は一体何なの？ ぶっ放してた光……。あれ、放電みたいだったけど、放電とは全く違うものだったわよ？」

そう、御坂は言う。

「さあな。」

勇斗はそう返した。

その返事に対して御坂はムツとしたが、

「おれはもう1回出て、調べてくる。だからお前らはここで留守番して、初春たちを守っててくれ。」

勇斗はそれを無視して、2人にそう頼んだ。

「押しも押されもせぬ学園都市の第3位。そして、その第3位のピッチを救った後輩。お前らになら任せられる。……言っとくが、ただ戦うより守る方が難しいからお前らに頼んでるんだからな。」

少し不服そうにしていた御坂を見て、勇斗は後半の言葉を付け足す。

そこで2人は頷いた。

……御坂はややしぶしぶだったが。

それから、勇斗はソファーに寝せてある初春に近づいた。

毛布がかけてあった。

佐天がやってくれたのだろうか。

その心遣いに感謝しながら、初春のそばにしゃがむ。

「……悪いな、巻き込んでしまった。」

意識を失っている彼女の頭を撫でながら、呟いた。

「もうちょっと待っていてくれ。もうすぐ助けるから。」

そして立ち上がって、床にマットを敷いて寝せてある坂本、固法、白井の3人の方にも目を向けて、言った。

「……そう言う訳です。待っていてください。」

再び御坂と佐天を見る。

「頼むよ。」

「任せなさい……！」

「任せてください……！」

頼もしい返事を受けて、勇斗は微笑んだ。

「じゃあ、行ってくるよ。」

言って、勇斗は再び戦場へと駆け出した。

突如、学園都市に現れた『天使』。

それを見た上条も行動を開始していた。

(くそ!! あの『天使』をどうにかしないと……!!!)

今日1日で起こった様々な問題全てをまとめても、『天使』のヤバさには敵わない。

あれは格が違う。

ただ、それでも、

(……でも、打ち止めの方はどうする!?)

電話アクセラレータで一方通行は、この鉄橋が待ち合わせ場所だと言ったが、打ち止めオクターはどこにもいない。

本当に現れたのか。それともヴェントを見て逃げたのか。

判断がつかない。

(ちくしょう!!!)

上条は再び打ち止めラストオーダーが持っていた子供用の携帯電話を取り出して、一方通行アクセラレータに電話をかけた。



今回は、電話はすぐに繋がった。

「おい、一方通行アクセラレータ！！ 言われた鉄橋まで来たけど、打ち止めはどラストオーダーこにもいなかったぞ！！ そっちは見つかったのか！？」

『……あのガキの居場所は、もオすぐ突き止められそオだ。少なくとも、闇雲に走り回って見つかるトコにはいねエ。後はこっちでやる。』

「なっ……おい！ 嘘ついたのかよ！？」

『オマエの右手は銃にも対応できんのか！？』

「……っ！！」

痛い所を突かれて、上条は言い返せない。

くそ、と上条は心の中で呟いた。

これに協力できない事が、胸に刺さった。

……だが、しかし。

それなら逆に自分自身は『天使』の方に集中すればいい。

そう気持ちを切り替えて、上条は声をかける。

「悪い、それもそうだな。……一方通行アクセラレータ、さっきのヤツ見たか？ 街の一角に、すげえ光と一緒に何十本って翼が湧き出てる場所があると思うんだけど。」

『……学園都市の外周に向けて、何かを撃ってやがったヤツだな？』

「俺は、あの『天使』を止めに行く。だから本当に、お前と協力するのは難しくなる。」

『構わねエよ。』

「悪い、……………死ぬなよ。」

『……………互いにな。』

電話を切って、それをポケットにしまって、上条は駆け出した。

事態の終結を、目指して。

e p . 3 5 9 月 3 0 日 - 1 0 ( 後 書 き )

そろそろ世紀末帝王HAMADURAが出てくる、……かもしれません。

e p . 3 6 9 月 3 0 日 . 1 1 ( 前 書 き )

N o t h i n g S p e c i a l ! !

今 回 も よ ろ し く お 願 い し ま す ! !

「…………近くで見るとめちゃくちゃでけーな…………」

勇斗は走りながら呟いた。

道なりに走って、『天使』の元へと進んでいる。

大通りに人影は無い。

「くそ、いちいちスケールの大きいことで!!」

口元をゆがめて、毒づく。

…………と、横道から白い何かが飛び出してきた。

よく見れば、それは白い修道服を着た少女だった。

インデックスは、ばしゃばしゃと水溜りを踏み鳴らし、ずぶ濡れのまま、『天使』に向かって一心不乱に走る。

「おい!! インデックス!!」

その背中に向かって声をかけると、インデックスは立ち止まり、振り返った。

「……ゆうと？」

立ち止まったインデックスの横まで行つて、勇斗は言う。

「お前こんな所で何やってんだ！？ 危ないぞ！！」

「あそこにはひょうかがいるから、行かないといけないの。どうしてそこにいるのか知らないけど、止めないと。あそこにいるのは私の友達のあのひょうかなんだよ！！」

混乱しているのか、断片的な情報しか伝わってこない。

しかし、重要なキーワードを、勇斗は聞いた気がした。

「ひょうか……止める？」

ひょうか。

その名前を聞いて、勇斗は9月1日の事件を思い出した。

新学期早々、地下街を舞台に繰り広げられた、イギリス清教の魔術師シェリー＝クロムウェルとの戦い。

それに巻き込まれた、インデックスの『ともだち』、風斬氷華。

『ヒト』ではなく、AIM拡散力場の集合体である存在。

正直、下手な人間よりよっぽど人間らしいのだが。

恐らく、『ひょうか』とは、この風斬氷華であっているだろう。

そして、それを『止める』という事は……

「……まさか、あの『天使』って、風斬なのか……？」

「そうなの！！ だから私は行かないといけないんだよ！！」

勇斗はしばし言葉を失った。

なまじ彼女を知っているせいで、いまいち話が信じられない。

ただし、事態は待たなかった。

2人の視界に、新たに現れた人影。

黒いツンツン頭の少年が、20〜30メートル先の角から走って出てきた。

「とつまー！ー！」

上条が、走っていく。

その後ろ姿に向かって、インデックスは土砂降りの中で叫ぶ。

「駄目だよ、とうま！！ ひょうかを殺さないでッ！！」

前を行く上条が、体を硬直させて、そしてゆっくりと振り返った。

一瞬安堵の表情を浮かべたが、すぐに緊張で顔をこわばらせて、勇斗とインデックスを掴んで路地裏に逃げ込もうとした。

しかし、突然勇斗がインデックスを引っ張って抱き寄せる。

「わわっ!?!」

「なに……!!」

してんだ!?!

と言いかけた上条のセリフを遮るように、

パン！！

という破裂音が、雨に交じって響いた。

ほぼ同時に、その背後で、コンクリートの壁が ドガッ！！ っと音をたてて砕けた。



完全に、インデックスを貫いていたであろうルートを通って。

「「!!」」

上条と、勇斗の腕の中のインデックスが驚愕の表情を浮かべる。

その状況の中で、勇斗だけが逆に平静を取り戻していた。

「……………また何か厄介事持ってきたのかよお前は。」

インデックスを離して、心底呆れたように勇斗は言った。

「あんな黒い連中引き連れちゃって。」

上条が出てきた方、つまり、銃弾が飛んできた方から、わらわらと黒づくめの男たちが集まってくる。

全員が、銃口を3人へと向けていた。

「何をしたん？」

「知らねーよ!! 何を狙ってるかいまいち掴めねえし。少なくとも、良いヤツじゃない!!」

「まあ確かに、良いやつだったら話もなしに人に銃なんか向けない

よなあ。」

そう言っつて、勇斗は黒づくめ達を見据える。

銃を向けられ、体をこわばらせる上条とインデックス。

反対に、勇斗はどんどん口調も態度も軽くなっていく。

「……やってみるよ、自称正義の味方共。」

勇斗は黒づくめ達に言い放つ。

そして、それに応えるように、黒づくめ達は引き金を引いた。

何発もの銃声が、響き渡った。

上条は、今度こそヤバいと思った。

硬く目をつぶって、体をこわばらせる。

しかし、いつまで経っても痛みはやってこなかった。

閉じた視界の向こう側で、勇斗の声が聞こえてくる。

「まあ、やれるもんならな……っっていうテンプレだけどね。」

余裕しか感じないその言葉。

上条は目を開けた。

いつの間にか、2人の目前、盾になるような位置に、金色の輪つかとクリアブルーの翼を出した勇斗が浮かんでいる。

勇斗の前には、よくわからない文字のようなものが書かれた魔法陣が、壁のように展開されていた。

放たれた銃弾は、1発たりともその壁を超えることは無い。

インデックスは、目を丸くしてそれを見ている。

「……………この俺を銃弾ごときで殺せるとは思うな。銃弾じゃ遅すぎなんだよ。……………さっさと消えろ。」

一瞬だった。

瞬きをするかしないかくらいの速度で、黒づくめ達が弾き飛ばされる。

上条の目には、一瞬勇斗の姿がブレ、何かが光ったくらいにしか見えなかった。

それだけで、いつのまにか、危機は去っていた。

「お願い、とうま。あそこには行かないで。どういう理屈かは私にも分からないけど、でもあそこにいる『天使』はきつとひょうかなんだよ。あれは絶対に止めなくちゃいけない現象なんだけど、でもとうまだけは関わっちゃだめ！！　とうまが触ったら、善悪なんて関係なくひょうかが消えちゃうんだよ！！」

一旦の危機が去り、3人は路地裏に隠れていた。

雨でじつとり濡れて重くなった上条のシャツを掴み、インデックスは彼に訴える。

「『ひょうか』って……」

上条も、それが誰を指すのかに思い当たったようだ。

「『風斬氷華』……。……こんなことをする奴には思えないけど……」

3人が知っている彼女は、ああいった破壊活動とは全く縁のない人間だった。

しかし

「……………それについては、心当たりがある。」

勇斗が口を開いた。

「アイツはAIM拡散力場の集合体だったよな。そんで、AIMっていうのは能力者が発する微弱な力の事だ。ここまではいいな？」

「ああ。」「うん。」

「そして、能力者って言うのは、パーソナルリアリティ『自分だけの現実』を土台にして、能力を具現化してる。……『手から炎を出す可能性』とか『他人の心を読む可能性』みたいに、現実の常識とはズレた世界、こいつを

観測して、世界を操る源だ。」

「……頭がグルグルしてきたかも。」

「早い話が、『まともな現実から切り離されている状態』っつーある種の精神障害だ。各々が『異常な世界』を妄想・観測して、それを現実の世界に当てはめてるわけだな。」

「……なるほどなんだよ。」

「その各々の『バーソナルリアリティ異常な世界』の、千差万別な、現実に対する無意識の干渉。……それがA I M拡散力場にあたる。」

一度、ちらりと『天使』を見て、勇斗は続ける。

「それだけA I M拡散力場と自分だけの現実には密接なつながりがある。バーソナルリアリティ……つまり、A I M拡散力場に干渉することによって、その自分のだけの現実……、言い換えれば心に影響を与えることができる。ましてや風斬は、そのA I M拡散力場の集合体だ。A I M拡散力場を完璧に操れば、形状から言動まで、全てを制御できる可能性がある。……結論を言う。今の風斬に、俺たちのアイツに対するイメージは通用しないと考えた方が良い。」

勇斗は断じた。

冷たい雨が、更に冷たくなったような気がした。

「……流石勇斗、詳しいな。」

上条はきまり悪げに言った。

「……まあ、本職だしな。」

「……？ お前の能力って、翼じゃないのか？」

「……いろいろあるんだよ。能力にはな。」

勇斗はため息をつく。

「……ってことは、ひょうかは誰かに無理やりあんなことさせられちゃってるだけなんだよね！？」

そんな中、何かに気づいたように。

縋り付くように、インデックスは言った。

勇斗は頷く。

「……なら！ とつま、ひょうかは私が何とかするから！ だから、ひょうかに手を出さないで！」

インデックスは切実に叫んだ。

彼女にとって、風斬氷華は初めて作った友達だ。



『天使』の出現という一大事に対して、禁書目録としての立場の間に揺れながらも、風斬の命を危険にさらしたくないのだろう。

しかし、

「駄目だ。」

上条は、インデックスの言葉を拒む。

「とうまー!」

「アイツは俺が止める。それに、一問題はアイツだけじゃない。……お前だけには任せられない。」

「でも、とうまの右手を使ったらひょうかが死んじゃうよ!」

「……………」

「とうまー!」

「……………死なせねえよ。」

沈黙を破って、上条は言う。

「殺すためじゃない。アイツを助けるために俺は行く。さっき

勇斗も言ってただろ? あんなのは普通の風斬じゃないだろ!?

アイツの身には何かが起きちまったからあんな風になってんだよ。

だったら助けに行かないと駄目なんだ。」

インデックスは何も反論できず、ぱくぱくと口を開閉した。

上条は構わず続ける。

「……俺には『天使』がどうだの、魔術的な詳しい仕組みだのは分からない。だからお前の知識が必要だ。でも今風斬に起きてる現象にはA I M拡散力場も絡んでるから、お前にも分からない事があるかもしれない。だったらそっちは俺も手伝えるし、勇斗だって手伝えるんだ。俺達なら、俺達でなら風斬を助けられるんだ！！ なら、行くしかないだろ！！」

インデックスは、その声を聞いて、  
こくと頷いた。

「……まあ、まずはあの黒づくめの連中をどうにかしないとイケないんだけどな。」

そう言つて、上条は路地の出口に視線を走らせた。

と、

「……しよーがない。お前らは行け。」

と、勇斗が路地の入口の方へと向かう。

「勇斗……?」

「俺が足止めする。さっさと行って、風斬を助けてこい。」

その時、複数の足音が路地の中まで入ってきた。

3人を見つけた黒づくめの連中が突撃してきたのだ。

それでも、勇斗は笑みを浮かべる。

「AIM関連は……そうだな、おまえのよめ御坂にでも頼め。アイツだってレベル5だ。俺なみに得意だろうさ。」

言って、その背から翼が展開される。

水晶のようで、それでいて秘めた力強さを感じさせる翼が。

その翼が、振るわれた。

烈風が巻き起こされる。

その風が、黒づくめたちを吹き飛ばす。

「御覧の通りだ。安心して任せてさっさと行ってこい。」

「……わかった。行くぞインデックス!!」

「うん!! ゆつとも気を付けて!!」

「おう!!」

そう声をかけて、勇斗は走り去る2人を見送る。

異能の力にしか効果がない右手を持つ上条と、普通の戦いの術を持たないインデックス。

彼らには、それぞれの持ち場で頑張ってもらおう事にしよう。

そう考えて、再び勇斗は路地の入口を見る。

いくつもの人の気配と、殺意を感じる。

「……さてさて。こいつを見てまだケンカを売ってくるか。」

自らの背からのびる翼。

頭上に浮かぶ輪っか。

それをイメージしながら、勇斗は呟いた。

「いい加減、この街の『闇』は粘着質な奴らだよ。全く……」

トシッ、っど。

1歩踏み出すと、もう勇斗は表通りのご真ん中にいる。

そこは、群れに群れた黒づくめたちの真ん中。

全員が、突然現れた勇斗を見て硬直する。

「…………後悔しろ。お前らはケンカを売る相手を間違った。」

勇斗はただ翼を振るう。

ドツ、パア！！ と、打撃音が響き渡った。

薙ぎ払われ、打ち据えられ、意識を刈り取られた黒づくめたちが、宙を舞い、地面を転がっていく。

それを見て、生き残った連中が勇斗に向けて発砲する。

「…………見上げた根性だけど、さ。」

呆れたようなため息をつき、再び翼を振るって、全弾を撃ち落とす。

「もう一度言う。……………さっさと消えろ。」

三度、翼一閃。

それだけで、黒づくめたちは沈黙した。

「はあ……！！ くそつ……！！ こつちだ浜面！！」  
「……おう！！」

雨が降る夜の街を、2人の少年が走る。

1人は茶髪で、ジャージの上には下はジーパンという服装。

鼻にはピアスをしている、はまじり浜面という少年。

もう1人は、黒髪、黒系の服で上下を固める、半蔵という少年だ。

息を荒げながら、彼らは夜の街を逃げ回る。

「くそつ！！ なんなんだよあいつら！！」  
「知るか！！」

彼らはスキルアウトという無能力者LEVELLOの集団に所属している。

仲間内で遊んでいてのだが、色々物が無くなって、買い出しに出  
ていた。

そして、コンビニでジュースや酒、つまみなどを買って、戻る途中。  
近道として路地裏を通ろうとしたのだが、そこで、謎の黒づくめ集  
団と鉢合わせしてしまったのだ。

「ちっ、まだ追ってくるぞー!!」  
「いい加減しつこいな!! ……浜面!! こっちだ!!」  
「……っ!! おう!!」

前方。

銃を構えて近づいてくる黒づくめがいた。

それをかわすように、2人は路地を折れる。

「……やっちまった。行き止まりだ!!」  
「オイ、笑えねえぞお前!!」

浜面が絶叫する。

「……っ、まずは逃げるぞー!!」

そう言って、身をひるがえして、浜面は元の道に引き返そうとする。  
しかし、

黒づくめたちが、2人の前に立ちふさがる。

そいつらは、無言で銃を彼らに突き付けていた。



「……………!!」

苦々しげな表情を、彼らは浮かべる。

誰が何と言おうと、絶体絶命のピンチだ。

能力で一発逆転……も、無能力者である彼らには不可能であるし、並大抵の能力ではこの状況に対処できるとも思えない。

彼らは、何のアクションも起こさない。

いや、起こせない。

黒づくめたちは、引き金にかけていた指を、引いた。

否、引こうとした、のだが。

その直前、頭上から、『誰か』が飛び降りてきた。

そいつは、背中から翼をはやした少年だった。

( (なんだ、こいつ) )

2人が、脳内で疑問の言葉を浮かべるよりも早く。

翼が瞬いた。

「「!!!」」

2人には、何かが光ったようにしか見えなかった。

それだけで、黒づくめが吹っ飛ばされる。

「……大丈夫か？」

一瞬でこの状況を打開した少年　勇斗が、2人に声をかける。

「あ、……ああ。」

浜面が、目の前で起きたことに目を丸くしながら答えた。

「……すまねえ。助かった。」

「……ああ。ほんと絶体絶命だったからな。ありがとよ。」

浜面の言葉に続けて、半蔵も言った。

「……いや、気にすんな。……けど、今日はもう出歩かない方が良  
い。リアルに死ぬぞ。」

感謝を受け止めて、そしてそれから2人に警告した。

それに対して、浜面が反応する。

「……今、何か起こってんのか？」

「知らないのか？ 学園都市に侵入者。そんでさらに、サーチ&デストロイな黒づくめ集団がうろついている。」

「うん、ソレハマズイ。」

あまりの事態に浜面が片言になる。

「……目的地は、ここから遠いか？」

今度は、半蔵の方に問いかける。

「……いや、もうすぐそこだ。」

「なら、今すぐにも隠れてくれ。そうするに越したことは無い。」

「ああ、わかった。……行こうぜ浜面」

「……だな。……今日はホントに助かったよ。ありがとう。」

「どういたしまして。」

2人は、感謝の言葉を残して走り去っていった。



第7学区にある、高層ビル。

その屋上に、アクセラレータ一方通行はいた。

その目線の先には、いくつものビルを切り崩しながら飛び出した、大量の翼がある。

この窓からは、その翼を出した本体は見えない。

しかし、アクセラレータ一方通行は一目で『天使』という言葉思い浮かべた。

( ) ” ANGEL ”、か)

先だつて、統括理事会の1人であるトマスIIプラチナバグを襲撃し、掴んでいた情報。

学園都市に侵入した正体不明の脅威に対する、作戦コード名。

それが、” ANGEL ”。

すなわち、『天使』。

この科学によって構成された街で、『天使』という非科学的存在が現出した。

「……………チクシヨウ。トンでやがるなア……………」

『ウイルスを上書きさせた打ち止め』ラストオーダーを使った、脅威への対抗。

しかし、具体的にどう『脅威を取り除く』のかはわからなかった。

『脅威』の内容やウイルスの詳細についてもわからない。

学園都市で最高の頭脳を持つ一方通行アクセラレータにすら、わからない。

明らかに、一方通行アクセラレータには情報が足りない。

しかし

まだ終わっていない。

取り戻せるものはある。

最優先は打ち止めだ。ラストオーダー

そして、大通りをはさんだ、向かいの廃ビル、その一室。

そこに、ヤツラがいる。

（まずは、アイツを殺して、それから考えればいいな。……それじゃア、行きますかア！！）

チョーカーのスイッチを入れて、能力を取り戻す。

脚力のベクトル、そして、周囲の風のベクトルを操作して生み出した4本の竜巻を操り、アクセラレータは空を舞う。

猛スピードで空を滑り、

大きく弧を描いて、その廃ビルに突っ込んだ。

ガツシャアア！！ という、ガラスの炸裂する音。

衝突した時のベクトルを操作し、炸裂したガラスの破片の軌道を操作。

窓のそばにいた3人の黒づくめを切り刻む。

同時、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は自分の1番近くにいた黒づくめに飛び蹴りを喰らわせる。

やはりベクトルを操作されたその一撃を受けて、黒づくめは反対側の壁まで吹っ飛ばされた。

ノーバウンドで10メートル以上宙を舞って内壁に激突。

そいつは、装甲服をバラバラに粉碎しながら床に崩れ落ちた。

一瞬で4人の黒づくめを排除して、さらにターゲットを正確に捉える。

「ホイイイ原くウウウウウウウー！！」

絶叫しながらショットガンの銃口を向け、迷わず引き金に指をかけ、引く。



と、木原は近くにいた自分の部下を突き飛ばした。

ちょうど木原の盾になる形で躍り出たその男に、無数の散弾が突っ込み、血を撒き散らして転がる。

「おいおい一方通行アクセラレータあ！ ちゃーんと狙って撃てよお！ じゃねーとみんなの迷惑だぜえ！！」

その挑発を黙殺して、木原の周囲にいる黒づくめたちに視線を向ける。

(……邪魔だな。こいつらから消す！！)

黒づくめの1人の懐へと突っ込み、男の装甲服の肩の近くに備え付けられた、4つの手榴弾の4本のピンを全て抜いて、間髪入れずに腹へ蹴りをぶち込み、ボーリングのように他の黒づくめを巻き込んで薙ぎ倒した。

1番上にいる男が、慌てて装甲服についたままの手榴弾へと手を伸ばすが、もう遅い。

人間爆弾が起爆する。

視界の隅の方で飛び散る血や肉。

しかし、一方通行アクセラレータはそれには意識を向けず、残った最後の黒づくめを睨み付ける。

そして、

「ひっ!?!」

動く間も与えずに、懐に突っ込んで、

血流を逆転させ、その体を炸裂させた。

これで黒づくめは全滅。

しかし、それを意にも介さず、木原は笑う。

「カツコイーツ!! 一皮剥けやがって、惚れちゃいそーだぜ一方アクセラレータラレータ  
通行ああ!!」

「きめエンだよクソ野郎がア!! スクラップの時間だぜエ!!」

木原には『反射』が通じない。

しかし、一方通行は臆アクセラレータしない。

一気に木原の懐に潜り込み、手を伸ばす。

「意味ねえんだよ!! クソガキがあ!!」

しかし、木原はあっさりとそれをよけ、アクセラレータ一方通行を殴り飛ばす。

「チッ!!」

アクセラレータ一方通行は再び立ち上がる。

いくら殴られようが、ここで倒れるわけにはいかないのだから。

ラストオーダー大切な少女を、守るために。

ジャッジメント  
風紀委員 177 支部。

御坂美琴はそこにいた。

雨に濡れる学園都市。

耳を澄ませば、銃声が聞こえてくるようだ。

本当であれば、首を突っ込みたいのはやまやまなのだが。

（佐天さんや初春さん、黒子にその先輩たち。私には、その人たちを守る責任がある！！）

ジャッジメント  
風紀委員は、学園都市の治安維持の一端を担っている。

すなわち、その存在を快く思っていない連中　例えばスキルアウ  
トなどの不良たち　もいる。

もし、この状況でそいつらがここに押し入ってくれば　。

女子生徒がほとんどで、おまけに1人を除いて意識を失っている。

自分がない状況で、彼女らがどんな目にあうか、想像に難くない。

(うーん……、なんだかむしゃくしゃするわね……)

と、御坂が欲求不満気に立っていると、突然携帯電話が鳴りだした。

(！…………この着信音は……)

雨の夜とは対極な、明るいメロディ。

それは、上条専用のメロディのはずだ。

(…………で、出ないと…………)

気恥しいのか、顔をわずかに赤らめて、深呼吸して、電話を取った。

『みこと!?!　えーあいえむかくさんりきばってやつについて詳しく  
教えて欲しいんだよ!?!』

「……………」

何故か、電話口にいるのはインデックスだった。

御坂は突然のことで何も言えなくなるが、それでもインデックスは話し続ける。

『みこと!?!』

「……………」

『みこと!?!』

「……………なんであんたがアイツの携帯からかけてくるの?」

疑問と、ほんのわずかの羨望を込めて、口を開く。

『む、それはごめんなさいなんだよ。……………あ、とゆつかそうじゃなくて!?! だからうーんと、えーあいえむ……………むー、やっぱりとうまにかわるんだよ!?!』  
『もしもし、御坂か!?!』

インデックスの電話は怒涛のように過ぎ、あっという間に上条に変わった。

一体どうしたのだろうか。

えーあいえむ

(……………AIM拡散力場関連よね……………?)

思考を巡らしながら、再び御坂は話し出す。

「……そうだけど。何なの？ アンタら、デートでもしてるの？」  
『んなわけあるか！！ 大体何で俺がインデックスと……あー！！  
つーかそうじゃなくて！！ 確か常盤台中学ってのは、卒業と共に第一線に立つために教育してるんだよな？ って事は、大学レベルの講義も受けてんだろ！？』  
「まあ……そうだけど。何で？」  
『あの『天使』を止めるために、AIM拡散力場関連の知識が必要なんだ！！ 詳しいアドバイザーが欲しい！！ お前だけが頼りなんだ！ 任せられるか！？』

よく聞いてみれば、上条の声も、インデックスの声も、緊迫感に満ちていた。

どうやら、ホントに切羽詰まってるらしい。

(……やるしかないみたいね。)

「いいわ、そっちは任せなさい！！」  
『すまん！！……よし、じゃあインデックス。俺の電話はお前に預けておく。なんか分からない事があつたら全部御坂に聞け！！』  
「ん？」  
『ありがとう！！ 頼むんだよ、みこと！！』  
「……よくわかんないけど……まあいいわ！！ 任せなさい！！」

電話の後ろ、すぐ後ろで、上条が走り去る音が聞こえた。

またどこかへ、1人で行ってしまうのだろうか。

ほんとなら引き留めて、自分も一緒についていきたい。

しかし、彼はそれを許さないだろう。

他人を巻き込もうとせず、自分で抱え込んで。

けど、いつかは彼の横に立って、戦いたい。

それでも、今は、今だけは。

もう、行ってしまったのなら。

足音を聞いて、御坂はこう思いながら、インデックスに向かって叫んでいた。

（上条当麻が、無事に帰って来ますように。）  
と。



e p . 3 6 9 月 3 0 日 - 1 1 ( 後 書 き )

そろそろほんとに0930クライマックスです!! 多分WWW  
頑張ります!! またよろしく願いします!!

e p . 3 7 9 月 3 0 日 - 1 2 ( 前 書 き )

最近何かと忙しい……

いつもよりも短めで、しかも主人公が出てきません……

つづきも鋭意製作中ですが、キリが悪くなりそうだったのでここで投稿します。

駄文ですが、よろしくお願いします。

『天使』が現れた爆心地。

背中から大小様々な大きさの翼を伸ばし、そこに鎮座する風斬氷華。

それを横目に、上条当麻と前方のヴェントが対峙する。

「大罪人同士、キズの舐め合いでもやってるトコだったかしら。」

口元から鮮血を垂らし、黄色の服を真紅に染めながら、ヴェントは武器を片手にニヤニヤと笑っている。

侮蔑と嘲り。

その笑みからは、マイナスの感情しか読み取ることはできない。

「……アンタは後回しにしてやろうって考えてたのに、自分から殺されに来ちゃうなんて、とんだおバカさんよねえ。コレ以上悲惨なモンを見たくないから、まず自分を先にぶっ潰して欲しいってコトかな？」

見る者すべてに嫌悪感を抱かせる、大仰に首をかしげる動作。

だが、それを見ても上条の表情は変わらない。

「風斬はやらせない。」

淡々と、それでいて力強く、上条は言い切る。

しかし、ヴェントは更に侮蔑の笑みを深くすると、心底意外そうに言った。

「へえ。あんなモンに対しても情が湧くんだ。とんだ博愛主義者よねえ。黙示録に登場する『特大の淫婦』よりも醜く汚れた冒涇の象徴だつてのに。そこらの変態でも流石にアレは受け入れられないと思うわよ。」

言い放たれたのは、言葉の暴力だった。

その鋭い言葉と、そこに込められた憎悪の感情に、上条自身も傷つけられたかのような気がした。

「テメエ！！ 撤回しろ！！」

故に、上条は叫ぶ。

流石に、見過ごすことなどできなかった。

しかし、ヴェントの言葉は続く。

「ナニについて？　もしかしてー、普段はああじゃないとかって言うつもり？　……馬鹿馬鹿しいわね。私はソイツを見るのは今日が初めてだけど、あの学園都市アレキスターの長が、街の全部を使って無害で役に立たないものを作るとでも思ってたの？　そんなわけないじゃない。莫大な価値や戦力があるのよ。むしろアンタが今まで見てきたモノの方が未完成不完全のイレギュラーだったんでしょ。どうせね。」  
「……っ！」

ヴェントの言葉は正論だった。

学園都市の長。

すなわち、統括理事長アレキスター。

科学サイドとして、世界の半分を丸々支配下に置いている者。

上条より数段深い世界で、策を巡らし、動いている人物。

そんな人間が、無害で役立たずな物をわざわざ作るはずがない。

そんなことは、既にわかりきった事だ。

しかし、それでも。

「……もう一度だけ言わせてもらおう。」

「ナニを？」

「撤回しろ、クソ野郎。」

「……へえ。意外にカワイイ所があるじゃない。イイでしょう、気持ちぐらいは汲んでやるわ。どのみち、アンタ達は順番に殺していく予定だし、仲良く一緒に殺してアゲル。」

「……ふざけやがって!!」

吐き捨てるように、上条は言った。

それを心の底から愉快そうに見ながら、ヴェントは口を開く。

「さーて。おしゃべりはこのくらいにね。」

その怪物は神

聖かな？ソレとも墮落かしら？……言うまでもないわよねえ。そこにいるのはタダの墮天使野郎。人間の作った出来損ないの羽つき人形にすぎないのよ！ 学園都市にどんな意図があるかは知らない！ 知ったこっちゃないわ!! お前達のやってるコトを、私達『神の右席』は認めない!!」

言葉を出すたびに、ヴェントの感情が爆発していく。

「今のソイツに、私の『本命』が通用するとは思えない。そもそも人間と同じ精神性を保っているかどうかも分からないしね。でも私は殺す！ 私の力が足りずとも、今の不完全な『墮天使』なら、空

中分解しそんな内燃制御系に介入する術式を組んで、自滅を誘発させてやるわ！！ 怪物を怪物の力で吹っ飛ばしてやる！！………  
…そして、一緒にお前と………そういえば、ベラナバスと戦ってた千乃勇斗とかってやつもいたな。………まあいい。後で全部まとめてぶっ潰してやるわ！！ まずはいいつを、この『墮天使』を殺す！！」

上条はそれを、拳を握りしめ、奥歯を噛みしめながら聞いていた。

ふざけるな！！ と、上条の心は叫んでいる。

不条理で無理難題ばかりのこの状況でも、諦めなどはしない。

ヴェントを正面からにらみつけ、口を動かす。

「………やらせるかよ！！ 俺は、風斬氷華を守ると決めた！！ テ  
メエみたいな人間は全部俺が倒してやる！！」

拳を、硬く、固く、堅く握りしめて、上条は駆け出した。

そして、戦いは再び幕を開けた。

死闘が、始まった。

廃オフィス。

ここでは既に、別の戦いが幕を開けている。

アクセラレータ  
一方通行と木原数多。

ラストオーダー  
打ち止めを巡る戦いだ。



(制限時間は 大体3分つてとこかア)

能力は極力使わず、迅速に行動したため、バッテリーはおよそそれくらい残っている。

(とにかく、それまでに木原を殺す。それさえできれば、後はあの医者に任せりゃいい)

アクセラレータ  
一方通行はそう考える。

(だから殺せ。とにかく殺せ!! アイツを殺せば全て終わりだ!  
! 他の事アどオでもいい。何も考えんな。道ずれで構わねエ。木原と一緒に地獄へ落ちる事だけ考えろ!!)

そして再び、アクセラレータ一方通行は木原の懐へと突っ込んでいく。

ベクトル操作で木原をズタズタにしようと、再び彼は手を伸ばす。

下から顔を狙うようなコースで鋭く放ち、

しかし木原は、首を振っただけで軽々とそれを避けた。

恐怖や緊張などは存在しない。

表情には『絶対に当たらない』という絶対の自信が浮かんでいる。

(クソ……「があっ……!!」

手を伸ばしたままのアクセラレータ一方通行に向かって、木原のクロスカウンター

が飛んだ。

それはやはり、アクセラレータ『一方通行の『反射』の壁をすり抜け、彼の顔面に叩き込まれる。』

鈍い音が響いた。

そして、痛みによってわずかに動きを止めたアクセラレータ一方通行へ、さらに軽い連撃が叩き込まれる。

「クツ……ソガア!!」

アクセラレータ一方通行は反撃しようと腕を振るう。

しかし、木原はそれら全てをあっさり躲し、再び連撃の雨を降らせってくる。

(チィ……!!)

アクセラレータ一方通行は舌打ちすると、地面を蹴った時のベクトルを操作し、一度距離を取る。

「あれえ、アクセラレータ一方通行あ。逃げてる暇なんてあるのかおい。」

安い挑発だ、と木原の言葉を見殺して、彼は考える。

(……後ろへ向かう力に対しての『反射』。……そう言う事か。ゴ  
ミのくせしやがって、余計な策だけは考えてきやがる!!)

本来であれば、核爆弾の一撃すらも『反射』する自らの能力。

それを、木原が破るために使っているトリック。

ようやく合点がいった。

木原は、自分が放った拳を一方通行に当てる直前で逆向きにさせて  
いる。アクセラレータ

そうする事で『後ろへ向かう拳のベクトル』を自分の方に向け直す  
羽目になっていたのだ。

……と、黙り続けている彼に向かって、木原はこう言った。

「テメエさあ、もしかして自分で自分をすげー格好良いと思っ  
たのか？ たった1人で巨大な悪の組織に立ち向かって、哀れ囚わ  
れの身になったガキ助けるために走り回ってさあ。……もしかして  
そういう行動で自分の人生全部チャラにできるとでも考えてん  
のか？」

侮蔑と嘲笑。

それらを浮かべた顔で、木原は笑っている。

「ぎゃはは！ ふざけんじゃねえよ！ テメエは一生泥ん中だ！  
這いずつても這い上がつても泥まみれなんだよ！！ だつたらその  
まま沈んでろ！ テメエみてえなのが表えベタベタ歩くと周りが汚  
れちまうん」「うるせエ！！」

その言葉を断ち切るように、アクセラレータ一方通行は叫んだ。

「そんなくらい、ここに来てわざわざお前に言われるまでもなくわか  
つてんだよ！！」

怒りを、後悔を、諦めを、悲しみを、

それら全てを込めて、彼は叫ぶ。

「わかつてんだよ。一生泥ん中だつて事ぐれエ！！ オマエ達が思  
い出させてくれたんだろオガア！！ 今更未練なんざありやアしね  
えよ！！ …… いい加減にしるよ、ドイツもコイツも！！ よつて  
たかつてあのガキを狙いやがつて！！ 『闇』にあのガキを巻き込  
んでんじゃねエよこのクソ野郎！！」

その叫びを、木原はポカンとしたような顔で聞いていた。

が、徐々にその顔には笑みが広がっていく。

「……だからあのガキの命守りたいってかあ、一方通行よお？」  
アクセラレータ

そう言いながら、白衣の中に手を突っ込んで、「こそごとやり始める。」

それに、アクセラレータ一方通行は訝しげな目を向けた。

「……何の真似だ。」

「いやいや一方通行さあ、ガキの頭がどうなってるか知ってるか？」  
アクセラレータ

「……ウイルスぶち込んでんだろ。それがどオした。」

「いやあねえ、ウイルスぶち込んだってことはさあ、ウイルスのモオ  
リジナルスクリプトともとのデータが必要だろ？ 実はそれがここにあるんだよねえ。」

そう言っつて、木原は白衣から取り出したそれを見せる。

取り出されたのは一枚のチップだ。

「いやさあ、俺ってお前が大嫌いだからさあ、お前の嫌がることを  
とことんやないと気が済まないんだよねえ。」

テストメント学習装置を使って打ち止めを治療するのに、必要なデータ。  
ラストオーダー

それが入ったチップ。

そのチップを、

木原は、アクセラレータ一方通行の目の前で握り潰した。

「ぎゃはははははははははははははははッ！」

嘲笑が響き渡る。

粉々になったチップが、パラパラと床に落ちた。

「これであのガキは助からねえ！！ お前の思いも無駄無駄無駄つてやつだあ！！ 悔しがれよこのクソガキ！！ 俺はテメエの一番大切にしているものを全部ぶっ壊してやったんだ！！ テメエはもう何にも取り戻す事あできねえんだよ！！ あははあはぎやはは！！」

狂ったように木原は笑い続ける。

これでアクセラレータ一方通行の生きる意味は全て刈り取った。

木原はそう思っていた。

しかし

アクセラレータ一方通行は動かない。

本来なら、怒り狂って突っ込んでくるであろうアクセラレータ一方通行が、動かな

い。

「……あれーアクセラレータ一方通行あ。お前もしかしてさあ、心折れて何にも  
言えなくなっちゃたあ!？ いやー、わるいねえー。おま」……  
……もういいかよ?」「……ああ?」

木原の言葉を遮るように、アクセラレータ一方通行は言う。

それはとても静かな声で、しかしそれでいて、押し殺した怒りが伝  
わってくる。

「残念だが、……そんな程度じゃなんとも思わねえよ。……いやア、流  
石にそれは言い過ぎだけだよオ」

真っ直ぐに木原を見据えて、口を開いた。

「オレの勝利条件はあのガキを無事に助け出すことじゃねえ。あの  
ガキの命を助け出すことだア。」  
「あ?」

「つまり、命さえ無事なら他アどうなってもいいんだよ。」

しゃべりながら、アクセラレータ一方通行の瞳に、強い光が浮かんでいく。

「……お前、やっぱり薄情もんだなおい。」  
「勝手に言ってるよゴミが。生憎と、医者には心当たりがあるんで  
なア。」

言いながら、アクセラレータ一方通行は自分にも言い聞かせていく。

そうだ、わかってるじゃないか。

オレはコイツを殺して、ラストオーダー打ち止めを取り戻しさえすればいい。

木原の言う事やる事なんざに気を取られずに、ラストオーダー打ち止めを助けるた  
めの最善の行動をすればいい。

つまり

(つべこべ言わずに、木原を殺せ!!!)

もう、迷いや劣等感、その他マイナスな感情は捨てた。

例え自分が斃れても、それでも木原を殺す。

ただ、それまでは、絶対に斃れない。

何があっても、何度でも立ち上がれ!!!



e p . 3 7 9 月 3 0 日 - 1 2 ( 後 書 き )

ぬ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ ! !

e p · E X e p i s o d e U I H A R U (前書き)

短いです。閑話です。駄文です。

少しずつ書きだめてたぶんができたので、アップさせていただきました。

繰り返しますが、短いです。閑話です。駄文です。

よろしく願います。

初春飾利は恋する少女だ。

現在、ジャッジメント風紀委員の先輩である勇斗に片思い中である。

きっかけは、なんてことはない。

どこのツンツン頭の高校生がするみたいに、命を救われたとか、そんな大げさなことではなく、

ジャッジメント風紀委員の新人りだったころの自分に、優しく接してくれて、1つ1つ丁寧に、仕事を教えてくれた。

失敗しても、「次に頑張ればいいんだ」と言って笑顔で許して、励ましてくれる。

それが嬉しくて、その時の笑顔が優しくて、その積み重ねで、いつの間にか勇斗の事が好きになっていた。

そんな少女の、とある一幕。

「佐天さん……。やっぱり、先輩の事はあきらめた方が良  
いんでしょうか……。」

「どったの初春!? なんかつたの?」

ある日の学校帰り。

初春は、佐天にこう切り出した。

「……実は……、勇斗先輩が楽しそうに同じ高校の人と歩いてたんですよ。すっごく大人っぽい人で……、それに、スタイルも良かったし……。」

はあ、と大きくため息をついて。

「……正直、勝てる気がしないんですよ……」

そう、言った。

「まあ、そんな簡単にあきらめちゃだめだってば初春。ただ単に、その人と仲良いのは同じ高校だからだって。……てゆうか、その人つてもしかして、背が高くてスタイルが良くてちよっとおでこが広めの委員長オーラがうまくってる人じゃない？」

「！！　そ、そうです、そんな感じの人です！！」

一体何でその人の事を佐天さんが知ってるんでしょうか！？  
とか考えながら、初春は佐天の言葉に応える

「いやさ、わたしもその人と歩いてる勇斗先輩は見たことあるんだけど。『彼女さんなんですか！？』って聞いたらさー。……なーんーとー。」

「とー……！！？」

「……ただのクラスメイトなんだって。」

「そっ、……そうですか。」

妙にもつたいぶるから何か重大な発表でもあるのか！？　と違って

身構えていた初春は、こけかけながらそう言った。

「実際何もないみたいだし、まだまだ初春にもチャンスはあるって  
！！」レディライクマナー「せっかく私が眉の書き方教えてあげたりとか、御坂さん直伝  
『淑女の嗜み』とか教わったりしたんだから。……私が言うのもな  
んだけど、初春はかわいいよ。だから大丈夫だって。自信持ちなよ。」

その初春の肩を、ポンポン、と叩きながら、佐天は言う。

「……………優しすぎるんですよ、勇斗先輩」  
「ん？」

それに対して、初春はボソツと呟いた。

「優しすぎるんですよ、先輩」  
「……………どんなふうによ？」  
「何かと面倒見てくれますし、それに……………あ、頭とか撫でてくれる  
んです。」

ちょっと赤くなりながら、初春は思い返す。

「……………マジで!?!?」

「はい。……でも……」

そこで、初春の表情が陰った。

「でも？」

「でも、……それに甘えちゃうと、余計に子ども扱いしかされなくなりそうで……最近ちょっと距離を取っちゃうんですよ。」

寂しそうに、初春は笑う。

「先輩は気をつかっていろいろしてくれてるのに、テンパって、自分から離れて行っちゃうんです。……こんなことしたら、そのうち嫌われちゃうんじゃないかなって……」

初春はうつむいて、声もどんどん小さくなっていく。

「……どうしたら、いいんでしょうかね……」

そして、こう言うと黙ってしまった。

しばし、2人の間を沈黙が支配する。

「……初春はぢ」



その沈黙を破るように、佐天は口を開いた。

「何が、嫌なんだい？ 子ども扱いされる事？ それとも、嫌われる事？」

その問いかけに、初春はしばらく沈黙で答えてから、ポツリとつぶやいた。

「……どっちも嫌ですよ。本当は。もっと、もっと近い立場で扱ってほしい。」

そう言っつて、今度は佐天の目をしっかりと見据えて、続ける。

「でも、どちらが嫌かと言われれば、嫌われるのが嫌です。好きな人に、嫌われるなんて絶対に嫌なんです……！」

板挟み状態に苦しめられて、初春の心はもう一杯一杯だった。

泣きそうになりながら、初春は本当の気持ちを佐天に告げる。

それを聞いた佐天は、しばらく悩んだ。

そして、考え抜いて、こう言った。

「……………ならさ、両方やってやればいいじゃない。」  
「……………え？」

「優しさは素直に受け取っちゃえばいいじゃないかー。で、今よりもっとしつかりして、堂々としてればいいんだよ。」

「堂々と……………」

「そうそう。先輩に子ども扱いされないくらい、堂々とね。先輩に見合うだけの大人な女に初春がなってしまえばいいのさ。」

そこまで言って、ふと、佐天は不敵な笑みを浮かべて、

「でも初春。カラダは関係ないよ？ 別に『女の子』から『女』になれ、とかって訳じゃないからね？」

「……………そっ、それは分かっていますよー！！ 私に対するあてつけですかっ！？」

初春は、佐天の体の一部を親の仇のように睨み付けて、叫んだ。

「……………全く。気にしてるのに……………」

「いやー、ごめんごめん。ついねえ？」

「何が『つい』ですか。何が。」

そう言うってから、初春は表情を引き締める。

「……………ようは、心構えを変えるってことですね？」  
「そ」

その初春を見て、佐天も真面目な表情で口を開いた。

「今の状況でくよくよするんなら、初春自身が変わっちゃえばいいんだよ。ほら、やらないで後悔するより、やって後悔する方が良かったてよく言っじゃん。そういう事だつて。」

言って、初春の肩を叩いて、目を真っ直ぐ見て言う。

「頑張りなつて初春。私は応援するし、泣き言でもなんでも聞いてあげるから。」

「佐天さん……………。ありがとうございます。私、頑張ります!！」  
「いーつていーつて」

ようやく、初春の表情に笑顔が戻った。

しかし、

「ただ」

「……………ただ？」



抜けるような青空は、少女の決意を祝福しているようで

まだまだ暑い、とある夏の1日。

恋する少女のたたかいは始まった。

e p · E X e p i s o d e U I H A R U (後書き)

うーむ……

バイトがきつい。

頑張って年内中に本編進められるようにします……

あ、スバル様かわいいよスバル様。

ep.38 9月30日・13(前書き)

あと1話位で0930は終わります。はい。

今年中は……キツイか。

まあ何はともあれ、今回もよろしくお願いします!!!

対峙する、アクセラレータ一方通行と木原数多。

膠着状態に陥った状況を、アクセラレータ一方通行が崩す。

ドンツ！！と、脚力のベクトルを操作して、彼は再び木原の懐へと飛び込んでいく。

「おいおいアクセラレータ一方通行あ！！ またおんなじ手かア！？ ははあ！！  
バカの一つ覚えってなあ！！」

言って、木原は伸ばされたアクセラレータ一方通行の手を顔を振るだけであっさり  
躲し、再び拳を叩き込んでくる。

「！！！」

それを見て、アクセラレータ一方通行は。

自分からその拳に突っ込んだ。

「な……………！！？」



ここにきて、初めて木原が驚きの表情を浮かべる。

(殴る瞬間に手首を返す……この動き、人間のカラダの構造的に無理がある。こつやつて、自分から突っ込んでやれば対応しきれねはずだ!!)

そして、激突。

「ぐっ……!?!」

鈍い音と苦悶の音が響き渡る。

(チツ!! 無駄にハイスpekでいやがる!!)

それでもまだ、木原は一方通行の『アクセラレータ反射』を破ってきた。

しかし、確実にダメージは減っている。

完全に、通用しないわけではない。

「ってーな一方通行アクセラレータあ!! やるじゃねーかよもやしみてえなナリしやがって!?!」

そう言う木原の右手を見れば、手首のあたりが痣を負ったかのように青くなっている。

(……それで十分だア!!)

再び脚力のベクトルを操作。

一瞬で、木原の背後へと回り込み、そして机の上にあったライフルを掴む。

しかし、それを振り回そうとしたところで、

「オイオイ、足元の計算がおろそかだぞ？」

そんな声がして、不意に視界に天井が映る。

「!?!」

倒された、

そして、思考がこの解を導き出すより早く、木原は動いていた

「調子こいてんじゃないぞ、クソガキ！」

その言葉と共に、射抜くような一撃がアクセラレータ一方通行に叩き込まれた。

「う……ぼ……！」

貫くような激痛が、アクセラレータ一方通行から呼吸を奪う。

(ぐ……く、そ、がア……！)

再びベクトルを操作。

床に叩き付けられた勢いを使って、木原から再び距離を取る。

(……タネが分かってても、戦う術を考えてる時間はもうねエ……。  
どうする……?)

このままではジリ貧。

イタチごっこだ。

対峙する木原とアクセラレータ一方通行。

しかしここで、場違いな、しかしそれでいて切羽詰まった少女の声が耳に飛び込んでくる。

「いた……！ あの子だ……！」

そうやって、廃棄オフィスに踏み込んでくる声の主。

つい数時間ほど前、ラストオーダー迷子探しと一緒にやった少女。

インデックスが、ずぶ濡れの白い修道服を引きずって、そこに立っていた。

「ッ、オマエ、何しに来た!!」

アクセラレータ  
一方通行は思わず叫ぶ。

「私のともだちと、その女の子を助けに来たのっ!!」

『闇』に生きているやつでも、ほとんどがおびえてしまっような怒号。

しかし、インデックスは気にも留めることは無い。

「助けない」と、強い意志を持って。

待ち受けているかもしれない危険など、何も考えることは無い。

ただ「助けない」と。

その一心で、ここまでやってきた。

そして、アクセラレータ一方通行はそれを目の当たりにする。

彼や木原が属する、ドロドロとした『闇』ではなく、本来打ち止めラストオーダーが属すべき、『光』を。

.....

.....

.....

.....

.....

「.....そうか。なら頼む、そのガキは任せた。」

そう言って、アクセラレータ一方通行は再び木原に向き直る。

「任せるぞ。オレは、ガキ助けるために、こいつをブツ飛ばすからよオ」

「わかったんだよ!!」

言って、インデックスは打ち止めのもとに向かう。ラストオーダー

それをぼんやりと眺めて、そして一方通行は思考を切り替える。

アクセラレータ

(……木原数多は、開発した時のデータからオレの戦い方を完璧に読ンでやがる。考えて戦つてもどオセ無駄なんだろうよ)

現状を分析する。

(……だから、考えなきゃいい)

アクセラレータ

一方通行は、強く強く、拳を握りしめた。

(時間切れだつて構わねエ。ただがむしゃらに木原を殺せ。それさえできりゃ万々歳だ)

そこまで考えて、口元に獰猛な笑みを浮かべて、

ピ

と、首元のチャージャーから電子音が鳴った。

意味しているのは、バッテリー切れ。

瞬間、前後左右のバランスが怪しくなる。

もう能力を使用する事もできないし、言葉を理解する事もできないし、指折り数えれば答えが分かる程度の計算もできない。

自分の体重や重心の管理すら行えないため、まともに立ち上がるのすらも難しい。

それでも、『思い』は残っている。

ラストオーダー  
打ち止めに助けたい、という、強い強い思いが。

勇斗は、夜の街を駆けまわり続けていた。

付きまとい、次々と現れる黒づくめたちを、どんどんと無力化していく。

烈風で吹き飛ばし、翼で殴りつける。

もちろん、殺さないようにしっかりと加減をして、だ。

作業極まりないことを、しかし勇斗は黙々とこなしていく。

（俺にこいつらを引き付けねば、他の連中は動きやすい。やるっきゃねえ）

そして、撃破数が30を超えようかといったところで、勇斗に声がかけられた。



「……このくらいにしていただけませんか。」

声のした方を向けば、黒づくめとは明らかに違う出で立ちのスーツを着こなした男がそこにいた。

「殺されていないだけいいのですけれどね。人員補充が必要ありませんし。」

「お前は……暗部組織か？ 何の用件だよ。」

突然の暗部組織からの接触。

勇斗は、敵意全開でそいつを睨み付ける。

「少し、お話しておかなければならないことがございまして、私にここに派遣された次第でございます。」

「……用件は？」

「ああ、はい、ではお話しさせていただきます。……あなたは、『魔術』というものをご存じですよね？」

「……だったら、どうなんだ？」

「科学的に開発された異能 学園都市の超能力 とはまた違う、『オカルト』と呼ばれる異能の力であり、本来ならば科学と魔術は棲み分けがなされてきました。まあ……これくらいならご存知でしょうがね。」

多少大げさとも取れる身振り手振りを交えて、男は話を続ける。

「ところが最近になって、この棲み分けが破られそうになっていま  
す。……『イマジンプレイカー幻想殺し』の上条当麻、そして　あなた、『エンゼ御使  
ルライス顕現』の千乃勇斗。この2人によってね。」

男は完全に自分の世界に入り込んだようで、どんと話し方から動きまで演劇がかってきていた。

そのことと、男のセリフにすこし苛立ちを覚えながら、勇斗は話を聞いている。

「ああ……もちろん、あなた方2人に非があると言っているわけでは  
ありません。最初にケンカを吹っかけてきたのはあちらさん方です  
から、ね。ただ、……少々まずいことになっているのも事実で  
して。全ての異能の天敵である『イマジンプレイカー幻想殺し』、オカルトめいた本  
質を秘めた『エンゼルライス御使顕現』。この2つを科学サイドが保有していると  
いう事を魔術サイド……特に、ローマ正教のお偉いさんたちが気に  
入らないようでしてね。何かと絡んでくるんですよ。……どうやら  
今日のこの騒ぎもそうであるようだ」と統括理事長も考えているよう  
でして。」

「……多少のツッコミどころはあるが……お前が言いたいことはあ  
れか？ 『魔術サイドと戦争になりそうだから戦力になってほしい。  
ついでに暗部に入って。』とかそんなところか？」

「まさに、その通りですよ。」

出来がいい生徒を見るような目をして、男は言った。

「……んなこと言われて、『はい、わかりました』とか素直に言う  
とでも思ってたのか？ ドッキリ浸かってこなかったとはいえ、俺  
だって暗部にはいたからこの街の『闇』ってのがどんなのかは大体  
わかってる。」

「……まあ、そう言われるとは思っていませんでした。ですから、こ  
ちらも切り札を切らせていただきます。」  
「……？」

勇斗は怪訝な表情を浮かべ、それを見た男は満足そうに口を開く。

「……初春飾利嬢。彼女の存在こそ、あなたに対する切り札に  
成り得ます。」

「……人質にでもとるってのか！？」

激昂する勇斗。

それに対し、男の方は涼しい顔で応える。

「……いえいえ。流石にそこまではいたしませんよ。ただ、魔術師とい  
う存在をもう一度よく考えてみてください。彼らは、自分の目的の  
達成のためには手段を問いません。ということは、不要なものを排  
除するために、周囲ごと巻き込む事もあるんですよ。」  
「……！！！」

「初春嬢が、まあ当然、あなたの知り合い全体がその『周囲』にカテゴライズされる可能性もありますが、襲撃される可能性だってあります。」

「……………それで？ 『守ってやるから見返りに暗部に入れ』ってか？ 残念だけど、いくら何でも信用できねーよ。暗部の力も、性質たちもな。」

「ああ、いやいや。私たちが見返りに提供するの『庇護』ではなく『情報』ですよ。」

「はあ……………？」

「あなたが心配する通り、いくら暗部組織とはいえ、『オカルト』に対抗することは難しいでしょう。従って、私たちでは初春嬢に確固とした『庇護』を与えることは不可能です。ああ、与えないという訳ではありません。最大限、保証します。しかし……………暗部にいれば、早く・新しく・重要で・正確な情報を入手することができます。後は、そこから必要な情報を取り出して、あなたが彼女を守ってあげたほうが現実でしょう。それを考えれば、……………悪い話ではないと思いますけどね？」

「……………くっ……………！」

「ご存知かとは思いますが、『情報』というものは立派な武器になります。世界には、その取引を生業としている人間もいるくらいです。すね……………ああ、それと」

「何だよ……………？」

「『オカルト』に対する確固とした対抗手段がない現状では、……………下手をすれば、この街は墜ちます。」

「……………！」

「まあ、だからこそ協力をお願いしたい、というのももちろんあるんですよね。」

知っていた通り、やはりこの街の『闇』は性質たちが悪い。

的確に、勇斗の不安や弱みに付け込んでくる。

「あなたの周囲の人達と、この街を守るために、協力してはいただけませんか？」

言葉の一言一言が、勇斗の対抗意識をズタズタに切り裂いていく。

反論したいが、なかなか判断材料が見当たらない。

自分で守ればいいじゃないか、という考えも浮かんだが、勇斗はそれを一瞬でゴミ箱に叩き込んだ。

知り合い全般に手が回る可能性がある以上、それは物理的に難しい。

「……情報って言ったな。確実性その他もろもろは保証してもらえないんだな？」

その勇斗の言葉に、男はにっこりと笑って、返答した。

「ええ、もちろんです。統括理事長から、あなたのために特別回線を使うよう通達が出ています。」

「……」

提示されたのは、破格といってもいい条件だった。

そこまで、勇斗に期待しているのか。

そこまでしてこの街は、勇斗を引きずり込むことに必死なのか。

いずれにせよ、選択の余地は無いといってもいい。

入るのか、入らないのか。

入って周囲の知り合いと学園都市を守るのか、入らないで綱渡りの戦いを続けるのか。

絶対的な2択であり、勇斗にとってはもう答えは決まっている。

腹くくるか。

そう、心の中で考えて、勇斗は口を開く。

「……いいだろう。『暗部』に足を踏み入れてやるよ。……ただし、『見返り』に不備があれば、お前を潰す。それでいいな。」  
「良い返事です。『見返り』については、どんな手段を使ってでも保証しましょう。」

満面の笑みを顔に浮かべて、男は再び口を開く。

「……お帰りなさい、千乃勇斗君。」



木原数多に殴られ、叩かれ、潰され、一方通行アクセラレータの体が床を滑る。

胸倉を掴まれ、床から引きずり起こされ、事務机の上に背中を叩きつけられ、そこへさらに木原の拳が放たれる。

ミシミシと頭蓋骨から嫌な音が聞こえ、顔の皮膚が引きつったように切れていく。脳が揺さぶられたせいかわ、指先から力が抜けるのが分かった。

しかし、意識だけは切れない。

そこだけは、絶対に揺らがない。

一方通行アクセラレータの耳に聞こえてくる、修道服の少女の優しい歌声。

言語機能を失っている彼には、どんな言葉なのかは分からない。

だが、少女の歌声にあふれる打ち止めラストオーダーを思いやる気持ち。

それを、一方通行アクセラレータは確かに感じていた。

歌の意味など知らない。



だが、その気持ちだけで十分だった。

ラストオーダー  
打ち止めは、今までそんな事すらもしてもらえなかったのだから。

アクセラレータ  
一方通行はうつつすらと笑う。

少女の滑らかな歌は続いている。

あたたかく、包み込むような。

こんな自分には、絶対に出せないような声で。

そうだよ。

ラストオーダー  
打ち止めみたいなガキは、木原だの、アクセラレータ  
一方通行だの、そんなクソ野郎どもの手を行ったり来たりするべきじゃないんだ。

光の世界の住人は、同じ世界の温かい人々に助けてもらおうのが、一番まっとうなんだ。

そんなのはとうにわかってる。

知ってる。

理解してる。

しかし、それがどうした。

さっき自分で確かめただろう。

一方通行は、打ち止めを助けない。

理不尽な暴力に苦しめられる彼女を、助けてやりたい。

光とか闇とか、そんな立ち位置などどうでも良い。

一方通行が光の世界にいるから、彼女を守りたいのではない。

たとえ彼女がどんな世界にいても、一方通行はこの手で少女を守りたい。

世界の区別なんて、関係ないんだ。

今日自分が戦っているのは、打ち止めを取り戻すためだ。

「……………」

ガン！ と、一方通行は、座ったまま事務机へ手を伸ばした。

そのままギリギリと音を立て、彼はゆっくりと立ち上がる。

結論は出た。

悪にしても胸を張れ。

闇の世界を突き進んだとして、それでも光を救ってみせる。

進むべき道が周りと違うからといって、それを恥じるな。

闇の奥にいる事を誇りに思えるような、それほどの黒となれ。

既存のルールは全て捨てる。

可能と不可能をもう一度再設定しろ。

目の前にある条件をリスト化し、その壁を取り払え。

「き、はら」

言語機能を失ったはずの口から、声がこぼれた。

震えながらも、その両足でしっかりと立ち上がる。

「木イイ原アアあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああッ!」

その瞬間、アクセラレータ一方通行の背中が弾け飛んだ。

墨よりも黒く、光を呑み込む、正体不明の翼。

いや、翼というよりも噴射に近いだろうか。

「何なんだよ……」

木原はそれを見て言葉を失った。

木原は『天使』という存在を目撃している。

その出現の片棒を担いだ事も理解している。

それでも、目の前で展開された現象を正しく認識する事ができない。

「……………どうなってんだよ。その背中から生えてる真つ黒な翼は  
アあああ!？」

木原は絶叫して、とっさに床に転がっていた手榴弾を拾い上げ、  
一方通行<sup>クセラレータ</sup>へ投げつけた。

ゴッ、と手榴弾は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の額にぶつかった。

瞬間、爆発。

衝撃波と共に大量の破片が撒き散らされ、灰色の煙が吹き荒れる。

近距離での爆発だったため、木原の体も爆風で飛ばされかける。

しかし、ここまですべて、全く勝った気がしない。

漠然とした不安が、立ち上がった木原を襲う。

と、その時。

ドッ！！と。

木原の四肢が消し飛んだ。

「が、あ　　ッ！？」

そして、木原の顔を、ガシィッ！！と。

何者かの手が、正面から鷲掴みにした。

「…………ッ！！」

薄まっっていく粉塵のなか、アクセラレータ一方通行が立っていた。

(ど…………どうなってやがる…………ッ！！???)

納得がいかない。

理解が追いつかない。

(今、こいつは能力が使えないはず…………。なら、一体どんなトリックでアレを防ぎやがった…………！！！)

『種類を問わず、あらゆるベクトルを制御下に置く』アクセラレータ 一方通行の力。  
科学的に考えれば、今の一方通行は物理法則の演算ができないため、その力を制御するのは不可能だ。

(まさか……『オカルト』なのか……?)

オカルト。

木原クラスの研究者でなければ逆に分からない、数千数万と科学実験を重ねた中でほんのわずかに顔を覗かせる、イレギュラーな法則のようなもの。

非科学的な法則に基づき、異能の行使。

非科学的な理論を捉えるのに、既存の演算能力など関係があるのか。

(新たな能力の制御方法の取得………、………クリアランス 制御領域の拡大の取得だと!? こいつ、パーソナルリアリティ 『自分だけの現実』に何の数値を入力した……。一体どここの通信手段を確立しやがったんだ!?)

しかし、一方通行はそんな事など気にも留めない。アクセラレータ

一方通行は笑う。アクセラレータ

静かに、笑う。

「は、はは」

木原も、思わず笑い返していた。

それから、質問する。

「うつ、後ろ……気づいてんのかよ、化け物」  
「ihbf殺wq」

黒色の翼の噴射が、爆発的に勢いを増す。

同時、一方通行の手のひらから噴き出した不可視の力が、木原数多へ襲いかかる。

音速の数十倍の速度で、木原の体は夜空を吹っ飛んだ。

生死など、わざわざ確認するまでもなかった。

e p . 3 8 9 月 3 0 日 - 1 3 ( 後 書 き )

10月分入ったら、なんかのキャラをぶち込んでみようかと思っ  
ます。

クロスというわけでもなく、ただキャラを借りるだけみたいな感じ  
で。

ご期待に添えるかはわかりませんが、お楽しみに!!

……大丈夫だろうかwww

まあいいか。

また次話も、よろしく願います!!



e p . 3 9 9 月 3 0 日 - 1 4 ( 前 書 き )

何とか間に合いました!!

ちょっとぶった切りすぎた気もしますが……

とりあえず、これで0930は終了です……!

では、さよう……!

土砂降りの雨の中、上条は道路に立っている。

そこに、戦いの音は無い。

ただ、雨が降る音だけが彼の周囲を包んでいる。

天使の羽は沈黙していた。

先ほどまでの膨大な火花はおさまっている。

恐らく、インデックスがうまくやってくれているのだろう。

羽や天使の輪も徐々に揺らぎ、薄れつつある。

(……とりあえずは、一段落か……)

命の危機がひとまず去ったことで、ふう、と脱力する。

「にしても……」

上条は、転がっているヴェントを見て呟く。

『天罰術式』を受けて、倒れた人々を起こす方法でも尋ねたかったのだが、何度頬を叩いても、何度体を揺すっても目を覚ます気配はない。

ここまで反応が無いとなると、対尋問用の術式でも組んでいるのだろうか。

「……これからこいつはどうなるんだろうな……」

『前方のヴェント』

学園都市の都市機能を、ほぼ完全に停止へ追い込んだ存在。

そいつを、学園都市じゅえんが野放しにするとは思えない。

先に攻め込んできたのが魔術サイドである以上、『科学と魔術のパワーバランス』うんぬんの話いいわげも通じないだろう。

今までの事件とは、レベルが違う。

超えてはならない一線を、越えてしまったのかもしれない。

学園都市としては、たとえ彼女を殺しても危険な技術をこの世から消したい。

一方、『神の右席』、ひいてはローマ正教は、それほど高威力かつ

利便性のある術式をそうそう簡単に手放そうとはしない……はず。

今度こそ、事態の收拾が『科学と魔術の話し合い』などで何とかなるとは、上条は到底思えなかった。

この件が科学と魔術の全面戦争の引き金となる事も考えられる。

……だから、何とかしたい。

自分が動くことで、解決に向かうというなら。

ふう、と上条はため息をついて、

「問題山積みだなあ……」

と呟いた。

その時、

ゴン！！と。

突然目の前のコンクリートの山が砕け、地震でも起こったかのように地面が揺れる。

巻き上げられた灰色の粉塵が、上条の視界を覆う。

「なっ……!!?」

上条はとっさに目をかばうように手を当てる。

爆風が、上条の体を転ばせた。

「……くっ!! ……何が?」

そう呟いた上条の目前。

土砂降りの雨が、巻き上げられた空気中の粉塵を取り去っていく。

そこに突き立っていたのは、風力発電のプロペラだった。

瓦礫を吹き飛ばしたクレーターのど真ん中に、巨大な柱の半分ほどが埋まっている。

プロペラの根元にあたる部分は、ねじ切ったかのように千切られている。

(……まさか、投げつけたのか……? これを!? ……どんだけのがあればこんなことができんだよ!?)

上条は愕然とする。

自分の想像を超えた事態が、目の前で起こっているのだ。

(……………!!　　そうだ……………ヴェントは!?)

すぐ近くで倒れていたはずの、ヴェントはどうなった。

慌てて周囲を見回す上条。

しかし、ついさっきまですぐ近くで気を失って倒れていたはずのヴェントの姿がどこにも見えない。

……………ただ、上条は別のものを発見した。

いや、「もの」ではなく「人」か。

上条から少し離れた所に、1人の男が立っている。

「……………つ、誰だ!?!」

男は、ぐったりしたヴェントを片手で抱えている。

青系の長袖シャツの上に、さらに白い半袖シャツを着重ね、通気性の良さそうな薄手のスラックスをはいた、白人の男。

スポーティな格好をしているが、元気さはない。

シックな黒い傘と合わせて、上条のような高校生には出せない静か

で揺るぎない気配で満たされていた。

白い肌も茶系の髪も、全てが研ぎ澄まされた鋭い刃のような印象を与えてくる。

「失礼」

男が口にしたのは、見た目に反して流暢な日本語だった。

「この子に用があつたものでな。手荒な真似を避けるために目を眩ませてもらったが、気に障ったかね。」

「誰だつつつてんだよ!」

「後方のアックア。この前方のヴェントと同じく、『神の右席』の1人である。」

「……!」

ここに来て、2人目の『神の右席』

後方のアックアと名乗るこの男が、ヴェントと同等の力を持っていると仮定すれば、非常にまずい事態だ。

そして、あのヴェントを『この子』と呼ぶ余裕。

おそらく、この男はヴェントよりも格上。

と、そこまで考えて、ガチガチに体をこわばらせる上条に、アック

アは小さく笑った。

「心配しなくても良い。兵の無駄死には避けるべきだ。今日の所はこれで引き返す。流石に、貴様の後ろに控えている『墮天使』と戦うのは無謀だろう。……エンゼルライズ御使顕現の少年はともかく、準備を整えるまでは無謀なことは避けるべきだろう。」

「……準備さえできれば、いつでも戦えるってか。」

その上条の言葉を見無視して、アックアは言う。

「今までヴェントを苦しめていた、魔術を潰す効果はすでに失われているようだが、こちらにも事情というものがあるのでな。」

彼はふう、と息を吐いて、風斬氷華へと視線を投げかける。

「……黙って帰ってくれるんなら一向に構わないんだけどよ。……ヴェントは離していけ。」

「……学園都市の負傷者を助ける方法でも聞き出す気かね。」  
「それもある。だが、1番の理由はそこじゃねえ!! そいつの科  
学への敵対心はただの勘違いだ。そいつだって本当はその事に気づ  
いている。『神の右席』なんて場所にいたら、いつまで経ってもその  
感情から抜けられない! いつまでも弟への思いにとらわれ続ける  
だけだ!!」



上条のその叫びを聞いて、アックアは再び溜息をつく、

「ヴェントの闇が、そう簡単に打ち消せるものか。我々『神の右席』は、単なる不幸な小娘に同情心で手を差し伸べる事などはしない。我々は世界を動かすために存在する。そしてヴェントは、その力を使ってでも個人の事情を貫こうと決意していた。今まで、彼女がどれだけのものを支払ってきたか、知っているか。その力がどれほどのものか、貴様に想像がつくのか。」

「……………だったら、何だよ。」

「なに？」

「言葉を聞いてもらえないからって、そこで何も言わねえんじや、どうにもならねえんだよ!!」

「ふん。……………まあ、貴様の言いたいことは分からないでもない。だがしかし、ここでヴェントを離したとして……………、科学サイドに捕縛されれば、間違いなく処刑だろう。それはほぼ確実に、免れることはないぞ。」

「っ!!」

そのアックアの言葉に、流石に上条は言い返すことができなかった。

そんな彼の様子に、アックアは笑みを深くする。

まだまだ世間知らずな子供をやさしく諭すようで、しかし、その底には侮蔑をこめた目で。

「……………これをくれてやる。」

ピツ、とアックアは指先で、上条に向けて何かを弾いた。

「……これは。」

それはヴェントの舌についていた、鎖と十字架のアクセサリ。

おそらく、今回のヴェントの魔術を支えていたであろう霊装だ。

「それはどの道貴様の右手で破壊されているから必要ない。もはやただのガラクタだ。そして、それが壊れたことで、ヴェントはもう『天罰』を使えん。制圧された人間も、すぐに回復するだろう。今はそれで学園都市の平穏を守れたという事で安心しておけ。」

「待てよ！！ そんなので納得できるか！！！」

「……1つだけ、貴様に教えてやる。」

彼は、拳を握る上条に、堂々と背中を向けて、言った。

「私は聖人だ。」

その声には何の感情も込められていない。

あくまでも、ただ淡々と事実を告げている。



そして、上条の背後から、よく聞きなれた声がした。

「……………勇斗？」

上条が振り返る。

そこには、水晶色の翼を背に広げ、金色の円環を冠する勇斗が浮かんでいた。

「勇斗……これ、お前がやったのか？」

茫然とした表情で、上条は勇斗に尋ねる。

「んー、まーね。」

それに対して、勇斗の返事は軽いものだ。

「……死ぬかと思ったんですけど。」

「いや、ちゃんと狙ったから大丈夫だって。それより、まずはこっちじゃなくてそっちだろ。」

あくまで軽い口調を崩さず、しかし、アックアから視線を外さずに、勇斗は言う。

その言葉を聞いて、上条も再びアックアへと視線を向ける。

さっきまでの余裕の表情はなりを潜め、厳しい表情がアックアの顔には浮かんでいる。

「……エンゼルライズ 御使顕現、千乃勇斗か……」

「……はじめまして、後方のアックア」

放たれる威圧感に臆することなく、勇斗はアックアに対応する。

2人の間で戦意が高まるのを、隣にいる上条は感じ取った。

背筋に嫌な汗が流れ、寒気が身体を走る。

「……貴様も『墮天使』か、その力は。」

アックアが憎々しげに口を開く。

「ああ、どうやらそうらしい。……持ちたくて持ったわけじゃないけど。しかも、目覚めさせてくれたのはアンタら魔術側の人間だしな。」

そのアックアの言葉にも、やはり勇斗は臆することはない。

「くっ……ベラナバスはしくじったのであるか。しかも、生きてその力を十全に振るえるという、互いにとって最悪の事態を作り出して……！」

勇斗の言葉を受けて、アックアは絞り出すように口を開いた。

「……何の話だ？」  
「……あいつがお前を殺していれば、そこにいる上条当麻以外特に大きな障害もなく科学サイドをつぶせていただろう。しかし、お前が生き残り、その上覚醒までしてしまったとなれば、魔術サイドからすればお前という存在は大きな障害になるのである。『協定』違反に『墮天使』の力。攻める理由は大いにあるしな。」

そこまで言って、一度言葉を切って、再び口を開く。

「だがしかし、こうして相対して分かった。お前の力は規格外である。並みの聖人など、とうに超えているのである。並みの、……いや、ほとんどの魔術師では相対することなど出来ないだろう。……故に、我々魔術サイドは、最大の難敵を自ら生み出してしまったとも言っている。それは認めるのである。だがしかし、こちらにも事情があるのでな。お前と言う存在を許しておくわけにはいかないのである。」

「……………はあ、全く、ふざけた話だよなあ。」

アックアの言葉を聞いて、勇斗は、やれやれ、と肩をすくめた。

「……………テメエらが引いた末路だぜ？ テメエらでうけとれ、よッ！」

一瞬の出来事だった。

地を蹴り、一瞬でアックアに接近した勇斗が、翼と同じ材質の水晶色の剣で切りかかる。

それをアックアが、どこから取り出したのか、巨大なメイスで受け止めている。

轟音、衝撃。

ぶつかり合いは、世界を震わせた。



「ぐっ……!!」

ヴェントを抱えている分、アックアは片手でメイスを支え、勇斗の攻撃を受け止めていた。

「……なるほど。お前の力が素晴らしいのは身にしみて実感した。」

苦しそうに攻撃を受け止めているアックア。

しかし、その顔に、笑みが浮かんだ。

「……!?!」

勇斗は、その笑みの意味が理解出来ない。

いったいなんだ、何だと言うのだ。

「……しかし、力の扱いはまだまだである!!」

その言葉と同時、

アックアから放たれる威圧感が爆発的に増した。

「なっ………!?!」

認識を超えたスピードでアックアが動く。

急に鏢迫り合い状態を解かれた勇斗が、バランスを崩しかける。

そこに、強大で莫大な、メイスの一撃。

「……っ!?!」

勇斗はとっさに翼と剣で防御の態勢を取る。

しかし、なまじ受け止めてしまったせい、その一撃で勇斗は身体ごと薙ぎ払われた。

砲弾の射出のようなスピードで、勇斗は瓦礫の山に突っ込んだ。

「勇斗っ!?!」

それを見ていた上条が叫ぶ。

「テメエ!?!」

そして、アックアを睨みつけるが、アックアは意にも介さないように口を空けた。

「……仮にも『墮天使』の力を持っている。あの程度の激突ではダメージなど負うことはないだろう。」

そう言つて、アックアは背を向けて再び歩き出す。

「……さつきも言つたように、今日は引き返す。『墮天使』のほかに、エンゼルライズ御使顕現の千乃勇斗まで途轍もない力を持っているからな。……ただ、次に彼に会つたら伝えておくのだな。『次はない』と。」

ダンー！！ という地面を蹴る凄まじい音が聞こえた。

上条が瞬きした時には、もうアックアとヴェントはどこにもいなかった。

彼ら……、いや、後方のアックアは、桁違いの速さで消えていた。

戦いが終わっても問題は解決しない。

それどころか、もっと大きな戦いを招いているだけの気がする。

初めて、それに気付いた。

(……止めるんだ)

ローマ正教。

学園都市。

(ちくしょう。この流れを、必ず止めるんだ……)

土砂降りの雨の中、上条は勇斗の方に向かいながら口の中で呟いた。

依然として、黒い雲が晴れる気配は、無かった。

統括理事会による、都市内部関係各位への通達

1・9月30日の事件を以って、学園都市として『魔術』集団の存在を肯定する。

ただし、『魔術』とはローマ正教内部の『魔術』というコードネームを冠する科学的超能力であり、オカルト的な異能ではない事に留意せよ。

2・10月1日付で、『エンゼルライズ御使顕現』、千乃勇斗をレベル5、序列第0位とする。

3・同じく10月1日付で、『アクセラレータ一方通行』、千乃勇斗、土御門元春、結標淡希、海原光貴の5人を、『グループ』の所属とする。

争いが、始まるうとしていた。

学園都市とローマ正教の正面对立。

世界で3度目になるかもしれない、大きな大きな戦争が。



e p . 3 9 9 月 3 0 日 - 1 4 ( 後 書 き )

いよいよ次話から10月入り!

暗部編……ですかね!

では、次話もまたよろしく願いします!

みなさん、よいお年を!

あけましておめでとつございます!!

第40話です!

この前予告した通り、禁書以外の作品より、キャラのみクロスとなりました。

ですが、原作といるるかえておりますので、ほとんどオリキャラと言っていくらいになっているかもしれません。

等々、ありますが、今年も頑張っていくつもりです。

では、よろしく願います!!

現在時刻は、午前11時。

場所は、第7学区のどことも知れない場所。

地下に造られた、四角い空間。

そこには、大型テレビにソファー。

更には、いくつもの超高級素材でも使っているであろう、ふかふかのベッドまで置いてある。

そんな空間に、勇斗はいた。

正確には、勇斗のほかにも4名、この場にいる。

見るからに疲れ切っている、金髪サングラスの少年と白い肌に見える赤い目をした白髪の少年。

線が細く、茶色い髪をして、スーツに身を包む少年。

耳より低い位置で左右に結った髪を背中の方へと流し、冬服のスカーフトにベルトを付け、布で胸を隠しただけの上半身にブレザーを引っかけている、露出度多めの少女。

すなわち

土御門元春

アケセラレタ

一方通行

海原光貴

結標淡希

この4人+勇斗の計5人が、ソファーに座り、部屋中央のテーブルを囲んでいる。

そんな中で、金髪グラサン　土御門が、口を開いた。

「……さーて、お集まりの皆さん。これから大切な大切なお話を始めるにゃー……」

「もうすでにボロボロじゃねーか、お前。」

あまりの土御門の状況に、思わず勇斗がツッコむ。

「……まあ、昨日はひどい目にあっただからにゃー……。……まあいい、始めるか。」

一瞬遠い目をした後で、再び土御門は口を開いた。

「まずは新入りの3人に改めて一言だな。……ようこそ、裏の世界

へ。」

言って、土御門はにやっと笑う。

「これまで、オレとエツア……いや、海原の2人組で色々と暗躍してきたわけだが。今度からは人数も増えて、晴れて『グループ』として活動を開始する。いやー、にぎやかになっていいことだにやー。」

### 『グループ』

それは、学園都市の暗部に存在する……否。発足した組織だ。

土御門の話によれば、学園都市統括理事会の直属組織であり、表には出ない裏方の仕事を回される。

要するに、学園都市内部専門の、土御門のエージェントとしての仕事に近い。

そして、声を発した土御門の声は、明らかに白々しい。

明らかに現状を皮肉ったものだ。

「チツ……。オイ土御門。オレはこん中で馴れ合っつもりなぞねエぞ。」

「あら、奇遇ね一方通行。私と同じじゃないの。」

その土御門の声に反応したのは、一方通行アクセラレータと結標淡希。

9月14日の残骸レムナントの一件があり、2人の間には険悪なムードが漂っている。

「……アイツら、仲わりーなー。」

その様子を見て、勇斗はボソツと呟いた。

「まあ、第一印象が最悪ですから……致し方ない面もあると思いますよ?」

「!?!? ……何だ、海原か。」

「ふふ……どうも。」

そっと、勇斗の後ろから声をかけてきたのは、海原光貴（仮）だ。

先だっで行われた顔合わせで、顔も名前も偽物だと言っていたから、仮。

正体は、アステカの魔術師だ。

「まあ、確かにそうだよな。……で、俺に対する印象はどうなった?」

「……まだちよつと畏怖の念は染みついています、もう大丈夫ですよ。」

「……ならいいか。」

そう呟いて、勇斗は、はあ、とため息をつく。

顔合わせの時、彼の変装術式の魔力に反応してしまった勇斗が、敵の再来かと思ひ、能力を完全行使。

勇斗の膨大な力を感じ取った海原は、勇斗に対して恐怖を感じただという。

「……まったく、あなたはとんでもない規格外ですね。」

「持ちたくてこの力持つことになったわけじゃないんだけどね……。何回か死にそうになったしさー。」

再びため息をつく勇斗。

海原は苦笑いで返す。

そのとき、土御門が再び口を開き、一方通行と結漂の言葉に応えた。

アクセラレータ

「馴れ合う必要なんざないさ。俺達は利用価値でのみつながつてる集団だ。……まあ、それだけではないけどにゃー。それは気にしないでいい。……まあ、俺達全員、この街に守りたい人間がいる。その境遇は同じだ。何かあれば手伝ってやれ。それに……、この集

団はいささか戦力過剰だからな。上に目をつけられる可能性もある。念のため用心するに越したことは無いだろう。あくまで念のためだな。……………なにせ学園都市からすれば、レベル5が2人もいて、最強の懐刀にも、最悪の自爆ボタンにもなりうるんだからにゃー。」「……………なるほどなア（ね）。」「……………もしもの時は協力するに越したことは無いだろう。それぞれが生き残るためににゃー。」

その言葉で、アクセラレータ一方通行と結標は口を閉じた。

各々で、今の言葉を受け止めているようだ。

勇斗も今の言葉を聞いて自分自身の境遇について思いを巡らせる。

言い方は悪いが、暗部に堕ちることになった原因。

そこまでしてでも、それぞれが守りたいと思った大切なもの。

「……………まあ、これで今日の集まりは終わりだ。顔合わせと確認。これさえできりゃあとは自由にしてくれ。……………昨日の疲れも残ってるだろうしな。」

そう言って、土御門はさっさと立ち去った。

「……………他に、用は無いかしら？ 無いなら、私も帰るわよ？」

「……………私もさすがに疲れましたし、私もここでお暇させていただき



ます。」

その後が続くように、結標と海原も部屋を出ていく。

そして、部屋には勇斗と一方通行アクセラレータの2人が残された。

部屋が、静まり返る。

「……まさか、オマエまで暗部コッチに戻ってくるとはなア。」

「そんなつもりは全く無かったんだけどな。……全く、最近はこのなんばっかだよ。」

一方通行アクセラレータの声に応え、はあ、とため息をついて、勇斗はソファーに深く身を沈める。

「なんかもうだれかの悪意を感じるレベルだよ……」

「さっさと慣れるこつたなア。意外と楽だぜ、ソレもなア。」

「……なんとといういらぬアドバイス!!! 流石一方通行アクセラレータ、恐ろしい子!!!」

「……ナメてんのかよ」

「いや別に。」

「テメエ……」

「すいませんごめんなさいあやまるからその殺気はやめてください」

「……まアイ。とにかく、オマエと一緒に活動するのは久しぶりだな。楽しみにしてるぜ。」

「そりゃもちろん。」

「一方通行丸くなったなー、とか思いながら、勇斗はソファァーから体を起こして、立ち上がる。」

「……そろそろ昼か。飯でも行くか？」

「……いや、今回は遠慮する。銃の訓練もしておきてエんだ。」  
「ん、了解。」

この空間には、銃の訓練用のスペースまで備わっている。

昨日の事件で、能力非行使状態の厳しさを実感した一方通行は、早速訓練を始めるようだ。

「いざって時頼りになるのは、自分だけだからなア。」

そう言って、先に出て行った3人とは逆方向に歩き出して、地下へと向かう一方通行。

彼と別れて、勇斗も地上へと向かった。



エレベーターで地上に上がり、勇斗は建物から出る。

ここは第5学区。

その建物は一見すれば、いくつかの会社が入っている雑居ビルである。

暗い感じは全くしない。

逆に、常に人が出入りしていて、にぎやかだ。

しかし、だからこそその死角というものもある。

例えば、『清掃室』という部屋。

ビル内にある会社の従業員は、『外部委託の清掃業者が使ってるんだろ』と考えているし、

外部委託の清掃業者は、『従業員が使ってるんだろ』と考えている。

こうして、誰もが見ていて存在も知っているはずなのに、全く意識にも上らないような『死角』が生まれる。

『グループ』のアジトとも呼ぶべきあの空間は、そんな場所を入り口の1つとして持っていた。

そして、勇斗がここから出てきたのは訳がある。

「お……、もういい匂いがしてきたな」

行きつけのラーメン屋が近いのだ。

行くか、と頭の中でつぶやいて、歩き始める勇斗。

と、そこに、後ろから声がかげられた。

「あれ……千乃か？」

少し特徴的な、男子にしては高め、女子の中では少し低めの部類に入るアルトボイスが聞こえた。

どことなく、インデックス上条家の居候シスターに似た声の、その人物。

瞬間的に頭の中で検索するが、勇斗の記憶の中に該当する人物は一人しかいない。

「そつだぜこのえ近衛さんやい。」

振り向いて、声をかける。

そこにいたのは、長い髪を後ろでリボンでまとめ、スカートから、

ニーソックスをはくことで脚線美5割増となった美脚がのぞいている、そんな美少女。

近衛スバル。

勇斗のクラスメイトであり、文武両道を地で行く美少女執事である。

そう、執事。

同じく勇斗のクラスメイトである、涼月奏 学園都市の大手

スポンサーであり、協力機関でもある涼月グループのご令嬢に仕えている。

女性でありながら、執事をしているというのもアンバランスな感はあるが、いろいろと事情というものがあるのだ(と、以前近衛は勇斗に伝えていた。)

「近衛は……なるほど、デートか。」

辺りを見回して、目的の人物が近づいてくるのを見つけ、それと目の前の近衛を結びつける。

「／／／ まっ、ままままあ、そんな感じ……」

そして勇斗の目前では、顔を真っ赤にした美少女が、恥ずかしそうにうつむいている。

(……なんつーか、あいつ許すまじ)

近づいてくるその人物に、心の中で呪詛の言葉を呟く勇斗。

「おっす近衛……に、勇斗？」

声をかけてきたのは、これまた勇斗のクラスメイトであり、友人である武闘派メガネ男子、さかまちきんじろう坂町近次郎だ。

「奇遇だなあ」

「ダメリヤガレリア充」

「会っていきなりそれかよ!!」

普通に話しかけてきた坂町に対して、勇斗は棒読みで相對する。

「流石にひどくない？」

「休日に可愛い彼女とデートして楽しい時間を過ごしているリア充に言うことはねえよ!!」

「／／／／」

「!? てめえ! なに人の彼女口説いてんだ!!」

言って、坂町が飛び掛かってくる。

「ッ、知るかりア充！！ こっそり惚気やがってコンチクショウ！！」

勇斗は、能力を使つて本気で回避した。

「おい、能力はズルいんじゃないのか！？」

「うるせーよ！ だれが好き好んで本職の人間と体術オンリーでバトルるもんか！ つーか友人の彼女口説くほどクズになったつもりはねえよ！」

「……！！ ……それもそうか。悪いな勇斗。」

「……分かればいいさ、バカップルめ。」

坂町は、母親が女子プロレスラー。

そして妹もその血を受け継いでかなりの武闘派。

そんな、ある種バイオレンスな家庭で育つたために、彼自身も体術はかなりの腕前だ。

ジャッジメント  
風紀委員で体術をかじった勇斗に、実戦で十全に戦えるようにと稽古をつけてくれたのも、この坂町である。

そして、超がつくくらいの愛妻家。

ちなみに、体術の腕前で言えば、後ろでいまだに照れている近衛もかなりの腕前だ。





特に、激しく自己主張している2つのカタマリ。

「……涼月か」

涼月奏。

近衛の主であり、親友。

抜群のプロポーションと美貌を持つ、クールビューティー。

そして、頭脳明晰文武両道と、完璧といってもいい優等生だ。

お嬢様故に、多少世間ずれしているところがあるのも事実なのだが。

今日は私服に身を包んでいる。

(やっぱりかわいいですよんかかわいい)

「あら勇斗君。ちょっとそっけなさ過ぎるんじゃない?」

「でもなあ……」

内心では、役得役得!!! とか考えているのだが、勇斗は必死にポーカーフェイスを作っている。

……赤くなっただと、ほころぶ口元は隠しきれないのだが。

一方、バカップル、それも特に近衛の方は、とても驚いているようだ。

口をパクパクさせて、声を出せないでいる。

「……か、かかか、かなちゃん！？　なんでここにいるの！？」

近衛がテンパる横では、坂町が、やれやれ、といった感じでため息をついていた。

「うまかったな。」

「だろ。値段も量も学生向けで、おまけに味もなかなかなんだよ。」

「……まあ、後ろのお嬢様方の口に合うかはわかんないけどな。」

「あら、おいしかったわよ？　ねえスバル？」

「う、うん。おいしかったよ。ありがとう千乃」

結局そのまま4人でラーメン屋に行き、そこで涼月（+勇斗）によ

るいじりタイムとなったのだ。

今、4人は喫茶店でだべっている。

坂町は復活しているようだが、まだちょっと近衛は顔が赤い。

「あ、そういえば……みんなゆうとって呼んでるから、ボクもそう呼んでいいかな？」

と、近衛がそう言ってきた。

余談だが、『ゆうと』のニュアンス、というか言い方が、かなりインデックスに近い。

「ああ、いいよ。」

特に問題は無かったので勇斗は許可。

「ありがとう、えっと……ゆうと。」

「(スツ)……勇斗」

「だから何もしねえって言うてんだろ！ こえーんだよお前は！」

またなにか勘違いをしたのか、勇斗の背後に坂町が立っている。

「落ち着いて勇斗君。ジロー君はスバルとのデートを邪魔されて怒ってるのよ。」

と、にやけながら涼月が言った。

「……そっか、ごめんなジロー。俺、もう行くから。」  
「私ももう行くわね。」

そう言っつて、勇斗と涼月が椅子から立ち上がる。

涼月のその行動を見て、バカップルは動きを止めた。

「勇斗君、送ってくれる？」

その2人を見やって、微笑んでから涼月は言った。

「……あれ、もう帰るのか？ 別にかまわないけど。」  
「ありがとう勇斗君。」

涼月はにこっと笑った。

「か、かなちゃん！ 帰るなら……」

「大丈夫よ。そのために勇斗君に頼むんだから。だからあなたとジ

ロ「君はちゃんと楽しんできなさい。」

「……わかりました。」

そう、不安そうに近衛は言う。

「ゆつと、お嬢様を……かなちゃんを頼むよ。」

「俺からも頼むぜ勇斗。」

真剣に、2人は言った。

「お、おう」

その様子に少し違和感を覚えながらも、勇斗は頷いた。





「アイツらはどうしたんだ？」

帰る道すがら、突然態度が豹変したバカカップルについて、勇斗は涼月に尋ねた。

「涼月が帰るって言った途端にあれだからなあ……」

「ああ、あれは……」

それにたいして、涼月はにっこりと笑って言った。

「私が勇斗君に襲われないか心配だったのよ。」

「……どこをどう見れば俺がそんな人間になるんだよ。」

「うーん……。私、毎日スバルと一緒にお風呂に入っているの。」

「!？」

突然の言葉に、勇斗の思考が止まりかける。

そして、思考が動き出すにつれて、少しずつイメージ映像が……

「今、私の裸を想像したでしょ？」

暴走していた思考が、涼月の言葉で一気に現実に戻される。

「えっち、変態、発情期。これだから男の子ってやつは……」  
「今のはズルすぎんだろぅが!!」

勇斗は叫んだ。心の底から。

「そうじゃなくて！ つーかもしそれが本当なら2人とも俺に任せようとしないだろ！」

「ええ、ついでに、私も最初から頼まないわ、とも言うっておこうかしら。」

明らかに楽しむような微笑みを浮かべて、涼月は言う。

(……ドSめ!……)

反撃をされそうで、その叫びを心の中に留めておく。

「……で、本当は何なんだ？ お嬢様だから狙われるとかか？」

勇斗は適当に言う。

しかしその言葉に、涼月は曖昧な笑みを浮かべて、

「半分正解よ。ただ、私達が危惧しているのは、『お嬢様だから』

ではないわ。」

とのたまう。

「？ どういう……っ！？」

ことだ？ と聞こうとして、その言葉を中断する。

「……困まれてる？」

いつの間にか、勇斗と涼月は囲まれている。

得体のしれない、『裏』の気配。

「……やっぱり、予想通りね。」

「『予想通り』？」

そして、涼月は勇斗の予想斜め上の言葉を口にする。

「こ……う……いう……事態……になり……そう……だった……から……、わ……ざ……わ……ざ……昨日……の……今日……であ……な……たと……お……話……に……来……た……の……『グ……ル……ー……プ』の……レ……ベ……ル……5……第……0……位……、千……乃……勇……斗……君……に……ち……よ……っ……と……予……想……よ……り……あ……っ……ち……が……早……か……っ……た……け……ど……ね。」

「!？」

驚愕が、勇斗を包む。

なぜ、目の前にいる少女が、そこまで知っているのか。

「ふふ、そのお話はまた後にしましょう。まずは……ここを乗り切らないと。」

そう言って笑っている彼女の後ろから、銃声が鳴り響く。

その音を合図にして、『表』と『裏』の曖昧な戦いが、幕を開けた。

e p . 4 0 1 0 月 1 日 - 1 ( 後 書 き )

オリキャラ考えるのに疲れまして……タイプが似ていた涼月さんを  
借りることにしました。

少しずつですが、禁書キャラと絡ませていく予定です。

ではまた次話も、よろしくお願ひします m ) ( m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2412r/>

---

科学の都市の大天使

2012年1月6日01時46分発行